

『誰も教えてくれない聖書の読み方』
新共同訳ガイド

上田 完*

この文書の編者からのメッセージ

これは何？

このコンテンツは、

『誰も教えてくれない聖書の読み方』（ケン・スミス 著、山形浩生 訳、晶文社、2001 年）

を読む方のために作成しました。カトリック・プロテスタント・それ以外の別なく、聖書を読む上で持っている非常に面白く、また先入観や恣意を鋭く指摘してくれる一冊だと思います。ぜひ皆さん、この機会に御一読下さい。

宗教とアメリカ、そしてファンダメンタリズム

『誰も……』は、ファンダメンタリズム（聖書根本主義）に対する痛烈な皮肉として書かれた本です。日本の方々には、この言葉に馴染みがないかもしれませんが、ファンダメンタリズムという概念は、アメリカという国を理解する上で必須と言っても過言ではない程に重要なものです。

世間のほとんどの人達は、アメリカという国が、色々な意味でオープンな国だと思われていることでしょう。しかし、宗教という切り口で言うならば、**実際のアメリカという国は一大「宗教国家」**であると言えます。え？ そんなカタいイメージはないけれど……と思われる方、アメリカ大統領の宣誓の場面を思い出して下さい、大統領の手が置かれていたのは……そう、聖書です。

日本ではこのようなことはまずありえません。あれば当然問題にされるでしょう。しかしあのアメリカという国では、これが当たり前のことなのです。このことひとつだけをとってみても、アメリカが国家というレベルで宗教、特にキリスト教と深い関わりを有していることが分かるでしょう。

いや、先進国の代表であるアメリカに「政教分離」の概念がない筈がない！と思われる方もおられるでしょう。たしかに、アメリカは憲法の修正条項第 1 条（いわゆる「権利

章典) で政教分離を定めています。

Congress shall make no law respecting an establishment of religion, or prohibiting the free exercise thereof; or abridging the freedom of speech, or of the press; or the right of the people peaceably to assemble, and to petition the Government for a redress of grievances.

ここを読むと明らかなのですが、この修正条項第1条が禁止しているのは「国教の樹立」です。つまり、(組織としての) 国家が特定の宗教と結びつくことが禁じられているのであり、(行為としての) 政治に宗教を持ち込むことが禁じられているわけではないのです。もし後者を不用意に禁止してしまうと、今度はいわゆる信教の自由に抵触しますから、就任式で聖書に誓いをたてるというような宗教的な行為を大統領が行うことは、このアメリカ憲法における政教分離には抵触せず、信教の自由に基いた一権利として認められているのです。公人の演説が God bless America という一節で締めくくられるのをよく耳目にしますが、これもこういう論拠から、何も問題のない行為とみなされているわけです。

このような背景から、アメリカの世論や政治は、しばしばキリスト教由来の倫理観に非常に大きな影響を受けます。たとえば、進化論に関して、この21世紀のご時世であってもその教育の是非が問われる……これは、日本人にしてみたら実にバカげた話だと思われるでしょうが、アメリカ人にとっては実にシリアスな話なのです。実際、アメリカでは1925年のスコップス裁判以来、1987年のルイジアナ州授業時間均等法裁判まで、実に4件もの裁判で、この問題が争われています。スコップス裁判の頃は、進化論が人種差別主義者や優生主義者の論拠になっていた、という背景があったにせよ、進化論と二元論的概念として天地創造説が扱われる……アメリカは、宗教という切り口で見ると、しばしばそのような様相を示すことを、われわれは知っておく必要があるでしょう。

このようなアメリカで、社会への宗教的主張において一番熱心だとみなされているのが、「福音派」と呼ばれる宗派の人達です。ひとくちに「福音派」と言っても様々な宗派がその中に内包されますが、彼らに共通しているのが、「聖書に重きをおく」ということです。彼らは、聖書こそが唯一で絶対的な、神の意志を示すものである、と考えています。その中でも最もその傾向が強い派をファンダメンタリズムというのです。彼らは、聖書の記述に対してファンダメンタルでなければならない、という考えを持っているのでこう呼ばれるのですが、これを日本語で分かり易く言うならば……

「聖書に書いてあることは、聖書に書いてあるそのままに、一字一句違わぬ真理である」

ということになるでしょうか。

いやそんなこと言ったらそれはあくまで比喩として……とかお思いの方。違います。

彼らは本当にそう信じているのです。聖書に書かれていることは過去に実際に起こったことか、未来に実際に起こることだ、と、彼らは心の底からかたく信じているのです。たとえば、「ヨハネの黙示録」に書かれていることは、来たるべきハルマゲドンで、それは将来必ずや到来するものなのだ、と、彼らは確信しているのです。実に恐ろしい話なのですが、アメリカ人の3割程の人がファンダメンタリストだと言われています。彼らは決してアメリカにおける少数派ではありません。

聖書の無謬性？

先のファンダメンタリストが主張・確信しているものは、箇条書きにすると以下のような感じでしょうか。

- 聖書の靈感と権威（聖書の無謬性）
- イエス・キリストの処女降誕
- 代償的贖罪の教理
- イエス・キリストの体の復活
- イエス・キリストの再臨

これらを信じている人々を、キリスト教における分類では「福音派」（Evangelicals）と称します。ただし、福音派という括りの中には穏健な人々から急進派に属する人々まで入ってしまうので、その中でも特に厳密、かつ急進的な立場をとる人々を称して（特に聖書の無謬性への厳密さをその特徴とみなして）ファンダメンタリストと称するわけです。

しかし、本当にファンダメンタリスト達は聖書に関してファンダメンタルなのでしょうか。そもそも聖書は本当に無謬性のあるものなのでしょうか。ファンダメンタリスト達はそうだと考えています。聖書の中には、ケン・スミスが指摘しているように数多くの矛盾や未解決箇所が存在するのですが、それは人間側の解釈に限界と誤りがあるためだ……というのが、ファンダメンタリストの立場です。

彼らの主張が正当なものであるならば、ケン・スミスの指摘にファンダメンタリストは答えなければなりません。ケン・スミスの指摘する箇所に、皆が納得し得る解釈を与えられないとするならば、それは「人間側の解釈に限界と誤りがあるためだ」ということとなります。なぜならば、それこそがファンダメンタリストの主張だからです。

ところが、どういうわけか、彼らはその矛先を己に向けることがありません。ディスペンセーション主義（Dispensationalism）に代表されるファンダメンタリスト達の見解は、旧約聖書とイスラエルに偏った世界観で、新約に説かれる神の愛というものを感じさせず、そのくせ黙示録を記述通りに解釈しようとして終末思想を膨張させていくわけです。

これはおかしくありませんか？ バランス感覚を欠いていませんか？ 聖書の無謬性を確信しているようでいて、実のところ、己の歪みをそのまま聖書に投影しているだけではないのでしょうか？ そう……ケン・スミスが示すように。

もちろん、このような批判は、福音派にだけ向けられるべきものではありませんし、アメリカ人だけに向けられるべきものでもありません。カテキズムを暗記する勢いで読みふけることで「敬虔な信者」たり得ると信じて疑わないような「歪んだ」カトリック信者を、僕は何人も知っています。どういうわけか、ネットの世界でそういう「自称」敬虔な信者を目にするのが多いのですが、どうして彼らは、自らが生きることを以て信仰をあかすことができないのでしょうか。いや、その責めは僕自身にも向くものだと承知しています。その上であえて書くのです。

だから、山形浩生氏の筆致を借りるならば、僕はこう言いたいのです：

「聖書、読もうぜ。ケン・スミスの指摘を、下らないとかつまらないとか斬り捨てずに、ちゃんとつきあって、その上で、聖書、読もうぜ」

それができなければ、僕達もファンダメンタリストと同じ自己矛盾を抱えて生きていくことになるのですから。

編者の立場は？

一応、僕の立場を明かしておいた方が皆さんも安心して読み進められると思いますので、ここに書いておきますが……まず、僕はカトリックの信者です。小学生のときに洗礼を受けて、もう30年以上カトリックの信者として暮らしています。父方の祖父、そして両親と兄弟は皆カトリックの信者ですから、小さい頃からキリスト教の世界には馴染んでいる方だと思います。

僕自身は、聖書の無謬性というものを信じていません。これは文献学的研究の結果などからも明らかなことですし、聖書が活版印刷の発明される遥か以前から筆写に次ぐ筆写で伝承・保存されてきたことをみても、聖書には無謬性がない、ということに関しては確信をもっています。また、この本に関しては、「この本を読んだ位で揺らぐ信仰なんて意味がない」（あくまで僕自身の話ですよ、あくまで）と思っているし、ケンの指摘はいちいちもっともだと思えます。

キリスト教信者に限って、こういう指摘に対しては、まるで臭いものに蓋をするように、怠惰な対応に終始したり、「下らない」「信仰の躓きになる」などの言葉で片付けたりする人が多いのではないかと思います。僕はこのケンの本を読んだときに、彼の虚心坦懐に聖書を読んでみよう、という姿勢に強い共感をおぼえました。キリスト教の信者にこそ、この本は必要なんじゃないか、そう思うのです。ケンの指摘を受け止めた後に聖書を

読み返してみると、旧約・新約の別なく、聖書というものが極めて人間臭いものであって、何千年という時間を経過し、そこに残留する記者や筆写した人のエゴを含めてもなお、面白いものとして感じられるのですから。

誰も教えてくれない『誰も教えてくれない聖書の読み方』の問題点

さて、このように手放しで『誰も……』を礼賛してきたわけですが、この本にいささか問題がないわけでもありません。ここではそれに言及しておこうと思います。

実は、今回この document を書くにあたって、原著を知らずにどうのこうの言うのも問題があるだろう、ということで、“Ken’s Guide to the Bible” を買いました。この本はペーパーバックが出ていて、2010年3月現在の定価が\$7.95です。国内の書店の洋書売り場で見つけるのは難しいかもしれませんが、Amazonなどで注文すれば3週間程度で入手できます。

で、早速、山形訳と並べて読み比べてみました。さすがに現在の日本でも指折りの英語の使い手である山形氏だけあって、英語の訳自体には問題はないと思います。ただ、ヒューマンエラーがかなりあります。まず、ケンが引用しているのに山形氏が飛ばしている箇所が数か所あります。そして、ケンが言及していないのに訳本には引用されている箇所（つまり山形氏が訳本にない箇所を追加したということでしょう）が2か所ありました。訳者の山形氏はケン・スミス氏と親交があるそうなので、これらに関しては著者との交渉の上でこうしているのかもしれませんが、それに関する断りが一切ない、というのはいささか問題があるでしょう。これらに関しては、この文書では改めて訳した文章を適宜挿入してあります。

また、訳本を通読している段階から、聖書の章節番号の誤記が何か所かあるのには気付いていたのですが、そのほとんどが訳の段階での写し間違いと思われるものでした。これらに関しても、注釈を入れた上で本来の章節番号の箇所を引用し直しました。上記のものも含め、この種の間違いは合計で22か所ありましたが、全てケン・スミスの書いた通りにフォローできるように整えました。

そして、原著の巻末にある索引（「恥かしくさせられる聖書の疑問」、「聖書セックス索引」、「ボーナス中絶反対論者ホラー索引」等）もばっさり割愛されています。これらに関してはこの文書の最後に補遺として追加してあります。

これらのような問題点は、この本の価値を著しく貶める程のものではないかと思いますが、できれば何とかしてもらいたいところです。この手の本が改版する程部数が出るとも思えないので、無理な相談かもしれませんが……

『『誰も教えてくれない聖書の読み方』新共同訳ガイド』の使い方

このテキストは、『誰も……』の登場順に聖書の一節を引用しています。『誰も……』の訳者である山形浩生氏は、財団法人日本聖書協会の文語訳・口語訳聖書を主な引用元としていますが、このコンテンツにおいては、本テキスト執筆時点（2010年）において最もひろく用いられていて、実際のキリスト教信者に一番馴染み深い「新共同訳聖書」から、改めて引用を行っています。この再引用に伴い、引用節が一部ずれている箇所が発生しましたが、ケン・スミスの記述を内容的にフォローするように、また、やや広めに引用をしておりますので、並行して読んでいただく分には問題は発生しないと思います。

また、新共同訳の聖書は、一部の差別的な記述……特にらい病などに関して……への対処や、文献学的により適切な表現に改める、等の理由から、旧来の聖書と異なった記述がされている箇所があります。このような記述に関しては、日本聖書協会の口語訳聖書、日本聖書刊行会（現新日本聖書刊行会・いのちのことば社新改訳聖書センター）の新改訳聖書、文語版聖書（旧約は明治訳版、新約は大正改訳版）、欽定訳聖書、そして「聖書根本主義者御用達」の Good News Bible から並行して引用を行っております。著作権に関しては以下を御参照下さい。

『聖書 新共同訳』：

聖書 新共同訳：(c) 共同訳聖書実行委員会

Executive Committee of The Common Bible Translation

(c) 日本聖書協会

Japan Bible Society , Tokyo 1987,1988

『口語訳聖書』：

聖書：(c) 日本聖書協会

Japan Bible Society, Tokyo 1954,1955

最後に、このコンテンツは **eBible Japan**^{*1} と **DT Works クラウド型聖書検索**^{*2} を使用して作成しましたことを追記し、両サイトに深く感謝する次第です。正直言って、これらのオンライン聖書検索サービスなしには、こんなことをする気にならなかったことでしょう。

*1 <http://park10.wakwak.com/~ebible/bsrch/>

*2 <http://dtime.jp/bible/>

目次

第0章	はじめに	5
第1章	旧約聖書によろこそ	7
1.1	はじめに	7
1.2	アダムとその一家	9
1.2.1	ノア	10
1.2.2	ヤコブとその家族	12
1.3	モーゼと出エジプト記	25
1.3.1	神の戒律	26
1.3.2	契約の聖櫃	30
1.4	約束の地	46
1.5	サムソン	54
1.6	イスラエル王国	61
1.6.1	あまりてきめんではない天罰	65
1.6.2	ダビデ	66
1.6.3	ソロモンとシバの女王	81
1.6.4	汝の隣人を殺せ	84
1.6.5	エリヤとエリシャ	87
1.6.6	イゼベル (ジュゼベル)	92
1.7	約束の地:後日談	101
1.8	わけわかんないのから崇高なのまでいろいろ	103
1.9	預言者たち	138
1.9.1	ネブカドネザル王	156
第2章	新約聖書へよろこそ	179
2.1	四つの福音	179
2.2	イエス、でしよう。救世主、じゃないでしよう	180

2.3	なぜイエスが神さまよりいいか	181
2.3.1	メッセージの中身	181
2.3.2	プレゼンテーション	182
2.3.3	イメージ	182
2.4	イエスの物語	183
2.4.1	第1部 若き日のイエス	183
2.4.2	第2部 中年の危機	187
2.4.2.1	アカのイエス	187
2.4.2.2	イマイチなできごと	188
2.4.2.3	おデブのイエス	190
2.4.2.4	おまぬけ弟子たち	198
2.4.2.5	ゴーマンな子羊くん	201
2.4.2.6	イエス、家族を語る	204
2.4.2.7	福音いっぱいのお跡	207
2.4.2.8	地獄好きなイエス	211
2.4.2.9	言わなきゃよかった教えの数々	212
2.4.3	第3部 泣き言とともに去りぬ	225
2.4.3.1	イエスの十字架はりつけに関する誤解	235
	十字架を担いだのは？	235
	「ロープ」は誰のもの？	235
	「ロープ」は誰のもの？（ヨハネ福音書の記述）	236
	通りすがりの人は悼んだ？ バカにした？	238
	一緒にはりつけにされた泥棒達は……	238
	海綿	239
	イエスのお母さんは	239
	わき腹から……	239
	イエス、臨終のことば	240
2.4.3.2	なぜイエスは失敗したか	242
2.4.3.3	福音書の不一致	243
2.4.3.4	ヨハネ伝の神さまらしからぬイエス	247
第3章	二次会 —— イエスが帰ってから	251
3.1	タルソのサウル	259
3.2	使徒書簡	262
3.2.1	神さまとイエスに関するパウロの独特な解釈	262

3.2.2	キリスト教徒は律法よりえらいのじゃ	263
3.2.3	新たな選民	264
3.2.4	シニカルなパウロ	265
3.2.5	キリスト教徒はイエスよりお金が入用	265
3.2.6	パウロ:爆裂エゴの持ち主	267
3.2.7	自信のないやつ死んじまえ	268
3.2.8	救われましてもこれでは……	269
3.2.9	パウロは女性がお嫌い	270
3.2.10	結婚カウンセラーパウロ	271
3.2.11	分をわきまえなさい	272
3.2.12	パウロのホントにへんてこな信念	272
3.2.13	……そして珍しく半ば正気な瞬間も	275
3.2.14	ヘブル人への使徒書簡	275
3.2.15	ヤコブの使徒書簡	276
3.2.16	ペテロの使徒書簡	277
3.2.17	ヨハネの使徒書簡	277
3.2.17.1	ヨハネの堂々巡り	278
3.2.18	ユダの手紙	278
3.3	おっかない未来	281
3.3.1	ハイライトを少々	281
3.4	最後の審判	282
第4章	編者による補遺	283
4.1	恥かしくさせられる聖書の疑問	283
4.2	聖書セックス索引	284
4.3	ボーナス中絶反対論者ホラー索引	286
4.3.1	切り裂かれた妊婦に言及している箇所	286
4.3.2	殺された子供に言及している箇所	286
第5章	編者あとがき	287
第6章	Errata ——山形訳本正誤表	291

第0章

はじめに

全能者と言い争う者よ、引き下がるのか。神を責めたてる者よ、答えるがよい。——ヨブ 40:2

人よ、神に口答えするとは、あなたは何者か。造られた物が造った者に、「どうしてわたしをこのように造ったのか」と言えるでしょうか。——ローマ 9:20

分裂を引き起こす人には一、二度訓戒し、従わなければ、かかわりを持たないようにしなさい。あなたも知っているとおりに、このような人は心がすっかりゆがんでいて、自ら悪いと知りつつ罪を犯しているのです。——テトス 3:10-11

彼女は、ろばのような肉をもち、馬のような精をもった者の側女であることに欲情を燃やした。——エゼキエル 23:20

第1章

旧約聖書によろこそ

1.1 はじめに

全能者と言ひ争う者よ、引き下がるのか。神を責めたてる者よ、答えるがよい。——ヨブ 40:2

神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。**第一の日**である。——創世記 1:3-5

神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神はそれらを天の大空に置いて、地を照らさせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。**第四の日**である。——創世記 1:16-19

神は言われた。

「**我々**にかたどり、**我々**に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」——創世記 1:26

主なる神は言われた。

「人は**我々**の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」——創世記 3:22

我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」——創世記 11:7

1.2 アダムとその一家

主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

女は蛇に答えた。

「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。」

でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

蛇は女に言った。

「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。——創世記 3:1-6

二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。——創世記 3:1-7

主なる神は言われた。

「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」

主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。——創世記 3:22-23

カインは主に言った。

「わたしの罪は重すぎて負いきれません。今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよひ、さすらう者となってしまえば、わたしに出会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」

主はカインに言われた。

「いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう。」

主はカインに出会う者がだれも彼を撃つことのないように、カインにしるしを付けられた。——創世記 4:13-15

彼女（編者註・エバ）はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。——創世記 4:2-5

イエレドは**九百六十二年**生き、そして死んだ。——創世記 5:20

メトシェラは**九百六十九年**生き、そして死んだ。——創世記 5:27

さて、地上に人が増え始め、娘たちが生まれた。神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、おのおの選んだ者を妻にした。——創世記 6:1-2

当時もその後も、地上にはネフィリムがいた。これは、神の子らが人の娘たちのところに入って産ませた者であり、大昔の名高い英雄たちであった。——創世記 6:4

1.2.1 ノア

ノアは五百歳になったとき、セム、ハム、ヤフェトをもうけた。——創世記 5:32

神はノアに言われた。

「すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす。——創世記 6:13

第七の月の十七日に箱舟はアララト山の上に止まった。

（参考・口語訳）箱舟は七月十七日にアララテの山にとどまった。

（参考・欽定訳）And the ark rested in the seventh month, on the seventeenth day of the month, upon the mountains of Ararat. ——創世記 8:4

さて、ノアは農夫となり、ぶどう畑を作った。

あるとき、ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。カナン之父ハム

は、自分の父の裸を見て、外にいた二人の兄弟に告げた。セムとヤフェトは着物を取って自分たちの肩に掛け、後ろ向きに歩いて行き、父の裸を覆った。二人は顔を背けたままで、父の裸を見なかった。ノアは酔いからさめると、末の息子がしたことを知り、こう言った。

「カナンは呪われよ
奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ。」
また言った。
「セムの神、主をたたえよ。
カナンはセムの奴隷となれ。
神がヤフェトの土地を広げ（ヤフェト）
セムの天幕に住ませ
カナンはその奴隷となれ。」——創世記 9:20-27

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シナルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。

彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。

主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。

「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」

主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。——創世記 11:1-9

その地方に飢饉があった。アブラムは、その地方の飢饉がひどかったので、エジプトに下り、そこに滞在することにした。エジプトに入ろうとしたとき、妻サライに言った。

「あなたが美しいのを、わたしはよく知っている。エジプト人があなたを見たら、『この女はあの男の妻だ』と言って、わたしを殺し、あなたを生かしておくにちがいない。どうか、わたしの妹だ、と言ってください。そうすれば、わたしはあなたのゆえに幸いになり、あなたのお陰で命も助かるだろう。」

アブラムがエジプトに入ると、エジプト人はサライを見て、大変美しいと思った。ファラオの家臣たちも彼女を見て、ファラオに彼女のことを褒めたので、サライはファラオの

宮廷に召し入れられた。アブラムも彼女のゆえに幸いを受け、羊の群れ、牛の群れ、ろば、男女の奴隷、雌ろば、らくだなどを与えられた。ところが主は、アブラムの妻サライのことで、ファラオと宮廷の人々を恐ろしい病気にかからせた。

ファラオはアブラムを呼び寄せて言った。

「あなたはわたしに何ということをしたのか。なぜ、あの婦人は自分の妻だと、言わなかったのか。なぜ、『わたしの妹です』などと言ったのか。だからこそ、わたしの妻として召し入れたのだ。さあ、あなたの妻を連れて、立ち去ってもらいたい。」

ファラオは家来たちに命じて、アブラムを、その妻とすべての持ち物と共に送り出させた。——創世記 12:10-20

あなたたち、およびあなたの後に続く子孫と、わたしとの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。——創世記 17:10

ロトはツォアルを出て、二人の娘と山の中に住んだ。ツォアルに住むのを恐れたからである。彼は洞穴に二人の娘と住んだ。姉は妹に言った。

「父も年老いてきました。この辺りには、世のしきたりに従って、わたしたちのところへ来てくれる男の人はいません。さあ、父にぶどう酒を飲ませ、床を共にし、父から子種を受けましょう。」

娘たちはその夜、父親にぶどう酒を飲ませ、姉がまず、父親のところへ入って寝た。父親は、娘が寝に来たのも立ち去ったのも気がつかなかった。

あくる日、姉は妹に言った。

「わたしは夕べ父と寝ました。今晚も父にぶどう酒を飲ませて、あなたが行って父と床を共にし、父から子種をいただきましょう。」

娘たちはその夜もまた、父親にぶどう酒を飲ませ、妹が父親のところへ行って寝た。父親は、娘が寝に来たのも立ち去ったのも気がつかなかった。

このようにして、ロトの二人の娘は父の子を身ごもり、——創世記 19:30-36

1.2.2 ヤコブとその家族

ある日のこと、ヤコブが煮物をしていると、エサウが疲れきって野原から帰って来た。

エサウはヤコブに言った。

「お願いだ、その赤いもの（アドム）、そこの赤いものを食べさせてほしい。わたしは疲れきっているんだ。」彼が名をエドムとも呼ばれたのはこのためである。ヤコブは言った。

「まず、お兄さんの長子の権利を譲ってください。」

「ああ、もう死にそうだ。長子の権利などどうでもよい」とエサウが答えると、ヤコブは言った。

「では、今すぐ誓ってください。」

エサウは誓い、長子の権利をヤコブに譲ってしまった。ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えた。エサウは飲み食いしたあげく立ち、去って行った。こうしてエサウは、長子の権利を軽んじた。——創世記 25:29-34

リベカの計略

イサクは年をとり、目がかすんで見えなくなってきた。そこで上の息子のエサウを呼び寄せて、「息子よ」と言った。エサウが、「はい」と答えると、イサクは言った。

「こんなに年をとったので、わたしはいつ死ぬか分からない。今すぐに、弓と矢筒など、狩りの道具を持って野に行き、獲物を取って来て、わたしの好きなおいしい料理を作り、ここへ持って来てほしい。死ぬ前にそれを食べて、わたし自身の祝福をお前に与えたい。」

リベカは、イサクが息子のエサウに話しているのを聞いていた。エサウが獲物を取りに野に行くと、リベカは息子のヤコブに言った。

「今、お父さんが兄さんのエサウにこう言っているのを耳にしました。『獲物を取って来て、あのおいしい料理を作ってほしい。わたしは死ぬ前にそれを食べて、主の御前でお前を祝福したい』と。わたしの子よ。今、わたしが言うことをよく聞いてそのとおりにしなさい。家畜の群れのところへ行って、よく肥えた子山羊を二匹取って来なさい。わたしが、それでお父さんの好きなおいしい料理を作りますから、それをお父さんのところへ持って行きなさい。お父さんは召し上がって、亡くなる前にお前を祝福してくださるでしょう。」

しかし、ヤコブは母リベカに言った。

「でも、エサウ兄さんはとても毛深いのに、わたしの肌は滑らかです。お父さんがわたしに触れば、だましているのが分かります。そうしたら、わたしは祝福どころか、反対に呪いを受けてしまいます。」

母は言った。

「わたしの子よ。そのときにはお母さんがその呪いを引き受けます。ただ、わたしの言うとおりに、行って取って来なさい。」

ヤコブは取りに行き、母のところを持って来たので、母は父の好きなおいしい料理を作った。リベカは、家にしまっておいた上の息子エサウの晴れ着を取り出して、下の息子ヤコブに着せ、子山羊の毛皮を彼の腕や滑らかな首に巻きつけて、自分が作ったおいしい料理とパンを息子ヤコブに渡した。

祝福をだまし取るヤコブ

ヤコブは、父のもとへ行き、「わたしのお父さん」と呼びかけた。父が、「ここにいる。わたしの子よ。誰だ、お前は」と尋ねると、ヤコブは言った。「長男のエサウです。お父さんの言われたとおりにしてきました。さあ、どうぞ起きて、座ってわたしの獲物を召し上がり、お父さん自身の祝福をわたしに与えてください。」「わたしの子よ、どうしてまた、こんなに早くしとめられたのか」と、イサクが息子に尋ねると、ヤコブは答えた。「あなたの神、主がわたしのために計らってくださったからです。」イサクはヤコブに言った。「近寄りなさい。わたしの子に触って、本当にお前が息子のエサウかどうか、確かめたい。」

ヤコブが父イサクに近寄ると、イサクは彼に触りながら言った。「声はヤコブの声だが、腕はエサウの腕だ。」イサクは、ヤコブの腕が兄エサウの腕のように毛深くなっていたので、見破ることができなかった。そこで、彼は祝福しようとして、言った。「お前は本当にわたしの子エサウなのだな。」ヤコブは、「もちろんです」と答えた。イサクは言った。「では、お前の獲物をここへ持って来なさい。それを食べて、わたし自身の祝福をお前に与えよう。」ヤコブが料理を差し出すと、イサクは食べ、ぶどう酒をつぐと、それを飲んだ。それから、父イサクは彼に言った。「わたしの子よ、近寄ってわたしに口づけをなさい。」ヤコブが近寄って口づけをすると、イサクは、ヤコブの着物の匂いをかいで、祝福して言った。

「ああ、わたしの子の香りは
主が祝福された野の香りのようだ。
どうか、神が
天の露と地の産み出す豊かなもの
穀物とぶどう酒を
お前に与えてくださるように。
多くの民がお前に仕え
多くの国民がお前にひれ伏す。
お前は兄弟たちの主人となり
母の子らもお前にひれ伏す。
お前を呪う者は呪われ
お前を祝福する者は
祝福されるように。」

悔しがるエサウ

イサクがヤコブを祝福し終えて、ヤコブが父イサクの前から立ち去るとすぐ、兄エサウが狩りから帰って来た。彼もおいしい料理を作り、父のところへ持って来て言った。「わたしのお父さん。起きて、息子の獲物を食べてください。そして、あなた自身の祝福をわたしに与えてください。」父イサクが、「お前は誰なのか」と聞くと、「わたしです。あなたの息子、長男のエサウです」と答えが返ってきた。イサクは激しく体を震わせて言った。

「では、あれは、一体誰だったのだ。さっき獲物を取ってわたしのところに持って来たのは。実は、お前が来る前にわたしはみんな食べて、彼を祝福してしまった。だから、彼が祝福されたものになっている。」

エサウはこの父の言葉を聞くと、悲痛な叫びをあげて激しく泣き、父に向かって言った。「わたしのお父さん。わたしも、このわたしも祝福してください。」イサクは言った。「お前の弟が来て策略を使い、お前の祝福を奪ってしまった。」エサウは叫んだ。

「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り（アーカブ）欺いた。あのときはわたしの長子の権利を奪い、今度はわたしの祝福を奪ってしまった。」エサウは続けて言った。「お父さんは、わたしのために祝福を残しておいてくれなかったのですか。」

イサクはエサウに答えた。「既にわたしは、彼をお前の主人とし、親族をすべて彼の僕とし、穀物もぶどう酒も彼のものにしてしまった。わたしの子よ。今となっては、お前のために何をしてやれようか。」

エサウは父に叫んだ。

「わたしのお父さん。祝福はたった一つしかないのですか。わたしも、このわたしも祝福してください、わたしのお父さん。」エサウは声をあげて泣いた。父イサクは言った。

「ああ

地の産み出す豊かなものから遠く離れた所

この後お前はそこに住む

天の露からも遠く隔てられて。

お前は剣に頼って生きていく。

しかしお前は弟に仕える。

いつの日にかお前は反抗を企て

自分の首から軛を振り落とす。」

逃亡の勧め

エサウは、父がヤコブを祝福したことを根に持って、ヤコブを憎むようになった。そして、心の中で言った。「父の喪の日も遠くない。そのときがきたら、必ず弟のヤコブを殺してやる。」ところが、上の息子エサウのこの言葉が母リベカの耳に入った。彼女は人をやって、下の息子のヤコブを呼び寄せて言った。

「大変です。エサウ兄さんがお前を殺して恨みを晴らそうとしています。わたしの子よ。今、わたしの言うことをよく聞き、急いでハランに、わたしの兄ラバンの所へ逃げて行きなさい。そして、お兄さんの怒りが治まるまで、しばらく伯父さんの所に置いてもらいなさい。そのうちに、お兄さんの憤りも治まり、お前のしたことを忘れてくれるだろうから、そのときには人をやってお前を呼び戻します。一日のうちにお前たち二人を失うことなど、どうしてできましょう。」

ヤコブの出発

リベカはイサクに言った。「わたしは、ヘト人の娘たちのことで、生きているのが嫌になりました。もしヤコブまでも、この土地の娘の中からあんなヘト人の娘をめとったら、わたしは生きているかがありません。」——創世記 27

ラバンはヤコブに言った。「お前は身内の者だからといって、ただで働くことはない。どんな報酬が欲しいか言ってみなさい。」

ところで、ラバンには二人の娘があり、姉の方はレア、妹の方はラケルといった。レアは優しい目をしていたが、ラケルは顔も美しく、容姿も優れていた。ヤコブはラケルを愛していたので、「下の娘のラケルをくださるなら、わたしは七年間あなたの所で働きます」と言った。ラバンは答えた。「あの娘をほかの人に嫁がせるより、お前に嫁がせる方が良い。わたしの所にいなさい。」ヤコブはラケルのために七年間働いたが、彼女を愛していたので、それはほんの数日のように思われた。ヤコブはラバンに言った。

「約束の年月が満ちましたから、わたしのいいなずけと一緒にらせてください。」ラバンは土地の人たちを皆集め祝宴を開き、夜になると、娘のレアをヤコブのもとに連れて行ったので、ヤコブは彼女のところに入った。ラバンはまた、女奴隷ジルパを娘レアに召し使いとして付けてやった。ところが、朝になってみると、それはレアであった。ヤコブがラバンに、「どうしてこんなことをなさったのですか。わたしがあなたのもとで働いたのは、ラケルのためではありませんか。なぜ、わたしをだましたのですか」と言うと、ラバンは答えた。「我々の所では、妹を姉より先に嫁がせることはしないのだ。とにかく、この一週間の婚礼の祝いを済ませなさい。そうすれば、妹の方もお前に嫁がせよう。だがもう七年間、うちで働いてもらわねばならない。」ヤコブが、言われたとおりの一週間の婚礼の祝いを済ませると、ラバンは下の娘のラケルもヤコブに妻として与えた。ラバンはまた、女奴隷ビルハを娘ラケルに召し使いとして付けてやった。こうして、ヤコブはラケルをめとった。ヤコブはレアよりもラケルを愛した。そして、更にもう七年ラバンのもとで働いた。——創世記 29:15-30

ラケルは、ヤコブとの間に子供ができないことが分かると、姉をねたむようになり、ヤコブに向かって、「わたしにもぜひ子供を与えてください。与えてくださらなければ、わたしは死にます」と言った。ヤコブは激しく怒って、言った。「わたしが神に代われると言うのか。お前の胎に子供を宿らせないのは神御自身なのだ。」ラケルは、「わたしの召し使いのビルハがいます。彼女のところに入ってください。彼女が子供を産み、わたしがその子を膝の上に迎えば、彼女によってわたしも子供を持つことができます」と言った。ラケルはヤコブに召し使いビルハを側女として与えたので、ヤコブは彼女のところに

入った。やがて、ビルハは身ごもってヤコブとの間に男の子を産んだ。そのときラケルは、「わたしの訴えを神は正しくお裁き（ディン）になり、わたしの願いを聞き入れ男の子を与えてくださった」と言った。そこで、彼女はその子をダンと名付けた。ラケルの召し使いビルハはまた身ごもって、ヤコブとの間に二人目の男の子を産んだ。そのときラケルは、「姉と死に物狂いの争いをして（ニフタル）、ついに勝った」と言って、その名をナフタリと名付けた。

レアも自分に子供ができなくなったのを知ると、自分の召し使いジルパをヤコブに側女として与えたので、レアの召し使いジルパはヤコブとの間に男の子を産んだ。そのときレアは、「なんと幸運な（ガド）」と言って、その子をガドと名付けた。——創世記 30:1-11

小麦の刈り入れのころ、ルベンは野原で恋なすびを見つけ、母レアのところへ持って来た。ラケルがレアに、「あなたの子供が取って来た恋なすびをわたしに分けてください」と言うと、レアは言った。「あなたは、わたしの夫を取っただけでは気が済まず、わたしの息子の恋なすびまで取ろうとするのですか。」「それでは、あなたの子供の恋なすびの代わりに、今夜あの人があなたと床を共にするようにしましょう」とラケルは答えた。夕方になり、ヤコブが野原から帰って来ると、レアは出迎えて言った。「あなたはわたしのところに来なければなりません。わたしは、息子の恋なすびであなたを雇ったのですから。」その夜、ヤコブはレアと寝た。——創世記 30:14-16

「何をお前に支払えばよいのか」とラバンが尋ねると、ヤコブは答えた。「何もくださるには及びません。ただこういう条件なら、もう一度あなたの群れを飼い、世話をいたしましょう。今日、わたしはあなたの群れを全部見回って、その中から、ぶちとまだらの羊をすべてと羊の中で黒みがかかったものをすべて、それからまだらとぶちの山羊を取り出しておきますから、それをわたしの報酬にしてください。明日、あなたが来てわたしの報酬をよく調べれば、わたしの正しいことは証明されるでしょう。山羊の中にぶちとまだらでないものや、羊の中に黒みがかかっていないものがあつたら、わたしが盗んだものと見なして結構です。」ラバンは言った。「よろしい。お前の言うとおりにしよう。」——創世記 30:31-34

ヤコブは、ポプラとアーモンドとプラタナスの木の若枝を取って来て、皮をはぎ、枝に白い木肌の縞を作り、家畜の群れがやって来たときに群れの目につくように、皮をはいだ枝を家畜の水飲み場の水槽の中に入れた。そして、家畜の群れが水を飲みに来たとき、さかりがつくようにしたので、家畜の群れは、その枝の前で交尾して縞やぶちやまだ

らのものを産んだ。また、ヤコブは羊を二手に分けて、一方の群れをラバンの群れの中の縞のものと全体が黒みがかかったものに向かわせた。彼は、自分の群れだけにはそうしたが、ラバンの群れにはそうしなかった。また、丈夫な羊が交尾する時期になると、ヤコブは皮をはいだ枝をいつも水ぶねの中に入れて群れの前に置き、枝のそばで交尾させたが、弱い羊のときには枝を置かなかった。そこで、弱いのはラバンのものとなり、丈夫なのはヤコブのものとなった。——創世記 30:37-42

ヤコブは人をやって、ラケルとレアを家畜の群れがいる野原に呼び寄せて、言った。「最近、気づいたのだが、あなたたちのお父さんは、わたしに対して以前とは態度が変わった。しかし、わたしの父の神は、ずっとわたしと共にいてくださった。——創世記 31:4-5

お父さんが、『ぶちのものがお前の報酬だ』と言えば、群れはみなぶちのものを産むし、『縞のものがお前の報酬だ』と言えば、群れはみな縞のものを産んだ。

神はあなたたちのお父さんの家畜を取り上げて、わたしにお与えになったのだ。——創世記 31:8-9

皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、

ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」「お前の名は何というのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。——創世記 32:24-30

シケムでの出来事

あるとき、レアとヤコブとの間に生まれた娘のディナが土地の娘たちに会いに出かけたが、その土地の首長であるヒビ人ハモルの息子シケムが彼女を見かけて捕らえ、共に寝て辱めた。シケムはヤコブの娘ディナに心を奪われ、この若い娘を愛し、言い寄った。更にシケムは、父ハモルに言った。

「どうか、この娘と結婚させてください。」

ヤコブは、娘のディナが汚されたことを聞いたが、息子たちは家畜を連れて野に出てい

たので、彼らが帰るまで黙っていた。シケムの父ハモルがヤコブと話し合うためにやって来たとき、ヤコブの息子たちが野から帰って来てこの事を聞き、皆、互いに嘆き、また激しく憤った。シケムがヤコブの娘と寝て、イスラエルに対して恥ずべきことを行ったからである。それはしてはならないことであった。ハモルは彼らと話した。

「息子のシケムは、あなたがたの娘さんを恋い慕っています。どうか、娘さんを息子の嫁にしてください。

お互いに姻戚関係を結び、あなたがたの娘さんたちをわたしどもにくださり、わたしども娘を嫁にしてくださいませんか。そして、わたしどもと一緒に住んでください。あなたがたのための土地も十分あります。どうか、ここに移り住んで、自由に使ってください。」

シケムも、ディナの父や兄弟たちに言った。

「ぜひとも、よろしく願います。お申し出があれば何でも差し上げます。どんなに高い結納金でも贈り物でも、お望みどおりに差し上げます。ですから、ぜひあの方をわたしの妻にください。」

しかし、シケムが妹のディナを汚したので、ヤコブの息子たちは、シケムとその父ハモルをだましてこう答えた。

「割礼を受けていない男に、妹を妻として与えることはできません。そのようなことは我々の恥とするところです。ただ、次の条件がかなえられれば、あなたたちに同意しましょう。それは、あなたたちの男性が皆、割礼を受けて我々と同じようになることです。そうすれば、我々の娘たちをあなたたちに与え、あなたたちの娘を我々がめとります。そして我々は、あなたたちと一緒に住んで一つの民となります。しかし、もし割礼を受けることに同意しないなら、我々は娘を連れてここを立ち去ることにします。」

ハモルとその息子シケムは、この条件なら受け入れてもよいと思った。とくにシケムは、ヤコブの娘を愛していたので、ためらわず実行することにした。彼は、ハモル家の中では最も尊敬されていた。ハモルと息子シケムは、町の門のところへ行き町の人々に提案した。

「あの人たちは、我々と仲良くやっていける人たちだ。彼らをここに住ませ、この土地を自由に使ってもらうことにしようではないか。土地は御覧のとおり十分広いから、彼らが来ても大丈夫だ。そして、彼らの娘たちを我々の嫁として迎え、我々の娘たちを彼らに与えようではないか。ただ、次の条件がかなえられれば、あの人たちは我々と一緒に住み、一つの民となることに同意するというのだ。それは、彼らが割礼を受けているように、我々も男性は皆、割礼を受けることだ。そうすれば、彼らの家畜の群れも財産も動物もみな、我々のものになるではないか。それには、ただ彼らの条件に同意さえすれば、彼らは我々と一緒に住むことができるのだ。」

町の門のところに集まっていた人々は皆、ハモルと息子シケムの提案を受け入れた。町

の門のところに集まっていた男性はこうして、すべて割礼を受けた。

三日目になって、男たちがまだ傷の痛みを苦しんでいたとき、ヤコブの二人の息子、つまりディナの兄のシメオンとレビは、めいめい剣を取って難なく町に入り、男たちをことごとく殺した。ハモルと息子シケムも剣にかけて殺し、シケムの家からディナを連れ出した。ヤコブの息子たちは、倒れている者たちに襲いかかり、更に町中を略奪した。自分たちの妹を汚したからである。そして、羊や牛やろばなど、町の中のものも野にあるものも奪い取り、家の中にあるものもみな奪い、女も子供もすべて捕虜にした。

「困ったことをしてくれたものだ。わたしはこの土地に住むカナン人やペリジ人の憎まれ者になり、のけ者になってしまった。こちらは少人数なのだから、彼らが集まって攻撃してきたら、わたしも家族も滅ぼされてしまうではないか」とヤコブがシメオンとレビに言うと、二人はこう言い返した。

「わたしたちの妹が娼婦のように扱われてもかまわないのですか。」——創世記 34

(編者註:) この先に進む前にちょっと予習をしておこう。ヤコブ = 後のイスラエルのその後だけど、姉レア、妹ラケル、妹ラケルの召し使いビルハ、そして姉レアの召し使いジルパ、と4人もいる妻と12人の子供を作った。内訳は以下の通り。

レアの息子がヤコブの長男ルベン、それからシメオン、レビ、ユダ、イサカル、ゼブルン、ラケルの息子がヨセフとベニヤミン、ラケルの召し使いビルハの息子がダンとナフタリ、レアの召し使いジルパの息子がガドとアシェルである。これらは、パダン・アラムで生まれたヤコブの息子たちである。——創世記 35:23-26

(編者註:) で、ここで活躍するのがヤコブとラケルの息子のヨセフ。ヨセフはヤコブ改めイスラエルが年を取ってからの息子なので、イスラエルに可愛がられた。おまけに自分が王になることを暗示する夢をみて、その内容を兄弟に喋ったので、兄たちの嫉妬を受けて憎まれることになる。イスラエルの言い付けで、シケムで羊の群れを追う兄たちと合流するためにやってきたヨセフを、兄たちは殺して野獣に食わせて証拠隠滅しようとして画策するんだけど、長兄ルベンが、それは可哀想だから、荒れ野の穴に放り込むだけにしよう、と皆をいさめる。そしてヨセフは捕まって、身ぐるみ剥がれてから、獣がいそうな穴に放り込まれるのだけど、幸い穴の中に獣はいなかった。そこにイシュマエル人の隊商が通りがかったので、兄の一人であるユダが「肉親を殺すのはアレだから、あいつらに売っ払っちゃおう」と提案するんだけど、ヨセフはたまたま通りがかったミディアン人の隊商に拾われて、銀20枚でイシュマエル人の隊商に転売されてしまう。やっべーどーしよー、と

長兄ルベンがテンパったので、皆はさっき剥いだ着物に血をつけてイスラエルに送り届ける。イスラエルは悲嘆に暮れて泣く。(つづく)

そのころ、ユダは兄弟たちと別れて、アドラム人のヒラという人の近くに天幕を張った。ユダはそこで、カナン人のシュアという人の娘を見初めて結婚し、彼女のところに入った。彼女は身ごもり男の子を産んだ。ユダはその子をエルと名付けた。彼女はまた身ごもり男の子を産み、その子をオナンと名付けた。彼女は更にまた男の子を産み、その子をシェラと名付けた。彼女がシェラを産んだとき、ユダはケジブにいた。

ユダは長男のエルに、タマルという嫁を迎えたが、ユダの長男エルは主の意に反したので、主は彼を殺された。ユダはオナンに言った。

「兄嫁のところに入り、兄弟の義務を果たし、兄のために子孫をのこしなさい。」

オナンはその子孫が自分のものとならないのを知っていたので、兄に子孫を与えないように、兄嫁のところに入る度に子種を地面に流した。彼のしたことは主の意に反することであったので、彼もまた殺された。——創世記 38:1-10

ユダは嫁のタマルに言った。

「わたしの息子のシェラが成人するまで、あなたは父上の家で、やもめのまま暮らしていなさい。」

それは、シェラもまた兄たちのように死んではいけないと思ったからであった。タマルは自分の父の家に帰って暮らした。

かなりの年月がたって、シュアの娘であったユダの妻が死んだ。ユダは喪に服した後、友人のアドラム人ヒラと一緒に、ティムナの羊の毛を切る者のところへ上って行った。ある人がタマルに、「あなたのしゅうとが、羊の毛を切るために、ティムナへやって来ます」と知らせたので、タマルはやもめの着物を脱ぎ、ベールをかぶって身なりを変え、ティムナへ行く途中のエナイムの入り口に座った。シェラが成人したのに、自分がその妻にしてみらえない、と分かったからである。ユダは彼女を見て、顔を隠しているので娼婦だと思った。ユダは、路傍にいる彼女に近寄って、「さあ、あなたの所に入らせてくれ」と言った。彼女が自分の嫁だとは気づかなかったからである。

「わたしの所にお入りになるのなら、何をくださいますか」と彼女が言うと、ユダは、「群れの中から子山羊を一匹、送り届けよう」と答えた。しかし彼女は言った。

「でも、それを送り届けてくださるまで、保証の品をください。」

「どんな保証がいいのか」と言うと、彼女は答えた。

「あなたのひもの付いた印章と、持っていらっしゃるその杖です。」ユダはそれを渡し、彼女の所に入った。彼女はこうして、ユダによって身ごもった。彼女はそこを立ち去り、

ベールを脱いで、再びやもめの着物を着た。——創世記 38:11-19

(編者註:) ヨセフはエジプトのファラオの侍従長ポティファルの所有になったのだけど、なにせ王となることを暗示する夢を見る位、神さまに気に入られていたので、やることなすことうまくいって、主人の全面的信頼を獲得する。おまけにイケメンだったので、主人の奥さんに言い寄られるんだけど、これをヨセフは拒絶する。誰もいないときに強引に床に引っ張り込まれそうになったので全裸で逃げ出したら、奥さんは逆ギレして「イタズラされるー!」と騒いだので、主人はヨセフを監獄に入れる。けれど神さまの御威光のおかげで今度は監獄内での全面的信頼を獲得する。

そんなある日、ファラオのコックと給仕がしくじって、ヨセフのいる監獄に入れられる。ヨセフ管理下の監獄で何日か過ごしたところで、この二人が夢を見たんだけど、ヨセフはこの夢の予言を読み解いて、給仕が復職し、コックが殺されると言い、それは的中する。

そして二年後、今度はファラオが夢を見たんだけど、話を聞いたその給仕が、自分が投獄されていたときにヘブライ人の若者が夢を読み解いた、という話をする。じゃあ、とファラオがヨセフを呼んで夢の話をする、7年の豊作の後に7年の飢饉が訪れること、飢饉に備えて食糧を保管することを告げられる。感心したファラオはヨセフを取り立て、ヨセフに導かれたエジプトは飢饉を乗り越える。

そんなエジプトに、ヨセフの兄たちが食糧を買いに来たのだけど、彼らはファラオの重臣がヨセフだと気付かない。ヨセフは彼らを投獄した後、シメオンを人質にして、末の弟のベニヤミンを連れてくるまで返さない、と伝え、彼らをカナンに帰らせる。兄たちは、これはヨセフを見捨てた罰だと言いがうが、やがて食糧がなくなり、彼らは再びエジプトを訪れることにする。ヨセフの出した条件通りベニヤミンを連れてきた彼らをヨセフは歓待するのだが、ベニヤミンの荷物に密かに自らの銀杯を包み、追手を出して彼らを捕えさせる。末の弟まで失ったら、きっとイスラエルは悲しみのあまり死んでしまう、と懇願するユダに打たれたヨセフは、はじめて兄たちに名乗るのであった……

急いで父上のもとへ帰って、伝えてください。『息子のヨセフがこう言っています。神が、わたしを全エジプトの主としてくださいました。ためらわずに、わたしのところへおいでください。——創世記 45:9

飢饉が極めて激しく、世界中に食糧がなくなった。エジプトの国でも、カナン地方でも、人々は飢饉のために苦しみあえいだ。ヨセフは、エジプトの国とカナン地方の人々が穀物の代金として支払った銀をすべて集め、それをファラオの宮廷に納めた。エジプトの

国にもカナン地方にも、銀が尽き果てると、エジプト人は皆、ヨセフのところにやって来て、「食べる物をください。あなたさまは、わたしどもを見殺しになさるおつもりですか。銀はなくなってしまいました」と言った。

ヨセフは答えた。「家畜を連れて来なさい。もし銀がなくなったのなら、家畜と引き換えに与えよう。」

人々が家畜をヨセフのところに連れて来ると、ヨセフは、馬や、羊や牛の群れや、ろばと引き換えに食糧を与えた。ヨセフはこうして、その年、すべての家畜と引き換えに人々に食糧を分け与えた。その年も終わり、次の年になると、人々はまたヨセフのところに来て、言った。

「御主君には、何もかも隠さずに申し上げます。銀はすっかりなくなり、家畜の群れも御主君のものとなって、御覧のように残っているのは、わたしどもの体と農地だけです。どうしてあなたさまの前で、わたしどもと農地が減んでしまってよいのでしょうか。食糧と引き換えに、わたしどもと土地を買い上げてください。わたしどもは農地とともに、ファラオの奴隷になります。種をお与えください。そうすれば、わたしどもは死なずに生きることができ、農地も荒れ果てないでしょう。」

ヨセフは、エジプト中のすべての農地をファラオのために買い上げた。飢饉が激しくなったので、エジプト人は皆自分の畑を売ったからである。土地はこうして、ファラオのものとなった。また民については、エジプト領の端から端まで、ヨセフが彼らを奴隷にした。——創世記 47:13-21

イスラエルがそこに滞在していたとき、ルベンは父の側女ビルハのところへ入って寝た。このことはイスラエルの耳にも入った。——創世記 35:22

お前は水のように奔放で
長子の誉れを失う。
お前は父の寝台に上った。
あ那时候、わたしの寝台に上り
それを汚した。——創世記 49:4

イスラエルの長男ルベンの子孫について。ルベンは長男であったが、父の寝床を汚したので、長子の権利を同じイスラエルの子ヨセフの子孫に譲らねばならなかった。そのため彼は長男として登録されてはいない。——歴代誌第一 5:1

ヨセフは父の顔に伏して泣き、口づけした。

ヨセフは自分の侍医たちに、父のなきがらに薬を塗り、防腐処置をするように命じたので、医者はイスラエルにその処置をした。そのために四十日を費やした。この処置をするにはそれだけの日数が必要であった。エジプト人は七十日の間喪に服した。——創世記 50:1-3

1.3 モーゼと出エジプト記

途中、ある所に泊まったとき、主はモーセと出会い、彼を殺そうとされた。ツイポラは、とっさに石刀を手にして息子の包皮を切り取り、それをモーセの両足に付け、「わたしにとって、あなたは血の花婿です」と叫んだので、主は彼を放された。彼女は、そのとき、割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのである。——出エジプト記 4:24-26

神は民を、葦の海に通じる荒れ野の道に迂回させられた。イスラエルの人々は、隊伍を整えてエジプトの国から上った。

(参考:欽定訳) But God led the people about, through the way of the wilderness of the Red sea: and the children of Israel went up harnessed out of the land of Egypt. ——出エジプト記 13:18

モーセはイスラエルを、葦の海から旅立たせた。彼らはシュルの荒れ野に向かって、荒れ野を三日の間進んだが、水を得なかった。

(参考:欽定訳) So Moses brought Israel from the Red sea, and they went out into the wilderness of Shur; and they went three days in the wilderness, and found no water. ——出エジプト記 15:22

「イスラエルの人々に、引き返してミグドルと海との間のピ・ハヒロトの手前で宿営するよう命じなさい。バアル・ツェフォンの前に、それに面して、海辺に宿営するのだ。

(参考:欽定訳) Speak unto the children of Israel, that they turn and encamp before Pihahiroth, between Migdol and the sea, over against Baal-zephon: before it shall ye encamp by the sea. ——出エジプト記 14:2

主はファラオの戦車と軍勢を海に投げ込み
えり抜きの戦士は葦の海に沈んだ。

(参考:欽定訳) Pharaoh's chariots and his host hath he cast into the sea: his chosen captains also are drowned in the Red sea. ——出エジプト記 15:4

(編者註:) この海は、伝統的な聖書では紅海とされることが多いが、新共同訳ではヘブラ

イ語により忠実な訳語として「葦の海」を用いている。

ヨシュアは、モーセの命じたとおりに実行し、アマレクと戦った。モーセとアロン、そしてフルは丘の頂に登った。モーセが手を上げている間、イスラエルは優勢になり、手を下ろすと、アマレクが優勢になった。モーセの手が重くなったので、アロンとフルは石を持って来てモーセの下に置いた。モーセはその上に座り、アロンとフルはモーセの両側に立って、彼の手を支えた。その手は、日の沈むまで、しっかりと上げられていた。ヨシュアは、アマレクとその民を剣にかけて打ち破った。——出エジプト記 17:10-13

民のために周囲に境を設けて、命じなさい。『山に登らぬよう、また、その境界に触れぬよう注意せよ。山に触れる者は必ず死刑に処せられる。その人に手を触れずに、石で打ち殺すか、矢で射殺さねばならない。獣であれ、人であれ、生かしておいてはならない。角笛が長く吹き鳴らされるとき、ある人々は山に登ることができる。』

モーセは山から民のところの下って行き、民を聖別し、衣服を洗わせ、——出エジプト記 19:12-14

1.3.1 神の戒律

あなたは、階段を用いて祭壇に登ってはならない。あなたの隠し所があらわにならないためである。——出エジプト記 20:26

人が自分の男奴隷あるいは女奴隷を棒で打ち、その場で死なせた場合は、必ず罰せられる。ただし、一両日でも生きていた場合は、罰せられない。それは自分の財産だからである。——出エジプト記 21:20-21

女呪術師を生かしておいてはならない。——出エジプト記 22:17

男であれ、女であれ、口寄せや霊媒は必ず死刑に処せられる。彼らを石で打ち殺せ。彼らの行為は死罪に当たる。——レビ記 20:27

自分の父あるいは母を呪う者は、必ず死刑に処せられる。——出エジプト記 21:17

自分の父母を呪う者は、必ず死刑に処せられる。父母を呪うことは死罪に当たる。——レビ記 20:9

すべて獣と寝る者は必ず死刑に処せられる。——出エジプト記 22:18

動物と交わった男は必ず死刑に処せられる。その動物も殺さねばならない。

いかなる動物とであれ、これに近づいて交わる女と動物を殺さねばならない。彼らは必ず死刑に処せられる。彼らの行為は死罪に当たる。——レビ記 20:15-16

(編者註:) レビ記の方は、性交相手の動物も殺すように定めている。

六日の間は仕事をする事ができるが、七日目は、主の聖なる、最も厳かな安息日である。だれでも安息日に仕事をする者は必ず死刑に処せられる。——出エジプト記 31:15

六日の間は仕事をする事ができるが、第七日はあなたたちにとって聖なる日であり、主の最も厳かな安息日である。その日に仕事をする者はすべて死刑に処せられる。——出エジプト記 35:2

主の御名を呪う者は死刑に処せられる。共同体全体が彼を石で打ち殺す。神の御名を呪うならば、寄留する者も土地に生まれた者も同じく、死刑に処せられる。——レビ記 24:16

人々がけんかをして、妊娠している女を打ち、流産させた場合は、もしその他の損傷がなくても、その女の主人が要求する賠償を支払わねばならない。仲裁者の裁定に従ってそれを支払わねばならない。もし、その他の損傷があるならば、命には命、目には目、歯には歯、手には手、足には足、やけどにはやけど、生傷には生傷、打ち傷には打ち傷をもって償わねばならない。——出エジプト記 21:22-25

彼はイスラエルの人々の若者を遣わし、焼き尽くす献げ物をささげさせ、更に和解の献げ物として主に雄牛をささげさせた。モーセは血の半分を取って鉢に入れて、残りの半분을祭壇に振りかけると、契約の書を取り、民に読んで聞かせた。彼らが、「わたしたちは

主が語られたことをすべて行い、守ります」と言うと、モーセは血を取り、民に振りかけて言った。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」——出エジプト記 24:5-8

主はモーセに仰せになった。「直ちに下山せよ。あなたがエジプトの国から導き上った民は墮落し、早くもわたしが命じた道からそれて、若い雄牛の鑄像を造り、それにひれ伏し、いけにえをささげて、『イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上った神々だ』と叫んでいる。」主は更に、モーセに言われた。「わたしはこの民を見てきたが、実にかたくなな民である。今は、わたしを引き止めるな。わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする。」モーセは主なる神をなだめて言った。「主よ、どうして御自分の民に向かって怒りを燃やされるのですか。あなたが大いなる御力と強い御手をもってエジプトの国から導き出された民ではありませんか。どうしてエジプト人に、『あの神は、悪意をもって彼らを山で殺し、地上から滅ぼし尽くすために導き出した』と言わせてよいのでしょうか。どうか、燃える怒りをやめ、御自分の民にくだす災いを思い直してください。どうか、あなたの僕であるアブラハム、イサク、イスラエルを思い起こしてください。あなたは彼らに自ら誓って、『わたしはあなたたちの子孫を天の星のように増やし、わたしが与えると約束したこの土地をことごとくあなたたちの子孫に授け、永久にそれを継がせる』と言われたではありませんか。」主は御自身の民にくだす、と告げられた災いを思い直された。——出エジプト記 32:7-14

モーセはこの民が勝手なふるまいをしたこと、アロンが彼らに勝手なふるまいをさせて、敵対する者の嘲りの種となったことを見ると、宿営の入り口に立ち、「だれでも主につく者は、わたしのもとに集まれ」と言った。レビの子らが全員彼のもとに集まると、彼らに、「イスラエルの神、主がこう言われる。『おのおの、剣を帯び、宿営を入り口から入り口まで行き巡って、おのおの自分の兄弟、友、隣人を殺せ』」と命じた。レビの子らは、モーセの命じたとおりに行った。その日、民のうちで倒れた者はおよそ三千人であった。モーセは言った。「おのおの自分の子や兄弟に逆らったから、今日、あなたたちは主の祭司職に任命された。あなたたちは今日、祝福を受ける。」

翌日になって、モーセは民に言った。「お前たちは大きな罪を犯した。今、わたしは主のもとに上って行く。あるいは、お前たちの罪のために贖いができるかもしれない。」モーセは主のもとに戻って言った。「ああ、この民は大きな罪を犯し、金の神を造りました。今、もしもあなたが彼らの罪をお赦しくくださるのであれば……。もし、それがかなわなければ、どうかこのわたしをあなたが書き記された書の中から消し去ってください。」主はモーセに言われた。「わたしに罪を犯した者はだれでも、わたしの書から消し去る。しか

し今、わたしがあなたに告げた所にこの民を導いて行きなさい。見よ、わたしの使いがあなたに先立って行く。しかし、わたしの裁きの日に、わたしは彼らをその罪のゆえに罰する。」主は民がアロンに若い雄牛を造らせたので、民を打たれたのである。——出エジプト記 32:25-35

モーセが、「どうか、あなたの栄光をお示してください」と言うと、主は言われた。「わたしはあなたの前にすべてのわたしの善い賜物を通らせ、あなたの前に主という名を宣言する。わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ。」また言われた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」更に、主は言われた。「見よ、一つの場所がわたしの傍らにある。あなたはその岩のそばに立ちなさい。わが栄光が通り過ぎるとき、わたしはあなたをその岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、わたしの手であなたを覆う。わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない。」——出エジプト記 33:18-23

あなたはほかの神を拜んではならない。主はその名を熱情といい、熱情の神である。

(参考・口語訳) あなたは他の神を拜んではならない。主はその名を『ねたみ』と言って、ねたむ神だからである。

(参考・欽定訳) For thou shalt worship no other god: for the LORD, whose name is Jealous, is a jealous God:——出エジプト記 34:14

モーセの顔の光

モーセがシナイ山を下ったとき、その手には二枚の掟の板があった。モーセは、山から下ったとき、自分が神と語っている間に、自分の顔の肌が光を放っているのを知らなかった。アロンとイスラエルの人々がすべてモーセを見ると、なんと、彼の顔の肌は光を放っていた。彼らは恐れて近づけなかったが、モーセが呼びかけると、アロンと共同体の代表者は全員彼のもとに戻って来たので、モーセは彼らに語った。その後、イスラエルの人々が皆、近づいて来たので、彼はシナイ山で主が彼に語られたことをことごとく彼らに命じた。モーセはそれを語り終わったとき、自分の顔に覆いを掛けた。

モーセは、主の御前に行って主と語るときはいつでも、出て来るまで覆いはずしていた。彼は出て来ると、命じられたことをイスラエルの人々に語った。イスラエルの人々がモーセの顔を見ると、モーセの顔の肌は光を放っていた。モーセは、再び御前に行って主と語るまで顔に覆いを掛けた。——出エジプト記 34:29-35

1.3.2 契約の聖櫃

奉納者が献げ物とする牛の頭に手を置き、臨在の幕屋の入り口で屠ると、アロンの子らである祭司たちは血を祭壇の四つの側面に注ぎかける。奉納者がこの牛を燃やして主にささげる和解の献げ物とする場合は、内臓を覆っている脂肪、内臓に付着するすべての脂肪、二つの腎臓とそれに付着する腰のあたりの脂肪、および腎臓と共に切り取った肝臓の尾状葉を取る。アロンの子らはこれを、祭壇の燃えている薪の上の焼き尽くす献げ物と共に煙にする。これが燃やして主にささげる宥めの香りである。——レビ記 3:2-5

また、彼らに亜麻布のズボンを作り、腰から腿までの肌を覆い隠すようにしなさい。アロンとその子らがそれを身に着けていれば、臨在の幕屋に入ったとき、あるいは聖所で務めをするために祭壇に近づいたとき、罪を負って死を招くことがない。これは彼とその後の子らにとって不変の定めである。

(参考:文語訳(明治訳)) 又かれらのためにその陰^{かくしどころ}所を蔽ふ麻の禪^{ももひき}をつくり腰^{つく}より髀^{もも}に達らしむべし アロンとその子等は集會^{しゅうかい}の幕屋に入る時又は祭壇に近づきて聖所^{きよきところ}に職事をなす時はこれを著^{きる}べし 斯^{かく}せば愆^{とが}をかうむりて死^{しぬ}ることなからん 是^{これ}は彼および彼の後の子孫の永く守るべき例なり——出エジプト記 28:42-43

命の代償

主はモーセに仰せになった。

あなたがイスラエルの人々の人口を調査して、彼らを登録させるとき、登録に際して、各自は命の代償を主に支払わねばならない。登録することによって彼らに災いがふりかからぬためである。登録が済んだ者はすべて、聖所のシェケルで銀半シェケルを主への献納物として支払う。一シェケルは二十ゲラに当たる。登録を済ませた二十歳以上の男子は、主への献納物としてこれを支払う。あなたたちの命を贖うために主への献納物として支払う銀は半シェケルである。豊かな者がそれ以上支払うことも、貧しい者がそれ以下支払うことも禁じる。あなたがイスラエルの人々から集めた命の代償金は臨在の幕屋のために用いる。それは、イスラエルの人々が主の御前で覚えられるために、あなたたちの命を贖うためである。——出エジプト記 30:11-16

アロンの子のナダブとアビフはそれぞれ香炉を取って炭火を入れ、その上に香をたいて主の御前にささげたが、それは、主の命じられたものではない、規定に反した炭火であっ

た。すると、主の御前から火が出て二人を焼き、彼らは主の御前で死んだ。——レビ記 10:1-2

(編者註: 11:13 の「鳥類のうちで、次のものは鳥類のうちで、次のものは汚らわしいものとして扱え。食べてはならない。それらは汚らわしいものである……」を受けて) こうのとりの類、青鷺の類、やつがしら鳥、こうもり。

羽があり、四本の足で動き、群れを成す昆虫はすべて汚らわしいものである。ただし羽があり、四本の足で動き、群れを成すもののうちで、地面を跳躍するのに適した後ろ肢を持つものは食べてよい。すなわち、いなごの類、羽ながいなごの類、大いなごの類、小いなごの類は食べてよい。——レビ記 11:19-22

(新共同訳) 禿鷲、ひげ鷲、黒禿鷲、鷹、隼の類、鳥の類、鷲みみずく、小みみずく、虎ふずく、鷹の類、森ふくろう、魚みみずく、大このはずく、小きんめふくろう、このはずく、みさご、こうのとりの類、青鷺の類、やつがしら鳥、こうもり。

(新改訳 3 版) はげわし、はげたか、黒はげたか、とび、はやぶさの類、鳥の類全部、だちょう、よたか、かもめ、たかの類、ふくろう、う、みみずく、白ふくろう、ペリカン、野がん、こうのとりの類、さぎの類、やつがしら、こうもりなど

(口語訳) はげわし、ひげはげわし、みさご、とび、はやぶさの類、もろもろのからすの類、だちょう、よたか、かもめ、たかの類、ふくろう、う、みみずく、むらさきばん、ペリカン、はげたか、こうのとりの類、さぎの類、やつがしら、こうもり。

——レビ記 11:13-19 で主が定めた「鳥類のうちで」「食べてはならない」「汚らわしい」もの

(編者註:) 口語訳や新改訳では 11:16 に「だちょう、よたか、かもめ、たかの類、」とあるのだが、新共同訳にはダチョウは出てこない。ここには引用しないけれど、欽定訳にもそれらしい記述はないんだよなあ……ちなみにダチョウはギリシア語で στρουθο (ラテン語の struthio と同じ語) で、この単語が語源になって欧米の各国語のダチョウに相当する語が形成された、といわれているそう。

あなたは妻の存命中に、その姉妹をめぐってこれを犯し、妻を苦しめてはならない。——レビ記 18:18

死者を悼んで身を傷つけたり、入れ墨をしてはならない。わたしは主である。——レビ記 19:28

女と寝るように男と寝る者は、両者共にいとうべきことをしたのであり、必ず死刑に処せられる。彼らの行為は死罪に当たる。——レビ記 20:13

アロンに告げなさい。

あなたの子孫のうちで、障害のある者は、代々にわたって、神に食物をささげる務めをしてはならない。だれでも、障害のある者、すなわち、目や足の不自由な者、鼻に欠陥のある者、手足の不釣り合いの者、手足の折れた者、背中にこぶのある者、目が弱く欠陥のある者、できものや疥癬のある者、睾丸のつぶれた者など、祭司アロンの子孫のうちで、以上の障害のある者はだれでも、主に燃やしてささげる献げ物の務めをしてはならない。彼には障害があるから、神に食物をささげる務めをしてはならない。——レビ記 21:17-21

女性の生理が始まったならば、七日間は月経期間であり、この期間に彼女に触れた人はすべて夕方まで汚れている。生理期間中の女性が使った寝床や腰掛けはすべて汚れる。彼女の寝床に触れた人はすべて、衣服を水洗いし、身を洗う。その人は夕方まで汚れている。また、その腰掛けに触れた人はすべて、衣服を水洗いし、身を洗う。その人は夕方まで汚れている。彼女の寝床や腰掛けを使って、それに触れたならば、その人は夕方まで汚れている。もし、男が女と寝て月経の汚れを受けたならば、七日間汚れる。またその男が使った寝床はすべて汚れる。——レビ記 15:19-24

(新共同訳) 重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き、髪をほどき、口ひげを覆い、「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばねばならない。

(新改訳3版) 患部のあるらい病人は、自分の衣服を引き裂き、その髪の毛を乱し、その口ひげをおおって、『汚れている、汚れている。』と叫ばなければならない。【第三版訂正箇所】 患部のあるそのツァラアトの者は、自分の衣服を引き裂き、その髪の毛を乱し、その口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ばなければならない。

(口語訳) 患部のあるらい病人は、その衣服を裂き、その頭を現し、その口ひげをおおって『汚れた者、汚れた者』と呼ばねばならない。

(欽定訳) And the leper in whom the plague is, his clothes shall be rent, and his head bare, and he shall put a covering upon his upper lip, and shall cry, Unclean, unclean. ——レビ記 13:45

主はモーゼに仰せになった。……復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。——レビ記 19:1, 19:18

(編者註:)[「主はモーゼに言われた」ということは、その言葉の対象はモーゼの民 = イスラエルの民、ということになる。旧約の他の箇所を読んでいくと明白だけど、ことさらに異民族であることを言わない限りは、この手の話の対象は全て同じ民族というのが最大前提なのだ。

姦淫の疑惑を持たれた妻の判決法

主はモーゼに仰せになった。

イスラエルの人々に告げてこう言いなさい。

ある人の妻が心迷い、夫を欺き、別の男と性的関係を持ったにもかかわらず、そのことが夫の目に触れず、露見せず、女が身を汚したことを目撃した証人もなく、捕らえられなくても、夫が嫉妬にかられて、事実身を汚した妻に疑いを抱くか、あるいは、妻が身を汚していないのに、夫が嫉妬にかられて、妻に疑いを抱くなら、夫は妻を祭司のところへ連れて行く。その際、大麦の粉十分の一エファを、オリーブ油を注がず、乳香も載せずに、妻のための献げ物として携えて行く。これは嫉妬した場合の献げ物、すなわち罪の判定のための献げ物である。

祭司は女を前に進ませ、主の御前に立たせる。祭司は聖水を土の器に入れ、幕屋の床にある塵を取ってその水に入れる。祭司はそれから、女を主の御前に立たせ、その髪をほどき、罪の判定のための献げ物、すなわち嫉妬した場合の献げ物を女の手置く。祭司は自分の手に呪いをくだす苦い水を持つ。

祭司は女に誓わせてこう言う。

もし、お前が別の男と関係を持ったこともなく、また夫ある身でありながら、心迷い、身を汚したこともなかったなら、この苦い水の呪いを免れるであろう。しかし、もしお前が夫ある身でありながら、心迷い身を汚し、夫以外の男に体を許したならば、——祭司は女に呪いの誓いをさせてこう言う——

主がお前の腰を衰えさせ、お前の腹を膨れさせ、民の中で主がお前を呪いの誓いどおりになさるるように。

この呪いをくだす水がお前の体内に入るや、お前の腹は膨れ、お前の腰はやせ衰えるであろう。

女は、「アーメン、アーメン」と言わなければならない。

祭司はこの呪いの言葉を巻物に書き、それを苦い水の中に洗い落とす。その呪いをくだ

す苦い水を女に飲ませ、呪いをくだす水が彼女の体内に入れば、それは苦くなるであろう。祭司は女の手から嫉妬した場合の献げ物を取り、それを主の御前に差し出し祭壇にささげる。祭司は献げ物から一つかみをそのしるしとして取り、祭壇で燃やして煙にする。それから、女にその水を飲ませる。水を飲ませたとき、もし、女が身を汚し、夫を欺いておれば、呪いをくだす水は彼女の体内に入って苦くなり、腹を膨らませ、腰を衰えさせる。女は民の中であって呪いとなるであろう。しかし、もし女が身を汚しておらず、清いなら、女はこの呪いを免れ、子を宿すであろう。

以上は、女が夫ある身でありながら、心迷い、身を汚したために、あるいは、夫が嫉妬にかられ、妻に疑いを抱いた場合の指示である。男は妻を主の御前に立たせ、祭司は彼女にこの指示どおりのことを行う。男は罪を負わない。妻は犯した罪を負う。——民数記 5:11-31

民に加わっていた雑多な他国人は飢えと渴きを訴え、イスラエルの人々も再び泣き言を言った。「誰か肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱やんにくが忘れられない。——民数記 11:4-5

さて、主のもとから風が出て、海の方からうずらを吹き寄せ、宿営の近くに落とした。うずらは、宿営の周囲、縦横それぞれ一日の道のりの範囲にわたって、地上二アンマほどの高さに積もった。民は出て行って、終日終夜、そして翌日も、うずらを集め、少ない者でも十ホメルは集めた。そして、宿営の周りに広げておいた。肉がまだ歯の間にあって、かみ切られないうちに、主は民に対して憤りを発し、激しい疫病で民を打たれた。そのためその場所は、キプロト・ハタアワ（貪欲の墓）と呼ばれている。貪欲な人々をそこに葬ったからである。——民数記 11:31-34

ミリアムとアロンは、モーセがクシュの女性を妻にしていることで彼を非難し、「モーセはクシュの女を妻にしている」と言った。

彼らは更に言った。「主はモーセを通してのみ語られるというのか。我々を通して語られるのではないか。」主はこれを聞かれた。モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった。主は直ちにモーセとアロンとミリアムに言われた。「あなたたちは三人とも、臨在の幕屋の前に出よ。」彼ら三人はそこに出た。主は雲の柱のうちであって降り、幕屋の入り口に立ち、「アロン、ミリアム」と呼ばれた。二人が進み出ると、主はこう言われた。

「聞け、わたしの言葉を。」

あなたたちの間に預言者がいれば
主なるわたしは幻によって自らを示し
夢によって彼に語る。
わたしの僕モーセはそうではない。
彼はわたしの家の者すべてに信頼されている。
口から口へ、わたしは彼と語り合う
あらわに、謎によらずに。
主の姿を彼は仰ぎ見る。
あなたたちは何故、恐れもせず
わたしの僕モーセを非難するのか。』

主は、彼らに対して憤り、去って行かれ、雲は幕屋を離れた。そのとき、見よ、ミリアムは重い皮膚病にかかり、雪のように白くなっていた。アロンはミリアムの方を振り向いた。見よ、彼女は重い皮膚病にかかっていた。——民数記 12:1-10

安息日の違反

イスラエルの人々が荒れ野にいたときのこと、ある男が安息日に薪を拾い集めているところを見つけられた。見つけた人々は、彼をモーセとアロンおよび共同体全体のもとに連れて来たが、どうすべきか、示しが与えられていなかったもので、留置しておいた。

主はモーセに言われた。「その男は必ず死刑に処せられる。共同体全体が宿営の外で彼を石で打ち殺さねばならない。」共同体全体は、主がモーセに命じられたとおりに、彼を宿営の外に連れ出して石で打ち殺したので、彼は死んだ。——民数記 15:32-36

コラ、ダタン、アビラムの反逆

さて、レビの子ケハトの孫でイツハルの子であるコラは、ルベンの孫でエリアブの子であるダタンとアビラム、およびペレトの子であるオンと組み、集会の召集者である共同体の指導者、二百五十名の名のあるイスラエルの人々を仲間に引き入れ、モーセに反逆した。彼らは徒党を組み、モーセとアロンに逆らって言った。「あなたたちは分を越えている。共同体全体、彼ら全員が聖なる者であって、主がその中におられるのに、なぜ、あなたたちは主の会衆の上に立とうとするのか。」

モーセはこれを聞くと、面を伏せた。彼はコラとその仲間すべてに言った。

「主は明日の朝、主に属する者、聖とされる者を示して、その人を御自身のもとに近づけられる。すなわち、主のお選びになる者を御自身のもとに近づけられる。

次のようにしなさい。コラとその仲間はすべて香炉を用意し、それに炭火を入れ、香をたいて、明日、主の御前に出なさい。そのとき主のお選びになる者が聖なる者なのだ。レ

ビの子らよ、分を越えているのはあなたたちだ。』

モーセは更に、コラに言った。「レビの子らよ、聞きなさい。イスラエルの神はあなたたちをイスラエルの共同体から取り分けられた者として御自身のそばに置き、主の幕屋の仕事をし、共同体の前に立って彼らに仕えさせられる。あなたたちはそれを不足とするのか。主は、あなたとあなたの兄弟であるレビの子らをすべて御自身のそばに近づけられたのだ。その上、あなたたちは祭司職をも要求するのか。そのために、あなたとあなたの仲間はずべて、主に逆らって集結したのか。アロンを何とあって、彼に対して不平を言うのか。』

モーセは人をやって、エリアブの子であるダタンとアビラムを呼び寄せようとしたが、彼らは言った。「我々は行かない。あなたは我々を乳と蜜の流れる土地から導き上って、この荒れ野で死なせるだけでは不足なのか。我々の上に君臨したいのか。あなたは我々を乳と蜜の流れる土地に導き入れもせず、畑もぶどう畑も我々の嗣業としてくれない。あなたはこの人々の目をめぐり出すつもりなのか。我々は行かない。』

モーセは激しく憤って主に言った。「彼らの献げ物を顧みないでください。わたしは彼らから一頭のろばも取ったことはなく、だれをも苦しめたことはありません。』

モーセはコラに言った。「明日、あなたとあなたの仲間すべて、すなわち、あなたも彼らも、アロンと共に主の御前になさい。あなたたちは、おのおの香炉を取り、それに香を載せ、主の御前に持って来なさい。おのおのの一つずつ、二百五十の香炉を持ち、あなたもアロンもそれぞれ自分の香炉を持って来なさい。』

彼らはおのおの香炉を取り、それに炭火を入れ、香を載せ、モーセとアロンと共に臨在の幕屋の入り口に立った。コラは共同体全体を集め、臨在の幕屋の入り口でモーセとアロンに相對した。主の栄光はそのとき、共同体全体に現れた。主はモーセとアロンに仰せになった。「この共同体と分かれて立ちなさい。わたしは直ちに彼らを滅ぼす。』彼らはひれ伏して言った。「神よ、すべて肉なるものに靈を与えられる神よ。あなたは、一人が罪を犯すと、共同体全体に怒りを下されるのですか。』

主はモーセに仰せになった。「コラ、ダタン、アビラムの住まいの周りから離れるよう、共同体に告げなさい。』モーセは立ち上がり、ダタンとアビラムのところに向かった。イスラエルの長老たちもついて行った。彼は共同体に言った。「この神に逆らう者どもの天幕から離れなさい。彼らの持ち物には一切触れてはならない。さもないと、彼らの罪のために、あなたたちは滅びる。』彼らはコラ、ダタン、アビラムの住まいから離れた。

ダタンとアビラムは、妻子、幼児と一緒に出て来て、天幕の入り口に立った。モーセは言った。「主がわたしを遣わして、これらすべてのことをさせられたので、わたしが自分勝手にしたのではない。それは次のことで分かるであろう。もしこの者たちが人の普通の死に方で死に、人の普通の運命に会うならば、主がわたしを遣わされたのではない。だが、もし主が新しいことを創始されて、大地が口を開き、彼らと彼らに属するものすべて

を呑み込み、彼らが生きたまま陰府に落ちるならば、この者たちが主をないがしろにしたことをあなたたちは知るであろう。」こう語り終えるやいなや、彼らの足もとの大地が裂けた。地は口を開き、彼らとコラの仲間たち、その持ち物一切を、家もろとも呑み込んだ。彼らと彼らに属するものはすべて、生きたまま、陰府へ落ち、地がそれを覆った。彼らはこうして、会衆の間から滅び去った。彼らの周りにいた全イスラエルは、彼らの叫び声を聞いて、大地に呑み込まれることのないようにと言って逃げた。また火が主のもとから出て、香をささげた二百五十人を焼き尽くした。

香炉

主はモーセに仰せになった。「祭司アロンの子エルアザルに告げ、焼け跡から香炉を取り出し、炭火は遠くにまき散らすように言いなさい。香炉は既に聖なるものとなっている。命を落とした罪人たちの香炉を打ち延ばして板金にし、祭壇の覆いを作りなさい。それらは、主の御前にささげられ、聖なるものとされているからである。これは、イスラエルの人々に対する警告のしるしとなるであろう。」祭司エルアザルは、焼き殺された人々がささげた青銅の香炉を集め、打ち延ばして板金にし祭壇の覆いを作った。これは、アロンの子孫以外の者が主の御前に近づき、香をささげてはならないことをイスラエルの人々に思い起こさせるためであり、コラとその仲間のようにならないためであった。それは、モーセを通してエルアザルに語られた主の言葉どおり作られた。

アロン、民を救う

その翌日、イスラエルの人々の共同体全体は、モーセとアロンに逆らって、「あなたたちは主の民を殺してしまったのではないか」と不平を言った。彼らがモーセとアロンに逆らって集結し、臨在の幕屋の方を向くと、見よ、雲がそれを覆い、主の栄光が現れていた。モーセとアロンが臨在の幕屋の前に進み出ると、主はモーセに仰せになった。「この共同体から離れなさい。わたしは直ちに彼らを滅ぼす。」二人はひれ伏した。

モーセはアロンに言った。「香炉を取り、それに祭壇の火を入れ、香を載せ、急いで共同体のもとに行き、彼らのために罪を贖う儀式を行いなさい。主の御前から怒りが出て、もう疫病が始まっている。」アロンは、モーセの命令どおりに行き、集結している人々の中へ走って行った。疫病は既に民の間に広がり始めていた。アロンが香をたき、民のために罪を贖う儀式を行い、死んだ者と生きている者との間に立つと、災害は治まった。この災害による死者の数は一万四千七百人であった。コラの事件による死者はこの数に含まれていない。アロンは臨在の幕屋の入り口にいるモーセのもとに帰った。災害はこうして治まった。——民数記 16:1-17:15

イスラエルがシティムに滞在していたとき、民はモアブの娘たちに従って背信の行為をし始めた。娘たちは自分たちの神々に犠牲をささげるときに民を招き、民はその食事に加

わって娘たちの神々を拝んだ。イスラエルはこうして、ペオルのバアルを慕ったので、主はイスラエルに対して憤られた。主はモーセに言われた。「民の長たちをことごとく捕らえ、主の御前で彼らを処刑し、白日の下にさらしなさい。そうすれば、主の憤りはイスラエルから去るであろう。」モーセはイスラエルの裁判人たちに言った。「おのおの、自分の配下で、ペオルのバアルを慕った者を殺しなさい。」

そのとき、モーセとイスラエルの人々の共同体全体が臨在の幕屋の入り口で嘆いているその目の前に、一人のイスラエル人がミディアン人の女を連れて同胞のもとに入って来た。祭司アロンの孫で、エルアザルの子であるピネハスはそれを見ると、共同体の中から立ち上がって、槍を手に取り、そのイスラエル人の後を追って奥の部屋まで行き、この二人、すなわちイスラエル人とその女を共に突き刺した。槍は女の腹に達した。それによって、イスラエルを襲った災害は治まったが、この災害で死んだ者は二万四千人であった。——民数記 25:1-9

(編者註:) pp.55 には「アロンの代用息子の一人エレアザルが」とあるが、これは「アロンの孫 (代用息子の一人エレアザルの子) ピネハスが」の違い。

主はモーセに仰せになった。

「イスラエルの人々がミディアン人から受けた仕打ちに報復しなさい。その後、あなたは先祖の列に加えられるであろう。」

モーセは民に告げた。「あなたたちの中から、戦いのために人を出して武装させなさい。ミディアン人を襲い、ミディアン人に対して主のために報復するのだ。イスラエルの全部族から、部族ごとに千人ずつを戦いに送り出さなさい。」

それで、イスラエルの諸部隊から部族ごとに千人ずつ、総計一万二千人の兵が選り出されて武装した。

モーセは、部族ごとに千人ずつの兵を戦いに送り出し、祭司エルアザルの子ピネハスを、聖なる祭具と出陣に吹くラッパをその手に持たせて、彼らと共に送り出した。彼らは、主がモーセに命じられたとおり、ミディアン人と戦い、男子を皆殺しにした。その死者のほかに、ミディアンの王たち、エビ、レケム、ツル、フル、レバという五人のミディアンの王を殺し、またペオルの子バラムをも剣にかけて殺した。イスラエルの人々はミディアンの女と子供を捕虜にし、家畜や財産、富のすべてを奪い取り、彼らの町々、村落や宿営地に火をつけて、ことごとく焼き払った。彼らが人や家畜など、戦利品と分捕ったものをすべて集め、それらの捕虜、分捕ったもの、戦利品を従えて、ヨルダン川を挟んでエリコの対岸にあるモアブの平野に陣を張っていたモーセと祭司エルアザル、およびイスラエルの人々の共同体のもとに戻って来たので、モーセと祭司エルアザルおよび共同体の指導者全

員は、宿営の外に出て来て彼らを迎えた。

モーセは、戦いを終えて帰還した軍の指揮官たち、千人隊長、百人隊長に向かって怒り、彼らにこう言った。

「女たちを皆、生かしておいたのか。ペオルの事件は、この女たちがバラムに唆され、イスラエルの人々を主に背かせて引き起こしたもので、そのために、主の共同体に災いがあったのではないか。直ちに、子供たちのうち、男の子は皆、殺せ。男と寝て男を知っている女も皆、殺せ。女のうち、まだ男と寝ず、男を知らない娘は、あなたたちのために生かしておくがよい。——民数記 31:1-18

バラクとバラム

イスラエルの人々は更に進んで、エリコに近いヨルダン川の対岸にあるモアブの平野に宿営した。ツイポルの子バラクは、イスラエルがアモリ人に対してした事をことごとく見た。モアブは、このおびただしい数の民に恐れを抱いていた。モアブはイスラエルの人々の前に気力もうせ、ミディアン人の長老たちに、「今やこの群衆は、牛が野の草をなめ尽くすように、我々の周りをすべてなめ尽くそうとしている」と言った。

当時、ツイポルの子バラクがモアブ王であった。彼は、ユーフラテス川流域にあるアマウ人の町ペトルに住むベオルの子バラムを招こうとして、使者を送り、こう伝えた。「今ここに、エジプトから上って来た一つの民がいる。今や彼らは、地の面を覆い、わたしの前に住んでいる。この民はわたしよりも強大だ。今すぐに来て、わたしのためにこの民を呪ってもらいたい。そうすれば、わたしはこれを撃ち破って、この国から追い出すことができるだろう。あなたが祝福する者は祝福され、あなたが呪う者は呪われることを、わたしは知っている。」

モアブとミディアンの長老たちは占いの礼物を携えてバラムの所に行き、バラクの言葉を伝えた。バラムは彼らに言った。「今夜はここに泊まりなさい。主がわたしに告げられるとおりに、あなたたちに伝えよう。」

モアブの長たちは、バラムのもとにとどまった。神はバラムのもとに来て言われた。「あなたのもとにいるこれらの者は何者か。」バラムは神に答えた。「モアブの王、ツイポルの子バラクがわたしに人を遣わして、『今ここに、エジプトから出て来た民がいて、地の面を覆っている。今すぐに来て、わたしのために彼らに呪いをかけてもらいたい。そうすれば、わたしはこれと戦って、追い出すことができるだろう』と申しました。」

神はバラムに言われた。「あなたは彼らと一緒に行ってはならない。この民を呪ってはならない。彼らは祝福されているからだ。」バラムは朝起きると、バラクの長たちに言った。「自分の国に帰りなさい。主は、わたしがあなたたちと一緒に行くことをお許しになりません。」モアブの長たちは立ち去り、バラクのもとに来て、「バラムはわたしどもと一

緒に来ることを承知しませんでした」と伝えた。

バラクはもう一度、前よりも多くの、位の高い使者を遣わした。彼らはバラムの所に来て言った。「ツイポルの子バラクはこう申します。『どうかわたしのところに来るのを拒まないでください。あなたを大いに優遇します。あなたが言われることは何でもします。どうか来て、わたしのためにイスラエルの民に呪いをかけてください。』」バラムはバラクの家臣に答えた。

「たとえバラクが、家に満ちる金銀を贈ってくれても、わたしの神、主の言葉に逆らうことは、事の大小を問わず何もできません。あなたがたも、今夜はここにとどまって、主がわたしに、この上何とお告げになるか、確かめさせてください。」その夜、神はバラムのもとに来て、こう言われた。「これらの者があなたを呼びに来たのなら、立って彼らと共に行くがよい。しかし、わたしがあなたに告げることだけを行わねばならない。」

バラムは朝起きるとろばに鞍をつけ、モアブの長と共に出かけた。

バラムとろば

ところが、彼が出発すると、神の怒りが燃え上がった。主の御使いは彼を妨げる者となって、道に立ちふさがった。バラムはろばに乗り、二人の若者を従えていた。主の御使いが抜き身の剣を手にして道に立ちふさがっているのを見たらばは、道をそれて畑に踏み込んだ。バラムはろばを打って、道に戻そうとした。主の御使いは、ぶどう畑の間の狭い道に立っていた。道の両側には石垣があった。ろばは主の御使いを見て、石垣に体を押しつけ、バラムの足も石垣に押しつけたので、バラムはまた、ろばを打った。主の御使いは更に進んで来て、右にも左にもそれる余地のない狭い場所に立ちふさがった。ろばは主の御使いを見て、バラムを乗せたままうずくまってしまった。バラムは怒りを燃え上がらせ、ろばを杖で打った。主がそのとき、ろばの口を開かれたので、ろばはバラムに言った。「わたしがあなたに何をしたというのですか。三度もわたしを打つとは。」バラムはろばに言った。「お前が勝手なことをするからだ。もし、わたしの手に剣があったら、即座に殺していただろう。」ろばはバラムに言った。「わたしはあなたのろばですし、あなたは今日までずっとわたしに乗って来られたではありませんか。今まであなたに、このようなことをしたことがあるでしょうか。」彼は言った。「いや、なかった。」

主はこのとき、バラムの目を開かれた。彼は、主の御使いが抜き身の剣を手にして、道に立ちふさがっているのを見た。彼は身をかがめてひれ伏した。主の御使いは言った。「なぜ、このろばを三度も打ったのか。見よ、あなたはわたしに向かって道を進み、危険だったから、わたしは妨げる者として出て来たのだ。」

このろばはわたしを見たから、三度もわたしを避けたのだ。ろばがわたしを避けていなかったなら、きっと今は、ろばを生かしておいても、あなたを殺していたであろう。」バラムは主の御使いに言った。「わたしの間違いでした。あなたがわたしの行く手に立ちふさがっておられるのをわたしは知らなかったのです。もしも、意に反するのでしたら、わ

たしは引き返します。」主の御使いはバラムに言った。「この人たちと共に行きなさい。しかし、ただわたしがあなたに告げることだけを告げなさい。」バラムはバラクの長たちと共にいった。——民数記 22:1-35

(編者註:) pp.55 脚註には「……で、近くの街の人がやってきて」とあるが、これは「イスラエル人が宿営していたモアブの王バラクが」と書くべきか。

モーセは、戦いを終えて帰還した軍の指揮官たち、千人隊長、百人隊長に向かって怒り、彼らにこう言った。

「女たちを皆、生かしておいたのか。ペオルの事件は、この女たちがバラムに唆され、イスラエルの人々を主に背かせて引き起こしたもので、そのために、主の共同体に災いがあったのではないか。——民数記 3:14-16

しかし、あなたに対して少しばかり言うべきことがある。あなたのところには、バラムの教えを奉ずる者がいる。バラムは、イスラエルの子らの前につまずきとなるものを置くようにバラクに教えた。それは、彼らに偶像に献げた肉を食べさせ、みだらなことをさせるためだった。——黙示録 2:14

(編者註:) 先の民数記 25:1- に出てくるイスラエルの子らの背信行為の前に、モアブの王バラクはバラムと会っている。先の「バラムとろば」のくだりの後ね。このとき、バラムは祭壇を築いて、いけにえを捧げて神に祈って託宣を得て、それをバラクに語った。最初の託宣はイスラエルを祝福するものだったので、バラクは怒る……そもそもバラクはバラムにイスラエルを呪ってほしくて呼んだんだけど、バラムはろばのくだりで主の御使いに脅されて、神からの託宣以外語るな、と戒められているからね。で、今度は呪ってね、とバラクに頼まれたバラムは儀式をやり直すんだけど、また神さまはイスラエルを祝福する託宣を伝え、バラムはそれを話してしまう。あーもうせめてあいつらを祝福するのはやめて、場所変えてまた儀式やってよ、とバラクはバラムに頼むんだけど、結局またイスラエルを祝福してしまう。ブチ切れたバラクに、バラムは「だから神さまに言われてるからさー、神さまの言葉伝えることしかできんのよ」と言って、帰り際に言ったのが……以下のところね。

バラムはバラクに言った。「あなたがわたしのもとに遣わした使者に対しても、わたし

はこう言ったではありませんか。『たとえバラクが、家に満ちる金銀を贈ってくれても、主の言葉に逆らっては、善にしる悪にしる、わたしの心のままにすることはできません。わたしは、主が告げられることを告げるだけです』と。わたしは今、わたしの民のもとに帰ります。後の日にこの民があなたの民に対して何をするか、あなたに警告しておきます。」

そして彼はこの託宣を述べた。

ベオルの子バラムの言葉。

目の澄んだ者の言葉。

神の仰せを聞き、いと高き神の知識を持ち

全能者のお与えになる幻を見る者

倒れ伏し、目を開かれている者の言葉。

わたしには彼が見える。しかし、今はいない。

彼を仰いでいる。しかし、間近にはではない。

ひとつの星がヤコブから進み出る。

ひとつの笏がイスラエルから立ち上がり

モアブのこめかみを打ち砕き

シェトのすべての子らの頭の頂を砕く。——民数記 24:12-17 (太線部:17)

(編者註:) 結局、民数記で見る限りにおいては、バラムはイスラエルを呪っていないし、先の背信行為にも関わっていないのね。

同じ母の子である兄弟、息子、娘、愛する妻、あるいは親友に、「あなたも先祖も知らなかった他の神々に従い、これに仕えようではないか」とひそかに誘われても、その神々が近隣諸国の民の神々であっても、地の果てから果てに至る遠い国々の神々であっても、誘惑する者に同調して耳を貸したり、憐れみの目を注いで同情したり、かばったりしてはならない。

このような者は必ず殺さねばならない。彼を殺すには、まずあなたが手を下し、次に、民が皆それに続く。——申命記 13:7-10

反抗する息子

ある人にわがままで、反抗する息子がおり、父の言うことも母の言うことも聞かず、戒めでも聞き従わないならば、両親は彼を取り押さえ、その地域の城門にいる町の長老のもとに突き出して、町の長老に、「わたしたちのこの息子はわがままで、反抗し、わたしたちの言うことを聞きません。放蕩にふけり、大酒飲みです」と言いなさい。町の住民は皆で石

を投げつけて彼を殺す。あなたはこうして、あなたの中から悪を取り除かねばならない。全イスラエルはこのことを聞いて、恐れを抱くであろう。——申命記 21:18-21

ふさわしくない服装

女は男の着物を身に着けてはならない。男は女の着物を着てはならない。このようなことをする者をすべて、あなたの神、主はいとわれる。——申命記 22:5

処女の証拠

人が妻をめとり、彼女のところに入った後にこれを嫌い、虚偽の非難をして、彼女の悪口を流し、「わたしはこの女をめとって近づいたが、処女の証拠がなかった」と言うならば、その娘の両親は娘の処女の証拠を携えて、町の門にいる長老たちに差し出し、娘の父は長老たちに、「わたしは娘をこの男と結婚させましたが、彼は娘を嫌い、娘に処女の証拠がなかったと言って、虚偽の非難をしました。しかし、これが娘の処女の証拠です」と証言し、布を町の長老たちの前に広げねばならない。町の長老たちは男を捕まえて鞭で打ち、イスラエルのおとめについて悪口を流したのであるから、彼に銀百シェケルの罰金を科し、それを娘の父親に渡さねばならない。彼女は彼の妻としてとどまり、彼は生涯、彼女を離縁することはできない。しかし、もしその娘に処女の証拠がなかったという非難が確かであるならば、娘を父親の家の戸口に引き出し、町の人たちは彼女を石で打ち殺さねばならない。彼女は父の家で姦淫を行って、イスラエルの中で愚かなことをしたからである。あなたはあなたの中から悪を取り除かねばならない。——申命記 22:13-21

辜丸のつぶれた者、陰茎を切断されている者は主の会衆に加わることはできない。——申命記 23:2

同胞には利子を付けて貸してはならない。銀の利子も、食物の利子も、その他利子が付くいかなるものの利子も付けてはならない。外国人には利子を付けて貸してもよいが、同胞には利子を付けて貸してはならない。それは、あなたが入って得る土地で、あなたの神、主があなたの手の働きすべてに祝福を与えられるためである。——申命記 23:20-21

組み打ちの場合

二人の男が互いに相争っているとき、一方の妻が近づき、夫が打たれるのを救おうとして、手を伸ばし、相手の急所をつかんだならば、その手は切り落とされねばならない。憐

れみをかけてはならない。——申命記 25:11-12

(編者註:) 以下の引用箇所は原著にあるのに山形訳では何故か削られている。ちなみにケンの説明文句はこうだ:

神さまは罪人を飢えさせ、彼らが子供を食べるのを楽しむんだって。

「あなたたちの中で一番おとなしく敏感な男であっても、哀れみの情を持つことはないだろう……彼は彼ら（彼の飢えた子供たち）に、自分が食べているその子達の肉を与えないだろう。」——申命記 28:53-57

あなたは敵に包囲され、追いつめられた困窮のゆえに、あなたの神、主が与えられた、あなたの身から生まれた子、息子、娘らの肉をさえ食べるようになる。あなたのうちで実に大切に扱われ、ぜいたくに過ごしてきた男が、自分の兄弟、愛する妻、生き残った子らに対して物惜しみをし、その中のだれにも自分の子の肉を与えず、残らず食べてしまう。あなたのすべての町が敵に包囲され、追いつめられた困窮のゆえである。あなたのうちで大切に扱われ、ぜいたくに過ごしてきた淑女で、あまりぜいたくに過ごし、大切に扱われたため、足の裏を地に付けようともしなかった者でさえ、愛する夫や息子、娘に対して物惜しみをし、自分の足の間から出る後産や自分の産んだ子供を、欠乏の極みにひそかに食べる。あなたの町が敵に包囲され、追いつめられた困窮のゆえである。——申命記 28:53-57

ある町を攻撃しようとして、そこに近づくならば、まず、降伏を勧告しなさい。もしその町がそれを受諾し、城門を開くならば、その全住民を強制労働に服させ、あなたに仕えさせねばならない。しかし、もしも降伏せず、抗戦するならば、町を包囲しなさい。あなたの神、主はその町をあなたの手へ渡されるから、あなたは男子をことごとく剣にかけて撃たねばならない。ただし、女、子供、家畜、および町にあるものはすべてあなたの分捕り品として奪い取ることができる。あなたは、あなたの神、主が与えられた敵の分捕り品を自由に用いることができる。このようになしうるのは、遠く離れた町々に対してであって、次に挙げる国々に属する町々に対してではない。あなたの神、主が嗣業として与えられる諸国の民に属する町々で息のある者は、一人も生かしておいてはならない。ヘト人、

アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人は、あなたの神、主が命じられたように必ず滅ぼし尽くさねばならない。それは、彼らとその神々に行ってきた、あらゆるいとうべき行為をあなたたちに教えてそれを行わせ、あなたたちがあなたたちの神、主に罪を犯すことのないためである。——申命記 20:10-18

1.4 約束の地

神の呪い

しかし、もしあなたの神、主の御声に聞き従わず、今日わたしが命じるすべての戒めと掟を忠実に守らないならば、これらの呪いはことごとくあなたに臨み、実現するであろう。あなたは町にいても呪われ、野にいても呪われる。籠もこね鉢も呪われ、あなたの身から生まれる子も土地の実りも、牛の子も羊の子も呪われる。あなたは入るときも呪われ、出て行くときも呪われる。

あなたが悪い行いを重ねて、わたしを捨てるならば、あなたの行う手の働きすべてに対して、主は呪いと混乱と懲らしめを送り、あなたは速やかに滅ぼされ、消えうせるであろう。主は、疫病をあなたにまといつかせ、あなたが得ようと入って行く土地であなたを絶やされる。主は、肺病、熱病、高熱病、悪性熱病、干ばつ、黒穂病、赤さび病をもってあなたを打ち、それらはあなたを追い、あなたを滅ぼすであろう。頭上の天は赤銅となり、あなたの下の地は鉄となる。主はあなたの地の雨を埃とされ、天から砂粒を降らせて、あなたを滅ぼされる。主は敵の前であなたを撃ち破らせられる。あなたは一つの道から敵を攻めるが、その前に敗れて七つの道に逃げ去る。あなたは地上のすべての王国にとって恐るべき見せしめとなる。あなたの死体は、すべての空の鳥、地の獣の餌食となり、それを脅して追い払う者もない。

主は、エジプトのはれ物、潰瘍、できもの、皮癬などであなたを打たれ、あなたはいやされることはない。主はまた、あなたを打って、気を狂わせ、盲目にし、精神を錯乱させられる。盲人が暗闇で手探りするように、あなたは真昼に手探りするようになる。あなたは何をしても成功せず、常に蹂躪され、かすめ取られてだれ一人助ける者はない。あなたは婚約しても、他の男がその女性と寝る。あなたは家を建てても、住むことはできない。ぶどう畑を作っても、その実の初物を味うことはできない。あなたの牛が目の前で屠られても、あなたは食べることができず、ろばが目の前で奪い取られても、返してはもらえない。羊の群れが敵に連れ去られても、だれ一人あなたを助ける者はない。あなたの息子や娘が他国の民に連れ去られるのを見て、その目は終日彼らを慕って衰えるが、なすすべはない。あなたの土地の実りも労苦の作もすべて、あなたの知らない民が食べ、あなたはただ蹂躪され、常に踏み碎かれるだけである。あなたはそのような有様を目の当たりにして、気が狂う。主は悪いはれ物を両膝や腿に生じさせ、あなたはいやされることはない。それはあなたの足の裏から頭のとっぺんまで増え広がる。

主は、あなたをあなたの立てた王と共に、あなたも先祖も知らない国に行かせられる。あなたはそこで、木や石で造られた他の神々に仕えるようになる。主があなたを追いやられるすべての民の間で、あなたは驚き、物笑いの種、嘲りの的となる。畑に多くの種を携

え出ても、いなごに食い尽くされて、わずかの収穫しか得られない。ぶどう畑を作って手を入れても、虫に実を食われてしまい、収穫はなく、ぶどう酒を飲むことはできない。オリーブの木があなたの領地の至るところにあっても、実は落ちてしまい、体に塗る油は採れない。あなたに息子や娘が生まれても、捕らわれて行き、あなたのものではなくなる。

あなたのどの木も土地の実りも、害虫に取り上げられる。あなたの中に寄留する者は徐々にあなたをしのぐようになり、あなたは次第に低落する。彼があなたに貸すことはあっても、あなたが彼に貸すことはない。彼はあなたの頭となり、あなたはその尾となる。

これらの呪いは、ことごとくあなたに臨み、付きまとい、実現して、ついにあなたを滅びに至らせる。あなたの神、主の御声に聞き従わず、命じられた戒めと掟とを守らなかったからである。これらのことは、あなたとあなたの子孫に対していつまでもしるしとなり、警告となるであろう。

あなたが、すべてに豊かでありながら、心からの喜びと幸せに溢れてあなたの神、主に仕えないので、あなたは主の差し向けられる敵に仕え、飢えと渇きに悩まされ、裸にされて、すべてに事欠くようになる。敵はあなたに鉄の首枷をはめ、ついに滅びに至らせる。主は遠く地の果てから一つの国民を、その言葉を聞いたこともない国民を、鷲が飛びかかるようにあなたに差し向けられる。その民は尊大で、老人を縛り、幼い子を憐れまず、家畜の産むものや土地の実りを食い尽くし、ついにあなたは死に絶える。あなたのために穀物も新しいぶどう酒もオリーブ油も、牛の子も羊の子も、何一つ残さず、ついにあなたを滅ぼす。彼らはすべての町であなたを攻め囲み、あなたが全土に築いて頼みとしてきた高くて堅固な城壁をついには崩してしまう。彼らは、あなたの神、主があなたに与えられた全土のすべての町を攻め囲む。あなたは敵に包囲され、追いつめられた困窮のゆえに、あなたの神、主が与えられた、あなたの身から生まれた子、息子、娘らの肉をさえ食べるようになる。あなたのうちで実に大切に扱われ、ぜいたくに過ごしてきた男が、自分の兄弟、愛する妻、生き残った子らに対して物惜しみをし、その中のだれにも自分の子の肉を与えず、残らず食べてしまう。あなたのすべての町が敵に包囲され、追いつめられた困窮のゆえである。あなたのうちで大切に扱われ、ぜいたくに過ごしてきた淑女で、あまりぜいたくに過ごし、大切に扱われたため、足の裏を地に付けようとしなかった者でさえ、愛する夫や息子、娘に対して物惜しみをし、自分の足の間から出る後産や自分の産んだ子供を、欠乏の極みにひそかに食べる。あなたの町が敵に包囲され、追いつめられた困窮のゆえである。

もし、この書に記されているこの律法の言葉をすべて忠実に守らず、この尊く畏るべき御名、あなたの神、主を畏れないならば、主はあなたとあなたの子孫に激しい災害をくだされる。災害は大きく、久しく続き、病気も重く、久しく続く。主はまた、あなたが恐れていたエジプトのあらゆる病気を再びあなたにうつされる。それはあなたにまといつくであろう。主は更に、この律法の書に記されていない病気や災害をことごとくあなたに臨ま

せ、あなたを滅びに至らせる。あなたたちは空の星のように多かったが、あなたの神、主の御声に聞き従わなかったから、わずかな者しか生き残らない。主は、かつてあなたたちを幸いにして、人数を増やすことを喜ばれたように、今は滅ぼし絶やすことを喜ばれる。あなたたちは、あなたが入って行って得る土地から引き抜かれる。主は地の果てから果てに至るまで、すべての民の間にあなたを散らされる。あなたも先祖も知らなかった、木や石で造られた他の神々に仕えるようになり、これら諸国民の間であって一息つくことも、足の裏を休めることもできない。主は、その所であなたの心を揺れ動かし、目を衰えさせ気力を失わせられる。あなたの命は危険にさらされ、夜も昼もおびえて、明日の命も信じられなくなる。あなたは心に恐怖を抱き、その有様を目の当たりにして、朝には、「夕になればよいのに」と願い、夕には、「朝になればよいのに」と願う。「あなたは二度と見ることはない」とかつてわたしが言った道を通して、主はあなたを船でエジプトに送り返される。そこでは、あなたたちが自分の身を男女の奴隷として敵に売ろうとしても、買ってくれる者はいない。——申命記 28:15-68

(編者註:) エリコ (ジェリコ、イエリコ) は、ヨシュア記の冒頭部から登場する。

ヌンの子ヨシュアは二人の斥候をシティムからひそかに送り出し、「行って、エリコとその周辺を探れ」と命じた。二人は行って、ラハブという遊女の家に入り、そこに泊まった。——ヨシュア記 2:1

(編者註:) ヨシュアとエリコに関して最も有名なくだりは、これ。

七度目に、祭司が角笛を吹き鳴らすと、ヨシュアは民に命じた。

「鬨の声をあげよ。主はあなたたちにこの町を与えられた。町とそこにあるものは、ことごとく滅ぼし尽くして主にささげよ。ただし、遊女ラハブおよび彼女と一緒に家の中にいる者は皆、生かしておきなさい。我々が遣わした使いをかくまってくれたからである。あなたたちはただ滅ぼし尽くすべきものを欲しがらないように気をつけ、滅ぼし尽くすべきものの一部でもかすめ取ってイスラエルの宿営全体を滅ぼすような不幸を招かないようにせよ。金、銀、銅器、鉄器はすべて主にささげる聖なるものであるから、主の宝物倉に納めよ。」

角笛が鳴り渡ると、民は鬨の声をあげた。民が角笛の音を聞いて、一斉に鬨の声をあげると、城壁が崩れ落ち、民はそれぞれ、その場から町に突入し、この町を占領した。彼らは、男も女も、若者も老人も、また牛、羊、ろばに至るまで町にあるものはことごとく剣

にかけて滅ぼし尽くした。——ヨシュア記 6:20-21

イスラエルは、追って来たアイの全住民を野原や荒れ野で殺し、一人残らず剣にかけて倒した。全イスラエルはアイにとって返し、その町を剣にかけて撃った。その日の敵の死者は男女合わせて一万二千人、アイの全住民であった。——ヨシュア記 8:24-25

主がアモリ人をイスラエルの人々に渡された日、ヨシュアはイスラエルの人々の見ている前で主をたたえて言った。

「日よ とどまれ ギブオンの上に
月よ とどまれ アヤロンの谷に。」
日は とどまり
月は 動きをやめた
民が 敵を打ち破るまで。

『ヤシャルの書』にこう記されているように、日はまる一日、中天にとどまり、急いで傾こうとしなかった。主がこの日のように人の訴えを聞き届けられたことは、後にも先にもなかった。主はイスラエルのために戦われたのである。——ヨシュア記 10:12-14

(編者註:) ここに出てくる『ヤシャルの書』 *The Book of Jasher* (Eng.), *Sefer haYashar* (Heb.) というのは実在の文書で、聖書にはこの箇所と、サムエル記下 1:18 に登場する。『高潔の書』『直立の書』とも呼ばれる。上引用部に相当するのは 88 章 63 節。

ヨシュアは、山地、ネゲブ、シェフェラ、傾斜地を含む全域を征服し、その王たちを一人も残さず、息ある者をことごとく滅ぼし尽くした。イスラエルの神、主の命じられたとおりであった。——ヨシュア記 10:40

エフドは近づいたが、そのとき王は屋上にしつらえた涼しい部屋に座り、ただ一人になっていた。エフドが、「あなたへの神のお告げを持って来ました」と言うと、王は席から立ち上がった。エフドは左手で右腰の剣を抜き、王の腹を刺した。剣は刃からつかまでも刺さり、抜かずにおいたため脂肪が刃を閉じ込めてしまった。汚物が出てきていた。——士師記 3:20-22

シセラは、カイン人ヘベルの妻ヤエルの天幕に走って逃げて来た。ハツォルの王ヤビ

ンと、カイン人ヘベル一族との間は友好的であったからである。ヤエルが出て来てシセラを迎え、「どうぞこちらに。わたしの主君よ、こちらにお入りください。御心配には及びません」と言うと、彼は彼女に近づいて天幕に入った。彼女は布で彼を覆った。シセラが彼女に、「喉が渴いた。水を少し飲ませてくれ」と言うので、彼女は革袋を開けてミルクを飲ませ、彼を覆った。シセラは彼女に、「天幕の入り口に立っているように。人が来て、ここに誰がいるかと尋ねれば、だれもいないと答えてほしい」と言った。だが、ヘベルの妻ヤエルは天幕の釘を取り、槌を手にして彼のそばに忍び寄り、こめかみに釘を打ち込んだ。釘は地まで突き刺さった。疲れきって熟睡していた彼は、こうして死んだ。そこへバラクがシセラを追ってやって来た。ヤエルは出て来て彼を迎え、「おいでください。捜しておられる人をお目にかけてみましょう」と言ったので、彼は天幕に入った。そこにはシセラが倒れて死んでおり、そのこめかみには釘が刺さっていた。——士師記 4:17-22

(編者註:) これだけでは分かりにくいので補足。デボラは女士師である。

ラピドトの妻、女預言者デボラが、士師としてイスラエルを裁くようになったのはそのころである。彼女は、エフライム山地のラマとベテルの間にあるデボラのなつめやしの木の下に座を定め、イスラエルの人々はその彼女に裁きを求めて上ることにしていた。——士師記 4:4-5

(編者註:) デボラはバラクに、シセラ達をやっちなえ！ という神託を語って、バラクにシセラを攻めるよう促す。バラクがデボラと一緒に来て〜と頼むと「いいけど手柄はあなたのものにならないよ、神さまは女にシセラを渡すから」と言う……で、先のようになるわけ。

エルバアル、つまりギデオンと彼の率いるすべての民は朝早く起き、エン・ハロドのほとりに陣を敷いた。ミディアンの陣営はその北側、平野にあるモレの丘のふもとにあった。主はギデオンに言われた。「あなたの率いる民は多すぎるので、ミディアン人をその手に渡すわけにはいかない。渡せば、イスラエルはわたしに向かって心がおごり、自分の手で救いを勝ち取ったと言うであろう。それゆえ今、民にこう呼びかけて聞かせよ。恐れおののいている者は皆帰り、ギレアドの山を去れ、と。」こうして民の中から二万二千人が帰り、一万人が残った。主はギデオンに言われた。「民はまだ多すぎる。彼らを連れて水辺に下れ。そこで、あなたのために彼らをえり分けることにする。あなたと共に行くべきだとわたしが告げる者はあなたと共に行き、あなたと共に行くべきではないと告げる者は

行かせてはならない。」彼は民を連れて水辺に下った。主はギデオンに言われた。「犬のように舌で水をなめる者、すなわち膝をついてかがんで水を飲む者はすべて別にしなさい。」水を手にすくってすすった者の数は三百人であった。他の民は皆膝をついてかがんで水を飲んだ。主はギデオンに言われた。「手から水をすすった三百人をもって、わたしはあなたたちを救い、ミディアン人をあなたの手に移そう。他の民はそれぞれ自分の所に帰しなさい。」

その民の糧食と角笛は三百人が受け取った。彼はすべてのイスラエル人をそれぞれ自分の天幕に帰らせたが、その三百人だけは引き留めておいた。ミディアン人の陣営は下に広がる平野にあった。

その夜、主は彼に言われた。「起きて敵陣に下って行け。わたしは彼らをあなたの手に移す。もし下って行くのが恐ろしいなら、従者プラを連れて敵陣に下り、彼らは何を話し合っているかを聞け。そうすればあなたの手に加わり、敵陣の中に下って行くことができる。」彼は従者プラを連れて、敵陣の武装兵のいる前線に下って行った。ミディアン人、アマレク人、東方の諸民族は、いなごのように数多く、平野に横たわっていた。らくだも海辺の砂のように数多く、数えきれなかった。ギデオンが来てみると、一人の男が仲間間に夢の話をしていた。「わたしは夢を見た。大麦の丸いパンがミディアンの陣営に転がり込み、天幕まで達して一撃を与え、これを倒し、ひっくり返した。こうして天幕は倒れてしまった。」仲間は答えた。「それは、イスラエルの者ヨアシュの子ギデオンの剣にちがいない。神は、ミディアン人とその陣営を、すべて彼の手に移されたのだ。」

ギデオンは、その夢の話と解釈を聞いてひれ伏し、イスラエルの陣営に帰って、言った。「立て。主はミディアン人の陣営をあなたたちの手に移してくださった。」

彼は三百人を三つの小隊に分け、全員に角笛と空の水がめを持たせた。その水がめの中には松明を入れさせ、彼らに言った。「わたしを見て、わたしのするとおりにせよ。わたしが敵陣の端に着いたら、わたしがするとおりにせよ。わたしとわたしの率いる者が角笛を吹いたら、あなたたちも敵の陣営全体を包囲して角笛を吹き、『主のために、ギデオンのために』と叫ぶのだ。」

ギデオンと彼の率いる百人が、深夜の更の初めに敵陣の端に着いたとき、ちょうど歩哨が位置についたところであった。彼らは角笛を吹き、持っていた水がめを砕いた。三つの小隊はそろって角笛を吹き、水がめを割って、松明を左手にかざし、右手で角笛を吹き続け、「主のために、ギデオンのために剣を」と叫んだ。各自持ち場を守り、敵陣を包囲したので、敵の陣営は至るところで総立ちになり、叫び声をあげて、敗走した。三百人が角笛を吹くと、主は、敵の陣営の至るところで、同士討ちを起こされ、その軍勢はツェレラのベト・シタまで、またタバトの近くのアベル・メホラの境まで逃走した。——士師記 7:1-22

(編者註:) pp.62の本文は間違い。ギデオンの軍勢300人は「水を手にくくってすすった者」であり、「犬のように舌で水をなめる者」ではない。加えていうと、この箇所に関する記述は原著にはない。

アビメレクはまたテベツに向かい、テベツに対して陣を敷き、これを制圧したが、この町の中に堅固な塔があり、男も女も皆、町の首長たちと共にその中に逃げ込んで立てこもり、塔の屋上に上った。アビメレクはその塔のところまで来て、これを攻撃した。塔の入り口に近づき、火を放とうとしたとき、一人の女がアビメレクの頭を目がけて、挽き臼の上石を放ち、頭蓋骨を砕いた。彼は急いで武器を持つ従者を呼び、「剣を抜いてわたしにとどめを刺せ。女に殺されたと言われたいために」と言った。従者は彼を刺し、彼は死んだ。イスラエルの人々はアビメレクが死んだのを見て、それぞれ自分の家へ帰って行った。神は、アビメレクが七十人の兄弟を殺して、父に加えた悪事の報復を果たされた。また神は、シケムの人々の行ったすべての悪事にもそれぞれ報復を果たされた。こうしてシケムの人々は、エルバアルの子ヨタムの呪いをその身に受けることとなった。——士師記 9:50-57

異教の習慣への警告

あなたが、あなたの神、主の与えられる土地に入ったならば、その国々のいとうべき習慣を見習ってはならない。あなたの中に、自分の息子、娘に火の中を通らせる者、占い師、卜者、易者、呪術師、呪文を唱える者、口寄せ、霊媒、死者に伺いを立てる者などがいてはならない。これらのことを行う者をすべて、主はいとわれる。これらのいとうべき行いのゆえに、あなたの神、主は彼らをあなたの前から追い払われるであろう。あなたは、あなたの神、主と共にあって全き者でなければならない。あなたが追い払おうとしているこれらの国々の民は、卜者や占い師に尋ねるが、あなたの神、主はあなたがそうすることをお許しにならない。——申命記 18:9-14

エフタは主に誓いを立てて言った。「もしあなたがアンモン人をわたしの手に渡してくださるなら、わたしがアンモンとの戦いから無事に帰るとき、わたしの家の戸口からわたしを迎えに出て来る者を主のものといたします。わたしはその者を、焼き尽くす献げ物といたします。」こうしてエフタは進んで行き、アンモン人と戦った。主は彼らをエフタの手にお渡しになった。彼はアロエルからミニトに至るまでの二十の町とアベル・ケラミムに至るまでのアンモン人を徹底的に撃ったので、アンモン人はイスラエルの人々に屈服した。

エフタがミツパにある自分の家に帰ったとき、自分の娘が鼓を打ち鳴らし、踊りながら迎えに出て来た。彼女は一人娘で、彼にはほかに息子も娘もいなかった。彼はその娘を見ると、衣を引き裂いて言った。「ああ、わたしの娘よ。お前がわたしを打ちのめし、お前がわたしを苦しめる者になるとは。わたしは主の御前で口を開いてしまった。取り返しがつかない。」彼女は言った。「父上。あなたは主の御前で口を開かれました。どうか、わたしを、その口でおっしゃったとおりにしてください。主はあなたに、あなたの敵アンモン人に対して復讐させてくださったのですから。」彼女は更に言った。「わたしにこうさせていたきたいのです。二か月の間、わたしを自由にしてください。わたしは友達と共に出かけて山々をさまよひ、わたしが処女のままであることを泣き悲しみたいのです。」彼は「行くがよい」と言って、娘を二か月の間去らせた。彼女は友達と共に出かけ、山々で、処女のままであることを泣き悲しんだ。二か月が過ぎ、彼女が父のもとに帰って来ると、エフタは立てた誓いどおりに娘をささげた。彼女は男を知ることがなかったので、イスラエルに次のようなしきたりができた。来る年も来る年も、年に四日間、イスラエルの娘たちは、ギレアドの人エフタの娘の死を悼んで家を出るのである。——士師記 18:30-39

1.5 サムソン

(編者註:) サムソンの出生に関しては士師記 13:2 から記述があるのだけど、13章のほとんどは、不妊の女であったサムソンの母(哀しいことに名前は出て来ず、夫の名で「マヌアの妻」とだけ呼ばれる)のところに神さまの使いが現れて、イスラエルを解放する「救いの先駆者」を身籠る、と告げられるくだりに費される。生まれて育って、ティムナというところで後の妻を見初めていきなりムラムラし始める。そして「獅子を引き裂き」「獅子からかき集めた蜜を食べ」(このエピソードは欧米ではよく知られている)……

父がその女のところに下って来たとき、サムソンは若者たちの習慣に従い、宴会を催した。サムソンを見て、人々は三十人の客を連れて来てサムソンと同席させた。サムソンは彼らに言った。「あなたたちになぞをかけたい。宴会の続く七日の間にその意味を解き明かし、言い当てるなら、わたしは麻の衣三十着、着替えの衣三十着を差し上げる。もし解き明かせなかったなら、あなたたちが麻の衣三十着と、着替えの衣三十着を差し出すことにしよう。」彼らは、「なぞをかけてもらおう。聞こうではないか」と応じた。

サムソンは言った。

「食べる者から食べ物が出た。

強いものから甘いものが出た。」

彼らは三日たっても、このなぞが解けなかった。

七日目になって、彼らはサムソンの妻に言った。「夫をうまく言いくるめて、あのなぞの意味を我々に明かすようにしてほしい。さもないと、火を放ってあなたを家族もろとも焼き殺してやる。まさか、我々からはぎ取るために招待したわけではないだろう。」

サムソンの妻は、夫に泣きすがって言った。「あなたはただわたしを嫌うだけで、少しも愛してくださらず、わたしの同族の者にかけてなぞの意味を、このわたしにも明かそうとなさいません。」彼は答えた。「父にも母にも明かしていないのに、お前に明かすわけがないだろう。」宴会が行われた七日間、彼女は夫に泣きすがった。彼女がしつこくせがんだので、七日目に彼は彼女に明かしてしまった。彼女は同族の者にそのなぞを明かした。七日目のこと、日が沈む前に町の人々は彼に言った。

「蜂蜜より甘いものは何か

獅子より強いものは何か。」

するとサムソンは言った。

「わたしの雌牛で耕さなかったなら

わたしのなぞは解けなかつたらう。」

そのとき主の霊が激しく彼に降り、彼はアシュケロンに下って、そこで三十人を打ち殺し、彼らの衣をはぎ取って、着替えの衣としてなぞを解いた者たちに与えた。彼は怒りに燃えて自分の父の家に帰った。サムソンの妻は、彼に付き添っていた友のものとなった。
——士師記 14:10-20

しばらくして小麦の収穫のころ、サムソンは一匹の子山羊を携えて妻を訪ね、「妻の部屋に入りたい」と言ったが、彼女の父は入らせなかった。父は言った。「わたしはあなたがあの娘を嫌ったものと思ひ、あなたの友に嫁がせた。妹の方がきれいではないか。その妹を代わりにあなたの妻にしてほしい。」サムソンは言った。「今度はわたしがペリシテ人に害を加えても、わたしには罪がない。」サムソンは出て行って、ジャッカルを三百匹捕らえ、松明を持って来て、ジャッカルの尾と尾を結び合わせ、その二つの尾の真ん中に松明を一本ずつ取り付けた。その松明に火をつけると、彼はそれをペリシテ人の麦畑に送り込み、刈り入れた麦の山から麦畑、ぶどう畑、オリーブの木に至るまで燃やした。

ペリシテ人は、「誰がこんな事をしたのか」と言い合った。「あのティムナ人の婿のサムソンがした。彼が婿の妻を取り上げ、その友に与えたからだ」と答える者があつた。ペリシテ人はそこで、彼女とその父のところの上って来て、火を放って焼き殺した。サムソンは彼らに、「これがお前たちのやり方なら、わたしはお前たちに報復せずにはいられない」と言って、彼らを徹底的に打ちのめし、下って行って、エタムの岩の裂け目に住んだ。
——士師記 15:1-8

(編者註:) サムソンは、「今度はわたしがペリシテ人に害を加えても、わたしには罪がない。」と言ひ、ペリシテ人がティムナ人 (=ペリシテ人) の元花嫁と義父を焼き殺したとき、それに対する復讐として、ペリシテ人を打ちのめしている。

そのころ、イスラエルには王がいなかった。またそのころ、ダンの部族は住み着くための嗣業の地を捜し求めていた。そのころまで、彼らにはイスラエル諸部族の中で嗣業の地が割り当てられていなかったからである。ダンの人々は土地を探り、調べるために、自分たちの氏族の者でツォルアとエシュタオル出身の勇士五人を自分のところから遣わして言った。「行って、土地を調べよ。」彼らはエフライムの山地のミカの家まで来て、そこで一夜を過ごした。——士師記 18:1-2

五人は更に進んでライシュに着き、その地の民が、シドン人のように静かに、また、穏やかに安らかな日々を送っているのを見た。その地には人をさげすんで権力を握る者は全

くなく、シドン人からも遠く離れ、またどの人間とも交渉がなかった。五人がツォルアとエシュタオルの兄弟たちのもとに帰ると、兄弟たちは、「どうだった」と尋ねたので、五人は答えた。「彼らに向かって攻め上ろう。我々はその土地を見たが、それは非常に優れていた。あなたたちは黙っているが、ためらわずに出発し、あの土地を手に入れて来るべきだ。行けば、あなたたちは穏やかな民のところに行けよう。神があなたたちの手にお渡しになったのだから、その土地は大手を広げて待っている。そこは、この地上のものが何一つ欠けることのない所だ。」——士師記 18:7-10

彼らはミカが造った物と彼のものであった祭司を奪って、ライシュに向かい、その静かで穏やかな民を襲い、剣にかけて殺し、町に火を放って焼いた。その町はシドンから遠く離れ、またどの人間とも交渉がなかったので、助けてくれる者がなかった。それはベト・レホブに属する平野にあった。彼らはその町を再建して住み着き、その町を、イスラエルに生まれた子、彼らの先祖ダンの名にちなんで、ダンと名付けた。しかし、その町の元来の名はライシュであった。——士師記 18:27-29

彼らがエブスの近くに来たとき、日は大きく傾いていた。若者は主人に、「あのエブス人の町に向かい、そこに泊まることにしてはいかがですか」と言ったが、主人は、「イスラエルの人々ではないこの異国人の町には入るまい。ギブアまで進むことにしよう」と答えた。更に彼は若者に、「さあ、このいずれかの場所に近づいて行き、ギブアかラマに泊まることにしよう」と言った。彼らは旅を続け、ベニヤミン領のギブアの近くで日は没した。彼らはギブアに入って泊まろうとして進み、町の広場に来て腰を下ろした。彼らを家に迎えて泊めてくれる者はいなかった。夕暮れに、一人の老人が畑仕事を終えて帰って来た。この人はエフライム山地の出身であったが、ギブアに滞在していた。土地の人々はベニヤミン族であった。老人は目を上げて、町の広場にいる旅人を見、「どちらにおいでになりますか。どちらからおいでになりましたか」と声をかけた。彼は老人に答えた。「わたしたちは、ユダのベツレヘムからエフライム山地の奥にあるわたしの郷里まで、旅をしているところです。ユダのベツレヘムに行って、今、主の神殿に帰る途中ですが、わたしたちを家に迎えてくれる人がいません。ろばのためのわらも飼い葉もありますし、わたしとこの女、あなたの僕の連れている若者のためのパンもぶどう酒もあります。必要なものはすべてそろっています。」老人は、「安心しなさい。あなたが必要とするものはわたしにまかせなさい。広場で夜を過ごしてはいけません」と言って、彼らを自分の家に入れ、ろばに餌を与えた。彼らは足を洗い、食べて飲んだ。

彼らがかつろいでいると、町のならず者が家を囲み、戸をたたいて、家の主人である老人にこう言った。「お前の家に来た男を出せ。我々はその男を知りたい。」家の主人は彼ら

のところに出て行って言った。「兄弟たちよ、それはいけない。悪いことをしないでください。この人がわたしの家に入った後で、そのような非道なふるまいは許されない。ここに処女であるわたしの娘と、あの人の側女がいる。この二人を連れ出すから、辱め、思いどおりにするがよい。だがあの人には非道なふるまいをしてはならない。」しかし、人々は彼に耳を貸そうとしなかった。男が側女をつかんで、外にいる人々のところへ押し出すと、彼らは彼女を知り、一晚中朝になるまでもてあそび、朝の光が射すころようやく彼女を放した。朝になるころ、女は主人のいる家の入り口までたどりつき、明るくなるまでそこに倒れていた。

彼女の主人が朝起きて、旅を続けようと戸を開け、外に出て見ると、自分の側女が家の入り口で手を敷居にかけて倒れていた。「起きなさい。出かけよう」と言った。しかし、答えはなかった。彼は彼女をろばに乗せ、自分の郷里に向かって旅立った。家に着くと、彼は刃物をとって側女をつかみ、その体を十二の部分に切り離し、イスラエルの全土に送りつけた。これを見た者は皆言った。「イスラエルの人々がエジプトの地から上って来た日から今日に至るまで、このようなことは決して起こらず、目にしたこともなかった。このことを心に留め、よく考えて語れ。」——士師記 19:11-30

イスラエルの人々は皆出て来て、ダンからベエル・シェバ、またギレアドの地まで、一団となって一人の人のようになり、ミツパで主の前に集まった。イスラエルの全部族、すべての民の要職にある者たちも、神の民、剣を携えた四十万の歩兵たちの集いに参加した。ベニヤミンの人々は、イスラエルの人々がミツパに上って来たことを伝え聞いた。イスラエルの人々が、「このような犯行がどうして行われたのか説明してもらいたい」と言ったので、殺された女の夫であるレビ人はこう答えた。「ベニヤミンのギブアに来て、わたしは側女と共に宿をとっておりました。ギブアの首長たちがわたしに向かって来て、夜、わたしの泊まった家を取り囲み、わたしを殺そうとし、側女を辱めて死に至らせたのです。わたしは側女をつかみ、その体を切り離して、イスラエルの嗣業の全耕地に送りました。彼らがイスラエルの中で極悪非道なことをしたからです。あなたたちイスラエルのすべての人々よ。ここで話し合って協議していただきたい。」すべての民は一人の人のように立ち上がり、こう言った。「我々はだれも自分の天幕に帰らず、だれも家に戻らない。我々が今、ギブアに対してなすべきことはこうだ。ギブアに対してまずくじを引いて攻め上ろう。イスラエル全部族から百人につき十人、従って千人なら百人、一万人いれば千人を選んで糧食を調達させ、部隊をベニヤミンのギブアに行かせ、ベニヤミンがイスラエルの中で行ったすべての非道を制裁しよう。」こうしてイスラエルの者が皆、一人の人のように連帯を固めてその町に向かって集まった。

イスラエルの諸部族は、全ベニヤミン族に人を送って、こう告げた。「あなたたちの中

で行われたあの犯行はなんということか。今、あのならず者の犯人がギブアにいれば、引き渡せ。犯人を殺してイスラエルの中から悪を取り除こう。」だが、ベニヤミンの人々は、その兄弟たち、イスラエルの人々の声を聞こうとはしなかった。かえってベニヤミンの人々は町々からギブアに集まり、イスラエルの人々と戦おうとして出て来た。その日、町々からはせ参じたベニヤミンの人々は、数を調べると、剣を携えた兵士二万六千人、そのほかにギブアの住民からえり抜きの兵士七百人であった。七百人のえり抜きの兵士からなるこの部隊の皆が左利きで、髪の毛一筋をねらって石を投げても、その的をはずすことがなかった。

一方、イスラエルの人々も、ベニヤミンを除いて数を調べると、剣を携えた兵士四十万で、彼らは皆、軍人であった。彼らは立ち上がってベテルに上った。イスラエルの人々は神に問うて言った。「我々のうち誰が最初に上って行ってベニヤミンと戦うべきでしょうか。」主は、「ユダが最初だ」と言われた。

翌朝、イスラエルの人々は行動を起こし、ギブアに対して陣を敷いた。イスラエル人はベニヤミンとの戦いに出陣し、ギブアに対して戦闘態勢に入ったが、ベニヤミンの人々はギブアから出撃して、その日、二万二千人のイスラエル兵を地に打ち倒した。しかし、イスラエル人の部隊は奮起し、最初の日には戦闘態勢に入った場所で、態勢を立て直した。イスラエルの人々は主の御前に上って、夕方まで泣き続け、主に問うて言った。「兄弟ベニヤミンと、再び戦いを交えねばなりませんか。」しかし、主は言われた。「彼らに向かって攻め上れ。」二日目もイスラエルの人々はベニヤミンの人々に向かって進撃した。しかし、ベニヤミンは、二日目にもギブアから出撃してそれを迎え撃ち、またもイスラエルの人々一万八千人を地に打ち倒した。彼らは皆、剣で武装した者であった。イスラエルの人々は皆、そのすべての軍団と共にベテルに上って行き、主の御前に座り込んで泣いた。その日、彼らは夕方まで断食し、焼き尽くす献げ物と和解の献げ物を主の御前にささげた。イスラエルの人々は主に問うた。——当時、神の契約の箱はそこにあり、また当時、アロンの孫でエルアザルの子であるピネハスが御前に仕えていた——イスラエルの人々は言った。「兄弟ベニヤミンとの戦いに、再び繰り返して出陣すべきでしょうか。それとも控えるべきでしょうか。」主は言われた。「攻め上れ。明日、わたしは彼らをあなたの手に渡す。」

イスラエルはギブアの周囲に伏兵を配置した。三日目もイスラエルの人々はベニヤミンの人々に向かって攻め上り、前と同じようにギブアに対して戦闘態勢に入った。ベニヤミンも、その軍団を迎え撃とうとして出て来た。彼らは町から遠くへおびき出され、一方はベテルに、他方はギブアに通じる大路を進んだ。野でイスラエルの部隊に死傷者が始始め、約三十人が倒れた。ベニヤミンの人々は、「初戦と同様、敵を打ち負かした」と思ったが、イスラエルの人々は、「撤退して敵を町から大路におびき出そう」と謀っていた。イスラエルの人々は皆、自分の持ち場から立ち上がり、バアル・タマルで戦闘態勢に入った。イスラエルの伏兵も自分の持ち場であるゲバの平原から躍り出た。全イスラエルのえ

り抜き、兵士一万人がギブアに向かって進撃し、激戦となった。ベニヤミンの人々は自分たちに不幸な結末が訪れるとは思ってもみなかった。主はイスラエルの目の前でベニヤミンを撃たれたので、イスラエルの人々が、その日打ち滅ぼしたベニヤミンの兵は二万五千人に上った。彼らは皆、剣を携える者であった。ベニヤミンの人々は敗北を認めざるをえなかった。

イスラエル人はギブアに対して配置した伏兵を信頼していたので、ベニヤミンに戦場を明け渡した。その伏兵がギブアを急襲した。伏兵は突入し、町をくまなく剣をもって撃った。イスラエル人と伏兵との間に打ち合わせがあって、町からのろしの煙が高々と揚がると、イスラエル人は戦線に復帰することになっていた。ベニヤミンは、イスラエル人に死傷者が始め、約三十人の兵を打ち倒したとき、「初戦と同様に、敵を打ち負かした」と思ったが、雲の柱のようなろしが町から揚がり始め、ベニヤミンが振り返ると、町全体が火に包まれ天に燃え上がっていた。そこへイスラエル人が引き返して来たので、ベニヤミン人は、自分たちに、不幸な結末が訪れるのを知って、うろたえた。彼らはイスラエル人を見て荒れ野の方に向かったが、戦いを逃れることができなかった。町々から出て来た人々も加わって彼らを屠り去った。彼らはベニヤミンを包囲し、追いつめ、手を緩めずギブアの向こう側、東側まで踏みこみ、ベニヤミンの中で一万八千人が倒れたが、彼らは皆、軍人であった。他の者は荒れ野のリモンの岩場に向かって逃げたが、イスラエル人は大路でその五千人を討ち、彼らが、壊滅するまで追い迫り、二千人を打ち殺した。この日、ベニヤミンの全戦死者は剣を携える者二万五千人で、彼らは皆、軍人であった。六百人が荒れ野のリモンの岩場に逃げて、四か月、そこリモンの岩場にとどまった。一方、イスラエル人はベニヤミンの人々のところに戻って来て、町の男たちから家畜まで、見つけしだい、残らず彼らを剣で撃ち、どの町にも見つけしだい火を放った。

イスラエル人はミツパにおいて、「我々はだれも自分の娘をベニヤミンに嫁として与えないことにする」と誓った。民はベテルに帰って、夕方まで神の御前に座り、声をあげて泣き叫んだ。「イスラエルの神、主よ。なぜイスラエルにこのようなことが行われ、今日イスラエルから一つの部族が欠けることになったのですか。」翌日、朝早く民は起きて、そこに祭壇を築き、焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげた。

イスラエルの人々は言った。「誰かイスラエルの全部族の中で、主の御前における集会上って来なかった者がいるか。」というのは、ミツパに上って主の御前に出なかった者に対しては、「必ず死なねばならない」との、堅い誓いがなされていたからである。イスラエルの人々は兄弟ベニヤミンのことを悔やみ、「今日イスラエルの中から一つの部族が切り捨てられた。その生き残りの者たちに妻を与えるにはどうすればいいだろう。わたしたちは、彼らには娘を嫁がせないと主に誓った」と言った。イスラエルの人々はそこで、「イスラエルのどの部族がミツパに上って、主の御前に出なかったのだろうか」と尋ねた。すると、ギレアドのヤベシュからはだれ一人この陣営に来ることなく、集会上って来なかった。

た。民の数が調べられたとき、ギレアドのヤベシュの住民は一人もそこにいなかったことが分かった。共同体は一万二千人の兵を派遣することにし、彼らにこう命じた。「行って、ギレアドのヤベシュの住民を女や子供に至るまで剣にかけよ。これがあなたたちのなすべきことである。男はもとより、男と寝たことのある女もすべて滅ぼし尽くさなければならない。」彼らはこうして、ギレアドのヤベシュの住民の中に男と寝たことのない処女の娘四百人を見だし、カナン地のシロの陣営に連れ帰った。

全共同体は、リモンの岩場にいるベニヤミンの人々に使者を送って和解を呼びかけた。ベニヤミンがこのとき帰って来たので、彼らはギレアドのヤベシュの女たちの中で生かしておいた娘たちをベニヤミンの人々に与えた。しかし、まだ足りなかった。

民はベニヤミンのことを悔やんだ。主がイスラエル諸部族の間を引き裂かれたからである。共同体の長老たちは言った。「生き残った者に妻を与えるにはどうすればいいだろう。ベニヤミンの女は絶えてしまった。」彼らはまた言った。「ベニヤミンに生き残る者を得させ、イスラエルから一つの部族も失われないようにしなければならない。だが、わたしたちは、娘を彼らの嫁にやるわけにはいかない。イスラエルの人々は、『ベニヤミンに嫁を与える者は呪われる』と誓った。」彼らは更に言った。「そうだ。年ごとにシロで主の祭りが行われる。」——シロの町はベテルの北側、ベテルからシケムに通じる大路の東側、レボナの南側にあった。そこで彼らはベニヤミンの人々にこう言い渡した。「ぶどう畑に行って、待ち伏せし、シロの娘がそろって踊りに出て来るのが見えたら、ぶどう畑から出て行って、シロの娘の中からそれぞれ妻にしようとする者を捕まえ、ベニヤミンの地に帰りなさい。もし彼女らの父や兄がわたしたちに文句を言いに来たら、こう言おう。『我々に免じて憐れみをかけてやってほしい。我々は戦争の間それぞれ妻を迎えることができなかったし、あなたたちも彼らに娘を与えることができなかった。与えていたら、あなたたちは罪に問われたはずだ』と。」ベニヤミンの人々はそのようにした。彼らは踊っている女たちを奪い、その中から自分たちの数だけ連れ去って、自分の嗣業の地に帰り、町を築き、そこに住んだ。イスラエルの人々もそのときそこを去り、それぞれ自分の部族、自分の氏族のもとに帰って行った。そこからそれぞれ自分の嗣業の地に向かって出て行った。

そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれ自分の目に正しいとすることを行っていた。——士師記 20:1-21:25

1.6 イスラエル王国

こうしてペリシテ軍は戦い、イスラエル軍は打ち負かされて、それぞれの天幕に逃げ帰った。打撃は非常に大きく、イスラエルの歩兵三万人が倒れた。神の箱は奪われ、エリの二人の息子ホフニとピネハスは死んだ。

ベニヤミン族の男が一人、戦場を出て走り、その日のうちにシロに着いた。彼の衣は裂け、頭には塵をかぶっていた。到着したとき、エリは道の傍らに設けた席に座り、神の箱を気遣って目を凝らしていた。その男が町に知らせをもたらすと、町全体から叫び声があがった。

エリは叫び声を耳にして、尋ねた。「この騒々しい声は何だ。」男は急いでエリに近寄り報告した。エリは九十八歳で目は動かず、何も見るができなかった。男はエリに言った。「わたしは戦場から戻って来た者です。今日戦場から落ちのびて来ました。」エリは尋ねた。「わが子よ、状況はどうなのか。」知らせをもたらした者は答えた。「イスラエル軍はペリシテ軍の前から逃げ去り、兵士の多くが戦死しました。あなたの二人の息子ホフニとピネハスも死に、神の箱は奪われました。」

その男の報告が神の箱のことに及ぶと、エリは城門のそばの彼の席からあおむけに落ち、首を折って死んだ。年若い、太っていたからである。彼は四十年間、イスラエルのために裁きを行った。——サムエル記上 4:10

主の御手はアシュドドの人々の上に重くのしかかり、災害をもたらした。主はアシュドドとその周辺の人々を打って、はれ物を生じさせられた。アシュドドの人々はこれを見て、言い合った。「イスラエルの神の箱を我々のうちにとどめて置いてはならない。この神の手は我々と我々の神ダゴンの上に災難をもたらす。」彼らは人をやってペリシテの領主を全員集め、「イスラエルの神の箱をどうしたものか」と尋ねた。彼らは答えた。「イスラエルの神の箱をガトへ移そう。」イスラエルの神の箱はそこに移された。

箱が移されて来ると、主の御手はその町に甚だしい恐慌を引き起こした。町の住民は、小さい者から大きい者までも打たれ、はれ物が彼らの間に広がった。

彼らは神の箱をエクロンに送った。神の箱がエクロンに着くと、住民は大声で叫んだ。「イスラエルの神の箱をここに移して、わたしとわたしの民を殺すつもりか。」彼らは人をやってペリシテの領主を全員集め、そして言った。「イスラエルの神の箱を送り返そう。元の所に戻ってもらおう。そうすれば、わたしとわたしの民は殺されはしないだろう。」実際、町全体が死の恐怖に包まれ、神の御手はそこに重くのしかかっていた。死を免れた

人々もはれ物で打たれ、町の叫び声は天にまで達した。——サムエル記上 5:6-12

主の箱は、七か月の間ペリシテの地にあった。ペリシテ人は、祭司たちと占い師たちを呼んで尋ねた。「主の箱をどうしたものでしょう。どのようにしてあれを元の所に送り返したらよいのか、教えてください。」彼らは答えた。「イスラエルの神の箱を送り返すにあたっては、何も添えずに送ってはならない。必ず賠償の献げ物と共に返さなければならない。そうすれば、あなたたちはいやされ、神の手があなたたちを離れなかった理由も理解できよう。」ペリシテ人は言った。「それでは、返すにあたって、賠償の献げ物は何がよいのでしょうか。」彼らは答えた。「同一の災厄があなたたち全員とあなたたちの領主にくださったのだから、ペリシテの領主の数に合わせて、五つの金のはれ物と五つの金のねずみにしなさい。はれ物の模型と大地を荒らすねずみの模型を造って、イスラエルの神に栄光を帰すならば、恐らくイスラエルの神は、あなたたち、あなたたちの神々、そしてあなたたちの土地の上にのしかかっているその手を軽くされるだろう。なぜ、あなたたちは、エジプト人とファラオがその心を固くしたように、心を固くするのか。神が彼らを悩ませたので、彼らはイスラエル人を行かせざるをえなくなり、イスラエル人は去って行ったのではないか。今、新しい車一両と、まだ軛をつけたことのない、乳を飲ませている雌牛二頭を用意しなさい。雌牛を車につなぎ、子牛は引き離して小屋に戻しなさい。主の箱を車に載せ、賠償の献げ物として主に返す金の品物を箱に入れ、傍らに置きなさい。それを送り出し、行くがままにしなさい。そして見ていて、それが自分の国に向かう道を、ベト・シメシュへ上って行くならば、我々に対してこの大きな災難を起こしたのは彼らの神だ。もし、その方向に上って行かなければ、彼らの神の手が我々を打ったのではなく、偶然の災難だったのだということが分かる。」

人々はそのとおりに行った。乳を飲ませている二頭の雌牛を連れて来て車につなぎ、子牛を小屋に閉じ込めた。主の箱を車に載せ、金で造ったねずみとはれ物の模型を入れた箱も載せた。雌牛は、ベト・シメシュに通じる一筋の広い道をまっすぐに進んで行った。歩きながら鳴いたが、右にも左にもそれなかった。ペリシテの領主たちは、ベト・シメシュの国境まで後をつけて行った。——サムエル記上 6:1-12

ベト・シメシュの人々は谷あいの平野で小麦を刈り入れていたが、目を上げると主の箱が見えた。彼らはそれを見て喜んだ。車はベト・シメシュの人ヨシュアの畑に着くと、そこに止まった。そこには大きな石があったので、人々は車に使われた木材を割り、雌牛を焼き尽くす献げ物として主にささげた。

レビ人たちは主の箱と、その脇に置いてあった金の品物の入った箱とを下ろし、大きな石の上に置いた。その日ベト・シメシュの人々は、焼き尽くす献げ物や、他のいけにえ

を主にささげた。ペリシテの五人の領主はこれを見届けると、その日のうちにエクロンへ戻った。

ペリシテ人が、主に賠償の献げ物として送った金のはれ物は、アシュドドのために一つ、ガザのために一つ、アシュケロンのために一つ、ガトのために一つ、エクロンのために一つである。金のねずみの数は、ペリシテの砦の町から田舎の村まで、五人の領主に属するペリシテ人のすべての町の数に合っていた。主の箱が置かれた大きな石は、今日でも、ベト・シエメシュの人ヨシュアの畑にある。

主はベト・シエメシュの人々を打たれた。主の箱の中をのぞいたからである。主は**五万のうち七十人の民**を打たれた。主が民に大きな打撃を与えられたので、民は喪に服した。ベト・シエメシュの人々は言った。「この聖なる神、主の御前に誰が立つことができようか。我々のもとから誰のもとへ行っていたらどうか。」彼らはキルヤト・エアリムの住民に使者を送って言った。「ペリシテ人が主の箱を返してきました。下って来て、主の箱をあなたがたのもとに担ぎ上げてください。」——サムエル記上 6:13-21

(編者註:) 何人死んだのか、という話だけど、新共同訳では上の通り「五万のうち七十人」とある……**五万人と七十人、どっちやねん!** とかいうツッコミはさておき、上の部分を欽定訳と Good News 版で比較しておく。

(欽定訳:) And he smote the men of Beth-shemesh, because they had looked into the ark of the LORD, even he smote of the people **fifty thousand and threescore and ten men**: and the people lamented, because the LORD had smitten many of the people with a great slaughter.

(Good News Bible:) The Lord killed **70** of the men of Beth Shemesh because they looked inside the Covenant Box. And the people mourned because the Lord had caused such a great slaughter among them. ——サムエル記上 6:19

(編者註:) threescore = 60。

そこへ、サウルが牛を追って畑から戻って来た。彼は尋ねた。「民が泣いているが、何事が起こったのか。」彼らはヤベシュの人々の言葉を伝えた。それを聞くうちに神の霊がサウルに激しく降った。彼は怒りに燃えて、一輓の牛を捕らえ、それを切り裂き、使者に持たせて、イスラエル全土に送り、次のように言わせた。「サウルとサムエルの後について出陣しない者があれば、その者の牛はこのようにされる。」民は主への恐れにかられ、一丸となって出陣した。——サムエル記上 11:5-7

(編者註:) ……とあるのだが、ここは本文 pp.67 末尾の記述と一致しない。ここで引用すべきなのはサムエル記上 7:10 なんじゃないか……と思って原著で確認したら、やっぱり 7:10 じゃないか！ どういうこと？ ……とりあえず周辺部を引用しておく:

サムエルはまだ乳離れしない小羊一匹を取り、焼き尽くす献げ物として主にささげ、イスラエルのため主に助けを求めて叫んだ。主は彼に答えられた。サムエルが焼き尽くす献げ物をささげている間に、ペリシテ軍はイスラエルに戦いを挑んで来たが、主がこの日、ペリシテ軍の上に激しい雷鳴をとどろかせ、彼らを混乱に陥れられたので、彼らはイスラエルに打ち負かされた。イスラエルの兵はミツパを出てペリシテ人を追ひ、彼らを討ってベト・カルの下まで行った。サムエルは石を一つ取ってミツパとシェンの間に置き、「今まで、主は我々を助けてくださった」と言って、それをエベン・エゼル（助けの石）と名付けた。——サムエル記上 7:9-12 (強調部: 10)

(編者註:) ちなみに「激しい雷鳴をとどろかせ……」の部分は、欽定訳でも *the LORD thundered with a great thunder...* となっている。

(編者註:) ここに、原著にあるのに訳本では削られている箇所があって、先のサムエル記上 11:5-7 に相当するのはここなんだよね。原文を訳すとこんな感じ:

はじめて神に油注がれたイスラエルの王であるサウルは、イスラエルの民の牛を皆殺しにすると脅すと、彼らが自分に従って戦ってくれるということを証明したんだ。——サムエル記上 11:5-7

そこへ、サウルが牛を追って畑から戻って来た。彼は尋ねた。「民が泣いているが、何事が起こったのか。」彼らはヤベシュの人々の言葉を伝えた。それを聞くうちに神の霊がサウルに激しく降った。彼は怒りに燃えて、一軀の牛を捕らえ、それを切り裂き、使者に持たせて、イスラエル全土に送り、次のように言わせた。「サウルとサムエルの後について出陣しない者があれば、その者の牛はこのようにされる。」民は主への恐れにかられ、一丸となって出陣した。——サムエル記上 11:5-7

1.6.1 あまりてきめんじゃない天罰

しかし、モーセの書、律法に記されているところに従い、その子供たちは殺さなかった。主がこう命じておられるからである。「父は子のゆえに死に定められず、子は父のゆえに死に定められない。人は、それぞれ自分の罪のゆえに死に定められる。」——歴代誌下 25:4

万軍の主はこう言われる。イスラエルがエジプトから上って来る道でアマレクが仕掛けて妨害した行為を、わたしは罰することにした。行け。アマレクを討ち、アマレクに属するものは一切、滅ぼし尽くせ。男も女も、子供も乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも打ち殺せ。容赦してはならない。」——サムエル記上 15:2-3

(編者註:) モーゼの疲れた腕の話というのは、この話のことだね。

ヨシュアは、モーセの命じたとおりに実行し、アマレクと戦った。モーセとアロン、そしてフルは丘の頂に登った。モーセが手を上げている間、イスラエルは優勢になり、手を下ろすと、アマレクが優勢になった。モーセの手が重くなったので、アロンとフルは石を持って来てモーセの下に置いた。モーセはその上に座り、アロンとフルはモーセの両側に立って、彼の手を支えた。その手は、日の沈むまで、しっかりと上げられていた。ヨシュアは、アマレクとその民を剣にかけて打ち破った。——出エジプト記 17:10-13

サムエルは命じた。「アマレクの王アガグを、わたしのもとに連れて来なさい。」アガグは、喜んで彼のもとに出て来た。これで死の苦しみは免れる、と思ったからである。しかし、サムエルは言った。「お前の剣は女たちから子供を奪った。そのようにお前の母も子を奪われた女の一人となる。」こうしてサムエルは、ギルガルで主の御前にアガグを切り殺した。——サムエル記上 15:32-33

1.6.2 ダビデ

(編者註:) ダビデは、おそらく旧約聖書の時代の人々、そして新約聖書に出てくる祭司やファリサイ人達が思い描いていたようなメシアのイメージそのものだ。イザヤ書に出てくる、イエスをイメージさせるような一節を読んで「ああ旧約の時代からこういうメシアが待望されていたんだ」とか思った人、間違っではいけない。かの時代に世が求めていたのは、神に祝福された英雄のステレオタイプ、まさにそのものだったわけ……勿論、彼らに非はないと思うよ。そういう時代だったんだから。

エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」——サムエル記上 16:12

ダビデは袋に手を入れて小石を取り出すと、石投げ紐を使って飛ばし、ペリシテ人の額を撃った。石はペリシテ人の額に食い込み、彼はうつ伏せに倒れた。ダビデは石投げ紐と石一つでこのペリシテ人に勝ち、彼を撃ち殺した。ダビデの手には剣もなかった。ダビデは走り寄って、そのペリシテ人の上にまたがると、ペリシテ人の剣を取り、さやから引き抜いてとどめを刺し、首を切り落とした。ペリシテ軍は、自分たちの勇士が殺されたのを見て、逃げ出した。——サムエル記上 17:49-51

(編者註:) あれれ？ 石で打ち殺してから首を切り落とした、とあるね。一応欽定訳を見よう。

And David put his hand in his bag, and took thence a stone, and slang it, and smote the Philistine in his forehead, that the stone sunk into his forehead; and he fell upon his face to the earth. So David prevailed over the Philistine with a sling and with a stone, and smote the Philistine, and **slew** him; but there was no sword in the hand of David. Therefore David ran, and stood upon the Philistine, and took his sword, and drew it out of the sheath thereof, and slew him, and cut off his head therewith. And when the Philistines saw their champion was dead, they fled. ——サムエル記上 17:49-51

(編者註:) slew は slay (殺す) の過去形だから、やはり首を切る前に殺していることになっている。もっとも、前だろうが後だろうが、これが惨殺の謗りを免れるわけではないけどさ。

自分の兵を従えて出立し、二百人のペリシテ人を討ち取り、その陽皮を持ち帰った。王に対し、婿となる条件である陽皮の数が確かめられたので、サウルは娘のミカルを彼に妻として与えなければならなかった。

(欽定訳:) Wherefore David arose and went, he and his men, and slew of the Philistines **two hundred** men; and David brought their foreskins, and they gave them in full tale to the king, that he might be the king' s son in law. And Saul gave him Michal his daughter to wife. —サムエル記上 18:27

(編者註:) 欽定訳でも 200 人 (ここに引用していないけれど、口語訳でも 200 人)。100 人という数字はどこから出てきたんだろう？

サムエルの死

サムエルが死んだので、全イスラエルは集まり、彼を悼み、ラマにある彼の家に葬った。ダビデは立ってパランの荒れ野に下った。

一人の男がマオンにいた。仕事場はカルメルにあり、非常に裕福で、羊三千匹、山羊千匹を持っていた。彼はカルメルで羊の毛を刈っていた。男の名はナバルで、妻の名はアビガイルと言った。妻は聡明で美しかったが、夫は頑固で行状が悪かった。彼はカレブ人であった。荒れ野にいたダビデは、ナバルが羊の毛を刈っていると聞き、十人の従者を送ることにして、彼らにこう言った。「カルメルに上り、ナバルを訪ね、わたしの名によって安否を問い、次のように言うがよい。『あなたに平和、あなたの家に平和、あなたのものすべてに平和がありますように。羊の毛を刈っておられると聞きました。あなたの牧童は我々のもとにいましたが、彼らを侮辱したことはありません。彼らがカルメルに滞在していた間、無くなったものは何もないはずです。あなたの従者に尋ねてくだされば、そう答えるでしょう。わたしの従者が御厚意にあずかれますように。この祝いの日に来たのですから、お手もとにあるものを僕たちと、あなたの子ダビデにお分けください。』」ダビデの従者は到着すると、教えられたとおりダビデの名によってナバルに告げ、答えを待った。ナバルはダビデの部下に答えて言った。「ダビデとは何者だ、エッサイの子とは何者だ。最近、主人のもとを逃げ出す奴隷が多くなった。わたしのパン、わたしの水、それに毛を刈る者にと準備した肉を取って素性の知れぬ者に与えろというのか。」

ダビデの従者は道を引き返して帰り着くと、言われたままをダビデに報告した。ダビデは兵に、「各自、剣を運びよ」と命じ、おのおの剣を運び、ダビデも剣を運びた。四百人ほどがダビデに従って進み、二百人は荷物のところにとどまった。

ナバルの従者の一人がナバルの妻アビガイルに報告した。「ダビデは、御主人に祝福を述べようと荒れ野から使いをよこしたのに、御主人は彼らをののしりました。あの人たちは実に親切で、我々が野に出ていて彼らと共に移動したときも、我々を侮辱したりせず、何かが無くなったこともありません。彼らのもとにいて羊を飼っているときはいつも、彼らが昼も夜も我々の防壁の役をしてくれました。御主人にも、この家の者全体にも、災いがふりかかろうとしている今、あなたが何をなすべきか、しっかり考えてください。御主人はならず者で、だれも彼に話しかけることができません。」

アビガイルは急いで、パンを二百、ぶどう酒の革袋を二つ、料理された羊五匹、炒り麦五セア、干しぶどう百房、干しいちじくの菓子を取って二百取り、何頭かのろばに積み、従者に命じた。「案内しなさい。後をついて行きます。」彼女は夫ナバルには何も言わなかった。アビガイルが、ろばに乗って山陰を進んで行くと、向こうからダビデとその兵が進んで来るのに出会った。ダビデはこう言ったばかりであった。「荒れ野で、あの男の物をみな守り、何一つ無くならぬように気を配ったが、それは全く無益であった。彼は善意に悪意をもって報いた。明日の朝の光が射すまでに、ナバルに属する男を一人でも残しておくなら、神がこのダビデを幾重にも罰してくださるように。」

アビガイルはダビデを見ると、急いでろばを降り、ダビデの前の地にひれ伏し礼をした。彼女はダビデの足もとにひれ伏して言った。「御主人様、わたしが悪うございました。お耳をお貸しください。はしための言葉をお聞きください。御主人様が、あのならず者ナバルのことなど気になさいませんかのように。名前のおりの人間、ナバルという名のおりの愚か者でございます。はしためは、お遣わしになった使者の方々にお会いしてはいないのです。主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。あなたを引き止め、流血の災いに手を下すことからあなたを守ってくださったのは主です。あなたに対して災難を望む者、あなたの敵はナバルのようになりましょう。ここにある物は、はしためが持参した贈り物でございます。お足もとに仕える従者にお取らせくださいますように。どうかはしための失礼をお許しください。主は必ずあなたのために確固とした家を興してくださいませ。あなたは主の戦いをたたかわれる方で、生涯、悪いことがあなたを襲うことはございませんから。人が逆らって立ち、お命をねらって追い迫って来ても、お命はあなたの神、主によって命の袋に納められ、敵の命こそ主によって石投げ紐に仕掛けられ、投げ飛ばされることになりましょう。また、主が約束なさった幸いをすべて成就し、あなたをイスラエルの指導者としてお立てになるとき、いわれもなく血を流したり、御自分の手で復讐なさったことなどが、つまずきや、お心の責めとなりませんように。主があなたをお恵みになるときには、はしためを思い出してください。」ダビデはアビガイルに答えた。「イス

ラエルの神、主はたたえられよ。主は、今日、あなたをわたしに遣わされた。あなたの判断はたたえられ、あなたもたたえられよ。わたしが流血の罪を犯し、自分の手で復讐することを止めてくれた。イスラエルの神、主は生きておられる。主は、わたしを引き止め、あなたを災いから守られた。あなたが急いでわたしに会いに来ていなければ、明日の朝の光が射すころには、ナバルに一人の男も残されていなかっただろう。」

ダビデは、彼女の携えて来た贈り物を受け、彼女に言った。「平和に帰りなさい。あなたの言葉を確かに聞き入れ、願いを尊重しよう。」

アビガイルがナバルのもとへ帰ってみると、ナバルは家で王の宴会にも似た宴会の最中であった。ナバルは上機嫌で、かなり酔っていたので、翌朝、日が昇るまで、彼女は事の大小を問わず何も話さなかった。翌朝、ナバルの酔いがさめると、彼の妻は成り行きを話して聞かせた。ナバルは意識を無くして石のようになった。十日ほどの後、主はナバルを打たれ、彼は死んだ。

ナバルが死んだと聞いたダビデは、「主はたたえられよ。主は、ナバルが加えた侮辱に裁きを下し、僕に悪を行わせず、かえって、ナバルの悪をナバルの頭に返された」と言った。

ダビデはアビガイルに人を遣わし、彼女を妻にしたいと申し入れた。ダビデの部下がカルメルにいたアビガイルのもとに来て、「ダビデは我々をあなたのもとに遣わし、あなたを妻として迎えたいと言っています」と告げた。彼女は立ち上がり、地に伏して礼をし、「わたしは御主人様の僕たちの足を洗うはしためになります」と答え、すぐに立ち、急いでろばに乗り、彼女に仕える侍女を五人連れて、ダビデの使者の後に従った。アビガイルはダビデの妻となった。

ダビデはイズレエル出身のアヒノアムをめとっていたので、この二人がダビデの妻となった。サウルは、ダビデの妻であった自分の娘ミカルを、ガリム出身のライシュの子バルティに与えた。——サムエル記上 25

三日目に、サウルの陣営から一人の男がたどりついた。衣服は裂け、頭に土をかぶっていた。男はダビデの前に出ると、地にひれ伏して礼をした。ダビデは尋ねた。「どこから来たのだ。」「イスラエルの陣営から逃れて参りました」と彼は答えた。「状況はどうか。話してくれ」とダビデは彼に言った。彼は言った。「兵士は戦場から逃げ去り、多くの兵士が倒れて死にました。サウル王と王子のヨナタンも亡くなりました。」

ダビデは知らせをもたらしたこの若者に尋ねた。「二人の死をどうして知ったのか。」この若者は答えた。「わたしはたまたまギルボア山におりました。そのとき、サウル王は槍にもたれかかっておられましたが、戦車と騎兵が王に迫っていました。王は振り返ってわたしを御覧になり、お呼びになりました。『はい』とお答えすると、『お前は何者だ』とお尋ねになり、『アマレクの者です』とお答えすると、『そばに来て、とどめを刺してくれ。

痙攣が起こったが死にきれない』と言われました。そこでおそばに行って、とどめを刺しました。倒れてしまわれ、もはや生き延びることはできまいと思ったからです。頭にかぶっておられた王冠と腕につけておられた腕輪を取って、御主人様に持って参りました。これでございます。」

ダビデは自分の衣をつかんで引き裂いた。共にいた者は皆それに倣った。彼らは、剣に倒れたサウルとその子ヨナタン、そして主の民とイスラエルの家を悼んで泣き、夕暮れまで断食した。

ダビデは、知らせをもたらした若者に尋ねた。「お前はどこの出身か。」「わたしは寄留のアマレク人の子です」と彼は答えた。ダビデは彼に言った。「主が油を注がれた方を、恐れもせず手にかけ、殺害するとは何事か。」

ダビデは従者の一人を呼び、「近寄って、この者を討て」と命じた。従者は彼を打ち殺した。ダビデは言った。「お前の流した血はお前の頭に返る。お前自身の口が、『わたしは主が油を注がれた方を殺した』と証言したのだから。」——サムエル記下 1:2-16

ベエロト人リモンの子レカブとバアナは、日盛りのころイシュ・ボシェトの家にやって来た。イシュ・ボシェトは昼寝をしていた。レカブとその兄弟バアナは、小麦を受け取る振りをして家の中に入り、彼の下腹を突き刺して殺し、逃亡した。すなわち、彼らが家に入ると、イシュ・ボシェトが寝室の寝床に横たわっていたので、二人は彼を突き刺して殺し、首をはねた。彼らはその首を携えてアラバへの道を夜通し歩き、ヘブロンのだビデのもとに、その首を持参した。二人は王に言った。「御覧ください。お命をねらっていた、王の敵サウルの子イシュ・ボシェトの首です。主は、主君、王のために、サウルとその子孫に報復されました。」

ダビデはベエロト人リモンの子レカブとその兄弟バアナに答えて言った。

「あらゆる苦難からわたしの命を救われた主は生きておられる。かつてサウルの死をわたしに告げた者は、自分では良い知らせをもたらしたつもりであった。だが、わたしはその者を捕らえ、ツイクラグで処刑した。それが彼の知らせへの報いであった。まして、自分の家の寝床で休んでいた正しい人を、神に逆らう者が殺したのだ。その流血の罪をお前たちの手に問わずにいられようか。お前たちを地上から除き去らずにいられようか。」

ダビデの命令によって、従者は二人を殺して両手両足を切り落とし、ヘブロンのだビデのほとりで木につるした。イシュ・ボシェトの首はヘブロンに運ばれ、アブネルの墓に葬られた。——サムエル記下 4:5-12

ダビデは彼に従うすべての兵士と共にバアレ・ユダから出発した。それは、ケルビムの上に座す万軍の主の御名によってその名を呼ばれる神の箱をそこから運び上げるため

あった。彼らは神の箱を新しい車に載せ、丘の上のアビナダブの家から運び出した。アビナダブの子ウザとアフヨがその新しい車を御していた。彼らは丘の上のアビナダブの家から神の箱を載せた車を運び出し、アフヨは箱の前を進んだ。ダビデとイスラエルの家は皆、主の御前で糸杉の楽器、豎琴、琴、太鼓、鈴、シンバルを奏でた。

一行がナコンの麦打ち場にさしかかったとき、牛がよろめいたので、ウザは神の箱の方に手を伸ばし、箱を押さえた。ウザに対して主は怒りを発し、この過失のゆえに神はその場で彼を打たれた。ウザは神の箱の傍らで死んだ。ダビデも怒った。主がウザを打ち砕かれたためである。その場所をペレッツ・ウザ（ウザを砕く）と呼んで今日に至っている。その日、ダビデは主を恐れ、「どうして主の箱をわたしのもとに迎えることができようか」と言って、ダビデの町、自分のもとに主の箱を移すことを望まなかった。ダビデは箱をガト人オベド・エドムの家に向かわせた。——サムエル記下 6:1-10

ダビデはエジプトのシホルからレボ・ハマトまでのすべてのイスラエル人を集め、神の箱をキルヤト・エアリムから運んで来ようとした。ダビデはすべてのイスラエル人と共にバアラト、つまりユダのキルヤト・エアリムに上って行った。それは、ケルビムの上に座しておられる主なる神の箱、その御名によって呼ばれる箱をそこから運び上げるためであった。彼らはアビナダブの家から、神の箱を新しい車に載せ、ウザとアフヨがその車を御した。ダビデとすべてのイスラエル人は、神の御前で力を込めて、歌をうたい、豎琴、琴、太鼓、シンバル、ラッパを奏でた。

一行がキドンの麦打ち場にさしかかったとき、牛がよろめいたので、ウザは手を伸ばして箱を押さえようとした。ウザが箱に手を伸ばしたので、ウザに対して主は怒りを発し、彼を打たれた。彼はその場で、神の御前で死んだ。ダビデも怒った。主がウザを打ち砕かれたからである。その場所をペレッツ・ウザ（ウザを砕く）と呼んで今日に至っている。その日、ダビデは神を恐れ、「どうして神の箱をわたしのもとに迎えることができようか」と言って、ダビデの町、自分のもとに箱を移さなかった。彼は箱をガト人オベド・エドムの家に向かわせた。——歴代誌上 13:5-14

主の箱がダビデの町に着いたとき、サウルの娘ミカルは窓からこれを見下ろしていたが、主の御前で跳ね踊るダビデ王を見て、心の内にさげすんだ。——サムエル記下 6:16

ダビデが家の者に祝福を与えようと戻って来ると、サウルの娘ミカルがダビデを迎えて言った。「今日のイスラエル王は御立派でした。家臣のはしためたちの前で裸になられたのですから。空っぽの男が恥ずかしげもなく裸になるように。」ダビデはミカルに言った。

「そうだ。お前の父やその家のだれでもなく、このわたしを選んで、主の民イスラエルの指導者として立ててくださった主の御前で、その主の御前でわたしは踊ったのだ。わたしはもっと卑しめられ、自分の目にも低い者となろう。しかし、お前の言うはしためたちからは、敬われるだろう。」サウルの娘ミカルは、子を持つことのないまま、死の日を迎えた。——サムエル記下 6:20-23

ウリヤの妻バト・シェバ

年が改まり、王たちが出陣する時期になった。ダビデは、ヨアブとその指揮下においた自分の家臣、そしてイスラエルの全軍を送り出した。彼らはアンモン人を滅ぼし、ラバを包囲した。しかしダビデ自身はエルサレムにとどまっていた。

ある日の夕暮れに、ダビデは午睡から起きて、王宮の屋上を散歩していた。彼は屋上から、一人の女が水を浴びているのを目に留めた。女は大層美しかった。ダビデは人をやって女のことを尋ねさせた。それはエリアムの娘バト・シェバで、ヘト人ウリヤの妻だということであった。ダビデは使いの者をやって彼女を召し入れ、彼女が彼のもとに来ると、床を共にした。彼女は汚れから身を清めたところであった。女は家に帰ったが、子を宿したので、ダビデに使いを送り、「子を宿しました」と知らせた。

ダビデはヨアブに、ヘト人ウリヤを送り返すように命令を出し、ヨアブはウリヤをダビデのもとに送った。ウリヤが来ると、ダビデはヨアブの安否、兵士の安否を問い、また戦況について尋ねた。それからダビデはウリヤに言った。「家に帰って足を洗うがよい。」

ウリヤが王宮を退出すると、王の贈り物が後に続いた。しかしウリヤは王宮の入り口で主君の家臣と共に眠り、家に帰らなかった。ウリヤが自分の家に帰らなかったと知らされたダビデは、ウリヤに尋ねた。「遠征から帰って来たのではないか。なぜ家に帰らないのか。」ウリヤはダビデに答えた。「神の箱も、イスラエルもユダも仮小屋に宿り、わたしの主人ヨアブも主君の家臣たちも野営していますのに、わたしだけが家に帰って飲み食いしたり、妻と床を共にしたりできるのでしょうか。あなたは確かに生きておられます。わたしには、そのようなことはできません。」ダビデはウリヤに言った。「今日もここにとどまるがよい。明日、お前を送り出すとしよう。」ウリヤはその日と次の日、エルサレムにとどまった。ダビデはウリヤを招き、食事を共にして酔わせたが、夕暮れになるとウリヤは退出し、主君の家臣たちと共に眠り、家には帰らなかった。

翌朝、ダビデはヨアブにあてて書状をしたため、ウリヤに託した。書状には、「ウリヤを激しい戦いの最前線に出し、彼を残して退却し、戦死させよ」と書かれていた。町の様子を見張っていたヨアブは、強力な戦士がいると判断した辺りにウリヤを配置した。町の者たちは出撃してヨアブの軍と戦い、ダビデの家臣と兵士から戦死者が出た。ヘト人ウリヤも死んだ。

ヨアブはダビデにこの戦いの一部始終について報告を送り、使者に命じた。「戦いの一部始終を王に報告し終えたとき、もし王が怒って、『なぜそんなに町に接近して戦ったのか。城壁の上から射かけてくると分かっていたはずだ。昔、エルベシエトの子アビメレクを討ち取ったのは誰だったか。あの男がテベツで死んだのは、女が城壁の上から石臼を投げつけたからではないか。なぜそんなに城壁に接近したのだ』と言われたなら、『王の僕ヘト人ウリヤも死にました』と言うがよい。」

使者は出発し、ダビデのもとに到着してヨアブの伝言をすべて伝えた。使者はダビデに言った。「敵は我々より優勢で、野戦を挑んで来ました。我々が城門の入り口まで押し返すと、射手が城壁の上から僕らに矢を射かけ、王の家臣からも死んだ者が出、王の僕ヘト人ウリヤも死にました。」ダビデは使者に言った。「ヨアブにこう伝えよ。『そのことを悪かったと見なす必要はない。剣があればだれかが餌食になる。奮戦して町を滅ぼせ。』そう言って彼を励ませ。」

ウリヤの妻は夫ウリヤが死んだと聞くと、夫のために嘆いた。喪が明けると、ダビデは人をやって彼女を王宮に引き取り、妻にした。彼女は男の子を産んだ。ダビデのしたことは主の御心に適わなかった。——サムエル記下 11

ナタンの叱責

主はナタンをダビデのもとに遣わされた。ナタンは来て、次のように語った。

「二人の男がある町にいた。

一人は豊かで、一人は貧しかった。

豊かな男は非常に多くの羊や牛を持っていた。

貧しい男は自分で買った一匹の雌の小羊のほかに

何一つ持っていなかった。

彼はその小羊を養い

小羊は彼のもとで育ち、息子たちと一緒にいて

彼の皿から食べ、彼の椀から飲み

彼のふところで眠り、彼にとっては娘のようだった。

ある日、豊かな男に一人の客があった。

彼は訪れて来た旅人をもてなすのに

自分の羊や牛を惜しみ

貧しい男の小羊を取り上げて

自分の客に振る舞った。」

ダビデはその男に激怒し、ナタンに言った。「主は生きておられる。そんなことをした男は死罪だ。小羊の償いに四倍の価を払うべきだ。そんな無慈悲なことをしたのだから。」

ナタンはダビデに向かって言った。「その男はあなただ。イスラエルの神、主はこう言われる。『あなたに油を注いでイスラエルの王としたのはわたしである。わたしがあなたをサウルの手から救い出し、あなたの主君であった者の家をあなたに与え、その妻たちをあなたのふところに置き、イスラエルとユダの家をあなたに与えたのだ。不足なら、何であれ加えたであろう。なぜ主の言葉を侮り、わたしの意に背くことをしたのか。あなたはヘト人ウリヤを剣にかけ、その妻を奪って自分の妻とした。ウリヤをアンモン人の剣で殺したのはあなただ。それゆえ、剣はとこしえにあなたの家から去らないであろう。あなたがわたしを侮り、ヘト人ウリヤの妻を奪って自分の妻としたからだ。』主はこう言われる。『見よ、わたしはあなたの家の者の中からあなたに対して悪を働く者を起こそう。あなたの目の前で妻たちを取り上げ、あなたの隣人に与える。彼はこの太陽の下であなたの妻たちと床を共にするであろう。あなたは隠れて行ったが、わたしはこれを全イスラエルの前で、太陽の下で行う。』」

ダビデはナタンに言った。「わたしは主に罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「その主があなたの罪を取り除かれる。あなたは死の罰を免れる。しかし、このようなことをして主を甚だしく軽んじたのだから、生まれてくるあなたの子は必ず死ぬ。」ナタンは自分の家に帰って行った。

主はウリヤの妻が産んだダビデの子を打たれ、その子は弱っていった。ダビデはその子のために神に願い求め、断食した。彼は引きこもり、地面に横たわって夜を過ごした。王家の長老たちはその傍らに立って、王を地面から起き上がらせようとしたが、ダビデはそれを望まず、彼らと共に食事をとろうともしなかった。

七日目にその子は死んだ。家臣たちは、その子が死んだとダビデに告げるのを恐れ、こう話し合った。「お子様がまだ生きておられたときですら、何を申し上げてもわたしたちの声に耳を傾けてくださらなかったのに、どうして亡くなられたとお伝えできよう。何かよくないことをなさいはしまいか。」ダビデは家臣がささやき合っているのを見て、子が死んだと悟り、言った。「あの子は死んだのか。」彼らは答えた。「お亡くなりになりました。」ダビデは地面から起き上がり、身を洗って香油を塗り、衣を替え、主の家に行って礼拝した。王宮に戻ると、命じて食べ物を用意させ、食事をした。家臣は尋ねた。「どうしてこのようにふるまわれるのですか。お子様の生きておられるときは断食してお泣きになり、お子様が亡くなられると起き上がって食事をなさいます。」彼は言った。

「子がまだ生きている間は、主がわたしを憐れみ、子を生かしてくださるかもしれないと思ったからこそ、断食して泣いたのだ。だが死んでしまった。断食したところで、何になろう。あの子呼び戻せようか。わたしはいずれあの子のところに行く。しかし、あの子がわたしのもとに帰って来ることはない。」——サムエル記下 12:1-23

(編者註:) 何が主の御心にかなわなかったか……十戒の6番目と7番目を見れば明らかかな。以下引用。

殺してはならない。

姦淫してはならない。——出エジプト記 20:13-14

ソロモンの誕生

ダビデは妻バト・シェバを慰め、彼女のところに行って床を共にした。バト・シェバは男の子を産み、ダビデはその子をソロモンと名付けた。主はその子を愛され、預言者ナタンを通してそのことを示されたので、主のゆえにその子をエディドヤ（主に愛された者）とも名付けた。——サムエル記下 12:24-25

アンモン、アラムとの戦い

その後、アンモン人の王が死に、その子ハヌンが代わって王となった。ダビデは、「ハヌンの父ナハシュがわたしに忠実であったのだから、わたしもその子ハヌンに忠実であるべきだ」と言って、使節を遣わして哀悼の意を表そうとした。ところが、ダビデの家臣たちがアンモン人の領地に入ると、アンモン人の高官たちは主君ハヌンに言った。「ダビデがお父上に敬意を表して弔問の使節を送って来たとお考えになってはなりません。この町を探りうかがい、倒そうとして、家臣を送り込んだにちがいありません。」それでハヌンはダビデの家臣を捕らえ、ひげを半分そり落とし、衣服も半分、腰から下を切り落として追い返した。この人たちが甚だしい辱めを受けたという知らせがダビデに届くと、ダビデは人を遣わして彼らを迎えさせ、王の伝言として、「ひげが生えそろうまでエリコにとどまり、それから帰るように」と言わせた。——サムエル記下 10:1-5

アムノンとタマル

その後、こういうことがあった。ダビデの子アブサロムにタマルという美しい妹がいた。ダビデの子アムノンはタマルを愛していた。しかしタマルは処女で、手出しをすることは思いもよらなかったのので、妹タマルへの思いにアムノンは病気になりそうであった。アムノンにはヨナダブという名の友人がいた。ヨナダブはダビデの兄弟シムアの息子で大変賢い男であった。ヨナダブはアムノンに言った。「王子よ、朝ごとに君はやつれていく。どうかしたのか。どうして打ち明けないのだ。」アムノンは彼に言った。「兄弟アブサロムの妹タマルを愛しているのだ。」

ヨナダブは言った。「病気を装って床に就くとよい。父上が見舞いに来られたら、『妹タ

マルをよこしてください。何か食べ物を作らせます。わたしに見えるように、目の前で料理をさせてください。タマルの手から食べたいのです』と言ったらよい。」

アムノンは床に就き、病を装った。王が見舞いに来ると、アムノンは王に言った。「どうか妹のタマルをよこしてください。目の前でレビボット（『心』という菓子）を二つ作らせます。タマルの手から食べたいのです。」

ダビデは宮殿にいるタマルのもとに人をやって、兄アムノンの家に行き、料理をするように、と伝えさせた。タマルが兄アムノンの家に来てみると、彼は床に就いていた。タマルは粉を取ってこね、アムノンの目の前でレビボットを作って焼き、鍋を取って彼の前に出した。しかしアムノンは食べようとせず、そばにいた者を皆、出て行かせた。彼らが皆出て行くと、アムノンはタマルに言った。「料理をこちらの部屋に持って来てくれ。お前の手から食べたいのだ。」タマルが、作ったレビボットを持って兄アムノンのいる部屋に入り、彼に食べさせようと近づくと、アムノンはタマルを捕らえて言った。「妹よ、おいで。わたしと寝てくれ。」タマルは言った。「いけません、兄上。わたしを辱めないでください。イスラエルでは許されないことです。愚かなことをなさらないでください。わたしは、このような恥をどこへもって行けましょう。あなたも、イスラエルでは愚か者の一人になってしまいます。どうぞまず王にお話してください。王はあなたにわたしを与えるのを拒まれないでしょう。」

アムノンは彼女の言うことを聞こうとせず、力づくで辱め、彼女と床を共にした。

そして、アムノンは激しい憎しみを彼女に覚えた。その憎しみは、彼女を愛したその愛よりも激しかった。アムノンは彼女に言った。「立て。出て行け。」タマルは言った。「いいえ、わたしを追い出すのは、今なされたことよりも大きな悪です。」だがアムノンは聞き入れようともせず、自分に仕える従者を呼び、「この女をここから追い出せ。追い出したら戸に錠をおろせ」と命じた。タマルは未婚の王女のしきたりによって飾り付きの上着を着ていたが、アムノンに仕える従者が彼女を追い出し、背後で戸に錠をおろすと、タマルは灰を頭にかぶり、まとっていた上着を引き裂き、手を頭に当てて嘆きの叫びをあげながら歩いて行った。

兄アブサロムは彼女に言った。「兄アムノンがお前と一緒にだったのか。妹よ、今は何も言うな。彼はお前の兄だ。このことを心にかけてはいけない。」タマルは絶望して兄アブサロムの家に身を置いた。——サムエル記下 13:1-20

ダビデ王は事の一部始終を聞き、激しく怒った。——サムエル記下 13:21

飢饉とサウルの子孫

ダビデの世に、三年続いて飢饉が襲った。ダビデは主に託宣を求めた。主は言われた。

「ギブオン人を殺害し、血を流したサウルとその家に責任がある。」王はギブオン人を招いて言った。——ギブオン人はアモリ人の生き残りで、イスラエルの人々に属する者ではないが、イスラエルの人々は彼らと誓約を交わしていた。ところがサウルは、イスラエルとユダの人々への熱情の余り、ギブオン人を討とうとしたことがあった。

ダビデはギブオン人に言った。「あなたたちに何をしたらよいのだろうか。どのように償えば主の嗣業を祝福してもらえるだろうか。」ギブオン人はダビデに答えた。「サウルとその家のことで問題なのは金銀ではありません。イスラエルの人々をだれかれなく殺すというのでもありません。」ダビデは言った。「言ってくれば何でもそのとおりにしよう。」彼らは王に答えた。「わたしたちを滅ぼし尽くし、わたしたちがイスラエルの領土のどこにも定着できないように滅亡を謀った男、あの男の子孫の中から七人をわたしたちに渡してください。わたしたちは主がお選びになった者サウルの町ギブアで、主の御前に彼らをさらし者にします。」王は、「引き渡そう」と言った。

しかし、王はサウルの子ヨナタンの息子メフィボシェトを惜しんだ。ダビデとサウルの子ヨナタンとの間には主をさして立てた誓いがあったからである。

王はアヤの娘リツパとサウルの間に生まれた二人の息子、アルモニとメフィボシェトと、サウルの娘ミカルとメホラ人バルジライの子アドリエルとの間に生まれた五人の息子を捕らえ、ギブオン人の手に渡した。ギブオンの人々は彼らを山で主の御前にさらした。七人は一度に処刑された。彼らが殺されたのは刈り入れの初め、大麦の収穫が始まるころであった。——サムエル記下 21:1-9

ダビデの人口調査

サタンがイスラエルに対して立ち、イスラエルの人口を数えるようにダビデを誘った。ダビデはヨアブと民の将軍たちに命じた。「出かけて行って、ベエル・シェバからダンに及ぶイスラエル人の数を数え、その結果をわたしに報告せよ。その数を知りたい。」ヨアブは言った。「主がその民を百倍にも増やしてくださいますように。主君、王よ、彼らは皆主君の僕ではありませんか。主君はなぜ、このようなことをお望みになるのですか。どうしてイスラエルを罪のあるものとなさるのですか。」しかし、ヨアブに対する王の命令は厳しかったので、ヨアブは退き、イスラエルをくまなく巡ってエルサレムに帰還した。ヨアブは調べた民の数をダビデに報告した。全イスラエルには剣を取りうる男子が百十万、ユダには剣を取りうる男子が四十七万であった。ヨアブにとって王の命令は忌まわしいものであったので、彼はその際レビ人とベニヤミンの調査はしなかった。

神はこのことを悪と見なされ、イスラエルを撃たれた。——歴代誌上 21:1-7

主はそこでイスラエルに疫病をもたらされ、イスラエル人のうち七万人が倒れた。

(参考:欽定訳) So the LORD sent **pestilence** upon Israel: and there fell of Israel seventy thousand men. —歴代誌上 21:14

ダビデは二十歳以下の者を人口に加えなかったが、それは主がイスラエルを空の星のように数多くすると約束されたからである。ツェルヤの子ヨアブはその数を数え始めたが、数えきることはできず、数え始めたために御怒りがイスラエルに臨み、その数は、『ダビデ王の年代記』の記録に載せられなかった。——歴代誌上 27:23-24

ダビデの人口調査

主の怒りが再びイスラエルに対して燃え上がった。主は、「イスラエルとユダの人口を数えよ」とダビデを誘われた。王は直属の軍の司令官ヨアブに命じた。「ダンからベエル・シェバに及ぶイスラエルの全部族の間を巡って民の数を調べよ。民の数を知りたい。」ヨアブは王に言った。「あなたの神、主がこの民を百倍にも増やしてくださいますように。主君、王御自身がそれを直接目にされますように。主君、王はなぜ、このようなことを望まれるのですか。」

しかし、ヨアブと軍の長たちに対する王の命令は厳しかったので、ヨアブと軍の長たちはダビデの前を辞し、イスラエルの民を数えるために出発した。彼らはヨルダン川を渡って、アロエルとガドの谷間の町から始め、更にヤゼルを目指し、ギレアドに入って、ヘト人の地カデシュに至り、ダン・ヤアンからシドンに回った。彼らはティルススの要塞に入り、ヒビ人、カナン人の町をことごとく巡ってユダのネゲブの、ベエル・シェバに至った。彼らは九か月と二十日をかけて全国を巡った後、エルサレムに帰還した。ヨアブは調べた民の数を王に報告した。剣を取りうる戦士はイスラエルに八十万、ユダに五十万であった。

民を数えたことはダビデの心に呵責となった。ダビデは主に言った。「わたしは重い罪を犯しました。主よ、どうか僕の悪をお見逃しください。大変愚かなことをしました。」ダビデが朝起きると、神の言葉がダビデの預言者であり先見者であるガドに臨んでいた。「行ってダビデに告げよ。主はこう言われる。『わたしはあなたに三つの事を示す。その一つを選ぶがよい。わたしはそれを実行する』と。」

ガドはダビデのもとに来て告げた。「七年間の飢饉があなたの国を襲うことか、あなたが三か月間敵に追われて逃げる事か、三日間あなたの国に疫病が起こることか。よく考えて、わたしを遣わされた方にどうお答えすべきか、決めてください。」ダビデはガドに言った。「大変な苦しみだ。主の御手にかかって倒れよう。主の慈悲は大きい。人間の手にはかかりたくない。」

主は、その朝から定められた日数の間、イスラエルに疫病をもたらされた。ダンからベエル・シェバまでの民のうち七万人が死んだ。御使いはその手をエルサレムに伸ばして、

これを滅ぼそうとしたが、主はこの災いを思い返され、民を滅ぼそうとする御使いに言われた。「もう十分だ。その手を下ろせ。」主の御使いはエブス人アラウナの麦打ち場の傍らにいた。ダビデは、御使いが民を打つのを見て、主に言った。「御覧ください、罪を犯したのはわたしです。わたしが悪かったのです。この羊の群れが何をしたのでしょうか。どうか御手がわたしとわたしの父の家に下りますように。」——サムエル記下 24:1-17

ダビデはその子ソロモンを呼び、イスラエルの神、主のために神殿を築くことを命じて、ソロモンに言った。「わたしの子よ、わたしはわたしの神、主の御名のために神殿を築く志を抱いていた。ところが主の言葉がわたしに臨んで、こう告げた。『あなたは多くの血を流し、大きな戦争を繰り返した。わたしの前で多くの血を大地に流したからには、あなたがわたしの名のために神殿を築くことは許されない。——歴代誌上 22:6-8

ダビデの家から王国を裂いて取り上げ、あなたに与えた。しかし、わが僕ダビデがわたしの戒めを守り、心を尽くしてわたしに従って歩み、わたしの目にかなう正しいことだけを行ったのは異なり、——列王記上 14:8

ダビデとシムイ

ダビデ王がバフリムにさしかかると、そこからサウル家の一族の出で、ゲラの子、名をシムイという男が呪いながら出て来て、兵士、勇士が王の左右をすべて固めているにもかかわらず、ダビデ自身とダビデ王の家臣たち皆に石を投げつけた。シムイは呪ってこう言った。「出て行け、出て行け。流血の罪を犯した男、ならず者。サウル家のすべての血を流して王位を奪ったお前に、主は報復なさる。主がお前の息子アブサロムに王位を渡されたのだ。お前は災難を受けている。お前が流血の罪を犯した男だからだ。」

ツェルヤの子アビシャイが王に言った。「なぜあの死んだ犬に主君、王を呪わせておかれるのですか。行かせてください。首を切り落としてやります。」王は言った。「ツェルヤの息子たちよ、ほうっておいてくれ。主がダビデを呪えとお命じになったのであの男は呪っているのだから、『どうしてそんなことをするのか』と誰が言えよう。」ダビデは更にアビシャイと家臣の全員に言った。「わたしの身から出た子がわたしの命をねらっている。ましてこれはベニヤミン人だ。勝手にさせておけ。主の御命令で呪っているのだ。主がわたしの苦しみを御覧になり、今日の彼の呪いに代えて幸いを返してくださるかもしれない。」

ダビデと一行は道を進んだ。シムイはダビデと平行して山腹を進み、呪っては石を投げ、塵を浴びせかけた。——サムエル記下 16:5-13

バフリム出身のあのベニヤミン人、ゲラの子シムイもユダの人々と共にダビデ王を迎えようと急いで下って来た。シムイはベニヤミン族の千人を率いていた。サウル家の従者であったツイバは、十五人の息子と二十人の召し使いを率い、ヨルダン川を渡って、王の前に出た。彼が渡し場を渡ったのは、王の目にかなうよう、渡るときに王家の人々を助けて川を渡らせるためであった。ゲラの子シムイは、王がヨルダン川を渡ろうとするとき、王の前にひれ伏し、王に言った。「どうか、主君がわたしを有罪とお考えにならず、主君、王がエルサレムを出られた日にこの僕の犯した悪をお忘れください。心にお留めになりませんように。わたしは自分の犯した罪をよく存じています。ですから、本日ヨセフの家のだれよりも早く主君、王をお迎えしようと下って参りました。」ツェルヤの子アビシャイが答えた。「シムイが死なずに済むものでしょうか。主が油を注がれた方をののしったのです。」

だがダビデは言った。「ツェルヤの息子たちよ、ほうっておいてくれ。お前たちは今日わたしに敵対するつもりか。今日、イスラエル人が死刑にされてよいものだろうか。今日わたしがイスラエルの王であることを、わたし自身が知らないと思うのか。」それからシムイに向かって、「お前を死刑にすることはない」と誓った。——サムエル記下 19:17-24

また、あなたのもとにはバフリム出身のベニヤミン人ゲラの子シムイがいる。彼はわたしがマハナインに行ったとき、激しくわたしを呪った。だが、彼はわたしを迎えにヨルダン川まで下って来てくれた。わたしは彼に、『あなたを剣で殺すことはない』と主にかけて誓った。しかし今、あなたは彼の罪を不問に付してはならない。あなたは知恵ある者であり、彼に何をなすべきか分かっているからである。あの白髪を血に染めて陰府に送り込まなければならない。」——列王記上 2:8-9

王は人を遣わし、シムイを呼んで、言った。「エルサレムに家を建てて、そこに住むがよい。そこからどこにも出て行ってはならない。もし出て行ってキドロンの川を渡れば、死なねばならないと心得よ。お前の血はお前自身の頭に降りかかるであろう。」シムイは王に、「親切なお言葉です。僕は、わが主君、王の言われるとおりにいたします」と答えた。シムイはエルサレムに住んで多くの月日を過ごした。しかし、三年目が過ぎて、シムイの二人の僕が、ガトの王マアカの子アキシユのもとに逃げ去ったときのことである。この二人の僕がガトにいるとの知らせを受けると、シムイはろばに鞍を置き、二人の僕を捜し出すために、ガトのアキシユのもとへ行った。そしてシムイは、二人の僕をガトから連れ戻して来た。シムイがエルサレムからガトに行って帰って来たとの知らせがソロモンに届くと、王は人を遣わしてシムイを呼び、こう言った。「わたしはお前に主にかけて誓わせ、警告しておいたではないか。『どこであれ出て行けば、その日に死なねばならないと

心得よ』と。そのときお前は、『親切なお言葉です。わたしは従います』と答えた。なぜ主にかけて誓ったこと、またわたしの授けた戒めを守らなかったのか。」更に王はシムイにこう言った。「お前はわたしの父ダビデに対して行ったすべての悪を知っているはずだ。お前の心はそれを知っている。主がお前の悪の報いをお前自身の頭にもたらしめてくださるように。しかし、ソロモン王は祝福され、ダビデの王座はとこしえに主の御前にあって揺らぐことのないように。」

王がヨヤダの子ベナヤに命じたので、彼は出て行ってシムイを打ち殺した。

こうして王国はソロモンの手によって揺るぎないものとなった。——列王記上 2:36-46

1.6.3 ソロモンとシバの女王

シェバの女王の来訪

シェバの女王は主の御名によるソロモンの名声を聞き、難問をもって彼を試そうとしてやって来た。彼女は極めて大勢の随員を伴い、香料、非常に多くの金、宝石をらくだに積んでエルサレムに来た。ソロモンのところに来ると、彼女はあらかじめ考えておいたすべての質問を浴びせたが、ソロモンはそのすべてに解答を与えた。王に分からない事、答えられない事は何一つなかった。

シェバの女王は、ソロモンの知恵と彼の建てた宮殿を目の当たりにし、また食卓の料理、居並ぶ彼の家臣、丁重にもてなす給仕たちとその装い、献酌官、それに王が主の神殿でささげる焼き尽くす献げ物を見て、息も止まるような思いであった。

女王は王に言った。

「わたしが国で、あなたの御事績とあなたのお知恵について聞いていたことは、本当のことでした。わたしは、ここに来て、自分の目で見るとまでは、そのことを信じてはいませんでした。しかし、わたしに知らされていたことはその半分にも及ばず、お知恵と富はうわさに聞いていたことをはるかに超えています。あなたの臣民はなんと幸せなことでしょう。いつもあなたの前に立ってあなたのお知恵に接している家臣たちはなんと幸せなことでしょう。あなたをイスラエルの王位につけることをお望みになったあなたの神、主はたたえられますように。主はとこしえにイスラエルを愛し、あなたを王とし、公正と正義を行わせられるからです。」

彼女は金百二十キカル、非常に多くの香料、宝石を王に贈ったが、このシェバの女王がソロモン王に贈ったほど多くの香料は二度と入って来なかった。

また、オフィルから金を積んで来たヒラムの船団は、オフィルから極めて大量の白檀や宝石も運んで来た。王はその白檀で主の神殿と王宮の欄干や、詠唱者のための豎琴や琴を作った。このように白檀がもたらされたことはなく、今日までだれもそのようなことを見た者はなかった。

ソロモン王は、シェバの女王に対し、豊かに富んだ王にふさわしい贈り物をしたほかに、女王が願うものは何でも望みのままに与えた。こうして女王とその一行は故国に向かって帰って行った。——列王記上 10:1-13

シェバの女王の来訪

シェバの女王はソロモンの名声を聞き、難問をもってソロモンを試そうと、極めて大勢の随員を伴い、香料、多くの金、宝石をらくだに積んでエルサレムに来た。ソロモンのところに来ると、彼女はあらかじめ考えておいたすべての質問を浴びせたが、ソロモンはそのすべてに解答を与えた。ソロモンに分からない事、答えられない事は何一つなかった。

シェバの女王は、ソロモンの知恵と彼の建てた宮殿を目の当たりにし、また食卓の料理、居並ぶ彼の家臣、丁重にもてなす給仕たちとその装い、献酌官とその装い、それに王が主の神殿でささげる焼き尽くす献げ物を見て、息も止まるような思いであった。

女王は王に言った。

「わたしが国で、あなたの御事績とあなたのお知恵について聞いていたことは、本当のことでした。わたしは、ここに来て、自分の目で見るとまでは、人の言うことを信じてはいませんでした。しかし、わたしに知らされていたことは大いなるお知恵の半分にも及ばず、あなたほうわさに聞いていたことをはるかに超えておられます。あなたの臣民はなんと幸せなことでしょう。いつもあなたの前に立ってお知恵に接している家臣たちはなんと幸せなことでしょう。あなたを王位につけられたあなたの神、主のための王とすることをお望みになったあなたの神、主はたたえられますように。あなたの神はイスラエルを愛して、とこしえに続くものとし、あなたをその上に王として立て、公正と正義を行わせられるからです。」

彼女は金百二十キカル、非常に多くの香料、宝石を王に贈ったが、このシェバの女王がソロモン王に贈ったような香料はかつてなかった。

また、オフィルから金を運んで来たヒラムの家臣たちとソロモンの家臣たちは、白檀や宝石も運んで来た。王はその白檀で神殿と王宮の床板や、詠唱者のための豎琴や琴を作った。かつてユダの地でだれもこのようなものを見たことはなかった。

ソロモン王は、シェバの女王が王に贈った物に報いる品々以上に、女王の願うものは何でも望みのままに与えた。こうして女王とその一行は故国に向かって帰って行った。——歴代誌下 9:1-12

おとめの歌

エルサレムのおとめたちよ

わたしは黒いけれども愛らしい。

ケダルの天幕、ソロモンの幕屋のように。

どうぞ、そんなに見ないでください

日焼けして黒くなったわたしを。

兄弟たちに叱られて

ぶどう畑の見張りをさせられたのです。

自分の畑は見張りもできないで。

(参考:欽定訳) I am **black**, but comely, O ye daughters of Jerusalem, as the tents of Kedar, as the curtains of Solomon. Look not upon me, because I am **black**, because the sun hath looked upon me: my mother's children were angry with me; they made me the keeper of the vineyards; but mine own vineyard have I not kept. ——雅歌 1:5-6

ソロモンの知恵

ソロモンは、エジプトの王ファラオの婿となった。彼はファラオの娘を王妃としてダビデの町に迎え入れ、宮殿、神殿、エルサレムを囲む城壁の造営が終わるのを待った。——列王記上 3:1

ソロモンの諸事業

ソロモンは、二十年を費やして二つの建物、主の神殿と王の宮殿を建て終わったとき、ティルス王ヒラムがソロモンの望みどおりにレバノン杉と糸杉の材木や金を提供してくれたので、ソロモンはヒラムにガリラヤ地方の二十の町を贈った。ヒラムはソロモンから贈られた町々を視察するためティルスから出て来た。しかし、この町々は彼の気に入らなかったため、ヒラムは、「わたしの兄弟よ、あなたがくださったこの町々は一体何ですか」と言った。そのため、この町々は「カブルの地（値打ちのない地）」と呼ばれ、今日に至っている。——列王記上 9:10-13

ソロモンの背信とその結果

ソロモン王はファラオの娘のほかにもモアブ人、アンモン人、エドム人、シドン人、ヘト人など多くの外国の女を愛した。これらの諸国の民については、主がかつてイスラエルの人々に、「あなたたちは彼らの中に入って行ってはならない。彼らをあなたたちの中に入れてはならない。彼らは必ずあなたたちの心を迷わせ、彼らの神々に向かわせる」と仰せになったが、ソロモンは彼女たちを愛してそのとりことなった。

彼には妻たち、すなわち七百人の王妃と三百人の側室がいた。この妻たちが彼の心を迷わせた。ソロモンが老境に入ったとき、彼女たちは王の心を迷わせ、他の神々に向かわせ

た。こうして彼の心は、父ダビデの心とは異なり、自分の神、主と一つではなかった。ソロモンは、シドン人の女神アシュトレト、アンモン人の憎むべき神ミルコムに従った。ソロモンは主の目に悪とされることを行い、父ダビデのように主に従い通さなかった。そのころ、ソロモンは、モアブ人の憎むべき神ケモシュのために、エルサレムの東の山に聖なる高台を築いた。アンモン人の憎むべき神モレクのためにもそうした。また、外国生まれの妻たちすべてのためにも同様に行ったので、彼女らは、自分たちの神々に香をたき、いけにえをささげた。

ソロモンの心は迷い、イスラエルの神、主から離れたので、主は彼に対してお怒りになった。主は二度も彼に現れ、他の神々に従ってはならないと戒められたが、ソロモンは主の戒めを守らなかった。そこで、主は仰せになった。「あなたがこのようにふるまい、わたしがあなたに授けた契約と掟を守らなかったゆえに、わたしはあなたから王国を裂いて取り上げ、あなたの家臣に渡す。あなたが生きている間は父ダビデのゆえにそうしないでおくが、あなたの息子の時代にはその手から王国を裂いて取り上げる。ただし、王国全部を裂いて取り上げることはしない。わが僕ダビデのゆえに、わたしが選んだ都エルサレムのゆえに、あなたの息子に一つの部族を与える。」——列王記上 11:1-13

イスラエルの王ソロモンすらも、このようにして罪を犯したのではなかったか。数ある諸国の中でも彼のような王はおらず、神に愛され、神によってすべてのイスラエルの王に立てられた、その彼でさえ、異民族の妻たちによって罪に引き込まれてしまった。わたしたちの神に逆らって異民族の女と結婚するという、この大きな罪悪を犯したということをお前たちについても聞かされなければならないのか。」——ネヘミヤ 13:26-27

1.6.4 汝の隣人を殺せ

ヤロブアムの子の病死

そのころ、ヤロブアムの息子アビヤが病気になった。ヤロブアムは妻に言った。「立って、ヤロブアムの妻だと知られないように姿を変え、シロに行ってくれ。そこには、わたしがこの民の王になると告げてくれた預言者アヒヤがいる。パン十個と菓子、それに蜜を一瓶持って彼のもとに行け。彼なら幼い子に何が起こるか教えてくれるだろう。」

ヤロブアムの妻は言われたとおりにした。彼女は立ってシロへ行き、アヒヤの家に着いた。アヒヤは老齢のために目がかすみ、見ることができなくなっていたが、主はアヒヤにこう告げておられた。「見よ、ヤロブアムの妻が来て、息子のことをあなたに尋ねる。息子は病気なのだ。あなたはこれこれしかじかと彼女に語れ。彼女は変装してやって来る。」

アヒヤは戸口に着いた彼女の足音を聞いて言った。

「ヤロブアムの妻よ、入りなさい。なぜそのように変装したのか。わたしはあなたにつらいことを告げるように命じられている。行ってヤロブアムに言いなさい。『イスラエルの神、主はこう言われる。わたしはあなたを民の中から選び出して高め、わが民イスラエルの指導者とし、ダビデの家から王国を裂いて取り上げ、あなたに与えた。しかし、わが僕ダビデがわたしの戒めを守り、心を尽くしてわたしに従って歩み、わたしの目にかなう正しいことだけを行ったのとは異なり、あなたはこれまでのだれよりも悪を行い、行って自分のために他の神々や、鑄物の像を造り、わたしを怒らせ、わたしを後ろに捨て去った。それゆえ、わたしはヤロブアムの家に災いをもたらす。ヤロブアムに属する者は、イスラエルにおいて縛られている者も、解き放たれている者も、男子であれば、すべて滅ぼし、人が汚物を徹底的にぬぐい去るように、わたしはヤロブアムの家に残る者をぬぐい去る。ヤロブアムに属する者は、町で死ねば犬に食われ、野で死ねば空の鳥の餌食になる。まことに主はこう告げられた。』あなたは立って家に帰るがよい。あなたが足を町に踏み入れるとき、あなたの子は死ぬ。イスラエルのすべての人々はこの子を弔い、葬るだろう。まことにヤロブアムに属する者で墓に入るのは、この子一人であろう。ヤロブアムの家の中でイスラエルの神、主にいくらか良いとされるのはこの子だけだからである。——列王記上 14:1-13

アサには盾と槍を携えるユダの兵三十万、小盾を携え、弓を引くベニヤミンの兵二十八万がいた。これらの者は皆、勇士であった。クシュ人ゼラが百万の軍隊と戦車三百両を率いてマレシャまで出て来たとき、アサはそれを迎えて出陣し、両軍はマレシャ近くのツェファタの谷で戦いの準備をした。アサは彼の神、主を呼び求めて言った。「主よ、あなたはある者にも無力な者にも分け隔てなく助けを与えてくださいます。わたしたちの神、主よ、わたしたちを助けてください。わたしたちはあなたを頼みとし、あなたの御名によってこの大軍に向かってやって来ました。あなたはわたしたちの神、主であって、いかなる人間もあなたに対抗することができません。」

主はアサとユダの目の前でクシュ人を撃たれ、クシュ人は逃げた。アサとその軍隊はゲラルまで追撃した。クシュ人は敗北を喫し、主とその陣営の前で打ち砕かれて倒れ、生き残った者は一人もなかった。持ち帰った戦利品は極めて多かった。彼らはまたゲラルの周辺にあるすべての町をも撃った。主への恐れが彼らを襲ったからである。彼らはそのすべての町で略奪をほしいままにした。そこには奪い取れるものが多かったからである。彼らは家畜の群れの天幕も打ち払い、多くの羊とらくだを捕獲して、エルサレムに帰った。——歴代誌下 14:7-14

こうして彼はユダとベニヤミンのすべての者およびエフライム、マナセ、シメオンから

彼らのもとに身を寄せている寄留者たちを集めた。彼の神、主が彼と共におられるのを見て、イスラエルから多くの者が彼のもとに投降した。アサの治世第十五年の第三の月に、彼らはエルサレムに集まった。その日彼らは、分捕って引いて来た雄牛七百頭、羊七千匹を屠って主にささげた。そして彼らは、心を尽くし、魂を尽くして先祖の神、主を求め、子供も大人も、男も女も、イスラエルの神、主を求めない者はだれでも死刑に処せられるという契約を結んだ。彼らは大声で叫び、ラッパと角笛を吹いて主に誓った。ユダの皆がこの誓いを喜び祝った。皆が心の底から誓い、喜んで主を求めたからである。主は彼らに御自分をお示しになり、主は、周囲の者たちから彼らを守って、安らぎを与えられた。——歴代誌下 15:9-15

次のような一通の手紙が預言者エリヤから彼のもとに届いた。「あなたの父祖ダビデの神、主はこう言われる。『あなたは父ヨシャファトの道、ユダの王アサの道を歩まず、イスラエルの諸王の道を歩み、アハブの家が淫行を行わせたように、ユダとエルサレムの住民に淫行を行わせ、またあなたの父の家の者、あなたよりも優れた兄弟たちを殺した。それゆえ、主は大きな災いをもって、あなたの民、あなたの子たち、妻たち、すべての財産を打つ。またあなた自身、悪質な内臓の病にかかり、それが日に日に重くなり、ついに内臓が外に出るようになる。』」

主は、クシュ人の近くに住んでいたペリシテ人とアラブ人のヨラムに対する敵意をおおられた。彼らはユダに攻め上って突き進み、王宮で見つかったすべての財宝と、王子や王妃たちを奪い去った。そのため、ヨラムには最年少の子ヨアハズしか残されなかった。その後、主は彼の腹を不治の病で打たれた。来る日も来る日も苦しみ、二年ばかり後には、その病のために内臓が出るようになり、彼はひどい苦しみにあえぎながら死んだ。民は、その先祖のために火をたいたようには、彼のために火をたくことをしなかった。彼は三十二歳で王となり、八年間エルサレムで王位にあったが、惜しまれることなく、世を去った。その遺体はダビデの町に葬られたが、王の墓には納められなかった。——歴代誌下 21:16-20

イスラエルの王はヨシャファトに言った。「あなたに言ったとおりではありませんか。彼はわたしに幸運ではなく、災いばかり預言するのです。」だが、ミカヤは続けた。「主の言葉をよく聞きなさい。わたしは主が御座に座し、天の万軍がその左右に立っているのを見ました。主が、『アハブを唆し、ラモト・ギレアドに攻め上らせて倒れさせるのは誰か』と言われると、あれこれと答える者がいましたが、ある霊が進み出て主の御前に立ち、『わたしが彼を唆します』と申し出ました。主が、『どのようにそうするのか』とただされると、その霊は、『わたしは行って、彼のすべての預言者たちの口を通して偽りを言う霊と

なります』と答えました。主は、『あなたは彼を唆して、必ず目的を達することができるにちがいない。行って、そのとおりにせよ』と言われました。今御覧のとおり、主がこのあなたのすべての預言者の口に偽りを言う霊を置かれました。主はあなたに災いを告げておられるのです。」

ケナアナの子ツイドキヤがミカヤに近づいて頬をなぐり、「主の霊はどのようにわたしを離れ去って、お前に語ったというのか」と言った。「あなたが身を隠そうと部屋から部屋へと移る日にそれが分かる」とミカヤは答えた。イスラエルの王は命じた。「ミカヤを捕らえ、町の長アモンと王子ヨアシュのもとに引いて行って、言え。『王はこう言われる。この男を獄につなぎ、わたしが無事に帰って来るまで、わずかな食べ物とわずかな飲み物しか与えるな。』」ミカヤは王に、「もしあなたが無事に帰って来ることができるなら、主はわたしを通して語られなかったはずですよ」と言い、「すべての民よ、あなたたちも聞いておくがよい」と言った。——列王記上 22:18-28

1.6.5 エリヤとエリシャ

その後、この家の女主人である彼女の息子が病気にかかった。病状は非常に重く、ついに息を引き取った。彼女はエリヤに言った。「神の人よ、あなたはわたしにどんなかわりがあるのでしょうか。あなたはわたしに罪を思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか。」エリヤは、「あなたの息子をよこしなさい」と言って、彼女のふところから息子を受け取り、自分のいる階上の部屋に抱いて行って寝台に寝かせた。彼は主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、あなたは、わたしが身を寄せているこのやもめにさえ災いをもたらし、その息子の命をお取りになるのですか。」彼は子供の上に三度身を重ねてから、また主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、この子の命を元に返してください。」主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。子供は生き返った。——列王記上 17:17-22

アハズヤは五十人隊の長を、その部下五十人と共にエリヤのもとに遣わした。隊長がエリヤのもとに上って行くと、エリヤは山の頂に座っていた。隊長が、「神の人よ、王が、『降りて来なさい』と命じておられます」と言うと、エリヤは五十人隊の長に答えて、「わたしが神の人であれば、天から火が降って来て、あなたと五十人の部下を焼き尽くすだろう」と言った。すると、天から火が降って来て、隊長と五十人の部下を焼き尽くした。——列王記下 1:9-10

預言者の仲間五十人もついて行った。彼らは、ヨルダンのほとりに立ち止まったエリヤ

とエリシャを前にして、遠く離れて立ち止まった。エリヤが外套を脱いで丸め、それで水を打つと、水が左右に分かれたので、彼ら二人は乾いた土の上を渡って行った。——列王記下 2:7-8

彼らが話しながら歩き続けていると、見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った。——列王記下 2:11

信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、神に喜ばれていたことが証明されていたからです。——ヘブライ人への手紙 11:5

は神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった。——創世記 5:24

エリシャはそこからベテルに上った。彼が道を上って行くと、町から小さい子供たちが出て来て彼を嘲り、「はげ頭、上って行け。はげ頭、上って行け」と言った。エリシャが振り向いてにらみつけ、主の名によって彼らを呪うと、森の中から二頭の熊が現れ、子供たちのうちの四十二人を引き裂いた。——列王記下 2:23-24

神の人エリシャの従者ゲハジは、「わたしの主人は、あのアラム人ナアマンが持って来たものを何も受け取らずに帰してしまった。主は生きておられる。彼を追いかけて何かもらってこよう」と言って、ナアマンの後を追った。ナアマンは彼が後を追って来るのを見て、戦車から飛び降り、彼を迎え、「どうかなさいましたか」と尋ねた。彼は答えた。「何でもありません。わたしの主人がわたしを遣わしてこう言いました。『今し方預言者の仲間の若い者が二人エフライムの山地から着いた。彼らに銀一キカルと着替えの服二着を与えてほしい。』」ナアマンは、「どうぞ、二キカル取ってください」と言ってしきりに勧め、二つの袋に銀二キカルを詰め、着替えの服二着を添えて、自分の従者二人に渡した。彼らはそれを持ち、ゲハジの先に立って進んだ。オフエルに着いたとき、ゲハジは彼らからそれらを受け取って家にしまい込み、彼らを帰した。彼らは去って行った。彼が主人のところに来て立つと、エリシャは、「ゲハジ、お前はどこに行っていたのか」と言った。ゲハジは、「僕はどこにも行っていません」と答えたが、エリシャは言った。「あの人が戦車から降りて引き返し、お前を迎えたとき、わたしの心がそこに行っていなかったとでも言うのか。今は銀を受け、衣服、オリーブの木やぶどう畑、羊や牛、男女の奴隷を受け取る時

であろうか。ナアマンの重い皮膚病がお前とお前の子孫にいつまでもまといつくことになるのに。」ゲハジは重い皮膚病で雪のようになり、エリシャの前から立ち去った。——列王記下 5:20-27

エリシャは言った。「主の言葉を聞きなさい。主はこう言われる。『明日の今ごろ、サムリアの城門で上等の小麦粉一セアが一シェケル、大麦二セアが一シェケルで売られる。』」王の介添えをしていた侍従は神の人に答えた。「主が天に窓を造られたとしても、そんなことはなからう。」エリシャは言った。「あなたは自分の目でそれを見る。だが、それを食べることはない。」——列王記下 7:1-2

そこで民は出て行ってアラムの陣営で略奪をほしいままにし、主の言葉どおり上等の小麦粉一セアが一シェケル、大麦二セアが一シェケルで売られるようになった。王は自分の介添えをしていた例の侍従を城門の管理に当たさせたが、彼は城門で民に踏み倒されて死んだ。王が神の人のところに下って行ったときに、神の人が告げたとおりであった。神の人が王に、「明日の今ごろ、サムリアの城門で大麦二セアが一シェケル、上等の小麦粉一セアが一シェケルで売られるようになる」と言うと、その侍従は神の人に、「主が天に窓を造られたとしても、そんなことはなからう」と答えたので、エリシャは、「あなたは自分の目でそれを見る。だが、それを食べることはない」と言った。それがそのとおりに実現し、彼は門で民に踏み倒されて死んだ。——列王記下 7:16-20

エリシャは死んで葬られた。その後、モアブの部隊が毎年この地に侵入して来た。人々がある人を葬ろうとしていたとき、その部隊を見たので、彼をエリシャの墓に投げ込んで立ち去った。その人はエリシャの骨に触れると生き返り、自分の足で立ち上がった。——列王記下 13:20-21

これは主の目には小さいことである。主はモアブをあなたたちの手にお渡しになる。あなたたちはすべての砦の町、すべてのえり抜きの町を打ち破り、すべての有用な木を倒し、すべての泉をふさぎ、すべての優れた耕地を石だらけの荒地とする。」——列王記下 3:18-19

モアブの王は戦いが自分の力の及ばないものになってきたのを見て、剣を携えた兵七百人を引き連れ、エドムの王に向かって突進しようとしたが、果たせなかった。そこで彼

は、自分に代わって王となるはずの長男を連れて来て、城壁の上で焼き尽くすいけにえとしてささげた。イスラエルに対して激しい怒りが起こり、イスラエルはそこを引き揚げて自分の国に帰った。——列王記下 3:26-27

ヨラムは、「馬をつなげ」と命じた。戦車に馬がつながれると、イスラエルの王ヨラムとユダの王アハズヤは、それぞれ自分の戦車に乗って出て行った。彼らはイエフを迎えようとして出て行き、イズレエル人ナボトの所有地で彼に出会った。ヨラムはイエフを見ると、「イエフ、道中無事だったか」と尋ねたが、イエフは答えた。「あなたの母イゼベルの姦淫とまじないが盛んに行われているのに、何が無事か。」ヨラムは手綱を返して逃げ出し、アハズヤに、「アハズヤよ、裏切りだ」と叫んだ。イエフは手に弓を取り、ヨラムの腕と腕の間を射た。矢は心臓を射貫き、彼は戦車の中に崩れ落ちた。——列王記下 9:21-24

ユダの王アハズヤはこれを見て、ベト・ガンの道を通って逃げた。イエフはその後を追いつ、「彼も撃ってしまえ」と命じた。アハズヤは、イブレアムの近くのグルの坂に行く戦車の中で傷を負い、メギドまで逃げて、そこで死んだ。——列王記下 9:27

アハブの子供が七十人サマリアにいた。イエフは手紙を書いてサマリアに送り、町の指導者、長老たちとアハブの子供の養育者たちにこう伝えた。「今この手紙が届いたら、あなたたちのもとにはあなたたちの主君の子供、それに戦車、軍馬、および砦の町と武器があるのだから、その主君の子供の中から最も優れた正しい人物を選んで、父の王座につけ、あなたたちの主君の家のために戦え。」彼らは大いに恐れ、「二人の王でさえ彼に立ち向かえなかったのに、どうして我々が立ち向かうことができよう」と言った。そこで宮廷長、町の長、長老、養育者たちはイエフに人を送ってこう言わせた。「わたしたちはあなたの僕です。あなたがお命じになることは何でもいたします。わたしたちにはだれをも王として立てるつもりがありません。あなたの目に良いと映ることをなさってください。」イエフは彼らにもう一通手紙を書いて、こう言った。「もしあなたたちがわたしの味方をし、わたしの命令に従うなら、あなたたちの主君の子供たちの首を取り、明日の今ごろ、イズレエルにいるわたしのもとに持って来なさい。」七十人の王子たちは、それぞれその養育に当たっていた町の有力者たちのところにいたが、この手紙が届くと、彼らは王子たちを捕らえ、七十人を残らず殺し、その首を籠に入れ、イズレエルにいるイエフのもとに送った。使者が、「王子の首が届けられました」と知らせに来ると、イエフは、「その首は二つの山に積んで、明朝まで町の入り口にさらしておけ」と命じた。翌朝、彼はそこに出て行って立ち、すべての民に言った。「あなたたちに罪はない。わたしは主君に対して謀

反を起こし、彼を殺した。だが、この者たちすべてを打ち殺したのは誰か。ただ、このことだけは知っておくがいい。主がアハブの家に対してお告げになった主の言葉は一つも地に落ちることがない。主はその僕エリヤによってお告げになったことを実現された。」こうしてイエフは、イズレエルに残っていたアハブの家の者およびアハブについていた有力者、親友、祭司を皆打ち殺し、一人も残さなかった。

イエフは立ってサマリアに向かったが、途中ベト・エケド・ロイムで、ユダの王アハズヤの身内の者たちに出会った。「あなたたちは誰か」と尋ねると、彼らは、「わたしたちはアハズヤの身内の者です。王子たち、王妃の子供たちの安否を問いにいくところです」と答えた。彼は、「この者たちを皆、生け捕りにせよ」と命じた。部下は彼らを生け捕りにして、の水溜めのところで、彼ら四十二人を殺し、一人も残さなかった。

イエフがそこを出て進んで行くと、彼を迎えに出たレカブの子ヨナダブに会った。イエフは彼に挨拶して言った。「わたしの心があなたの心に対して誠実であるように、あなたの心も誠実ですか。」ヨナダブは答えた。「そのとおりです。」イエフが、「そのとおりなら、手を出してください」と言ったので、ヨナダブが手を差し出すと、イエフは彼を引き上げて自分の戦車に乗せ、「一緒に来て、主に対するわたしの情熱を見てください」と言った。二人は彼の戦車と一緒に乗り、サマリアに行った。彼は主がエリヤにお告げになった言葉のとおり、サマリアでアハブの家の者をことごとく打ち殺し、一族を全滅させた。

イエフはすべての民を集めて言った。「アハブは少ししかバアルに仕えなかったが、このイエフは大いにバアルに仕えるつもりだ。今バアルのすべての預言者、バアルに仕えるすべての者、すべての祭司をわたしのもとに呼べ。一人も欠席させてはならない。わたしがバアルに大いなるいけにえをささげるからだ。欠席する者はだれも生かしてはおかない。」イエフはバアルに仕える者を絶やすために、策略を用いたのである。イエフが、「バアルのために聖なる集まりを催せ」と命じたので、彼らはそれを布告した。イエフがイスラエル中に使者を遣わすと、バアルに仕える者が皆集まって来た。来ない者は一人もなかった。彼らはバアルの神殿に入り、神殿は隅々まで満ちた。イエフは衣装係に、「バアルに仕えるすべての者に祭服を出してやれ」と言った。彼らは祭服を出した。そこでイエフはレカブ人ヨナダブと共にバアルの神殿に入り、バアルに仕える者たちに言った。「主に仕える者があなたたちと一緒にいることがないよう、ただバアルに仕える者だけがいるように、よく調べて見よ。」二人はいけにえと焼き尽くす献げ物をささげるために入ったが、イエフは外に八十人の人を置き、次のように言った。「わたしがお前たちの手に渡す者を逃がした者は、自分の命をその逃がした者の命に代えなければならない。」焼き尽くす献げ物をささげ終わったとき、イエフは近衛兵と侍従たちに言った。「入って、彼らを討て。一人も外に出すな。」近衛兵と侍従たちは彼らを剣にかけて殺し、そこに投げ捨て、更にバアルの神殿の奥まで踏み込み、バアルの神殿にある石柱を運び出して焼き捨てた。バアルの石柱を破壊してから、バアルの神殿を破壊し、これを便所にした。それは今日に

至るまでそうになっている。

このようにして、イエフはイスラエルからバアルを滅ぼし去った。ただ、イスラエルに罪を犯させたネバトの子ヤロブアムの罪からは離れず、ベテルとダンにある金の子牛を退けなかった。主はイエフに言われた。「あなたはわたしの目にかなう正しいことをよく成し遂げ、わたしの心にあった事をことごとくアハブの家に対して行った。それゆえあなたの子孫は四代にわたってイスラエルの王座につく。」——列王記下 10:1-30

1.6.6 イゼベル (ジュゼベル)

彼は窓を見上げ、「わたしの味方になる者は誰だ、誰だ」と言うと、二、三人の宦官が見下ろしたので、「その女を突き落とせ」と言った。彼らがイゼベルを突き落としたので、その血は壁や馬に飛び散り、馬が彼女を踏みつけた。彼は家に入って食事をしてから言った。「あの呪われた女の面倒を見てやれ。彼女も王女だったのだから、葬ってやれ。」だが、人々が葬ろうとして行くと、頭蓋骨と両足、両手首しかなかった。彼らが帰って、そのことを知らせると、イエフは言った。「これは主の言葉のとおりだ。主はその僕ティシュベ人エリヤによってこう言われた。『イゼベルの肉は、イズレエルの所有地で犬に食われ、イゼベルの遺体はイズレエルの所有地で畑の面にまかれた肥やしのようになり、これがイゼベルだとはだれも言えなくなる。』」——列王記下 9:32-37

(編者註:) イゼベルが道徳的に乱れた女性かどうか、列王記上の記述を追跡してみよう……

彼はネバトの子ヤロブアムの罪を繰り返すだけでは満足せず、シドン人の王エトバアルの娘イゼベルを妻に迎え、進んでバアルに仕え、これにひれ伏した。——列王記上 16:31

アハブは宮廷長オバドヤを呼び寄せた——オバドヤは心から主を畏れ敬う人で、イゼベルが主の預言者を切り殺したとき、百人の預言者を救い出し、五十人ずつ洞穴にかくまい、パンと水をもって養った——。——列王記上 18:3-4

イゼベルが主の預言者を殺したときにわたしがしたことを、あなたは知らされてはいないのですか。わたしは主の預言者百人を五十人ずつ洞穴にかくまい、パンと水をもって養いました。今あなたは、『エリヤがここにいる、とあなたの主君に言いに行きなさい』と言われる。わたしは殺されてしまいます。」エリヤはこう答えた。「わたしの仕えている万軍の主は生きておられます。今日わたしはアハブの前に姿を現します。」

オバドヤはアハブに会って知らせたので、アハブはエリヤに会いに来た。アハブはエリヤを見ると、「お前か、イスラエルを煩わす者よ」と言った。エリヤは言った。「わたしではなく、主の戒めを捨て、バアルに従っているあなたとあなたの父の家こそ、イスラエルを煩わしている。今イスラエルのすべての人々を、イゼベルの食卓に着く四百五十人のバアルの預言者、四百人のアシェラの預言者と共に、カルメル山に集め、わたしの前に出そうように使いを送っていただきたい。」——列王記上 18:13-19

アハブは、エリヤの行ったすべての事、預言者を剣で皆殺しにした次第をすべてイゼベルに告げた。イゼベルは、エリヤに使者を送ってこう言させた。「わたしが明日のこの時刻までに、あなたの命をあの前言者たちの一人の命のようにしていなければ、神々が幾重にもわたしを罰してくださるように。」——列王記上 19:1-2

妻のイゼベルが来て、「どうしてそんなに御機嫌が悪く、食事もなさらないのですか」と尋ねると、彼は妻に語った。「イズレエルの人ナボトに、彼のぶどう畑をわたしに銀で買い取らせるか、あるいは望むなら代わりの畑と取り替えさせるか、いずれにしても譲ってくれと申し入れたが、畑は譲れないと言うのだ。」妻のイゼベルは王に言った。「今イスラエルを支配しているのはあなたです。起きて食事をし、元気を出してください。わたしがイズレエルの人ナボトのぶどう畑を手に入れてあげましょう。」

イゼベルはアハブの名で手紙を書き、アハブの印を押して封をし、その手紙をナボトのいる町に住む長老と貴族に送った。その手紙にはこう書かれていた。「断食を布告し、ナボトを民の最前列に座らせよ。ならず者を二人彼に向かって座らせ、ナボトが神と王とを呪った、と証言させよ。こうしてナボトを引き出し、石で打ち殺せ。」その町の人々、その町に住む長老と貴族たちはイゼベルが命じたとおりに、すなわち彼女が手紙で彼らに書き送ったとおりに行った。彼らは断食を布告し、ナボトを民の最前列に座らせた。ならず者も二人来てナボトに向かって座った。ならず者たちは民の前でナボトに対して証言し、「ナボトは神と王とを呪った」と言った。人々は彼を町の外に引き出し、石で打ち殺した。彼らはイゼベルに使いを送って、ナボトが石で打ち殺されたと伝えた。イゼベルはナボトが石で打ち殺されたと聞くと、アハブに言った。「イズレエルの人ナボトが、銀と引き換えにあなたに譲るのを拒んだあのぶどう畑を、直ちに自分のものにしてください。ナボトはもう生きていません。死んだのです。」アハブはナボトが死んだと聞くと、直ちにイズレエルの人ナボトのぶどう畑を自分のものにしようと下って行った。

そのとき、主の言葉がティシュベ人エリヤに臨んだ。「直ちに下って行き、サマリアに住むイスラエルの王アハブに会え。彼はナボトのぶどう畑を自分のものにしようと下って来て、そこにいる。彼に告げよ。『主はこう言われる。あなたは人を殺したうえに、その

人の所有物を自分のものにしようとするのか。』また彼に告げよ。『主はこう言われる。犬の群れがナボトの血をなめたその場所で、あなたの血を犬の群れがなめることになる。』アハブがエリヤに、「わたしの敵よ、わたしを見つけたのか」と言うと、エリヤは答えた。「そうだ。あなたは自分を売り渡して主の目に悪とされることに身をゆだねたからだ。『見よ、わたしはあなたに災いをくだし、あなたの子孫を除き去る。イスラエルにおいてアハブに属する男子を、つながれている者も解き放たれている者もすべて絶ち滅ぼす。わたしはあなたが招いた怒りのため、またイスラエルの人々に罪を犯させたため、あなたの家をネバトの子ヤロブアムの家と同じように、またアヒヤの子バシャの家と同じようにする。』主はイゼベルにもこう告げられる。『イゼベルはイズレエルの壘壁の中で犬の群れの餌食になる。アハブに属する者は、町で死ねば犬に食われ、野で死ねば空の鳥の餌食になる。』」

アハブのように、主の目に悪とされることに身をゆだねた者はいなかった。彼は、その妻イゼベルに唆されたのである。彼は、主がイスラエルの人々の前から追い払われたアモリ人と全く同じように偶像に仕え、甚だしく忌まわしいことを行った。

アハブはこれらの言葉を聞くと、衣を裂き、粗布を身にまとって断食した。彼は粗布の上に横たわり、打ちひしがれて歩いた。そこで主の言葉がティシュベ人エリヤに臨んだ。「アハブがわたしの前にへりくだったのを見たか。彼がわたしの前にへりくだったので、わたしは彼が活着している間は災いをくださない。その子の時代になってから、彼の家に災いをくだす。」——列王記上 21:5-29

(編者註:) ……と、ここまで見てきたけれど、要するにイゼベルは、夫のイスラエルの王アハブに神に反するようなことをさせた、ということね。でもイゼベルの話は列王記下になってもなお続く。

イエフは立って家に入って来た。若者は彼の頭に油を注いで言った。「イスラエルの神、主はこう言われる。『わたしはあなたに油を注ぎ、あなたを主の民イスラエルの王とする。あなたはあなたの主君アハブの家を撃たねばならない。こうしてわたしはイゼベルの手にかかったわたしの僕たち、預言者たちの血、すべての主の僕たちの血の復讐をする。アハブの家は全滅する。わたしは、イスラエルにおいて縛られている者も解き放たれている者も、アハブに属する男子をすべて絶ち滅ぼし、アハブの家をネバトの子ヤロブアムの家のようにし、アヒヤの子バシャの家のようにする。犬がイズレエルの所有地でイゼベルを食い、彼女を葬る者はいない。』」彼は戸を開けて逃げ去った。——列王記下 9:6-10

ヨラムはイエフを見ると、「イエフ、道中無事だったか」と尋ねたが、イエフは答えた。

「あなたの母イゼベルの姦淫とまじないが盛んに行われているのに、何が無事か。」ヨラムは手綱を返して逃げ出し、アハズヤに、「アハズヤよ、裏切りだ」と叫んだ。イエフは手に弓を取り、ヨラムの腕と腕の間を射た。矢は心臓を射貫き、彼は戦車の中に崩れ落ちた。イエフは侍従ビドカルに言った。「彼をイズレエル人ナボトの所有地の畑に運んで投げ捨てよ。わたしがお前と共に馬に乗って彼の父アハブに従って行ったとき、主がこの託宣を授けられたことを思い起こせ。『わたしは昨日ナボトの血とその子らの血を確かに見た』と主は言われた。また、『わたしはこの所有地であなたに報復する』と主は言われた。今、主の言葉どおり、彼をその所有地に運んで投げ捨てよ。」——列王記下 9:22-26

(編者註:) ……どうだい？ 僕は「親の因果が子に報う」という賽の河原の話の思い浮かべてしまうのだけれど、まあ旧約聖書にはこういう話はいくつもあったりする。

祭司ヨヤダとアタルヤ

アハズヤの母アタルヤは息子が死んだのを見て、直ちに王族をすべて滅ぼそうとした。しかし、ヨラム王の娘で、アハズヤの姉妹であるヨシエバが、アハズヤの子ヨアシユを抱き、殺されようとしている王子たちの中からひそかに連れ出し、乳母と共に寝具の部屋に入れておいた。人々はヨアシユをアタルヤからかくまい、彼は殺されずに済んだ。こうして、アタルヤが国を支配していた六年の間、ヨアシユは乳母と共に主の神殿に隠れていた。

七年目に、ヨヤダは人を遣わして、カリ人と近衛兵からなる百人隊の長たちを神殿にいる自分のところに連れて来させ、彼らと契約を結んだ。彼は主の神殿の中で彼らに誓いを立てさせ、王子を見せて、こう命じた。「あなたたちがなすべきことはこれである。あなたたちのうち、安息日が出番に当たる者の三分の一は王宮の警備に就き、ほかの三分の一はスルの門に詰め、残る三分の一は近衛兵の背後の門に詰め、こうしてあなたたちは交代で王宮の警備に当たれ。安息日が非番に当たるほかの二組は主の神殿で王のそばにいて警備に当たれ。おのおの武器を手にして、王の周囲を固めなければならない。隊列を侵す者は殺されなければならない。王が出るときも、入るときも、王と行動を共にせよ。」

百人隊の長たちは、すべて祭司ヨヤダが命じたとおりに行い、おのおの安息日が出番に当たる部下と非番に当たる部下を引き連れ、祭司ヨヤダのもとに来た。祭司は主の神殿に納められているダビデ王の槍と小盾を百人隊の長たちに渡した。近衛兵たちはおのおの武器を手にして、祭壇と神殿を中心に神殿の南の端から北の端まで王の周囲を固めた。そこでヨヤダが王子を連れて現れ、彼に冠をかぶらせ、掟の書を渡した。人々はこの王子を王とし、油を注ぎ、拍手して、「王万歳」と叫んだ。

アタルヤは近衛兵と民の声を聞き、主の神殿の民のところに行った。彼女が見ると、慣例どおり柱の傍らに王が立ち、その傍らには將軍たちと吹奏隊が立ち並び、また国の民は

皆喜び祝い、ラッパを吹き鳴らしていた。アタルヤは衣を裂いて、「謀反、謀反」と叫んだ。祭司ヨヤダは、軍を指揮する百人隊長の長たちに、「彼女を隊列の間から外に出せ。彼女について行こうとする者は剣にかけて殺せ」と命じた。祭司が、「彼女を主の神殿で殺してはならない」と言ったからである。彼らはアタルヤを捕らえ、馬の出入り口を通して王宮に連れて行った。彼女はそこで殺された。——列王記下 11:1-16

祭司ヨヤダとアタルヤ

アハズヤの母アタルヤは息子の死んだのを見て、直ちにユダの家の王族をすべて滅ぼそうとした。しかし、王女ヨシェバがアハズヤの子ヨアシュを抱き、殺されようとしている王子たちの中からひそかに連れ出し、乳母と共に寝具の部屋に入れておいた。祭司ヨヤダの妻であり、アハズヤの妹である、ヨラム王の娘ヨシェバは、ヨアシュをアタルヤからかくまい、彼は殺されずに済んだ。こうして、アタルヤが国を支配していた六年の間、ヨアシュは彼らと共に神殿の中に隠れていた。

七年目に、ヨヤダは決意を固め、百人隊長の長たちエロハムの子アザルヤ、ヨハナンの子イシュマエル、オベドの子アザルヤ、アダヤの子マアセヤ、ジクリの子エリシャファトを連れて来て、彼らと契約を結んだ。彼らはユダを行き巡り、ユダのすべての町からレビ人とイスラエルの氏族の長を集めてエルサレムに帰って来た。全会衆が神殿の中で王と契約を結ぶと、ヨヤダは彼らに言った。「見よ、王の子を。主がダビデの子孫について言われた言葉に従って、彼が王となる。あなたたちがなすべきことはこれである。あなたたちのうち、祭司もレビ人も、安息日が出番に当たる者の三分の一は門衛となり、三分の一は王宮の中に、三分の一は礎の門にいないといけない。民は皆、主の神殿の庭にとどまれ。祭司と奉仕に当たるレビ人以外は、だれも神殿に入ってはならない。彼らは聖別されているので入ることができる。民は皆、主の戒めを守らなければならない。レビ人はおのおの武器を携え、王の周囲を固めなければならない。神殿に入る者は殺さなければならない。王が入るときも、出るときも、王と行動を共にせよ。」

レビ人とすべてのユダの人々は、すべて祭司ヨヤダが命じたとおりに行い、おのおの安息日が出番に当たる部下と非番に当たる部下を連れて来た。祭司ヨヤダが組分けを解かなかったからである。祭司ヨヤダは神殿に納められているダビデ王の槍と大盾と小盾を百人隊長の長たちに渡し、すべての民にはおのおの手に投げ槍を持たせ、祭壇と神殿を中心に神殿の南の端から北の端まで王の周囲を固めさせた。そこで彼らは王子を連れて現れ、彼に冠をかぶらせ、掟の書を渡して、彼を王とした。ヨヤダとその息子たちは彼に油を注いで、「王万歳」と叫んだ。

アタルヤは民が走りながら王をたたえる声を聞き、主の神殿の民のところに行った。彼女が見ると、入り口の柱の傍らに王が立ち、そのそばに將軍たちと吹奏隊が立ち並び、ま

た国の民は皆、喜び祝ってラッパを吹き鳴らし、詠唱者たちは楽器を奏で、賛美の先導を行っていた。アタルヤは衣を裂いて、「謀反、謀反」と叫んだ。祭司ヨヤダは、軍を指揮する百人隊の長たちを呼び出して、「彼女を隊列の間から外に出せ。彼女について行こうとする者は剣にかけて殺せ」と命じた。祭司が、「彼女を主の神殿で殺してはならない」と言ったからである。彼らはアタルヤを捕らえて、王宮の馬の門の入り口まで連れて行き、そこで彼女を殺した。——歴代誌下 22:10-23:15

(編者註:) ケンが書いている「いちばんつまらん」というのは、例えばこういうところ。

アダムからアブラハムまでの系図

アダム、セト、エノシュ、ケナン、マハラルエル、イエレド、エノク、メトシェラ、レメク、ノア、セム、ハム、ヤフェト。ヤフェトの子らは、ゴメル、マゴグ、メディア、ヤワン、トバル、メシェク、ティラス。ゴメルの子らは、アシュケナズ、ディファト、トガルマ。ヤワンの子らは、エリシャ、タルシシュ、キティム、ロダニム。ハムの子らは、クシュ、エジプト、プト、カナン。クシュの子らは、セバ、ハビラ、サブタ、ラマ、サブテカ。ラマの子らは、シェバ、デダン。

クシュにはまた、ニムロドが生まれた。ニムロドは地上で最初の勇士となった。

エジプトには、リディア人、アナミム人、レハビム人、ナフトヒム人、上エジプト人、カスルヒム人、カフトル人が生まれた。このカフトル人からペリシテ人が出た。

カナンには長男シドンとヘト、また、エブス人、アモリ人、ギルガシ人、ヒビ人、アルキ人、シニ人、アルワド人、ツェマリ人、ハマト人が生まれた。

セムの子らは、エラム、アシュル、アルパクシャド、ルド、アラム、ウツ、フル、ゲテル、メシェク。

アルパクシャドにはシェラが生まれ、シェラにはエベルが生まれた。エベルには二人の息子が生まれた。一人の名は、その時代に土地が分けられた(パラグ)のでペレグといい、その兄弟はヨクタンといった。ヨクタンには、アルモダド、シェレフ、ハツアルマベト、イエラ、ハドラム、ウザル、ディクラ、エバル、アビマエル、シェバ、オフィル、ハビラ、ヨバブが生まれた。これらは皆、ヨクタンの息子たちである。

セム、アルパクシャド、シェラ、エベル、ペレグ、レウ、セルグ、ナホル、テラ、アブラム、これがアブラハムである。——歴代誌上 1:1-27

(編者註:) うん、まあ確かにつまらないけれど、預言者や王の権威を主張するときその血統を以て主張する、というのは、世の東西、古今を問わずに行われるものなのよ。だか

らこういうところは、必要があれば読めばよろしい。ケンはずっとチェックしていて、面白いことがあったらちゃんとツッコんでいる辺りが流石だ。

アマツヤはユダの人々を召集し、ユダ族とベニヤミン族のすべての人々を家系に従って千人隊の長および百人隊の長のもとに配属した。二十歳以上の者の数を調べたところ、槍と盾を携える戦闘員として三十万の若者がいることが分かった。また彼は銀百キカルを費やして、イスラエルから勇士十万を雇った。ところが、ある神の人が来て言った。「王よ、イスラエルの軍隊を同行させてはなりません。主はイスラエルの者、すなわちどのエフライム人とも共においでにならないからです。もし行くなら、単独で行って勇敢に戦いなさい。そうでなければ、神は敵の前であなたを挫かれます。神には力があって、助けることも、挫くこともおできになります。」アマツヤは神の人に言った。「イスラエルの部隊に払った百キカルはどうしたらよいのか。」神の人は答えた。「主はそれより多くのものを与えることがおできになります。」そこでアマツヤはエフライムから来た部隊を、彼らの地に帰らせるために分離した。そのため、彼らはユダに対して激しく憤り、怒りに燃えながら彼らの地に帰って行った。

しかしアマツヤは、勇気を奮い起こし、自分の軍隊を率いて塩の谷まで進み、一万のセイル兵を打ち倒した。またユダの兵はほかに一万の敵兵を生け捕りにし、岩山の頂に引いて行き、彼らをその岩山の頂から突き落とすので、皆碎かれて死んだ。他方、アマツヤが戦いに同行させずに送り返した部隊の兵士らは、サマリアからベト・ホロンまでのユダの町々を荒らしまわり、三千人の住民を打ち殺し、略奪をほしいままにした。——歴代誌下 25:5-13

ところが、彼は勢力を増すとともに思い上がって墮落し、自分の神、主に背いた。彼は主の神殿に入り、香の祭壇の上で香をたこうとした。祭司アザルヤは主の勇敢な祭司八十人と共に後から入り、ウジヤ王の前に立ちはだかつて言った。「ウジヤよ、あなたは主に香をたくことができない。香をたくのは聖別されたアロンの子孫、祭司である。この聖所から出て行きなさい。あなたは主に背いたのだ。主なる神からそのような栄誉を受ける資格はあなたにはない。」香をたこうとして香炉を手にしていたウジヤは怒り始めたが、祭司たちに怒りをぶつけている間に重い皮膚病がその額に現れた。それは主の神殿の中にいた祭司たちの目の前、香の祭壇の前の出来事だった。祭司長アザルヤと祭司たちは皆彼の方を向いて、その額に重い皮膚病ができているのを認め、直ちに去らせた。彼自身も急いで出て行った。主が彼を打たれたからである。ウジヤ王は死ぬ日までその重い皮膚病に悩まされ、重い皮膚病のために隔離された家に住んだ。主の神殿に近づくことを禁じられたからである。その子ヨタムが王宮を取りしきり、国の民を治めた。

ウジヤの他の事績は、初期のことも後期のことも、預言者、アモツの子イザヤが書き残している。ウジヤは先祖と共に眠りにつき、その遺体は、重い皮膚病に冒されていたということで、王の墓の近くの野に先祖と共に葬られた。その子ヨタムがウジヤに代わって王となった。——歴代誌下 26:16-23

(編者註:) 上引用部は訳本では「歴代誌下 26:16」となっているけれど、原著には「歴代誌下 26:16-21」とある。

その夜、主の御使いが現れ、アッシリアの陣営で十八万五千人を撃った。朝早く起きてみると、彼らは皆死体となっていた。——列王記下 19:35

ユダの王マナセ

マナセは十二歳で王となり、五十五年間エルサレムで王位にあった。その母は名をヘフツィ・バと言った。彼は主がイスラエルの人々の前から追い払われた諸国の民の忌むべき慣習に倣い、主の目に悪とされることを行なった。彼は父ヒゼキヤが廃した聖なる高台を再建し、イスラエルの王アハブが行ったようにバアルの祭壇を築き、アシェラ像を造った。更に彼は天の万象の前にひれ伏し、これに仕えた。主はかつて、「エルサレムにわたしの名を置く」と言われたが、その主の神殿の中に彼は異教の祭壇を築いた。彼はまた、主の神殿の二つの庭に天の万象のための祭壇を築いた。彼は自分の子に火の中を通らせ、占いやまじないを行い、口寄せや霊媒を用いるなど、主の目に悪とされることを数々行って主の怒りを招いた。彼はまたアシェラの彫像を造り、神殿に置いた。主はその神殿について、かつてダビデとその子ソロモンにこう仰せになった。「わたしはこの神殿に、イスラエルの全部族の中から選んだエルサレムに、とこしえにわたしの名を置く。もし彼らがわたしの命じるすべてのこと、すなわちわが僕モーセが彼らに授けたすべての律法を行うよう努めるなら、わたしはイスラエルをその先祖に与えた土地から二度と迷い出させない。」しかし彼らはこれに聞き従わず、マナセに惑わされて、主がイスラエルの人々の前で滅ぼされた諸国の民よりも更に悪い事を行なった。

主はその僕である預言者たちを通してこう告げられた。「ユダの王マナセはこれらの忌むべき事を行い、かつてアモリ人の行ったすべての事より、更に悪い事を行い、その偶像によってユダにまで罪を犯させた。それゆえ、イスラエルの神、主はこう言われる。見よ、わたしはエルサレムとユダに災いをもたらす。これを聞く者は皆、両方の耳が鳴る。わたしはサマリアに使った測り縄とアハブの家に使った下げ振りをエルサレムに用いる。鉢をぬぐい、それをぬぐって伏せるように、わたしはエルサレムをぬぐい去る。わたしは

わが嗣業の残りの者を見捨て、敵の手に渡す。彼らはそのすべての敵の餌食となり、略奪の的となる。彼らは先祖がエジプトを出た日から今日に至るまでわたしの意に背くことを行い、わたしを怒らせてきたからである。」

マナセは主の目に悪とされることをユダに行わせて、罪を犯させた。彼はその罪を犯したばかりでなく、罪のない者の血を非常に多く流し、その血でエルサレムを端から端まで満たした。

マナセの他の事績、彼の行ったすべての事、彼の犯した罪は、『ユダの王の歴代誌』に記されている。マナセは先祖と共に眠りにつき、自分の宮殿の庭園、すなわちウザの庭園に葬られた。その子アモンがマナセに代わって王となった。——列王記下 21:1-18

(編者註:) 参考までに。歴代誌下のこの記述に相当する部分は以下の通り。

ユダの王マナセ

マナセは十二歳で王となり、五十五年間エルサレムで王位にあった。彼は主がイスラエル人の前から追い払われた諸国の民の忌むべき慣習に倣い、主の目に悪とされることを行った。彼は父ヒゼキヤが取り壊した聖なる高台を再建し、バアルの祭壇を築き、アシェラ像を造った。更に彼は天の万象の前にひれ伏し、これに仕えた。主はかつて、「エルサレムにわたしの名をとこしえにとどめる」と言われたが、その主の神殿の中に彼は異教の祭壇を築いた。彼はまた、主の神殿の二つの庭に天の万象のための祭壇を築いた。彼はベン・ヒノムの谷で自分の子らに火の中を通らせ、占いやまじないを行い、魔術や口寄せ、霊媒を用いるなど、主の目に悪とされることを数々行って主の怒りを招いた。彼はまた像、彫像を造り、神殿に置いた。神はその神殿について、かつてダビデとその子ソロモンにこう仰せになった。「わたしはこの神殿に、イスラエルの全部族の中から選んだエルサレムに、とこしえにわたしの名を置く。もし彼らがわたしの命じるすべてのこと、モーセによるすべての律法、掟、法を行うよう努めるなら、わたしはあなたたちの先祖のものと定めたこの土地から、二度とイスラエルを移さない。」

マナセはユダとエルサレムの住民を惑わし、主がイスラエルの人々の前で滅ぼされた諸国の民よりも更に悪い事を行わせた。主はマナセとその民に語られたが、彼らはそれに耳を貸さなかった。——歴代誌下 33:1-10

1.7 約束の地:後日談

王のもとからこちらに上って来たユダの者らがエルサレムに着き、反逆と悪意の都を再建していることをご存じでしょうか。彼らは既に城壁の工事を始め、基礎を修復しました。

(参考:欽定訳) Be it known unto the king, that the **Jews** which came up from thee to us are come unto Jerusalem, building the rebellious and the bad city, and have set up the walls thereof, and joined the foundations. —エズラ記 4:12

またそのころ、ユダの人々がアシュドド人やアンモン人やモアブ人の女と結婚していることが、わたしに分かった。その子供たちの半数は、アシュドドの言葉あるいはそれぞれの民族の言葉を話し、ユダの言葉を知らなかった。わたしは彼らを責め、呪い、幾人かを打ち、その毛を引き抜き、神にかけて誓わせた。「お前たちの娘を彼らの息子の妻にしてはならない。彼らの娘をお前たちの息子の妻に、またはお前たちの妻にしてはならない。——ネヘミヤ記 13:23-25

ハマンはクセルクセス王に言った。「お国のどの州にも、一つの独特な民族がおります。諸民族の間に分散して住み、彼らはどの民族のものとも異なる独自の法律を有し、王の法律には従いません。そのままにしておくわけにはまいりません。もし御意にかないますなら、彼らの根絶を旨とする勅書を作りましょう。わたしは銀貨一万キカルを官吏たちに支払い、国庫に納めるようにいたします。」王は指輪をはずし、ユダヤ人の迫害者、アガゲ人ハメダタの子ハマンに渡して、言った。「銀貨はお前に任せる。その民族はお前が思うようにしてよい。」——エステル記 3:8-11

(編者註:) 新共同訳ではクセルクセス王になっているけれど、ケンが書いているように、たとえば欽定訳では……

And Haman said unto **king Ahasuerus**, There is a certain people scattered abroad and dispersed among the people in all the provinces of thy kingdom; and their laws are diverse from all people; neither keep they the king's laws: therefore it is not for the king's profit to suffer them. — ESTHER, 3:8

(編者註:) と、オハシュロス王になっている。

ユダヤ人迫害、取り消される

エステルは、再び王の前に申し出て、その足もとにひれ伏し、涙を流し、憐れみを乞い、アガグ人ハマンの悪事、すなわち、ユダヤ人に対して彼がたくらんだことを無効にしていたことを願った。王が金の笏を差し伸べたので、エステルは身を起こし、王の前に立って、言った。「もしお心に適い、特別の御配慮をいただき、また王にも適切なことと思われ、私にも御目をかけていただけますなら、アガグ人ハメダタの子ハマンの考え出した文書の取り消しを書かせていただきとうございます。ハマンは国中のユダヤ人を皆殺しにしようとしてあの文書を作りました。私は自分の民族にふりかかる不幸を見るに忍びず、また同族の滅亡を見るに忍びないのでございます。」そこでクセルクセス王は王妃エステルとユダヤ人モルデカイに言った。「わたしはハマンの家をエステルに与え、ハマンを木につるした。ハマンがユダヤ人を滅ぼそうとしたからにはほかならない。お前たちはよいと思うことをユダヤ人のために王の名によって書き記し、王の指輪で印を押すがよい。王の名によって書き記され、王の指輪で印を押された文書は、取り消すことができない。」——エステル記 8:3-8

こうして王の命令によって、どの町のユダヤ人にも自分たちの命を守るために集合し、自分たちを迫害する民族や州の軍隊を女や子供に至るまで一人残らず滅ぼし、殺し、絶滅させ、その持ち物を奪い取ることが許された。——エステル記 8:11

ユダヤ人の復讐

第十二の月、すなわちアダルの月の十三日に、この王の命令と定めが実行されることとなった。それは敵がユダヤ人を征伐しようとしていた日であったが、事態は逆転し、ユダヤ人がその仇敵を征伐する日となった。ユダヤ人はクセルクセス王の州のどこでも、自分たちの町で、迫害する者を滅ぼすために集合した。ユダヤ人に立ち向かう者は一人もいなかった。どの民族もユダヤ人に対する恐れに見舞われたからである。諸州の高官、総督、地方長官、王の役人たちは皆、モルデカイに対する恐れに見舞われ、ユダヤ人の味方になった。モルデカイは王宮で大きな勢力を持ち、その名声はすべての州に広がった。まさにこのモルデカイという人物は、日の出の勢いであった。ユダヤ人は敵を一人残らず剣にかけて討ち殺し、滅ぼして、仇敵を思いのままにした。

要塞の町スサでユダヤ人に殺され、滅ぼされた者の数は五百人に達した。——エステル記 9:1-6

1.8 わけわかんないのから崇高なまでいろいろ

(編者註:) ヨブ記のはじめは、聖書を初めて読む人に混乱を与える。どうしてサタンが聖霊の集まりに来て、神さまとこんな会話なんかしているんだろう? って(前にも出てきたよね、主語が神だったりサタンだったり、とか)。少なくとも旧約聖書の世界では、サタンは天使の一人で、主に人に試練を与える存在として描かれているんだけど、一般通念に敵対するという見方から、「敵」「反対する事」を意味する言葉(ヘブライ語 satan またはアラム語 satana)がその名になったというわけ。

事の起こり

ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。七人の息子と三人の娘を持ち、羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった。

息子たちはそれぞれ順番に、自分の家で宴会の用意をし、三人の姉妹も招いて食事をすることにしていた。この宴会が一巡りするごとに、ヨブは息子たちを呼び寄せて聖別し、朝早くから彼らの数に相当するいけにえをささげた。「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにした。

ある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来た。主はサタンに言われた。

「お前はどこから来た。」

「地上を巡回しておりました。ほうほうを歩きまわっていました」とサタンは答えた。

主はサタンに言われた。

「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」

サタンは答えた。

「ヨブが、利益もないのに神を敬うのでしょうか。あなたは彼とその一族、全財産を守っておられるではありませんか。彼の手の業をすべて祝福なさいます。お陰で、彼の家畜はその地に溢れるほどです。ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらん下さい。面と向かってあなたを呪うにちがいありません。」

主はサタンに言われた。

「それでは、彼のものを一切、お前のいいようにしてみるがよい。ただし彼には、手を出すな。」

サタンは主のもとから出て行った。

ヨブの息子、娘が、長兄の家で宴会を開いていた日のことである。ヨブのもとに、一人

の召使いが報告に来た。

「御報告いたします。わたしどもが、牛に畑を耕させ、その傍らでろばに草を食べさせておりますと、シェバ人が襲いかかり、略奪していきました。牧童たちは切り殺され、わたしひとりだけ逃げのびて参りました。」

彼が話し終らないうちに、また一人が来て言った。

「御報告いたします。天から神の火が降って、羊も羊飼も焼け死んでしまいました。わたしひとりだけ逃げのびて参りました。」

彼が話し終らないうちに、また一人来て言った。

「御報告いたします。カルデア人が三部隊に分かれてらくだの群れを襲い、奪っていきました。牧童たちは切り殺され、わたしひとりだけ逃げのびて参りました。」

彼が話し終らないうちに、更にもう一人来て言った。

「御報告いたします。御長男のお宅で、御子息、御息女の皆様が宴会を開いておられました。すると、荒れ野の方から大風が来て四方から吹きつけ、家は倒れ、若い方々は死んでしまわれました。わたしひとりだけ逃げのびて参りました。」

ヨブは立ち上がり、衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏して言った。

「わたしは裸で母の胎を出た。

裸でそこに帰ろう。

主は与え、主は奪う。

主の御名はほめたたえられよ。」

このような時にも、ヨブは神を非難することなく、罪を犯さなかった。

またある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来て、主の前に進み出た。主はサタンに言われた。

「お前はどこから来た。」

「地上を巡回しておりました。ほうぼうを歩きまわっていました」とサタンは答えた。

主はサタンに言われた。

「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。お前は理由もなく、わたしを唆して彼を破滅させようとしたが、彼はどこまでも無垢だ。」

サタンは答えた。

「皮には皮を、と申します。まして命のためには全財産を差し出すものです。手を伸ばして彼の骨と肉に触れてごらん下さい。面と向かってあなたを呪うにちがいません。」

主はサタンに言われた。

「それでは、彼をお前のいいようにするがよい。ただし、命だけは奪うな。」

サタンは主の前から出て行った。サタンはヨブに手を下し、頭のとっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた。ヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむ

した。

彼の妻は、

「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」と言ったが、ヨブは答えた。

「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか。」

このようになって、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった。

さて、ヨブと親しいテマン人エリファズ、シュア人ビルダド、ナアマ人ツォファルの三人は、ヨブにふりかかった災難の一部始終を聞くと、見舞い慰めようと相談して、それぞれの国からやって来た。遠くからヨブを見ると、それと見分けられないほどの姿になっていたのので、嘆きの声をあげ、衣を裂き、天に向かって塵を振りまき、頭にかぶった。彼らは七日七晩、ヨブと共に地面に座っていたが、その激しい苦痛を見ると、話しかけることもできなかった。

ヨブの嘆き

やがてヨブは口を開き、自分の生まれた日を呪って、言った。——ヨブ記 1:1-3:2

(編者註:) ……そして、ケンが言う「聖書のなかでいちばん辛辣で、シニカルで、手厳しい神様への罵倒」のつぶやきが始まるわけ。

だからわたしは言う、同じことなのだ、と

神は無垢な者も逆らう者も

同じように滅ぼし尽くされる、と。

罪もないのに、突然、鞭打たれ

殺される人の絶望を神は嘲笑う。

この地は神に逆らう者の手にゆだねられている。

神がその裁判官の顔を覆われたのだ。

ちがうというなら、誰がそうしたのか。——ヨブ記 9:22-24

町では、死にゆく人々が呻き

刺し貫かれた人々があえいでいるが

神はその惨状に心を留めてくださらない。——ヨブ記 24:12

なぜ、神に逆らう者が生き永らえ

年を重ねてなお、力を増し加えるのか。
子孫は彼らを囲んで確かに続き
その末を目の前に見ることができる。
その家は平和で、何の恐れもなく
神の鞭が彼らに下ることはない。
彼らの雄牛は常に子をはらませ
雌牛は子を産んで、死なせることはない。
彼らは羊の群れのように子供を送り出し
その子らは踊り跳ね
太鼓や豎琴に合わせて歌い
笛を吹いて楽しむ。
彼らは幸せに人生を送り
安らかに陰府に赴く。
彼らは神に向かって言う。
「ほうっておいてください。
あなたに従う道など知りたくもない。
なぜ、全能者に仕えなければならないのか。
神に祈って何になるのか。」
だが、彼らは財産を手にはしていないか。
神に逆らう者の考えはわたしから遠い。

神に逆らう者の灯が消され、災いが襲い
神が怒って破滅を下したことが何度あろうか。
藁のように風に吹き散らされ
もみ殻のように
突風に吹き飛ばされたことがあろうか。
神は彼への罰を
その子らの代にまで延ばしておかれるのか。
彼自身を罰して
思い知らせてくださればよいのに。
自分の目で自分の不幸を見
全能者の怒りを飲み干せばよいのだ。
人生の年月が尽きてしまえば
残された家はどうなってもよいのだから。——ヨブ記 21:7-21

お前は神に劣らぬ腕をもち
神のような声をもって雷鳴をとどろかせるのか。——ヨブ記 40:9

ヨブは主に答えて言った。

あなたは全能であり
御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。
「これは何者か。知識もないのに
神の経綸を隠そうとするとは。」
そのとおりです。
わたしには理解できず、わたしの知識を超えた
驚くべき御業をあげつらっておりました。
「聞け、わたしが話す。
お前に尋ねる、わたしに答えてみよ。」
あなたのことを、耳にしてはおりました。
しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。
それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し
自分を退け、悔い改めます。——ヨブ記 42:1-6

ヨブが友人たちのために祈ったとき、主はヨブを元の境遇に戻し、更に財産を二倍にされた。兄弟姉妹、かつての知人たちがこぞって彼のもとを訪れ、食事を共にし、主が下されたすべての災いについていたわり慰め、それぞれ銀一ケシタと金の環一つを贈った。

主はその後のヨブを以前にも増して祝福された。ヨブは、羊一万四千匹、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つことになった。彼はまた七人の息子と三人の娘をもうけ、長女をエミマ、次女をケツィア、三女をケレン・プクと名付けた。ヨブの娘たちのように美しい娘は國中どこにもいなかった。彼女らもその兄弟と共に父の財産の分け前を受けた。

ヨブはその後百四十年生き、子、孫、四代の先まで見ることができた。ヨブは長寿を保ち、老いて死んだ。——ヨブ記 42:10-17

そして、人間に言われた。
「主を畏れ敬うこと、それが知恵
悪を遠ざけること、それが分別。」——ヨブ記 28:28

(編者註:) 神さまのヨブに対する非難を見てみよう。

主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。

男らしく、腰に帯をせよ。

お前に尋ねる。わたしに答えてみよ。

お前はわたしが定めたことを否定し

自分を無罪とするために

わたしを有罪とさえするのか。

お前は神に劣らぬ腕をもち

神のような声をもって雷鳴をとどろかせるのか。

威厳と誇りで身を飾り

栄えと輝きで身を装うがよい。

怒って猛威を振るい

すべて驕り高ぶる者を見れば、これを低くし

すべて驕り高ぶる者を見れば、これを挫き

神に逆らう者を打ち倒し

ひとり残らず塵に葬り去り

顔を包んで墓穴に置くがよい。

そのとき初めて、わたしはお前をたたえよう。

お前が自分の右の手で

勝利を得たことになるのだから。——ヨブ記 40:6-14

(編者註:) まあ、この辺まではいいんだよね。この後からおかしくなってくる。

見よ、ベヘモットを。

お前を造ったわたしはこの獣をも造った。

これは牛のように草を食べる。

見よ、腰の力と腹筋の勢いを。

尾は杉の枝のようにたわみ

腿の筋は固く絡み合っている。

骨は青銅の管

骨組みは鋼鉄の棒を組み合わせたようだ。

これこそ神の傑作
造り主をおいて剣をそれに突きつける者はない。
山々は彼に食べ物を与える。
野のすべての獣は彼に戯れる。
彼がそてつの木の下や
浅瀬の葦の茂みに伏せると
そてつの影は彼を覆い
川辺の柳は彼を包む。
川が押し流そうとしても、彼は動じない。
ヨルダンが口に流れ込んでも、ひるまない。
まともに捕えたり
罠にかけてその鼻を貫きうるものがあるか。

お前はレビヤタンを鉤にかけて引き上げ
その舌を縄で捕えて
 屈服させることができるか。
お前はその鼻に綱をつけ
顎を貫いてくつわをかけることができるか。
彼がお前に繰り返し憐れみを乞い
丁重に話したりするだろうか。
彼がお前と契約を結び
永久にお前の僕となったりするだろうか。
お前は彼を小鳥のようにもてあそび
娘たちのためにつないでおくことができるか。
お前の仲間を彼を取り引きにかけ
商人たちに切り売りすることができるか。
お前はもりで彼の皮を
やすで頭を傷だらけにすることができるか。
彼の上に手を置いてみよ。
戦うなどとは二度と言わぬがよい。——ヨブ記 40:15-32

(編者註:) そして、先のヨブ記 42:5-6 のくだりに至るといふわけ。

太陽の輝き、満ち欠ける月を仰いで
ひそかに心を迷わせ
口づけを投げたことは、決してない。
もしあるというなら
これもまた、裁かれるべき罪である。
天にいます神を否んだことになるのだから。——ヨブ記 31:26-28

賛美。ダビデの詩。

わたしの王、神よ、あなたをあがめ
世々限りなく御名をたたえます。
絶えることなくあなたをたたえ
世々限りなく御名を賛美します。
大いなる主、限りなく賛美される主
大きな御業は究めることもできません。
人々が、代々に御業をほめたたえ
力強い御業を告げ知らせますように。
あなたの輝き、栄光と威光
驚くべき御業の数々をわたしは歌います。
人々が恐るべき御力について語りますように。
大きな御業をわたしは数え上げます。
人々が深い御恵みを語り継いで記念とし
救いの御業を喜び歌いますように。
主は恵みに富み、憐れみ深く
忍耐強く、慈しみに満ちておられます。
主はすべてのものに恵みを与え
造られたすべてのものを憐れんでくださいます。

主よ、造られたものがすべて、あなたに感謝し
あなたの慈しみに生きる人があなたをたたえ
あなたの主権の栄光を告げ
力強い御業について語りますように。
その力強い御業と栄光を
主権の輝きを、人の子らに示しますように。
あなたの主権はとこしえの主権

あなたの統治は代々に。
主は倒れようとする人をひとりひとり支え
うずくまっている人を起こしてくださいます。
ものみながあなたに目を注いで待ち望むと
あなたはときに応じて食べ物をくださいます。
すべて命あるものに向かって御手を開き
望みを満足させてくださいます。

主の道はことごとく正しく
御業は慈しみを示しています。
主を呼ぶ人すべてに近くいまし
まことをもって呼ぶ人すべてに近くいまし
主を畏れる人々の望みをかなえ
叫びを聞いて救ってくださいます。
主を愛する人は主に守られ
主に逆らう者はことごとく滅ぼされます。
わたしの口は主を賛美します。すべて肉なるものは
世々限りなく聖なる御名をたたえます。——詩篇 145

ダビデの詩。

主をたたえよ、わたしの岩を
わたしの手に闘うすべを
指に戦するすべを教えてくださいます方を
わたしの支え、わたしの砦、砦の塔
わたしの逃げ場、わたしの盾、避けどころ
諸国の民をわたしに服従させてくださる方を。

主よ、人間とは何ものなのでしょう
あなたがこれに親しまれるとは。
人の子とは何ものなのでしょう
あなたが思いやってくださいますとは。
人間は息にも似たもの
彼の日々は消え去る影。

主よ、天を傾けて降り
山々に触れ、これに煙を上げさせてください。
飛び交う稲妻
うなりを上げる矢を放ってください。
高い天から御手を遣わしてわたしを解き放ち
大水から、異邦人の手から助け出してください。
彼らの口はむなしいことを語り
彼らの右の手は欺きを行う右の手です。

神よ、あなたに向かって新しい歌をうたい
十弦の琴をもってほめ歌をうたいます。
あなたは王たちを救い
僕ダビデを災いの剣から解き放ってくださいます。
わたしを解き放ち
異邦人の手から助け出してください。
彼らの口はむなしいことを語り
彼らの右の手は欺きを行う右の手です。

わたしたちの息子は皆
幼いときから大事に育てられた苗木。
娘は皆、宮殿の飾りにも似た
色とりどりの彫り物。
わたしたちの倉は
さまざまな穀物で満たされている。
羊の群れは野に、幾千幾万を数え
牛はすべて、肥えている。
わたしたちの都の広場には
破れも捕囚も叫び声もない。

いかに幸いなことか、このような民は。
いかに幸いなことか
主を神といただく民は。——詩篇 144

賛歌。ダビデの詩。

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。
主はわたしを青草の原に休ませ
憩いの水のほとりに伴い
魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく
わたしを正しい道に導かれる。
死の陰の谷を行くときも
わたしは災いを恐れない。
あなたがわたしと共にいてくださる。
あなたの鞭、あなたの杖
それがわたしを力づける。

わたしを苦しめる者を前にしても
あなたはわたしに食卓を整えてくださる。
わたしの頭に香油を注ぎ
わたしの杯を溢れさせてくださる。

命のある限り
恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
主の家にわたしは帰り
生涯、そこにとどまるであろう。——詩篇 23

指揮者によって。コラの子の詩。マスキール。

神よ、我らはこの耳で聞いています
先祖が我らに語り伝えたことを
先祖の時代、いにしえの日に
あなたが成し遂げられた御業を。
我らの先祖を植え付けるために
御手をもって国々の領土を取り上げ
その枝が伸びるために
国々の民を災いに落としたのはあなたでした。

先祖が自分の剣によって領土を取ったのでも
自分の腕の力によって勝利を得たのでもなく
あなたの右の御手、あなたの御腕
あなたの御顔の光によるものでした。
これがあなたのお望みでした。

神よ、あなたこそわたしの王。
ヤコブが勝利を得るように定めてください。
あなたに頼って敵を攻め
我らに立ち向かう者を
御名に頼って踏みにじらせてください。
わたしが依り頼むのは自分の弓ではありません。
自分の剣によって勝利を得ようともしていません。
我らを敵に勝たせ
我らを憎む者を恥に落とすのは、あなたです。
我らは絶えることなく神を賛美し
とこしえに、御名に感謝をささげます。〔セラ

しかし、あなたは我らを見放されました。
我らを辱めに遭わせ、もはや共に出陣なさらず
我らが敵から敗走するままになさったので
我らを憎む者は略奪をほしいままにしたのです。
あなたは我らを食い尽くされる羊として
国々の中に散らされました。
御自分の民を、僅かの値で売り渡し
その価を高くしようともなさいませんでした。
我らを隣の国々の嘲りの的とし
周囲の民が嘲笑い、そしるにまかせ
我らを国々の嘲りの歌とし
多くの民が頭を振って侮るにまかせられました。
辱めは絶えることなくわたしの前にあり
わたしの顔は恥に覆われています。
嘲る声、ののしる声がします。
報復しようとする敵がいます。

これらのことがすべてふりかかっても
なお、我らは決してあなたを忘れることなく
あなたとの契約をむなしいものとせず
我らの心はあなたを裏切らず
あなたの道をそれて歩もうとはしませんでした。

あなたはそれでも我らを打ちのめし
山犬の住みかに捨て
死の陰で覆ってしまわれました。
このような我らが、我らの神の御名を忘れ去り
異教の神に向かって
手を広げるようなことがあれば
神はなお、それを探り出されます。
心に隠していることを神は必ず知られます。
我らはあなたゆえに、絶えることなく
殺される者となり
屠るための羊と見なされています。

主よ、奮い立ってください。
なぜ、眠っておられるのですか。
永久に我らを突き放しておくことなく
目覚めてください。
なぜ、御顔を隠しておられるのですか。
我らが貧しく、虐げられていることを
忘れてしまわれたのですか。
我らの魂は塵に伏し
腹は地に着いたままです。
立ち上がって、我らをお助けください。
我らを贖い、あなたの慈しみを表してください。——詩篇 44

賛歌。アサフの詩。

神よ、異国の民があなたの嗣業を襲い
あなたの聖なる神殿を汚し

エルサレムを瓦礫の山としました。
あなたの僕らの死体を空の鳥の餌とし
あなたの慈しみに生きた人々の肉を
地の獣らの餌としました。
彼らは、エルサレムの周囲に
この人々の血を水のように流します。
葬る者もありません。
わたしたちは近隣の民に辱められ
周囲の民に嘲られ、そしられています。
主よ、いつまで続くのでしょうか。
あなたは永久に憤っておられるのでしょうか。
あなたの激情は火と燃え続けるのでしょうか。

御怒りを注いでください
あなたを知ろうとしない異国の民の上に
あなたの御名を呼び求めない国々の上に。
彼らはヤコブを食いものにし
その住みかを荒廃させました。

どうか、わたしたちの昔の悪に御心を留めず
御憐れみを速やかに差し向けてください。
わたしたちは弱り果てました。
わたしたちの救いの神よ、わたしたちを助けて
あなたの御名の栄光を輝かせてください。
御名のために、わたしたちを救い出し
わたしたちの罪をお赦しください。
どうして異国の民に言わせてよいのでしょうか
「彼らの神はどこにいる」と。
あなたの僕らの注ぎ出された血に対する報復を
異国の民の中で、わたしたちが
目の前に見ることができますように。
捕われ人の嘆きが御前に届きますように。
御腕の力にふさわしく
死に定められている人々を

生き長らえさせてください。

主よ、近隣の民のふところに
あなたを辱めた彼らの辱めを
七倍にして返してください。
わたしたちはあなたの民
あなたに養われる羊の群れ。
とこしえに、あなたに感謝をささげ
代々に、あなたの栄誉を語り伝えます。——詩篇 79

歌。賛歌。アサフの詩。

神よ、沈黙しないでください。
黙していないでください。
静まっていないでください。
御覧ください、敵が騒ぎ立っています。
あなたを憎む者は頭を上げています。
あなたの民に対して巧みな謀をめぐらし
あなたの秘蔵の民に対して共謀しています。
彼らは言います
「あの民を国々の間から断とう。

イスラエルの名が
再び思い起こされることのないように」と。

彼らは心をひとつにして謀り
あなたに逆らって、同盟を結んでいます。
天幕に住むエドム人
イシュマエル人、モアブ、ハガル人。
ゲバル、アンモン、アマレク
ペリシテとティルス住民。
アッシリアもそれに加わり
ロトの子らに腕を貸しています。〔セラ

これらの民に対しても、なさってください
 あなたが、かつてミディアンになさったように
 キション川のほとりで
 シセラとヤビンになさったように。
 エン・ドルで彼らは滅ぼされ
 大地の肥やしとされました。
 これらの民の貴族をオレブとゼエブのように
 王侯らをゼバとツァルムナのようにしてください。
 彼らは言います
 「神の住まいを我らのものにしよう」と。

わたしの神よ、彼らを車の輪のように
 風に巻かれる藁のようにしてください。
 火の手が林を焼くように
 炎が山々をなめるように
 あなたの嵐によって彼らを追い
 あなたのつむじ風によって恐れさせてください。
 彼らの顔が侮りで覆われるなら
 彼らは主の御名を求めるようになるでしょう。
 彼らが永久に恥じ、恐れ
 嘲りを受けて、滅びますように。
 彼らが悟りますように
 あなたの御名は主
 ただひとり

全地を超えて、いと高き神であることを。——詩篇 83

指揮者によって。ダビデの詩。賛歌。

わたしの賛美する神よ
 どうか、黙していないでください。
 神に逆らう者の口が
 欺いて語る口が、わたしに向かって開き
 偽りを言う舌がわたしに語りかけます。
 憎しみの言葉はわたしを取り囲み
 理由もなく戦いを挑んで来ます。

愛しても敵意を返し
わたしが祈りをささげても
その善意に対して悪意を返します。
愛しても、憎みます。

彼に対して逆らう者を置き
彼の右には敵対者を立たせてください。
裁かれて、神に逆らう者とされますように。
祈っても、罪に定められますように。

彼の生涯は短くされ
地位は他人に取り上げられ
子らはみなしごとなり
妻はやもめとなるがよい。
子らは放浪して物乞いをするがよい。
廃虚となったその家を離れ
助けを求め歩くがよい。
彼のものは一切、債権者に奪われ
働きの実りは他国人に略奪されるように。
慈しみを示し続ける者もいなくなり
みなしごとなった彼の子らを
憐れむ者もなくなるように。
子孫は断たれ
次の代には彼らの名も消されるように。
主が彼の父祖の悪をお忘れにならぬように。
母の罪も消されることのないように。
その悪と罪は常に主の御前にとどめられ
その名は地上から断たれるように。

彼は慈しみの業を行うことに心を留めず
貧しく乏しい人々
心の挫けた人々を死に追いやった。
彼は呪うことを好んだのだから

呪いは彼自身に返るように。
祝福することを望まなかったのだから
祝福は彼を遠ざかるように。
呪いを衣として身にまとうがよい。
呪いが水のように彼のはらわたに
油のように彼の骨に染み通るように。
呪いが彼のまとう衣となり
常に締める帯となるように。
わたしに敵意を抱く者に対して
わたしの魂をさいなもうと語る者に対して
主はこのように報いられる。

主よ、わたしの神よ
御名のために、わたしに計らい
恵み深く、慈しみによって
わたしを助けてください。
わたしは貧しく乏しいのです。
胸の奥で心は貫かれています。
移ろい行く影のようにわたしは去ります。
いなごのように払い落とされます。
断食して膝は弱くなり
からだは脂肪を失い、衰えて行きます。
わたしは人間の恥。
彼らはわたしを見て頭を振ります。
わたしの神、主よ、わたしを助けてください。
慈しみによってお救いください。
それが御手によることを、御計らいであることを
主よ、人々は知るでしょう。
彼らは呪いますが
あなたは祝福してくださいます。
彼らは反逆し、恥に落とされますが
あなたの僕は喜び祝います。
わたしに敵意を抱く者は辱めを衣とし
恥を上着としてまとうでしょう。

わたしはこの口をもって
主に尽きぬ感謝をささげ
多くの人の中で主を賛美します。
主は乏しい人の右に立ち
死に定める裁きから救ってくださいます。——詩篇 109

指揮者によって。主の僕の詩。ダビデの詩。主がダビデをすべての敵の手、また、サウルの手から救い出されたとき、彼はこの歌の言葉を主に述べた。

主よ、わたしの力よ、わたしはあなたを慕う。
主はわたしの岩、砦、逃れ場
わたしの神、大岩、避けどころ
わたしの盾、救いの角、砦の塔。
ほむべき方、主をわたしは呼び求め
敵から救われる。

死の縄がからみつ
奈落の激流がわたしをおののかせ
陰府の縄がめぐり
死の網が仕掛けられている。
苦難の中から主を呼び求め
わたしの神に向かって叫ぶと
その声は神殿に響き
叫びは御前に至り、御耳に届く。

主の怒りは燃え上がり、地は揺れ動く。
山々の基は震え、揺らぐ。
御怒りに煙は噴き上がり
御口の火は焼き尽くし、炎となって燃えさかる。
主は天を傾けて降り
密雲を足もとに従え
ケルブを駆って飛び
風の翼に乗って行かれる。
周りに闇を置いて隠れがとし

暗い雨雲、立ちこめる霧を幕屋とされる。

御前にひらめく光に雲は従い

電と火の雨が続く。

主は天から雷鳴をとどろかせ

いと高き神は御声をあげられ

電と火の雨が続く。

主の矢は飛び交い

稲妻は散乱する。

主よ、あなたの叱咤に海の底は姿を現し

あなたの怒りの息に世界はその基を示す。

主は高い天から御手を遣わしてわたしをとらえ

大水の中から引き上げてくださる。

敵は力があり

わたしを憎む者は勝ち誇っているが

なお、主はわたしを救い出される。

彼らが攻め寄せる災いの日

主はわたしの支えとなり

わたしを広い所に導き出し、助けとなり

喜び迎えてくださる。

主はわたしの正しさに報いてくださる。

わたしの手の清さに応じて返してくださる。

わたしは主の道を守り

わたしの神に背かない。

わたしは主の裁きをすべて前に置き

主の掟を遠ざけない。

わたしは主に対して無垢であろうとし

罪から身を守る。

主はわたしの正しさに応じて返してくださる。

御目に対してわたしの手は清い。

あなたの慈しみに生きる人に

あなたは慈しみを示し

無垢な人には無垢に

清い人には清くふるまい
心の曲がった者には背を向けられる。
あなたは貧しい民を救い上げ
高ぶる目を引き下ろされる。
主よ、あなたはわたしの灯を輝かし
神よ、あなたはわたしの闇を照らしてくださる。
あなたによって、わたしは敵軍を追い散らし
わたしの神によって、城壁を越える。
神の道は完全
主の仰せは火で練り清められている。
すべて御もとに身を寄せる人に
 主は盾となってくくださる。
主のほかに神はない。
神のほかに我らの岩はない。
神はわたしに力を帯びさせ
わたしの道を完全にし
わたしの足を鹿のように速くし
高い所に立たせ
手に戦いの技を教え
腕に青銅の弓を引く力を帯びさせてくださる。

あなたは救いの盾をわたしに授け
右の御手で支えてくださる。
あなたは、自ら降り
 わたしを強い者としてくださる。
わたしの足は大きく踏み出し
くるぶしはよろめくことがない。
敵を追い、敵に追いつき
滅ぼすまで引き返さず
彼らを打ち、再び立つことを許さない。
彼らはわたしの足もとに倒れ伏す。
あなたは戦う力をわたしの身に帯びさせ
刃向かう者を屈服させ
敵の首筋を踏ませてくださる。

わたしを憎む者をわたしは滅ぼす。
彼らは叫ぶが、助ける者は現れず
主に向かって叫んでも答えはない。
わたしは彼らを風の前の塵と見なし
野の土くれのようにむなしいものとする。
あなたはわたしを民の争いから解き放ち
国々の頭としてくださる。
わたしの知らぬ民もわたしに仕え
わたしのことを耳にしてわたしに聞き従い
敵の民は憐れみを乞う。
敵の民は力を失い、おののいて砦を出る。

主は命の神。
わたしの岩をたたえよ。
わたしの救いの神をあがめよ。
わたしのために報復してくださる神よ
諸国の民をわたしに従わせてください。
敵からわたしを救い
刃向かう者よりも高く上げ
不法の者から助け出してください。
主よ、国々の中で
わたしはあなたに感謝をささげ
御名をほめ歌う。
主は勝利を与えて王を大いなる者とし
油注がれた人を、ダビデとその子孫を
とこしえまで
慈しみのうちにおかれる。——詩篇 18

マスキール。アサフの詩。

神よ、なぜあなたは
養っておられた羊の群れに怒りの煙をはき
永遠に突き放してしまわれたのですか。
どうか、御心に留めてください
すでにいにしえから御自分のものとし

御自分の嗣業の部族として贖われた会衆を
あなたのいます所であったこのシオンの山を。
永遠の廃虚となったところに足を向けてください。
敵は聖所のすべてに災いをもたらしました。
あなたに刃向かう者は、至聖所の中でほえ猛り
自分たちのしるしをしるしとして立てました。
彼らが木の茂みの中を
斧を携えて上るのが見えると
ただちに手斧、まさかりを振るって
彫り物の飾りをすべて打ち壊し
あなたの聖所に火をかけ
御名の置かれた所を地に引き倒して汚しました。
「すべて弾圧せねばならない」と心に言って
この地にある神の会堂をすべて焼き払いました。

わたしたちのためのしるしは見えません。
今は預言者もいません。
いつまで続くのかを知る者もありません。
神よ、刃向かう者はいつまで嘲るのでしょうか。
敵は永久にあなたの御名を侮るのでしょうか。
なぜ、手を引いてしまわれたのですか
右の御手は、ふところに入れられたまま。

しかし神よ、いにしえよりのわたしの王よ
この地に救いの御業を果たされる方よ。
あなたは、御力をもって海を分け
大水の上で竜の頭を砕かれました。
レビヤタンの頭を打ち砕き
それを砂漠の民の食糧とされたのもあなたです。
あなたは、泉や川を開かれましたが
絶えることのない大河の水を涸らされました。
あなたは、太陽と光を放つ物を備えられました。
昼はあなたのもの、そして夜もあなたのものです。
あなたは、地の境をことごとく定められました。

夏と冬を造られたのもあなたです。

主よ、御心に留めてください、敵が嘲るのを
神を知らぬ民があなたの御名を侮るのを。
あなたの鳩の魂を獣に渡さないでください。あなたの貧しい人々の命を
永遠に忘れ去らないでください。
契約を顧みてください。地の暗い隅々には
不法の住みかがひしめいています。
どうか、虐げられた人が再び辱められることなく
貧しい人、乏しい人が
御名を賛美することができますように。

神よ、立ち上がり
御自分のために争ってください。神を知らぬ者が絶えずあなたを嘲っているのを
御心に留めてください。
あなたに刃向かう者のあげる声
あなたに立ち向かう者の常に起こす騒ぎを
どうか、決して忘れないでください。——詩篇 74

歌。賛歌。コラの子の詩。指揮者によって。マハラトに合わせて。レアフト。マスキール。エズラ人へマンの詩。

主よ、わたしを救ってくださる神よ
昼は、助けを求めて叫び
夜も、御前におります。
わたしの祈りが御もとに届きますように。
わたしの声に耳を傾けてください。

わたしの魂は苦難を味わい尽くし
命は陰府にのぞんでいます。
穴に下る者のうちに数えられ
力を失った者とされ
汚れた者と見なされ
死人のうちに放たれて

墓に横たわる者となりました。
あなたはこのような者に心を留められません。
彼らは御手から切り離されています。
あなたは地の底の穴にわたしを置かれます
影に閉ざされた所、暗闇の地に。
あなたの憤りがわたしを押さえつけ
あなたの起こす波がわたしを苦しめます。〔セラ

あなたはわたしから
親しい者を遠ざけられました。
彼らにとってわたしは忌むべき者となりました。
わたしは閉じ込められて、出られません。
苦悩に目は衰え
来る日も来る日も、主よ、あなたを呼び
あなたに向かって手を広げています。
あなたが死者に対して驚くべき御業をなさったり
死霊が起き上がって
あなたに
感謝したりすることがあるでしょうか。〔セラ
墓の中であなたの慈しみが
滅びの国であなたのまことが
語られたりするでしょうか。
闇の中で驚くべき御業が
忘却の地で恵みの御業が
告げ知らされたりするでしょうか。

主よ、わたしはあなたに叫びます。
朝ごとに祈りは御前に向かいます。
主よ、なぜわたしの魂を突き放し
なぜ御顔をわたしに隠しておられるのですか。
わたしは若い時から苦しんで来ました。
今は、死を待ちます。
あなたの怒りを身に負い、絶えようとしています。
あなたの憤りがわたしを圧倒し

あなたを恐れてわたしは滅びます。
それは大水のように
絶え間なくわたしの周りに渦巻き
いっせいに襲いかかります。
愛する者も友も
あなたはわたしから遠ざけてしまわれました。
今、わたしに親しいのは暗闇だけです。——詩篇 88

指揮者によって。「暁の雌鹿」に合わせて。賛歌。ダビデの詩。

わたしの神よ、わたしの神よ
なぜわたしをお見捨てになるのか。
なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず
呻きも言葉も聞いてくださらないのか。
わたしの神よ
昼は、呼び求めても答えてくださらない。
夜も、黙ることをお許しにならない。

だがあなたは、聖所にいまし
イスラエルの賛美を受ける方。
わたしたちの先祖はあなたに依り頼み
依り頼んで、救われて来た。
助けを求めてあなたに叫び、救い出され
あなたに依り頼んで、裏切られたことはない。

わたしは虫けら、とても人とはいえない。
人間の屑、民の恥。
わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い
唇を突き出し、頭を振る。
「主に頼んで救ってもらおうがよい。
主が愛しておられるなら
助けてくださるだろう。」

わたしを母の胎から取り出し

その乳房にゆだねてくださったのはあなたです。
母がわたしをみごもったときから
わたしはあなたにすがってきました。
母の胎にあるときから、あなたはわたしの神。
わたしを遠く離れないでください
苦難が近づき、助けてくれる者はいないので。

雄牛が群がってわたしを囲み
バシヤンの猛牛がわたしに迫る。
餌食を前にした獅子のようにうなり
牙をむいてわたしに襲いかかる者がいる。
わたしは水となって注ぎ出され
骨はことごとくはずれ
心は胸の中で蠟のように溶ける。
口は渴いて素焼きのかけらとなり
舌は上顎にはり付く。
あなたはわたしを塵と死の中に打ち捨てられる。

犬どもがわたしを取り囲み
さいなむ者が群がってわたしを囲み
獅子のようにわたしの手足を砕く。
骨が数えられる程になったわたしのからだを
彼らはさらしものにして眺め
わたしの着物を分け
衣を取ろうとしてくじを引く。

主よ、あなただけは
わたしを遠く離れないでください。
わたしの力の神よ
今すぐにわたしを助けてください。
わたしの魂を剣から救い出し
わたしの身を犬どもから救い出してください。
獅子の口、雄牛の角からわたしを救い

わたしに答えてください。

わたしは兄弟たちに御名を語り伝え
集会の中であなたを賛美します。
主を畏れる人々よ、主を賛美せよ。
ヤコブの子孫は皆、主に栄光を帰せよ。
イスラエルの子孫は皆、主を恐れよ。

主は貧しい人の苦しみを
決して侮らず、さげすまれません。
御顔を隠すことなく
助けを求める叫びを聞いてくださいます。
それゆえ、わたしは大いなる集会で
あなたに賛美をささげ
神を畏れる人々の前で満願の献げ物をささげます。
貧しい人は食べて満ち足り
主を尋ね求める人は主を賛美します。
いつまでも健やかな命が与えられますように。

地の果てまで
すべての人が主を認め、御もとに立ち帰り
国々の民が御前にひれ伏しますように。
王権は主にあり、主は国々を治められます。
命に溢れてこの地に住む者はことごとく
主にひれ伏し
塵に下った者もすべて御前に身を屈めます。

わたしの魂は必ず命を得
子孫は神に仕え
主のことを来るべき代に語り伝え
成し遂げてくださった恵みの御業を
民の末に告げ知らせるでしょう。——詩篇 22

神は必ず御自分の敵の頭を打ち

咎のうちに歩み続ける者の

髪に覆われた頭を打たれる。

主は言われる。

「バシャンの山からわたしは連れ帰ろう。海の深い底から連れ帰ろう。

あなたは敵を打って足をその血に浸し

あなたの犬も分け前として敵の血に舌を浸す。」——詩篇 68:22-24

主はあなたの右に立ち

怒りの日に諸王を撃たれる。

主は諸国を裁き、頭となる者を撃ち

広大な地をしかばねで覆われる。——詩篇 110:5-6

主の慈しみに生きる人の死は主の目に価高い。——詩篇 116:15

バビロンの流れのほとりに座り

シオンを思って、わたしたちは泣いた。

豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。

わたしたちを捕囚にした民が

歌をうたえと言うから

わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして

「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。

どうして歌うことができようか

主のための歌を、異教の地で。

エルサレムよ

もしも、わたしがあなたを忘れるなら

わたしの右手はなえるがよい。

わたしの舌は上顎にはり付くがよい

もしも、あなたを思わぬときがあるなら

もしも、エルサレムを
わたしの最大の喜びとしないなら。

主よ、覚えていてください
エドムの子らを
エルサレムのあの日を
彼らがこう言ったのを
「裸にせよ、裸にせよ、この都の基まで。」

娘バビロンよ、破壊者よ
いかに幸いなことか
お前がわたしたちにした仕打ちを
お前に仕返す者
お前の幼子を捕えて岩にたたきつける者は。——詩篇 137

愚かな息子は父の破滅。
いさかい好きな妻は滴り続けるしずく。——箴言 19:13

神に従う人の口は知恵を生み
暴言をはく舌は断たれる。——箴言 10:31

豚が鼻に金の輪を飾っている。
美しい女に知性が欠けている。——箴言 11:22

貧乏な者は友にさえ嫌われるが
金持ちを愛する者は多い。——箴言 14:20

賄賂は贈り主にとって美しい宝石。
贈ればどこであろうと成功する。——箴言 17:8

打って傷を与えれば悪をたしなめる。

腹の隅々にとどくように打て。——箴言 20:30

若者の心には無知がつきもの。

これを遠ざけるのは論しの鞭。——箴言 22:15

若者を諭すのを控えてはならない。

鞭打っても、死ぬことはない。——箴言 23:13

馬に鞭、ろばにくつわ

愚か者の背には杖。——箴言 26:3

(編者註:) 「伝道の書」は新共同訳においては「コヘレトの言葉」という名前になっている。以下この表記を用いる。このコヘレトの言葉というのは、確かにケンの書いているように陰気だ。なにせ、最初から:

コヘレトは言う。

なんという空しさ

なんという空しさ、すべては空しい。——コヘレト 1:2

こんな調子だからね。ケンが例に挙げている「(人生は) 無意味で風を追うようなもの」「人は己の仕事を楽しむのがいちばんいい、それがかれの分相応というもの」に相当する部分は以下の通り。

わたしは生きることをいとう。太陽の下に起こることは、何もかもわたしを苦しめる。どれもみな空しく、風を追うようなことだ。——コヘレト 2:17

人間にとって最も幸福なのは、自分の業によって楽しみを得ることだとわたしは悟った。それが人間にふさわしい分である。

死後どうなるのかを、誰が見せてくれよう。——コヘレト 3:22

その他の発言。

何もかも、もの憂い。語り尽くすこともできず
目は見飽きることなく
耳は聞いても満たされない。
かつてあったことは、これからもあり
かつて起こったことは、これからも起こる。太陽の下、新しいものは何ひとつない。
見よ、これこそ新しい、と言ってみても
それもまた、永遠の昔からあり
この時代の前にもあった。
昔のことに心を留めるものはない。これから先にあることも
その後の世にはだれも心に留めはしまい。——コヘレト 1:8-11

知恵が深まれば悩みも深まり
知識が増せば痛みも増す。——コヘレト 1:18

賢者の目はその頭に、愚者の歩みは闇に。
しかしわたしは知っている
両者に同じことが起こるのだということを。——コヘレト 2:14

人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊をもっているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しく、すべてはひとつのところに
行く。

すべては塵から成った。
すべては塵に戻る。——コヘレト 3:19-20

弔い家に行くのは
酒宴家に行くのにまさる。
そこには人皆の終りがある。
命あるものよ、心せよ。
悩みは笑いにまさる。
顔が曇るにつれて心は安らぐ。——コヘレト 7:2-3

さあ、喜んであなたのパンを食べ
気持よくあなたの酒を飲むがよい。
あなたの業を神は受け入れていてくださる。
どのようなときも純白の衣を着て
頭には香油を絶やすな。
太陽の下、与えられた空しい人生の日々
愛する妻と共に楽しく生きるがよい。
それが、太陽の下で労苦するあなたへの
人生と労苦の報いなのだ。——コヘレト 9:7-9

食事をするのは笑うため。
酒は人生を楽しむため。
銀はすべてにこたえてくれる。——コヘレト 10:19

(編者註:) あれ、金じゃなかったっけ? 欽定訳では……

A feast is made for laughter, and wine maketh merry: but **money** answereth all things. ——
ECCLESIASTES (QOHELETH) 10:19

(編者註:) なるほど、キンじゃなくてカネなのね。

なんと空しいことか、とコヘレトは言う。
すべては空しい、と。——コヘレト 12:8

すべてに耳を傾けて得た結論。
「神を畏れ、その戒めを守れ。」
これこそ、人間のすべて。——コヘレト 12:13

若者たちの中にいるわたしの恋しい人は
森の中に立つりんごの木。
わたしはその木陰を慕って座り

甘い実を口にふくみました。——雅歌 2:3

おとめの歌

北風よ、目覚めよ。

南風よ、吹け。

わたしの園を吹き抜けて

香りを振りまいておくれ。

恋しい人がこの園をわがものとして

このみごとな実を食べてくださるように。——雅歌 4:16

若者の歌

気高いおとめよ

サンダルをはいたあなたの足は美しい。

ふっくらとしたももは

たくみの手に磨かれた彫り物。

秘められたところは丸い杯

かぐわしい酒に満ちている。

腹はゆりに囲まれた小麦の山。——雅歌 7:1-2

喜びに満ちた愛よ

あなたはなんと美しく楽しいおとめか。

あなたの立ち姿はなつめやし、乳房はその実の房。

なつめやしの木に登り

甘い実の房をつかんでみたい。

わたしの願いは

ぶどうの房のようなあなたの乳房

りんごの香りのようなあなたの息

うまいぶどう酒のようなあなたの口。

おとめの歌

それはわたしの恋しい人へ滑らかに流れ

眠っているあの人の唇に滴ります。——雅歌 7:7-10

あなたが、わたしの母の乳房を吸った
本当の兄だと思ふ人なら
わたしをとがめたりはしないでしょ
外であなたにお会いして
くちづけするわたしを見ても。
わたしを育ててくれた母の家に
あなたをお連れして
香り高いぶどう酒を
ざくろの飲み物を差し上げます。——雅歌 8:1-2

1.9 預言者たち

(編者註:) イザヤ書 29 章は、欽定訳でみると、

Woe to Ariel, to Ariel, the city where David dwelt! add ye year to year; let them kill sacrifices. — ISAIAH 29:1

という感じで始まる。これを重厚かつ朗々と朗読するのを想像すると……なるほど、と思えなくもないかな。

イザヤの召命

ウジヤ王が死んだ年のことである。

わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっばいに広がっていた。上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。彼らは互いに呼び交わし、唱えた。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。

主の栄光は、地をすべて覆う。」

この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。わたしは言った。

「災いだ。わたしは滅ぼされる。

わたしは汚れた唇の者。

汚れた唇の民の中に住む者。

しかも、わたしの目は

王なる万軍の主を仰ぎ見た。」——イザヤ 6:1-5

インマヌエル預言

ユダの王ウジヤの孫であり、ヨタムの子であるアハズの治世のことである。アラムの王レツインとレマルヤの子、イスラエルの王ペカが、エルサレムを攻めるため上って来たが、攻撃を仕掛けることはできなかった。——イザヤ 7:1

それゆえ、わたしの主が御自ら

あなたたちにしるしを与えられる。

見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み
その名をインマヌエルと呼ぶ。
災いを退け、幸いを選ぶことを知るようになるまで
彼は凝乳と蜂蜜を食べ物とする。

その子が災いを退け、幸いを選ぶことを知る前に、あなたの恐れる二人の王の領土は必ず捨てられる。——イザヤ 7:14-16

(編者註:) ここはややこしいので補足。アラムというのはダマスコ = ダマスカス、つまりシリアのこと。エフライムというのはイスラエルのことね。イザヤはユダの王アハズのところに赴いて、上の預言を伝えたわけ。

その日が来れば
主は口笛を吹いて
 エジプトの川の果てから蠅を
アッシリアの地から蜂を呼ばれる。——イザヤ 7:18

And it shall come to pass in that day, that the LORD shall hiss for the fly that is in the uttermost part of the rivers of Egypt, and for the bee that is in the land of Assyria. —— ISAIAH 7:18

見よ、主の日が来る
残忍な、怒りと憤りの日が。
大地を荒廃させ
そこから罪人を絶つために。——イザヤ 13:9

幼子たちは彼らの目の前で打ち碎かれ
どの家も強奪され、女たちは辱められる。——イザヤ 13:16

主はすべての国に向かって憤りを発し
怒りは、その全軍に及ぶ。
主は絶滅することを定め
彼らを屠るために渡された。

刺し貫かれた人々は投げ捨てられ
死骸は悪臭を放ち
山々はその血によって溶ける。——イザヤ 34:2-3

(編者註:) ここには原著を見ると引用箇所があるのだが、訳本にはない。原著から訳・引用しておく。

エジプトに対する悲観的な預言をドラマティックなものにするために、神さまはイザヤを裸で三年間歩かせる。——イザヤ 20:2-4

それに先立って、主はアモツの子イザヤを通して、命じられた。
「腰から粗布を取り去り、足から履物を脱いで歩け。」
彼はそのとおりにして、裸、はだしで歩き回った。
主は言われた。
「わたしの僕イザヤが、エジプトとクシュに対するしるしと前兆として、裸、はだしで三年間歩き回ったように、アッシリアの王は、エジプトの捕虜とクシュの捕囚を引いて行く。若者も老人も、裸、はだしで、尻をあらわし、エジプトの恥をさらしつつ行く。
彼らは自分たちの望みをかけていたクシュのゆえに、誇りとしていたエジプトのゆえに、恐れと恥をこうむるであろう。」——イザヤ 20:2-5

あなたの死者が命を得
わたしのしかばねが立ち上がりますように。
塵の中に住まう者よ、目を覚ませ、喜び歌え。
あなたの送られる露は光の露。
あなたは死霊の地にそれを降らせられます。——イザヤ 26:19

野の獣、山犬や駝鳥もわたしをあがめる。
荒れ野に水を、砂漠に大河を流れさせ
わたしの選んだ民に水を飲ませるからだ。

わたしはこの民をわたしのために造った。
彼らはわたしの栄誉を語らねばならない。——イザヤ 43:20-21

地の果てのすべての人々よ
わたしを仰いで、救いを得よ。
わたしは神、ほかにはいない。
わたしは自分にかけて誓う。
わたしの口から恵みの言葉が出されたならば
その言葉は決して取り消されない。
わたしの前に、すべての膝はかがみ
すべての舌は誓いを立て——イザヤ 45:22-23

こう言われる。
わたしはあなたを僕として
ヤコブの諸部族を立ち上がらせ
イスラエルの残りの者を連れ帰らせる。
だがそれにもまして
わたしはあなたを国々の光とし
わたしの救いを地の果てまで、もたらす者とする。——イザヤ 49:6

シオンは言う。
主はわたしを見捨てられた
わたしの主はわたしを忘れられた、と。
女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。
母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。
たとえ、女たちが忘れようとも
わたしがあなたを忘れることは決してない。——イザヤ 49:14-15

(編者註:) ここでの主張はさておき、原著にはこんな引用箇所はないんですけど。

お前たち、主を捨て、わたしの聖なる山を忘れ
禍福の神に食卓を調べ
運命の神に混ぜ合わせた酒を注ぐ者よ。
わたしはお前たちを剣に渡す。
お前たちは皆、倒され屠られる。
呼んでも答えず、語りかけても聞かず

わたしの目に悪とされることを行い
わたしの喜ばないことを選んだからである。——イザヤ 65:11-12

わたし自身がお前の着物の裾を顔まで上げ
お前の恥はあらわになった。——エレミヤ 13:26

見よ、わたしはお前に立ち向かうと
万軍の主は言われる。
わたしは、お前の裾を顔の上まで上げ
諸国の民にお前の裸を
もろもろの王国にお前の恥を見せる。——ナホム 3:5

わたしは、災いが速やかに来るよう
あなたに求めたことはありません。
痛手の日を望んだこともありません。
あなたはよくご存じです。
わたしの唇から出たことは
あなたの御前にあります。——エレミヤ 17:16

わたしを迫害する者が辱めを受け
わたしは辱めを受けないようにしてください。
彼らを恐れさせ
わたしを恐れさせないでください。
災いの日を彼らに臨ませ
彼らをどこまでも打ち砕いてください。——エレミヤ 17:18

「主はわたしにこう言われる。軛の横木と綱を作って、あなたの首にはめよ。——エレミヤ 27:2

ユダの王ゼデキヤにも、わたしは同じような言葉をすべて語った。
「首を差し出して、バビロンの王の軛を負い、彼とその民に仕えよ。そうすれば命を保つことができる。どうして、あなたもあなたの民も、剣、飢饉、疫病などで死んでよいで

あろうか。主がバビロンの王に仕えようとしないうちに宣言されたように、バビロンの王に仕えるな、と言っている預言者たちの言葉に従ってはならない。彼らはあなたたちに偽りの預言をしているのだ。主は言われる。わたしは彼らを派遣していないのに、彼らはわたしの名を使って偽りの預言をしている。彼らに従うならば、わたしはあなたたちを追い払い、あなたたちとあなたたちに預言している預言者を滅ぼす。」——エレミヤ 27:12-15

すると預言者ハナンヤは、預言者エレミヤの首から軛をはずして打ち砕いた。そして、ハナンヤは民すべての前で言った。

「主はこう言われる。わたしはこのように、二年のうちに、あらゆる国々の首にはめられているバビロンの王ネブカドネツァルの軛を打ち砕く。」

そこで、預言者エレミヤは立ち去った。——エレミヤ 28:10-11

更に、預言者エレミヤは、預言者ハナンヤに言った。

「ハナンヤよ、よく聞け。主はお前を遣わされていない。お前はこの民を安心させようとしているが、それは偽りだ。それゆえ、主はこう言われる。『わたしはお前を地の面から追い払う』と。お前は今年うちに死ぬ。主に逆らって語ったからだ。」

預言者ハナンヤは、その年の七月に死んだ。——エレミヤ 28:15-17

主が課せられた務めを

おろそかにする者は呪われよ。

主の剣をとどめて

流血を避ける者は呪われよ。——エレミヤ 48:10

エルサレムの陥落と捕囚

ゼデキヤは二十一歳で王となり、十一年間エルサレムで王位にあった。その母は名をハムタルといい、リブナ出身のイルメヤの娘であった。彼はヨヤキムが行ったように、主の目に悪とされることをことごとく行なった。エルサレムとユダは主の怒りによってこのような事態になり、ついにその御前から投げ捨てられることになった。ゼデキヤはバビロンの王に反旗を翻した。

ゼデキヤの治世、第九年十月十日に、バビロンの王ネブカドレツァルは全軍を率いてエルサレムに到着し、陣を敷き、周りに堡壘を築いた。都は包囲され、ゼデキヤ王の第十一年に至った。四月九日に、都の中で飢えが厳しくなり、国の民の食糧が尽き、都の一角が破られた。戦士たちは皆逃げ出した。彼らは夜中に、カルデア人が都を取り巻いていた

が、王の園に近い二つの城壁の間にある門を通して都を出、アラバへ向かって行った。カルデア軍は王の後を追ひ、エリコの荒れ地でゼデキヤに追いついた。王の軍隊はすべて王を離れ去ってちりぢりになった。王は捕らえられ、ハマト地方のリブラにいるバビロンの王のもとに連れて行かれ、裁きを受けた。バビロンの王は、ゼデキヤの目の前で彼の王子たちを殺し、また、ユダの將軍たちもすべてリブラで殺した。その上で、バビロンの王はゼデキヤの両眼をつぶし、青銅の足枷をはめ、彼をバビロンに連れて行き、死ぬまで牢獄に閉じ込めておいた。

五月十日、バビロンの王ネブカドレツァルの第十九年のこと、バビロンの王の側近である親衛隊の長ネブザルアダンがエルサレムに来て、主の神殿、王宮、エルサレムの家屋をすべて焼き払った。大いなる家屋もすべて、火を放って焼き払った。また、親衛隊の長と共に来たカルデア人は、軍をあげてエルサレムの周囲の城壁をすべて取り壊した。貧しい民の一部、民のうち都に残っていたほかの者、バビロンの王に投降した者、ほかの技師たちは親衛隊の長ネブザルアダンによって、捕囚とされ、連れ去られた。この地の貧しい民の一部は、親衛隊の長ネブザルアダンによってぶどう畑と耕地にそのまま残された。

カルデア人は主の神殿の青銅の柱、台車、主の神殿にあった青銅の「海」を砕いて、その青銅をことごとくバビロンへ運び去り、壺、十能、芯切り鋏、鉢、柄杓など、祭儀用の青銅の器をことごとく奪い取った。また親衛隊の長は、小鉢、火皿、鉢、壺、燭台、柄杓、水差しなど、金製品も銀製品もすべて奪い取った。ソロモンが主の神殿のために造らせた二本の柱、一つの「海」、それを支える青銅の牛十二頭および台車についていえば、これらすべてのものの青銅の重量は量りきれなかった。柱についていえば、一本の柱の高さは十八アンマ、周囲は十二アンマ、空洞で厚みは指四本分であった。その上に青銅の柱頭があり、一方の柱頭の高さは五アンマ、柱頭の周りには格子模様の浮き彫りとざくろがあって、このすべてが青銅であった。もう一本の柱も同様に出来ていて、ざくろもそうであった。九十六個のざくろがぶら下がっており、格子模様の浮き彫りの周囲にあるざくろは全部で百個であった。

親衛隊の長は祭司長セラヤ、次席祭司ツェファンヤ、入り口を守る者三人を捕らえた。また、彼は戦士の監督をする宦官一人、都にいた王の側近七人、国の民の徴兵を担当する將軍の書記官、および都にいた国の民六十人を都から連れ去った。親衛隊の長ネブザルアダンは彼らを捕らえて、リブラにいるバビロンの王のもとに連れて行った。バビロンの王はハマト地方のリブラで彼らを打ち殺した。こうしてユダは自分の土地を追われて捕囚となった。

ネブカドレツァルが捕囚として連れ去った民の数をここに記すと、第七年に連れ去ったユダの人々が三千二十三人、ネブカドレツァルの第十八年にエルサレムから連れ去った者が八百三十二人であった。ネブカドレツァルの第二十二年には、親衛隊の長ネブザルアダンがユダの人々七百四十五人を捕囚として連れ去った。総数は四千六百人である。

ヨヤキン王の名誉回復

ユダの王ヨヤキンが捕囚となって三十七年目の十二月二十五日に、バビロンの王エビル・メロダクは、その即位の年にユダの王ヨヤキンに情けをかけ、彼を出獄させた。バビロンの王は彼を手厚くもてなし、バビロンで共にいた王たちの中で彼に最も高い位を与えた。ヨヤキンは獄中の衣を脱ぎ、生きている間、毎日欠かさず王と食事を共にすることとなった。彼は生きている間、死ぬ日まで毎日、日々の糧を常にバビロンの王から支給された。
——エレミヤ 52

わたしが見ていると、北の方から激しい風が大いなる雲を巻き起こし、火を発し、周囲に光を放ちながら吹いてくるのではないか。その中、つまりその火の中には、琥珀金の輝きのようなものがあった。またその中には、四つの生き物の姿があった。その有様はこうであった。彼らは人間のようのものであった。それぞれが四つの顔を持ち、四つの翼を持っていた。脚はまっすぐで、足の裏は子牛の足の裏に似ており、磨いた青銅が輝くように光を放っていた。また、翼の下には四つの方向に人間の手があった。四つとも、それぞれの顔と翼を持っていた。翼は互いに触れ合っていた。それらは移動するとき向きを変えず、それぞれ顔の向いている方向に進んだ。その顔は人間の顔のようであり、四つとも右に獅子の顔、左に牛の顔、そして四つとも後ろには鷲の顔を持っていた。顔はそのようになっていた。翼は上に向かって広げられ、二つは互いに触れ合い、ほかの二つは体を覆っていた。それらはそれぞれの顔の向いている方向に進み、霊の行かせる所へ進んで、移動するとき向きを変えることはなかった。生き物の姿、彼らの有様は燃える炭火の輝くようであり、松明の輝くように生き物の間を歩き巡っていた。火は光り輝き、火から稲妻が出ていた。そして生き物もまた、稲妻の光るように出たり戻ったりしていた。

わたしが生き物を見ていると、四つの顔を持つ生き物の傍らの地に一つの車輪が見えた。それらの車輪の有様と構造は、緑柱石のように輝いていて、四つとも同じような姿をしていた。その有様と構造は車輪の中にもう一つの車輪があるかのようなようであった。それらが移動するとき、四つの方向のどちらにも進むことができ、移動するとき向きを変えることはなかった。車輪の外枠は高く、恐ろしかった。車輪の外枠には、四つとも周囲一面に目がつけられていた。生き物が移動するとき、傍らの車輪も進み、生き物が地上から引き上げられるとき、車輪も引き上げられた。それらは霊が行かせる方向に、霊が行かせる所にはどこにでも進み、車輪もまた、共に引き上げられた。生き物の霊が、車輪の中にあつたからである。生き物が進むときには車輪も進み、生き物が止まるときには車輪も止まった。また、生き物が地上から引き上げられるとき、車輪も共に引き上げられた。生き物の霊が、車輪の中にあつたからである。——エゼキエル 1:4-21

生き物の頭上にある大空の上に、サファイアのように見える王座の形をしたものがあり、王座のようなものの上には高く人間のように見える姿をしたものがあった。腰のように見えるところから上は、琥珀金が輝いているようにわたしには見えた。それは周りに燃えひろがる火のように見えた。腰のように見えるところから下は、火のように見え、周囲に光を放っていた。周囲に光を放つ様は、雨の日の雲に現れる虹のように見えた。これが主の栄光の姿の有様であった。わたしはこれを見てひれ伏した。そのとき、語りかける者があって、わたしはその声を聞いた。——エゼキエル 1:26-28

わたしが見ていると、人の有様のような姿があるではないか。その腰のように見えるところから下は火であり、腰から上は琥珀金の輝きのように光輝に満ちた有様をしていた。——エゼキエル 8:2

彼はわたしに言われた。「人の子よ、目の前にあるものを食べなさい。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語りなさい。」わたしが口を開くと、主はこの巻物をわたしに食べさせて、言われた。「人の子よ、わたしが与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。」わたしがそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった。——エゼキエル 3:1-3

あなたは小麦、大麦、そら豆、ひら豆、きび、裸麦を取って、一つの器に入れ、パンを作りなさい。あなたが脇を下にして横たわっている日数、つまり三百九十日間、それを食べなさい。あなたの食べる食物の分量は一日につき二十シェケルで、それを一定の間隔をおいて食べなければならない。あなたの飲む水の分量は六分の一ヒンで、それを一定の間隔をおいて飲まなければならない。大麦のパン菓子のようにそれを食べなければならない。それを人々の目の前で人糞で焼きなさい。

更に主は言われた。「このようにイスラエルの人々はわたしが追いやる先の国々で、汚れたパンを食べる。」そこで、わたしは言った。「ああ、主なる神よ、わたしはわが身を汚したことはありません。若いころから今に至るまで、死んだ動物や、野獣が引き裂いた動物の肉を食べたことはなく、定められた日数を過ぎたいけにえの肉を口に入れたこともありません。」

主はわたしに言われた。「あなたが人糞の代わりに牛糞を用いることをわたしは許す。あなたはその上でパンを焼くがよい。」——エゼキエル 4:9-15

(編者註:) これに関しては山形氏の書いている通り。中東でも(乾燥させた)牛糞は繊維質の多い燃料として普通に用いられている。

人の子よ、あなたは鋭い剣を取って理髪師のかみそりのようにそれを手に持ち、あなたの髪の毛とひげをそり、その毛を秤にかけて分けなさい。その三分の一は包囲の期間が終わったときに都の中で火で燃やし、ほかの三分の一は都の周りで剣で打ち、残り三分の一は風に乗せて散らしなさい。わたしは剣を抜いてその後を追う。あなたはそこから毛を少し取って着物の裾に包み、更にその幾らかを取って火に投げ入れ、火で燃やしなさい。そこからまた火が出て、イスラエルの全家に及ぶであろう。——エゼキエル 5:1-4

エルサレムの墮落

第六年の六月五日のことである。わたしは自分の家に座っており、ユダの長老たちがわたしの前に座っていた。そのとき、主なる神の御手がわたしの上を下った。わたしが見ていると、人の有様のような姿があるではないか。その腰のように見えるところから下は火であり、腰から上は琥珀金の輝きのように光輝に満ちた有様をしていた。彼が手の形をしたものを差し伸べて、わたしの髪の毛の房をつかむと、霊はわたしを地と天の間に引き上げ、神の幻のうちにわたしをエルサレムへと運び、北に面する内側の門の入り口に連れて行った。そこには、激怒を起こさせる像が収められていた。——エゼキエル 8:1-3

しかし、わたしは彼らの中から少数の人々を残し、剣と飢えと疫病から守る。彼らが自分たちの行った忌まわしいすべてのことを、行く先々の国の中で語り聞かせるためである。そのとき、彼らは、わたしが主であることを知るようになる。」——エゼキエル 12:16

エルサレムの背信

主の言葉がわたしに臨んだ。「人の子よ、エルサレムにその忌まわしいことを知らせなさい。あなたは言わねばならない。主なる神は、エルサレムに対してこう言われる。お前の出身、お前の生まれはカナン人の地。父はアモリ人、母はヘト人である。誕生について言えば、お前の生まれた日に、お前のへその緒を切ってくれる者も、水で洗い、油を塗ってくれる者も、塩でこすり、布にくるんでくれる者もいなかった。だれもお前に目をかけず、これらのことの一つでも行って、憐れみをかける者はいなかった。お前が生まれた日、お前は嫌われて野に捨てられた。しかし、わたしがお前の傍らを通って、お前が自分の血の中でもがいているのを見たとき、わたしは血まみれのお前に向かって、『生きよ』と言った。血まみれのお前に向かって、『生きよ』と言ったのだ。わたしは、野の若草のようにお前を榮えさせた。それでお前は、健やかに育ち、成熟して美しくなり、胸の形も整い、髪も伸びた。だが、お前は裸のままであった。その後、わたしがお前の傍らを通ってお前を見たときには、お前は愛される年ごろになっていた。そこでわたしは、衣の裾を広げて

お前に掛け、裸を覆った。わたしはお前に誓いを立てて、契約を結び、お前は、わたしのものになった、と主なる神は言われる。

わたしはお前を水で洗い、血を洗い落とし、油を塗った。そして、美しく織った服を着せ、上質の革靴を履かせ、亜麻布を頭にかぶらせ、絹の衣を掛けてやった。わたしはまた、装身具をお前につけ、腕には腕輪、首には首飾りをつけた。また、鼻に飾りの輪を、耳には耳輪を、頭には美しい冠をかぶらせた。こうして、お前は金銀で身を飾り、亜麻布と絹とで美しく織った服を身に着けた。そして小麦粉と蜂蜜と油を食物とした。こうしてお前は非常に美しくなり、女王のようになった。その美しさのゆえに、お前の名は国々の間に広まった。わたしがお前を装わせた装いには、少しも欠けるところがなかったからである、と主なる神は言われる。

それなのに、お前はその美しさを頼みとし、自分の名声のゆえに姦淫を行った。お前は通りかかる者すべてにこびを売り、身をまかせた。また、自分の着物の中から選び出して、華やかな床をしつらえ、その上で姦淫を行った。このようなことは、かつてなかったし、これからもあってはならないことだ。お前はまた、わたしが与えた金銀の美しい品々を取って男の像を造り、それと姦淫を行った。お前は美しく織った服をとってそれらの像に着せ、わたしの油と香をその前に供えた。また、お前はわたしが与えた食物、お前を養ってきた小麦粉、油、蜜をその前に供えて、宥めの香りとした、と主なる神は言われる。

お前はまた、わたしのために産んだお前の息子、娘たちをとり、偶像の食物として供えた。お前の姦淫はまだ足りないのか。お前はわたしの子供たちを殺し、火に焼いて偶像にささげた。お前は、あらゆる忌まわしいことや姦淫を行っているあいだ、幼いときに裸で血の中をもがいていたことを思い起こさなかった。

ああ、なんと災いなことか、お前は、と主なる神は言われる。すべての悪事の後に、お前は祭儀台を設け、すべての広場に高い所を造り、すべての四つ辻には高い所を設けて、お前の美しさを汚した。また、傍らを通るすべての者に両脚を広げ、姦淫を重ねた。お前はまた、肉欲の強い隣国エジプト人たちと姦淫を行い、姦淫を重ねてわたしを怒らせた。わたしは手をお前の上に伸ばして、お前の分け前を奪い、敵であるペリシテの女たちに渡し、その意のままにさせる。彼女たちはお前のみだらな行いにあきれ果てている。それでも、お前は飽き足らず、アシュルの人々と姦淫を行った。彼らと姦淫を行ってもまだ飽きず、商業の地カルデアと淫行を重ねたが、それでもなお飽き足らなかった。お前の心はなんとひどい熱病にかかっていることか、と主なる神は言われる。厚かましい淫婦が行うこれらすべてのことをしているとは。お前はすべての四つ辻に祭儀台を設け、すべての広場に高い所を造った。お前は報酬を受け取ることを潔しとしなかったから、娼婦とは違って、お前は、自分の夫の代わりに外国の男と通じる淫行の妻だ。すべての娼婦に対して人は金を払う。ところが、お前はすべてお前を愛する者に、お前の方から贈り物をし、賄賂を贈り、姦淫をするために人々を四方からお前のもとに来させる。お前の姦淫は他の女

たちとは逆である。だれも、お前を誘って姦淫したのではない。お前が報酬を支払われるのではなく、お前の方から報酬を支払っているところが逆である。

それゆえ、姦淫の女よ、主の言葉を聞け。主なる神はこう言われる。お前が、愛を求める者と姦淫するために、欲情を注ぎ、裸をさらしたために、また、すべての忌まわしい偶像と、それにささげたお前の息子たちの血のゆえに、わたしは、お前がもてなしたすべての愛人たち、お前の好きだった者も嫌いだった者もすべて集める。わたしは彼らを至るところからお前のもとに集め、お前の裸を彼らにさらす。彼らはお前の裸をくまなく見る。わたしは、お前を淫行と流血のゆえに裁く。また、怒りと熱情をもって、お前の流血に報いる。更にわたしは、お前を彼らの手に渡す。彼らはお前の祭儀台を倒し、高い所を破壊し、お前の着物をはぎ取り、美しい飾りを取り去ってお前を裸にする。彼らは群衆を駆り立ててお前に向かわせ、石を投げさせ、剣で切りつけさせる。——エゼキエル 16:1-40

オホラとオホリバ

主の言葉がわたしに臨んだ。「人の子よ、かつて二人の女性がいた。彼女たちは同じ母の娘であった。彼女たちはエジプトで淫行を行った。まだ若いのに淫行を行った。その地で、彼女たちの乳房は握られ、処女の乳首は摘まれた。彼女たちの名は、姉はオホラ、妹はオホリバといった。彼女たちはわたしのものとなり、息子、娘たちを産んだ。彼女たちの名前であるオホラはサマリア、オホリバはエルサレムのことである。

オホラはわたしのもとにいながら、姦淫を行い、その愛人である戦士アッシリア人に欲情を抱いた。それは紫の衣を着た高官、知事、長官という皆、好ましい男たち、馬に乗る騎士たちであった。彼女はこの者どもと姦淫を行ったが、彼らは皆、アッシリアの支配者たちであった。彼女は欲情を抱いていたすべての者、およびその偶像によって身を汚した。彼女はエジプト以来の淫行から離れなかった。人々は彼女の若いときに彼女と寝て、処女の乳首を摘み、淫行を彼女に注いだからである。それゆえ、わたしは彼女をその愛人の手に、彼女が欲情を抱いたアッシリアの人々の手に渡した。彼らは彼女の裸をあらわにし、彼女の息子、娘たちを奪い、ついに彼女を剣で殺した。このように彼らは彼女を裁き、彼女は女たちの物笑いとなった。

妹オホリバはこれを見たが、彼女の欲情は姉よりも激しく、その淫行は姉よりもひどかった。彼女はアッシリアの人々に欲情を抱いた。彼らは知事、長官、戦士、盛装した者、馬に乗る騎兵たちで、皆、好ましい男たちであった。彼女が自らを汚すのをわたしは見たが、二人とも同じ仕方であった。彼女は淫行を更に加え、次には壁に浮き彫りされた人々、朱色に描かれたカルデア人の像に目を留めた。彼らは腰に帯を締め、頭には端を垂らすターバンを巻いており、皆、指揮官のようであった。彼らはカルデア出身のバビロン人の様子をしていて、彼女が彼らの有様に目を留めると欲情を抱き、使者をカルデアの彼

らのもとに遣わした。そこで、バビロンの人々は愛の床を共にするために彼女のもとに來り、淫行をもって彼女を汚した。彼女は彼らと共に自分を汚したが、やがてその心は彼らから離れた。彼女がこれ見よがしに姦淫を行い、裸をあらわにしたので、わたしの心は、姉から離れたように彼女からも離れた。彼女は、かつてエジプトの地で淫行を行った若いころを思い起こして、淫行を重ねた。彼女は、ろばのような肉をもち、馬のような精をもった者の側女であることに欲情を燃やした。このように、彼女はエジプトでその若い乳房を握られ、乳首を摘まれた若い日の不貞を再び味わった。

それゆえ、オホリバよ。主なる神はこう言われる。わたしは、お前の心が離れた愛人どもを呼び起こし、お前に立ち向かわせ、彼らを周囲からお前のもとに來させる。それはバビロンの人々とカルデアのすべての人々、ペコド、シヨア、コアおよびアッシリアのすべての人々である。彼らは皆、好ましい男たちで、知事、長官、指揮官、戦士、すべて馬に乗る者たちである。彼らは、武装した戦車、車、軍勢をもってお前を攻め、大盾、小盾、兜をもってお前を取り囲む。わたしが裁きを彼らにゆだねたので、彼らは自分たちの裁きの仕方でお前を裁く。わたしは熱情をもってお前に立ち向かい、彼らは憤りをもってお前をあしらう。彼らはお前の鼻と耳をそぎ取り、残った者は剣に倒れる。彼らはお前の息子、娘たちを連れ去り、残った者は火で焼き尽くされる。彼らはお前の衣服をはぎ取り、美しい飾りを奪う。わたしはお前の不貞と、エジプトの地にいたとき以来の淫行をやめさせる。お前はそれらに目を向けず、もはやエジプトを思い起こさない。

主なる神はこう言われる。わたしはお前が憎む者の手に、既にお前の心が離れてしまった者の手にお前を渡す。彼らは憎しみをもってお前をあしらい、労苦によって得たものを奪い、お前を裸にして捨てる。お前の淫行と不貞と姦淫は、裸にされて暴かれる。これらのことが臨むのは、お前が諸国民と姦淫を行い、彼らの偶像によって身を汚したためである。お前は姉の歩んだ道を歩んだので、わたしは彼女の杯をお前の手に渡す。

主なる神はこう言われる。

姉の杯を、お前は飲まねばならぬ

深くて大きい杯を。

お前は嘲られ、侮られる。

杯は満ち溢れている。

お前は酔いと悲しみで満たされる。

恐れと滅びの杯

お前の姉サマリアの杯

お前はそれを飲み干して

杯のかけらまでかまねばならない。

そして自分の乳房をかき裂く。

わたしがこれを語ったからだ

主なる神が言われる。

それゆえ、主なる神はこう言われる。お前はわたしを忘れ、わたしを後ろに投げ捨てたのだから、不貞と淫行の責めを自分で負わねばならぬ。

主はわたしに言われた。人の子よ、あなたはオホラとオホリバを裁くのか。あなたは彼女らにその忌まわしいことを告げ知らせるがよい。彼女たちは姦淫を行い、その手には血がある。彼女たちは自分の偶像と姦淫を行った。そしてわたしのために産んだ彼女たちの息子らさえ、食物として偶像にささげた。更に、彼女たちはわたしに対して次のことを行った。すなわち、その日にわたしの聖所を汚し、わたしの安息日を汚した。彼女たちはその息子を殺して偶像にささげたその日に、わたしの聖所に来てそれを汚した。このようなことを、彼女たちはわたしの家の中で行った。また、彼女たちは遠くから来る者たちのために人を遣わした。彼らのもとに使者が遣わされた。そして、彼らがやって来ると、彼女は彼らのために身を洗い、目にくま取りをし、飾り物で身を飾り、華やかなベッドに座った。また、その前に宴の座を用意し、わたしの香と油をそこに置いた。そこには、軽薄な群衆、荒れ野から連れて来られた多くの人々の騒ぎの聲が起こった。彼らは彼女たちの手に、腕輪をはめ、頭には美しい冠をかぶせた。わたしは、淫行に疲れ果てた彼女について言った。今も彼らは彼女と淫行を重ねるのか。また彼女も。やはり、彼らは彼女のもとへ行った。遊女のもとに行くように、彼らはこの不貞の女オホラとオホリバのもとへ行った。正しい人々は、姦淫の女の裁きと血を流す者の裁きに従って、彼女たちを裁く。彼女たちが姦淫の女であり、その手が血に染まっているからである。

主なる神はこう言われる。彼女たちのために会衆を召集せよ。彼女らを恐怖と略奪の的とせよ。会衆は彼女らを石で打ち殺し、剣で切り倒す。また、彼女らの息子、娘たちを殺し、家を火で焼く。こうして、わたしはこの地の不貞をやめさせる。すべての女たちはこれに学び、お前たちの不貞に従うことはない。お前たちの不貞の報いはお前たちに帰し、お前たちは偶像による過ちの責めを負わねばならない。そのとき、お前たちはわたしが主なる神であることを知るようになる。」——エゼキエル 23

洪水

さて、地上に人が増え始め、娘たちが生まれた。神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、おのおの選んだ者を妻にした。主は言われた。「わたしの霊は人の中に永久にとどまるべきではない。人は肉にすぎないのだから。」こうして、人の一生は百二十年となった。

当時もその後も、地上にはネフィリムがいた。これは、神の子らが人の娘たちのところに入って産ませた者であり、大昔の名高い英雄たちであった。——創世記 6:1-4

しかし、イスラエルの家は荒れ野でわたしに背き、人がそれを行えば生きることができ、わたしの掟に歩まず、わたしの裁きを退け、更に、わたしの安息日を甚だしく汚した。それゆえ、わたしは荒れ野で、憤りを彼らの上に注ぎ、彼らを滅ぼし尽くそうとした。しかし、わが名のために、わたしがイスラエルを連れ出したときに見ていた諸国民の前で、わが名を汚すことがないようにした。——エゼキエル 20:13-14

わたしもまた、良くない掟と、それによって生きることができない裁きを彼らに与えた。また、彼らが初子をすべてささげたとき、わたしは彼らの献げ物によって彼らを汚した。それは、わたしが彼らを荒廃させ、わたしが主であることを知らせるためであった。——エゼキエル 20:25-26

お前たちは、『我々は諸国民のように、また、世界各地の種族のように、木や石の偶像に仕えよう』と言っているが、お前たちが心に思うそのようなことは決して実現しない。わたしは生きていて、と主なる神は言われる。わたしは必ず、強い手と伸ばした腕と、溢れる憤りをもって、お前たちを治める。——エゼキエル 20:32-33

エゼキエルの妻の死

主の言葉がわたしに臨んだ。「人の子よ、わたしはあなたの目の喜びを、一撃をもってあなたから取り去る。あなたは嘆いてはならない。泣いてはならない。涙を流してはならない。声をあげずに悲しめ。死者の喪に服すな。頭にターバンを巻き、足に靴を履きなさい。口ひげを覆うな。嘆きのパンを食べてはならない。」

朝、わたしは人々に語っていた。その夕、わたしの妻は死んだ。翌朝、わたしは命じられたとおりに行った。人々はわたしに尋ねた。「あなたが行っているこれらの事は、我々にどんな意味があるのか告げてくれないか」と。そこでわたしは、彼らに語った。「主の言葉がわたしに臨んだ。イスラエルの家に言いなさい。主なる神はこう言われる。わたしは、わたしの聖所を汚す。それはお前たちの誇る砦であり、目の喜び、心の慕うものであった。お前たちが残してきた息子、娘たちは、剣によって滅びる。わたしがしたように、お前たちもするようになる。お前たちは口ひげを覆ってはならない。嘆きのパンを食べてはならない。頭にターバンを巻き、足に靴を履け。また、嘆いてはならない。泣いてはならない。お前たちは自分の罪のゆえに衰え、互いに嘆くようになる。エゼキエルは、お前たちにとってしるしとなる。すべて彼が行ったように、お前たちもするであろう。すべてが実現したとき、お前たちは、わたしが主なる神であることを知るようになる。」——エゼキエル 24:15-24

アンモン人への預言

主の言葉がわたしに臨んだ。「人の子よ、顔をアンモン人に向けて、彼らに預言せよ。アンモン人に言いなさい。主なる神の言葉を聞け、主なる神はこう言われる。お前はわたしの聖所が汚され、イスラエルの地が荒らされ、ユダの家が捕囚となって行ったことを、あはは、と言って嘲った。それゆえ、わたしはお前を東の人々に渡して彼らに所有させる。彼らはお前の中に陣営を張り、住まいを定める。彼らはお前の果実を食べ、お前の乳を飲む。わたしは都ラバを、らくだが草をはむ所とし、アンモンの地を羊の憩う所とする。そのとき、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。

主なる神はこう言われる。お前は手を打ち、足を踏み鳴らし、イスラエルの地に対する嘲りの思いに満ちて喜んだ。それゆえ、わたしはお前に向かって手を伸ばし、お前を国々の略奪にゆだね、諸国民の中から断ち、諸国から一掃して滅ぼし尽くす。そのとき、お前はわたしが主であることを知るようになる。」

モアブへの預言

主なる神はこう言われる。「モアブとセイルは、『ユダの家も他のすべての国のようになった』と言った。それゆえ、わたしはモアブの脇腹を引き裂き、この国の町々をすべて、その誇りであるベト・エシモト、バアル・メオン、キルヤタイムをはじめひとつ残らず滅ぼし尽くす。わたしは、アンモン人と共にモアブを東の人々に渡して所有させる。アンモン人が諸国民の間で思い起こされることはない。わたしはモアブに裁きを行う。そのとき、彼らはわたしが主であることを知るようになる。」

エドムへの預言

主なる神はこう言われる。「エドムはユダの家に復讐をした。彼らはその復讐によって、大いに罪を犯した。それゆえ、主なる神はこう言われる。わたしはエドムに向かって手を伸ばし、その中から人と獣を断って荒地とする。彼らはテマンからデダンにいたるまで剣で倒れる。わたしは、わが民イスラエルによってエドムに復讐する。彼らは、わたしの怒りと憤りのままにエドムに対して行う。そのとき、彼らはわたしの復讐を知るようになる」と主なる神は言われる。

ペリシテへの預言

主なる神はこう言われる。「ペリシテ人は復讐し、嘲りの思いをもって大いに仇を報い、昔からの憎しみにかられて滅ぼそうとした。それゆえ、主なる神はこう言われる。わたしは手をペリシテ人に向かって伸ばし、クレタ人を断ち、海辺に残っている者を一掃する。わたしは、彼らを憤りをもって懲らしめ、大いに復讐する。わたしが彼らに仇を報いるとき、彼らはわたしが主であることを知るようになる。」——エゼキエル 25:1-17

わたしは、お前を大地に投げ出し

野に投げ捨てる。
空のすべての鳥をお前の上にやどらせ
地上のすべての獣にお前を
食べさせて、飽かせる。
わたしはお前の肉を山の上に捨て
お前の腐った肉で谷を満たす。
わたしはお前の流れ出た血を
大地にのませ、山に注ぐ。
お前の血で谷間も満たされる。——エゼキエル 32:4-6

人の子よ、わたしはあなたをイスラエルの家の見張りとした。あなたが、わたしの口から言葉を聞いたなら、わたしの警告を彼らに伝えねばならない。わたしが悪人に向かって、『悪人よ、お前は必ず死なねばならない』と言うとき、あなたが悪人に警告し、彼がその道から離れるように語らないなら、悪人は自分の罪のゆえに死んでも、血の責任をわたしはお前の手に求める。しかし、もしあなたが悪人に対してその道から立ち帰るよう警告したのに、彼がその道から立ち帰らなかったのなら、彼は自分の罪のゆえに死に、あなたは自分の命を救う。——エゼキエル 33:7-9

人の子よ、あなたの同胞に言いなさい。正しい人の正しさも、彼が背くときには、自分を救うことができない。また、悪人の悪も、彼がその悪から立ち帰るときには、自分をつまずかせることはない。正しい人でも、過ちを犯すときには、その正しさによって生きることができない。正しい人に向かって、わたしが、『お前は必ず生きる』と言ったとしても、もし彼が自分自身の正しさに頼って不正を行うなら、彼のすべての正しさは思い起こされることがなく、彼の行う不正のゆえに彼は死ぬ。また、悪人に向かって、わたしが、『お前は必ず死ぬ』と言ったとしても、もし彼がその過ちから立ち帰って正義と恵みの業を行うなら、すなわち、その悪人が質物を返し、奪ったものを償い、命の掟に従って歩き、不正を行わないなら、彼は必ず生きる。死ぬことはない。彼の犯したすべての過ちは思い起こされず、正義と恵みの業を行った者は必ず生きる。それなのに、あなたの同胞は言っている。『主の道は正しくない』と。しかし正しくないのは彼らの道である。正しい人でも、正しさから離れて不正を行うなら、その不正のゆえに彼は死ぬ。また、悪人でも、悪から離れて正義と恵みの業を行うなら、それゆえに彼は生きる。それなのに、お前たちは言っている。『主の道は正しくない』と。イスラエルの家よ、わたしは人をそれぞれの道に従って裁く。』——エゼキエル 33:12-20

悪人であっても、もし犯したすべての過ちから離れて、わたしの掟をことごとく守り、正義と恵みの業を行うなら、必ず生きる。死ぬことはない。彼の行ったすべての背きは思い起こされることなく、行った正義のゆえに生きる。わたしは悪人の死を喜ぶだろうか、と主なる神は言われる。彼がその道から立ち帰ることによって、生きることを喜ばないだろうか。

しかし、正しい人でも、その正しさから離れて不正を行い、悪人がするようなすべての忌まわしい事を行うなら、彼は生きることができようか。彼の行ったすべての正義は思い起こされることなく、彼の背信の行為と犯した過ちのゆえに彼は死ぬ。

それなのにお前たちは、『主の道は正しくない』と言う。聞け、イスラエルの家よ。わたしの道が正しくないのか。正しくないのは、お前たちの道ではないのか。正しい人がその正しさから離れて不正を行い、そのゆえに死ぬなら、それは彼が行った不正のゆえに死ぬのである。しかし、悪人が自分の行った悪から離れて正義と恵みの業を行うなら、彼は自分の命を救うことができる。彼は悔い改めて、自分の行ったすべての背きから離れたのだから、必ず生きる。死ぬことはない。それなのにイスラエルの家は、『主の道は正しくない』と言う。イスラエルの家よ、わたしの道が正しくないのか。正しくないのは、お前たちの道ではないのか。——エゼキエル 18:21-29

それゆえ、彼らにこう言いなさい。主なる神はこう言われる。わたしは生きている。廃虚にいる者たちは必ず剣に倒れる。野にいる者はすべて、獣に餌食として与え、砦と洞穴にいる者たちは疫病によって死ぬ。わたしはこの土地を荒れ地とし、荒廃した土地とする。この土地が誇った力ほうせ、イスラエルの山々は荒れ果て、そこを通る者はなくなる。彼らが行ったすべての忌まわしいことのゆえに、わたしがこの土地を荒れ地とし、荒廃した地にするとき、彼らはわたしが主であることを知るようになる。——エゼキエル 33:27-29

それゆえ、イスラエルの家に言いなさい。主なる神はこう言われる。イスラエルの家よ、わたしはお前たちのためではなく、お前たちが行った先の国々で汚したわが聖なる名のために行う。わたしは、お前たちが国々で汚したため、彼らの間で汚されたわが大いなる名を聖なるものとする。わたしが彼らの目の前で、お前たちを通して聖なるものとされるとき、諸国民は、わたしが主であることを知るようになる、と主なる神は言われる。——エゼキエル 36:22-23

わたしがこれを行うのは、お前たちのためではないことを知れ、と主なる神は言われる。イスラエルの家よ、恥じるがよい。自分の歩みを恥ずかしく思え。——エゼキエル 36:32

彼らが内庭の門に入るときは、亜麻布の衣服を着なければならない。内庭の門と神殿で仕えるときは、羊毛のものを身に着けてはならない。頭には亜麻布のターバンをかぶり、腰には亜麻布の短いズボンをはかねばならない。汗が出るようなものを着てはならない。——エゼキエル 44:17-18

彼らが民のいる外庭に出て行くときは、務めを行うときに着用した衣服を脱ぎ、神聖な部屋に置き、別の衣服を着なければならない。彼らとその衣服で民に神聖さを移すことがないためである。——エゼキエル 44:19

ダニエルは宮廷の肉類と酒で自分を汚すまいと決心し、自分を汚すようなことはさせないでほしいと侍従長に願い出た。神の御計らいによって、侍従長はダニエルに好意を示し、親切にした。侍従長はダニエルに言った。

「わたしは王様が恐ろしい。王様御自身がお前たちの食べ物と飲み物をお定めになったのだから。同じ年ごろの少年に比べてお前たちの顔色が悪くなったら、お前たちのためにわたしの首が危うくなるではないか。」

ダニエルは、侍従長が自分たち四人の世話係に定めた人に言った。

「どうかわたしたちを十日間試してください。その間、食べる物は野菜だけ、飲む物は水だけにさせてください。その後、わたしたちの顔色と、宮廷の肉類をいただいた少年の顔色をよくお比べになり、その上でお考えどおりにしてください。」

世話係はこの願いを聞き入れ、十日間彼らを試した。十日たってみると、彼らの顔色と健康は宮廷の食べ物を受けているどの少年よりも良かった。それ以来、世話係は彼らに支給される肉類と酒を除いて、野菜だけ与えることにした。——ダニエル 1:8-16

1.9.1 ネブカドネザル王

燃え盛る炉に投げ込まれた三人

ネブカドネツァル王は一つの金の像を造った。高さは六十アンマ、幅は六アンマで、これをバビロン州のドラという平野に建てた。ネブカドネツァル王は人を遣わして、総督、執政官、地方長官、参議官、財務官、司法官、保安官、その他諸州の高官たちを集め、自分の建てた像の除幕式に参列させることにした。総督、執政官、地方長官、参議官、財務官、

司法官、保安官、その他諸州の高官たちはその王の建てた像の除幕式に集まり、像の前に立ち並んだ。伝令は力を込めて叫んだ。

「諸国、諸族、諸言語の人々よ、あなたたちに告げる。角笛、横笛、六絃琴、豎琴、十三絃琴、風琴などあらゆる楽器による音楽が聞こえたなら、ネブカドネツアル王の建てられた金の像の前にひれ伏して拝め。ひれ伏して拝まない者は、直ちに燃え盛る炉に投げ込まれる。」

それで、角笛、横笛、六絃琴、豎琴、十三絃琴の音楽が聞こえてくると、諸国、諸族、諸言語の人々は皆ひれ伏し、ネブカドネツアル王の建てた金の像を拜んだ。

さてこのとき、何人かのカルデア人がユダヤ人を中傷しようとして進み出て、ネブカドネツアル王にこう言った。

「王様がとこしえまでも生き永らえられますように。御命令によりますと、角笛、横笛、六絃琴、豎琴、十三絃琴、風琴などあらゆる楽器の音楽が聞こえたなら、だれでも金の像にひれ伏して拝め、ということでした。そうしなければ、燃え盛る炉に投げ込まれるはずですよ。バビロン州には、その行政をお任せになっているユダヤ人シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの三人がおりますが、この人々は御命令を無視して、王様の神に仕えず、お建てになった金の像を拜もうとしません。」

これを聞いたネブカドネツアル王は怒りに燃え、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴを連れて来るよう命じ、この三人は王の前に引き出された。王は彼らに言った。

「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ、お前たちがわたしの神に仕えず、わたしの建てた金の像を拜まないというのは本当か。今、角笛、横笛、六絃琴、豎琴、十三絃琴、風琴などあらゆる楽器の音楽が聞こえると同時にひれ伏し、わたしの建てた金の像を拜むつもりでいるなら、それでよい。もしも拝まないなら、直ちに燃え盛る炉に投げ込ませる。お前たちをわたしの手から救い出す神があるか。」

シャドラク、メシャク、アベド・ネゴはネブカドネツアル王に答えた。

「このお定めにつきまして、お答えする必要はございません。わたしたちのお仕える神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってくださいます。そうでなくとも、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拜むことも、決していたしません。」

ネブカドネツアル王はシャドラク、メシャク、アベド・ネゴに対して血相を変えて怒り、炉をいつもの七倍も熱く燃やすように命じた。そして兵士の中でも特に強い者に命じて、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴを縛り上げ、燃え盛る炉に投げ込ませた。彼らは上着、下着、帽子、その他の衣服を着けたまま縛られ、燃え盛る炉に投げ込まれた。王の命令は厳しく、炉は激しく燃え上がっていたので、噴き出る炎はシャドラク、メシャク、アベド・ネゴを引いて行った男たちをさえ焼き殺した。シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの三人は縛られたまま燃え盛る炉の中に落ち込んで行った。

間もなく王は驚きの色を見せ、急に立ち上がり、側近たちに尋ねた。

「あの三人の男は、縛ったまま炉に投げ込んだはずではなかったか。」

彼らは答えた。

「王様、そのとおりでございます。」

王は言った。

「だが、わたしには四人の者が火の中を自由に歩いているのが見える。そして何の害も受けていない。それに四人目の者は神の子のような姿をしている。」

ネブカドネツアル王は燃え盛る炉の口に近づいて呼びかけた。

「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ、いと高き神に仕える人々よ、出て来なさい。」すると、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴは炉の中から出て来た。総督、執政官、地方長官、王の側近たちは集まって三人を調べたが、火はその体を損なわず、髪の毛も焦げてはおらず、上着も元のままで火のにおいすらなかった。ネブカドネツアル王は言った。

「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの神をたたえよ。彼らは王の命令に背き、体を犠牲にしても自分の神に依り頼み、自分の神以外にはいかなる神にも仕えず、拝もうとしなかった。この僕たちを、神は御使いを送って救われた。わたしは命令する。いかなる国、民族、言語に属する者も、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの神をののしる者があれば、その体は八つ裂きにされ、その家は破壊される。まことに人間をこのように救うことのできる神はほかにはない。」

こうして王は、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴをバビロン州で高い位につけた。

大きな木の夢

ネブカドネツアル王は、全世界の諸国、諸族、諸言語の住民に、いっそうの繁栄を願って、挨拶を送る。

さて、わたしはいと高き神がわたしになさったしるしと不思議な御業を知らせる。

この神のしるしは、いかに偉大であり

不思議な御業は、いかに力あることか。

その御国は永遠の御国であり、支配は代々に及ぶ。——ダニエル 3

十二か月が過ぎたころのことである。王はバビロンの王宮の屋上を散歩しながら、こう言った。「なんとバビロンは偉大ではないか。これこそ、このわたしが都として建て、わたしの権力の偉大さ、わたしの威光の尊さを示すものだ。」まだ言い終わらぬうちに、天から声が響いた。「ネブカドネツアル王よ、お前に告げる。王国はお前を離れた。お前は人間の社会から追放されて、野の獣と共に住み、牛のように草を食らい、七つの時を過ごすのだ。そうしてお前はついに、いと高き神こそが人間の王国を支配する者で、神は御旨のままにそれをだれにでも与えるのだということを悟るであろう。」この言葉は直ちにネ

ブカドネツァルの身に起こった。彼は人間の社会から追放され、牛のように草を食らい、その体は天の露にぬれ、その毛は鷲の羽のように、つめは鳥のつめのように生え伸びた。
——ダニエル 4:26-30

(編者註:)「壁の文字」事件というのはこれ。

壁に字を書く指の幻

ベルシャツァル王は千人の貴族を招いて大宴会を開き、みんなで酒を飲んでいました。宴も進んだころ、ベルシャツァルは、その父ネブカドネツァルがエルサレムの神殿から奪って来た金銀の祭具を持って来るように命じた。王や貴族、後宮の女たちがそれで酒を飲もうというのである。そこで、エルサレムの神殿から奪って来た金銀の祭具が運び込まれ、王や貴族、後宮の女たちがそれで酒を飲み始めた。こうして酒を飲みながら、彼らは金や銀、青銅、鉄、木や石などで造った神々をほめたたえた。

その時、人の手の指が現れて、ともし火に照らされている王宮の白い壁に文字を書き始めた。王は書き進むその手先を見た。王は恐怖にかられて顔色が変わり、腰が抜け、膝が震えた。王は大声をあげ、祈祷師、賢者、星占い師などを連れて来させ、これらバビロンの知者にこう言った。「この字を読み、解釈をしてくれる者には、紫の衣を着せ、金の鎖を首にかけて、王国を治める者のうちの第三の位を与えよう。」宮廷の知者たちは皆、集まって来たが、だれもその字を読むことができず、解釈もできなかった。ベルシャツァル王はいよいよ恐怖にかられて顔色が変わり、貴族も皆途方に暮れた。

王や貴族が話しているのを聞いた王妃は、宴会場に来てこう言った。「王様がとこしえまでも生き永らえられますように。そんなに心配したり顔色を変えたりなさらないでくださいませ。お国には、聖なる神の霊を宿している人が一人おります。父王様の代に、その人はすばらしい才能、神々のような知恵を示したものでございます。お父上のネブカドネツァル王様は、この人を占い師、祈祷師、賢者、星占い師などの長にしておられました。この人には特別な霊の力があって、知識と才能に富み、夢の解釈、謎解き、難問の説明などがよくできるのでございます。ダニエルという者で、父王様はベルテシャツァルと呼んでいらっしゃいました。このダニエルをお召しになれば、その字の解釈をしてくれることのでございましょう。」

そこで、ダニエルが王の前に召し出された。王は彼に言った。「父王がユダから捕らえ帰ったユダヤ人の捕囚の一人、ダニエルというのはお前か。聞くところによると、お前は神々の霊を宿していて、すばらしい才能と特別な知恵を持っているそうだ。賢者や祈祷師を連れて来させてこの文字を読ませ、解釈させようとしたのだが、彼らにはそれができなかった。お前はいろいろと解釈をしたり難問を解いたりする力を持つと聞いた。もしこの

文字を読み、その意味を説明してくれたなら、お前に紫の衣を着せ、金の鎖を首にかけて、王国を治める者のうち第三の位を与えよう。」

ダニエルは王に答えた。「贈り物など不要でございます。報酬はだれか他の者にお与えください。しかし、王様のためにその文字を読み、解釈をいたしましょう。王様、いと高き神は、あなたの父ネブカドネツアル王に王国と権勢と威光をお与えになりました。その権勢を見て、諸国、諸族、諸言語の人々はすべて、恐れおののいたのです。父王様は思うままに殺し、思うままに生かし、思うままに栄誉を与え、思うままに没落させました。しかし、父王様は傲慢になり、頑に尊大にふるまったので、王位を追われ、栄光は奪われました。父王様は人間の社会から追放され、心は野の獣のようになり、野生のろばと共に住み、牛のように草を食らい、天から降る露にその身をぬらし、ついに悟ったのは、いと高き神こそが人間の王国を支配し、その御旨のままに王を立てられるのだということでした。さて、ベルシャツアル王よ、あなたはその王子で、これらのことをよくご存じでありながら、なお、へりくだらうとはなさらなかった。天の主に逆らって、その神殿の祭具を持ち出させ、あなた御自身も、貴族も、後宮の女たちも皆、それで飲みながら、金や銀、青銅、鉄、木や石で造った神々、見ることも聞くこともできず、何も知らないその神々を、ほめたたえておられます。だが、あなたの命と行動の一切を手中に握っておられる神を畏れ敬おうとはなさない。そのために神は、あの手を遣わして文字を書かせたのです。さて、書かれた文字はこうです。メネ、メネ、テケル、そして、パルシン。意味はこうです。メネは数えるということで、すなわち、神はあなたの治世を数えて、それを終わらせられたのです。テケルは量を計ることで、すなわち、あなたは秤にかけられ、不足と見られました。パルシンは分けるということで、すなわち、あなたの王国は二分されて、メディアとベルシアに与えられるのです。」

これを聞いたベルシャツアルは、ダニエルに紫の衣を着せ、金の鎖をその首にかけるように命じ、王国を治める者のうち第三の位を彼に与えるという布告を出した。その同じ夜、カルデア人の王ベルシャツアルは殺された。——ダニエル 5

(編者註:)[「ダニエルが神さまにお祈りして、ライオンの穴に一晩入れられた話」というのは以下のくだけり。

獅子の洞窟に投げ込まれたダニエル

さて、王国を継いだのは、メディア人ダレイオスであった。彼は既に六十二歳であった。ダレイオスは、王国に百二十人の総督を置いて全国を治めさせることにし、また、王に損失がないようにするため、これらの総督から報告を受ける大臣を三人、その上に置いた。ダニエルはそのひとりであった。ダニエルには優れた霊が宿っていたので、他の大臣や総

督のすべてに傑出していた。王は彼に王国全体を治めさせようとした。大臣や総督は、政務に関してダニエルを陥れようと口実を探した。しかし、ダニエルは政務に忠実で、何の汚点も怠慢もなく、彼らは訴え出る口実を見つけることができなかった。それで彼らは、「ダニエルを陥れるには、その信じている神の法に関してなんらかの言いがかりをつけるほかはあるまい」と話し合い、王のもとに集まってこう言った。「ダレイオス王様がとこしえまでも生き永らえられますように。王国の大臣、執政官、総督、地方長官、側近ら一同相談いたしまして、王様に次のような、勅令による禁止事項をお定めいただくということになりました。すなわち、向こう三十日間、王様を差し置いて他の人間や神に願い事をする者は、だれであれ獅子の洞窟に投げ込まれる、と。王様、どうぞこの禁令を出し、その書面に御署名ください。そうすれば、これはメディアとペルシアの法律として変更不可能なものとなり、廃止することはできなくなります。」ダレイオス王は、その書面に署名して禁令を發布した。ダニエルは王が禁令に署名したことを知っていたが、家に帰るといつものとおり二階の部屋に上がり、エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまずき、日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげた。役人たちはやって来て、ダニエルがその神に祈り求めているのを見届け、王の前に進み出、禁令を引き合いに出してこう言った。「王様、向こう三十日間、王様を差し置いて他の人間や神に願い事をする者があれば、獅子の洞窟に投げ込まれるという勅令に署名をなされたのではございませんか。」王は答えた。「そのとおりだ。メディアとペルシアの法律は廃棄されることはない。」彼らは王に言った。「王様、ユダヤからの捕囚の一人ダニエルは、あなたさまをも、署名なされたその禁令をも無視して、日に三度祈りをささげています。」王はこれを聞いてたいそう悩み、なんとかダニエルを助ける方法はないものかと心を砕き、救おうとして日の暮れるまで努力した。役人たちは王のもとに来て言った。「王様、ご存じのとおり、メディアとペルシアの法律によれば、王による勅令や禁令は一切変更してはならないことになっております。」それで王は命令を下し、ダニエルは獅子の洞窟に投げ込まれることになって引き出された。王は彼に言った。「お前がいつも拝んでいる神がお前を救ってくださるように。」一つの石が洞窟の入り口に置かれ、王は自分の印と貴族たちの印で封をし、ダニエルに対する処置に変更がないようにした。

王は宮殿に帰ったが、その夜は食を断ち、側女も近寄らせず、眠れずに過ごし、夜が明けるやいなや、急いで獅子の洞窟へ行った。洞窟に近づくと、王は不安に満ちた声をあげて、ダニエルに呼びかけた。「ダニエル、ダニエル、生ける神の僕よ、お前がいつも拝んでいる神は、獅子からお前を救い出す力があつたか。」ダニエルは王に答えた。「王様がとこしえまでも生き永らえられますように。神様が天使を送って獅子の口を閉ざしてくださいましたので、わたしはなんの危害も受けませんでした。神様に対するわたしの無実が認められたのです。そして王様、あなたさまに対しても、背いたことはございません。」王はたいそう喜んで、ダニエルを洞窟から引き出すように命じた。ダニエルは引き出され

たが、その身に何の害も受けていなかった。神を信頼していたからである。——ダニエル 6:1-24

(編者註:) ……と、ここまでだったらめでたしめでたしなんだけど、やはりそこは旧約聖書なので、そう簡単に話は終わらないのだった。

王は命令を下して、ダニエルを陥れようとした者たちを引き出させ、妻子もろとも獅子の洞窟に投げ込ませた。穴の底にも達しないうちに、獅子は彼らに飛びかかり、骨までもかみ砕いた。——ダニエル 6:25

(編者註:) ケンが不思議がっているダニエル書における神の扱いの話だけど、この辺にそれが現れている。

すると、夜の幻によってその秘密がダニエルに明かされた。ダニエルは**天の神**をたたえ、——ダニエル 2:19

王はダニエルに言った。

「あなたがこの秘密を明かすことができたからには、あなたたちの神はまことに**神々の神**、すべての王の主、秘密を明かす方にちがいない。」——ダニエル 2:47

この夜の幻で更に続けて見たものは、第四の**獣**で、ものすごく、恐ろしく、非常に強く、**巨大な鉄の歯**を持ち、食らい、かみ砕き、残りを足で踏みにじった。他の獣と異なって、これには十本の角があった。——ダニエル 7:7

(編者註:) 「末日」は英語の the latter days に相当するが、訳語としての「末日」はカトリックなどでは一般的には用いない。むしろ「末日聖徒イエス・キリスト教会」——いわゆる「モルモン教」:既存のキリスト教においては異端とみなされている——などの語で目にするの方が多いかもしい。

だが、秘密を明かす**天の神**がおられ、この神が**将来**何事が起こるのかをネブカドネツァル王に知らせてくださったのです。王様の夢、お眠りになっていて頭に浮かんだ幻を申し

上げましょう。

(参考・欽定訳:) But there is a God in heaven that revealeth secrets, and maketh known to the king Nebuchadnezzar what shall be **in the latter days**. Thy dream, and the visions of thy head upon thy bed, are these; ——ダニエル 2:28

それで、お前の民に**将来**起こるであろうことを知らせるために来たのだ。この幻はその時に関するものだ。」

(参考・欽定訳:) Now I am come to make thee understand what shall befall thy people in **the latter days**: for yet the vision is for many days. ——ダニエル 10:14

才知にたけ

その手にかかればどんな悪だくみも成功し

驕り高ぶり、平然として多くの人を滅ぼす。

ついに**最も大いなる君**に敵対し

人の手によらずに滅ぼされる。

(参考・欽定訳:) And through his policy also he shall cause craft to prosper in his hand; and he shall magnify himself in his heart, and by peace shall destroy many: he shall also stand up against **the Prince of princes**; but he shall be broken without hand. ——ダニエル 8:25

(編者註:) intelligence に相当する単語の存在は、新共同訳からはうかがい知ることが難しい。ここには欽定訳も併せて引用しておく。

キティムの船隊が攻めるので、彼は力を失う。彼は再び聖なる契約に対し、怒りを燃やして行動し、また聖なる契約を離れる者があることに気づく。

(参考・欽定訳:) For the ships of Chittim shall come against him: therefore he shall be grieved, and return, and have indignation against the holy covenant: so shall he do; he shall even return, and have **intelligence** with them that forsake the holy covenant. ——ダニエル 11:30

(編者註:) ここでケンの言っていることは厳密にはちょっと違う。ホセアが自ら淫行に励んでいるわけではなくて、神さまがホセアに「(淫行する女のように神さまを裏切る諸国をあかしするために)淫行をした女をめとれ」と言ってるのね。そういう汚れを皆女性の

方に帰属させようという辺りがいかにも旧約聖書的なんだけど。

ホセアの妻と子

主がホセアに語られたことの初め。

主はホセアに言われた。

「行け、淫行の女をめとり

淫行による子らを受け入れよ。

この国は主から離れ、淫行にふけているからだ。」

彼は行って、ディブライムの娘ゴメルをめとった。彼女は身ごもり、男の子を産んだ。

主は彼に言われた。

「その子をイズレエルと名付けよ。

間もなく、わたしはイエフの王家に

イズレエルにおける流血の罰を下し

イスラエルの家におけるその支配を絶つ。

その日が来ると

イズレエルの平野で

わたしはイスラエルの弓を折る。」

彼女は再び身ごもり、女の子を産んだ。主は彼に言われた。

「その子を

ロ・ルハマ（憐れまれぬ者）と名付けよ。

わたしは、もはやイスラエルの家を憐れまず

彼らを決して赦さないからだ。

だが、ユダの家には憐れみをかけ

彼らの神なる主として、わたしは彼らを救う。

弓、剣、戦い、馬、騎兵によって

救うのではない。」

彼女はロ・ルハマを乳離れさせると、また身ごもって、男の子を産んだ。主は言われた。

「その子を

ロ・アンミ（わが民でない者）と名付けよ。

あなたたちはわたしの民ではなく

わたしはあなたたちの神ではないからだ。」——ホセア 1:2-9

(編者註:) しまいには、背信者を許す自分をあかしするために、不倫してる女性をめとれ、とまで神さまは言うんだ。

神の愛による回復

主は再び、わたしに言われた。「行け、夫に愛されていながら姦淫する女を愛せよ。イスラエルの人々が他の神々に顔を向け、その干しぶどうの葉子を愛しても、主がなお彼らを愛されるように。」そこで、わたしは銀十五シェケルと、大麦一ホメルと一レテクを払って、その女を買い取った。わたしは彼女に言った。「お前は淫行をせず、他の男のものとならず、長い間わたしのもとので過ごせ。わたしもまた、お前のもとのにとどまる。」イスラエルの人々は長い間、王も高官もなく、いけにえも聖なる柱もなく、エフォドもテラフィムもなく過ごす。その後、イスラエルの人々は帰って来て、彼らの神なる主と王ダビデを求め、終わりの日に、主とその恵みに畏れをもって近づく。——ホセア 3:1-5

わたしはエフライムに対して食い尽くす虫となり
ユダの家には、骨の腐れとなる。——ホセア 5:12

サマリアは罰せられる。
その神に背いたからだ。
住民は剣に倒れ
幼子は打ち殺され
妊婦は引き裂かれる。——ホセア 14:1

ああ、恐るべき日よ
主の日が近づく。
全能者による破滅の日が来る。——ヨエル 3:6

地上の全部族の中からわたしが選んだのは
お前たちだけだ。
それゆえ、わたしはお前たちを
すべての罪のゆえに罰する。——アモス 3:2

町で角笛が吹き鳴らされたなら
人々はおののかないだろうか。
町に災いが起こったなら
それは主がなされたことではないか。——アモス 3:6

だから、わたしもお前たちのすべての町で
歯を清く保たせ
どの居住地でもパンを欠乏させた。
しかし、お前たちはわたしに帰らなかったと
主は言われる。
また、刈り入れにはまだ三月もあったのに
わたしはお前たちに雨を拒んだ。
ある町には雨を降らせ
ほかの町には雨を降らせなかった。
ある畑には雨が降ったが
雨のない畑は枯れてしまった。
二つ三つの町が水を飲むために
一つの町によろめいて行ったが
渇きはいやされなかった。
しかし、お前たちはわたしに帰らなかったと
主は言われる。

わたしはお前たちを黒穂病と赤さび病で撃ち
お前たちの園とぶどう畑を枯れさせた。
また、いちじくとオリーブの木は
いなごが食い荒らした。
しかし、お前たちはわたしに帰らなかったと
主は言われる。

かつて、エジプトを襲った疫病を
わたしはお前たちに送り
お前たちのえり抜きの兵士と
誇りとする軍馬とを剣で殺した。
わたしは陣営に悪臭を立ち上らせ
鼻をつかせた。
しかし、お前たちはわたしに帰らなかったと
主は言われる。

かつて、神がソドムとゴモラを覆したように
わたしはお前たちを覆した。

お前たちは炎の中から取り出された

燃えさしのようにになった。

しかし、お前たちはわたしに帰らなかったと

主は言われる。

それゆえ、イスラエルよ

わたしはお前にこのようにする。

わたしがこのことを行うゆえに

イスラエルよ

お前は自分の神と出会う備えをせよ。——アモス 4:6-12

アモスと祭司アマツヤ

ベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わして言った。「イスラエルの家の真ん中で、アモスがあなたに背きました。この国は彼のすべての言葉に耐えられません。

アモスはこう言っています。

『ヤロブアムは剣で殺される。

イスラエルは、必ず捕らえられて

その土地から連れ去られる。』

アマツヤはアモスに言った。

「先見者よ、行け。ユダの国へ逃れ、そこで糧を得よ。そこで預言するがよい。だが、ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王国の神殿だから。」アモスは答えてアマツヤに言った。「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。

主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた。今、主の言葉を聞け。あなたは、『イスラエルに向かって預言するな、イサクの家に向かってたわごとを言うな』と言う。

それゆえ、主はこう言われる。

お前の妻は町の中で遊女となり

息子、娘らは剣に倒れ

土地は測り縄で分けられ

お前は汚れた土地で死ぬ。

イスラエルは、必ず捕らえられて

その土地から連れ去られる。」——アモス 7:10-17

(編者註:) オバデヤ書は新共同訳の旧約聖書ではわずかに2ページ。ここに全文引用しようと思えばできないこともないのだけど、意味もなく引用するのは苦痛なのでしないことにする。興味のある方は(ない方も)直接聖書をお読みいただきたい。

ヨナの逃亡

主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。

「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。

主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった。船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた。船長はヨナのところに来て言った。

「寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。」

さて、人々は互いに言った。

「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。」

そこで、くじを引くとヨナに当たった。人々は彼に詰め寄って、「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいか。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。

ヨナは彼らに言った。

「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」

人々は非常に恐れ、ヨナに言った。

「なんという事をしたのだ。」

人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。

彼らはヨナに言った。「あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか。」

海は荒れる一方だった。ヨナは彼らに言った。

「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」

乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。ついに、彼らは主に向かって叫んだ。

「ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したといっ

て責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」

彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海は静まった。人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。

ヨナの救助

さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、言った。

苦難の中で、わたしが叫ぶと

主は答えてくださった。

陰府の底から、助けを求めると

わたしの声を聞いてくださった。

あなたは、わたしを深い海に投げ込まれた。

潮の流れがわたしを巻き込み

波また波がわたしの上を越えて行く。

わたしは思った

あなたの御前から追放されたのだと。

生きて再び聖なる神殿を見ることがあろうかと。

大水がわたしを襲って喉に達する。

深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。

わたしは山々の基まで、地の底まで沈み

地はわたしの上に永久に扉を閉ざす。

しかし、わが神、主よ

あなたは命を

滅びの穴から引き上げてくださった。

息絶えようとするとき

わたしは主の御名を唱えた。

わたしの祈りがあなたに届き

聖なる神殿に達した。

偽りの神々に従う者たちが

忠節を捨て去ろうとも

わたしは感謝の声をあげ

いけにえをささげて、誓ったことを果たそう。

救いは、主にこそある。

主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した。——ヨナ 1:1-2:11

人よ、何が善であり
主が何を前にお求めておられるかは
前にお告げられている。
正義を行い、慈しみを愛し
へりくだって神と共に歩むこと、これである。——ミカ 6:8

エフラタのベツレヘムよ
前はユダの氏族の中でいと小さき者。
前の中から、わたしのために
イスラエルを治める者が出る。
彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。——ミカ 5:1

このため、わたしは悲しみの声をあげ
泣き叫び、裸、はだして歩き回り
山犬のように悲しみの声をあげ
駝鳥のように嘆く。——ミカ 1:8

災いだ、流血の町は。
町のすべては偽りに覆われ、略奪に満ち
人を餌食にすることをやめない。
鞭の音、車輪の響く音
突進する馬、跳び駆ける戦車。
騎兵は突撃し
剣はきらめき、槍はひらめく。
倒れる者はおびただしく
しかばねは山をなし、死体は数えきれない。
人々は味方の死体につまずく。——ナホム 3:1-3

流れに面した門は開かれ、宮殿は揺れ動く。
王妃は引き出され、衣をはがれて連れ去られた。

侍女たちは鳩のような声で嘆き、胸を打つ。
 ニネベは、建てられたときから
 水を集める池のようであった。
 しかし、水は流れ出して
 「止まれ、止まれ」と言っても
 だれも振り返らない。
 「銀を奪え、金を奪え。」
 その財宝は限りなく
 あらゆる宝物が溢れている。——ナホム 2:6-10

災いだ

自分の隣人に怒りの熱を加えた酒を飲ませ
 酔わせて、その裸を見ようとする者は。
 お前は栄光よりも恥を飽きるほど受ける。
 酔え、お前も隠し所を見られる。
 お前のもとに、主の右の手の杯と恥辱が
 お前の栄光の代わりに回ってくる。

(参考・文語訳:) 人に酒を飲(のま)せ己の忿怒(いかり)を酌和(くみまじ)へて之
 を酔(ゑは)せ而(しか)して之が陰所(かくしどころ)を見んとする者は禍(わざわひ)
 なるかな 汝(なんぢ)は榮譽(ほまれ)に飽(あか)ずして羞辱(はぢ)に飽(あけ)り
 汝(なんぢ)もまた飲(のみ)て汝の不割禮(ふかつれい)を露(あら)はせ エホバ
 の右の手の杯汝に巡り來(きた)るべし 汝は汚(きた)なき者を吐(はき)て榮耀(ほ
 まれ)を掩(おほ)はん

(参考・欽定訳:) Woe unto him that giveth his neighbour drink, that putteth thy bottle to him,
 and makest him drunken also, that thou mayest look on their nakedness! Thou art filled with
 shame for glory: drink thou also, and let thy **foreskin be uncovered**: the cup of the LORD'
 S right hand shall be turned unto thee, and shameful spewing shall be on thy glory. ——ハバ
 クク 2:15-16

レバノンに加えられた不法がお前を覆い
 獣も絶えて、お前を恐れさせる。
 お前が人々の血を流し、国中で不法を

町とそのすべての住民に対して行ったからだ。——ハバクク 2:17

万軍の主はこう言われる。イスラエルがエジプトから上って来る道でアマレクが仕掛けて妨害した行為を、わたしは罰することにした。行け。アマレクを討ち、アマレクに属するものは一切、滅ぼし尽くせ。男も女も、子供も乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも打ち殺せ。容赦してはならない。」——サムエル記上 15:2-3

主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。

「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。——創世記 8:21

主の怒りの日

わたしは地の面から

すべてのものを一掃する、と主は言われる。

わたしは、人も獣も取り去り

空の鳥も海の魚も取り去る。

神に逆らう者をつまずかせ

人を地の面から絶つ、と主は言われる。——セファニヤ 1:2-3

(編者註:) ここも原著にある引用箇所が抜けている。以下、原著の引用箇所を引用 (読み仮名は編者による):

その日は憤りの日

苦しみと悩みの日、荒廃と滅亡の日

闇と暗黒の日、雲と濃霧の日である。

城壁に囲まれた町、城壁の角の高い塔に向かい

角笛が鳴り、鬨 (とき) の声があがる日である。

わたしは人々を苦しみに遭わせ

目が見えない者のように歩かせる。

彼らが主に対して罪を犯したからだ。

彼らの血は塵のように

はらわたは糞（ふん）のようにまき散らされる。——セファニヤ 1:15-17

金も銀も彼らを救い出すことはできない。

主の憤りの日に

地上はくまなく主の熱情の火に焼き尽くされる。

主は恐るべき破滅を

地上に住むすべての者に臨ませられる。——セファニヤ 1:18

神殿再建の呼びかけ

ダレイオス王の第二年六月一日に、主の言葉が預言者を通して、ユダの総督シェアルティエルの子ゼルバベルと大祭司ヨツァダクの子ヨシュアに臨んだ。「万軍の主はこう言われる。この民は、『まだ、主の神殿を再建する時は来ていない』と言っている。」

主の言葉が、預言者ハガイを通して臨んだ。

「今、お前たちは、この神殿を

廃虚のままにしておきながら

自分たちは板ではった家に住んでいてよいのか。

今、万軍の主はこう言われる。

お前たちは自分の歩む道に心を留めよ。

種を多く蒔いても、取り入れは少ない。

食べても、満足することなく

飲んでも、酔うことがない。

衣服を重ねても、温まることなく

金をかせぐ者がかせいでも

穴のあいた袋に入れるようなものだ。

万軍の主はこう言われる。

お前たちは自分の歩む道に心を留めよ。

山に登り、木を切り出して、神殿を建てよ。

わたしはそれを喜び、栄光を受けると

主は言われる。

お前たちは多くの収穫を期待したが

それはわずかであった。

しかも、お前たちが家へ持ち帰るとき

わたしは、それを吹き飛ばした。

それはなぜか、と万軍の主は言われる。

それは、わたしの神殿が廢虚のままであるのに
お前たちが、それぞれ自分の家のために
走り回っているからだ。
それゆえ、お前たちの上に
天は露を降らさず
地は産物を出さなかった。
わたしが干ばつを呼び寄せたので
それは、大地と山々と穀物の上に
新しいぶどう酒とオリーブ油と
土地が産み出す物の上に
また人間と家畜と
すべて人の労苦の上に及んだのだ。』

シャルティエルの子ゼルバベルと、大祭司ヨツァダクの子ヨシュア、および民の残りの者は皆、彼らの神、主が預言者ハガイを遣わされたとき、彼の言葉を通して、彼らの神、主の御声に耳を傾けた。民は主を畏れ敬った。主の使者ハガイは、主の派遣に従い、民に告げて言った。「わたしはあなたたちと共にいる、と主は言われる。」主が、ユダの総督シャルティエルの子ゼルバベルと大祭司ヨツァダクの子ヨシュア、および民の残りの者すべての霊を奮い立たせられたので、彼らは出て行き、彼らの神、万軍の主の神殿を建てる作業に取りかかった。それは六月二十四日のことであった。——ハガイ 1:1-15

主の僕ゼルバベル

同じ月の二十四日

主の言葉が再びハガイに臨んだ。
「ユダの総督ゼルバベルに告げよ。
わたしは天と地を揺り動かす。
わたしは国々の王座を倒し
異邦の国々の力を砕く。
馬を駆る者もろとも戦車を覆す。
馬も、馬を駆る者も
互いに味方の剣にかかって倒れる。
その日には、と万軍の主は言われる。
わが僕、シェアルティエルの子ゼルバベルよ
わたしはあなたを迎え入れる、と主は言われる。」

わたしはあなたをわたしの印章とする。
わたしがあなたを選んだからだ」と
万軍の主は言われる。——ハガイ 2:20-23

第六の幻

わたしが再び目を留めて見ると、一つの巻物が飛んでいた。御使いがわたしに、「何を見ているのか」と尋ねたので、わたしは答えた。「巻物が飛んでいるのが見えます。その長さは二十アンマ、幅は十アンマです。」彼はわたしに言った。「これは全地に向かって出て行く呪いである。すべての盗人はその一方の面に記されている呪いに従って一掃される。また偽って誓う者も、他の面の呪いに従って一掃される。」

わたしがこれを送り出す、と万軍の主は言われる。
それは盗人の家に
わが名によって偽りの誓いをする者の家に入り
その家の中に宿り
梁も石ももろともに滅ぼし尽くす。——ゼカリヤ 5:1-4

第七の幻

わたしに語りかけた御使いが現れ、わたしに言った。「目を留めて、そこに出て来るものが何であるか、よく見るがよい。」わたしが、「それは何ですか」と尋ねると、彼は、「そこに出て来たのはエファ升である」と答え、「それは全地を見る彼らの目である」と言った。鉛の円盤が取り除かれると、エファ升の中に一人の女が座っていた。彼は、「それは邪悪そのものである」と言って、かの女をエファ升の中に投げ返し、エファ升の口に鉛の重しを置いた。わたしが目を留めて見ると、二人の女が翼に風を受けて出て来た。かの女たちはこのとりの翼のような翼を持ち、地と天の間でエファ升を運び去ろうとしていた。わたしに語りかけた御使いに、「かの女たちはどこにエファ升を持って行こうとしているのですか」と尋ねると、彼はわたしに答えた。「かの女のため、シニアルの地に神殿を築こうとしているのだ。神殿が整えられると、その地に備えられた場所に置かれるはずだ。」——ゼカリヤ 5:5-11

その日が来る、と万軍の主は言われる。わたしは数々の偶像の名をこの地から取り除く。その名が再び唱えられることはない。また預言者たちをも、汚れた霊をも、わたしはこの地から追い払う。それでもなお預言する者がいれば、彼はその生みの親である父からも母からも、「主の御名において偽りを告げたのだから、お前は生きていてはならない」

と言われ、その預言のゆえに生みの親である父と母によって刺し貫かれる。——ゼカリヤ 13:2-3

その日、預言者たちは皆、預言をしても自分の幻のゆえに恥を受け、欺くための毛皮の外套を着るのをやめ、「わたしは預言者ではない、土を耕す者だ。わたしは若いときから土地を所有している」と言う。また、「あなたの胸にあるこの傷はどうしたのか」と問われると、「それは友人の家で受けたものだ」と答えるであろう。——ゼカリヤ 13:4-6

諸国の民がエルサレムに兵を進めてくれば
疫病で主はそのすべての者を撃たれる。
肉は足で立っているうちに腐り
目は眼窩の中で腐り、舌も口の中で腐る。——ゼカリヤ 14:12

祭司への警告

祭司たちよ、今あなたたちにこの命令が下される。もし、あなたたちがこれを聞かず、心に留めず、わたしの名に栄光を帰さないなら、と万軍の主は言われる。わたしはあなたたちに呪いを送り、祝福を呪いに変える。いや既に呪いに変えてしまった。これを心に留める者があなたたちの間に一人もいなかったからだ。

見よ、わたしはあなたたちの子孫を脅かし
あなたたちの顔に汚物を浴びせる。
それは祭りの犠牲の捨てられたものだ。
あなたたちは、その上に投げ捨てられる。——マラキ 2:1-3

主は、霊と肉を持つひとつのものを造られたではないか。そのひとつのものが求めるのは、神の民の子孫ではないか。あなたたちは、自分の霊に気をつけるがよい。
あなたの若いときの妻を裏切ってはならない。

わたしは離婚を憎むと
イスラエルの神、主は言われる。
離婚する人は、不法でその上着を覆っていると
万軍の主は言われる。
あなたたちは自分の霊に気をつけるがよい。

あなたたちは裏切ってはならない。——マラキ 2:15-16

だが、彼の来る日に誰が身を支えうるか。

彼の現れるとき、誰が耐えうるか。

彼は精錬する者の火、洗う者の灰汁のようだ。——マラキ 3:2

(編者註:) マラキ書 4 章は、新共同訳聖書では 3 章に統合されている。

見よ、わたしは

大いなる恐るべき主の日が来る前に

預言者エリヤをあなたたちに遣わす。

彼は父の心を子に

子の心を父に向けさせる。

わたしが来て、破滅をもって

この地を撃つことがないように。——マラキ 3:23-24

第2章

新約聖書へようこそ

2.1 四つの福音

福音書に関して、ごくごく簡単な補足をしておく。福音書というのは簡単に言ってしまうと「イエスの生き様の記録」ということになると思う。福音というのはもともと「神さまのことば」という位の意味だけど、イエスの生き様はそれ自身が「神さまが人に遺してくれたもの」なので、こういう呼び方をするわけだ。

ケンも書いている通り、福音書には四種類ある。各々の福音書を書いた人（って言っても、実は福音書を書いたのは使徒ではないと言われているんだけどね）、つまり福音書記者の名前をとって、

- マタイによる福音書
- マルコによる福音書
- ルカによる福音書
- ヨハネによる福音書

の四つが新約聖書に収録されている。これ以外にも「福音書」と呼ばれる文書はいくつか発見されている（その中には「マグダラのマリアによる福音書」とか「ユダの福音書」なんてのまである……しかも、この「ユダ」は書簡記者のユダじゃなくて、イスカリオテのユダだったりする）のだけど、その多くはキリスト教で異端とされる思想体系、たとえばグノーシスと呼ばれる思想の下から出てきたものとみなされていて、聖書と一緒に宗教的に用いられることはない（カトリックでは「外典」として参考に用いられている）。

で、いま僕たちが読むことのできる四つの福音書の位置付けなんだけど、「マタイ」「マルコ」「ルカ」の3文書と「ヨハネによる福音書」は区別されることが多い。前3つは内容の共通する部分が多くて、ある文書に書かれているイベントに関して読むときに、他の2文書の上でそこに相当する記述を探して読み比べることが多い。だから、四つの福音書

のうち、特に「マタイ」「マルコ」「ルカ」の三つの福音書を「共観福音書」と呼ぶ。新共同訳聖書をみても、ある共観福音書のイベントには、それに対応する他2文書の該当章節の番号が併記されている。

これに対してヨハネ福音書は、キリストの言葉がより強調して書かれているし、「イエスの愛しておられた弟子」(ケン「だーれだ」って書いてたけど、これが使徒ヨハネなのは言うまでもない)やマグダラのマリアの存在に重きを置いた筆致になっている。対照的に、使徒トマスは、見当違いのことを言うくせに、キリストの復活を信じられない頭でっかち、みたいな書かれ方をしている(使徒トマスはキリストの死後のキリスト教布教とキリスト教思想に対して大きな影響を与えていたので、トマスやトマスを信奉する人々をおとしめるためにこんな書き方をしたんじゃないか、という見方もあるらしい)。まあいずれにしても、この福音書では書かれていないこと、あるいは逆にこの福音書にしか書かれていないこと、というのが結構多いので、その点だけは頭に入れておくといいかもしれない。

2.2 イエス、でしょう。救世主、じゃないでしょう

ここにケンが書いていることはなかなか鋭い。キリストの時代には、神としてのキリストの存在を受容させるために、キリストを「なぞらえる」ための「権威」というアイコンが必要だった。アイコンはキリストの思想を受容させるために機能したけれど、そのアイコンを超える上で大きな障害になったわけだ。キリストが旧約聖書(イザヤ書とか)に預言されたメシアだと主張すること(マタイ福音書などを読むと、キリスト自身は自らこう口にしないようにふるまっていたのがうかがえて興味深かったりする)が、旧約聖書や律法の教条主義的解釈を超えてキリストが何事かを主張するときに、「メシアのはずがあんなこと言ってる、じゃあメシアって言ってたのは嘘なんじゃないの?」

という追及を生んだのは、だから否定できないことだと思う。

ケンが指摘する「キリストが神の子だ」というアイコンも、キリスト教内部においてですら大きな障害を引き起こした。だって、このアイコンを単一のものとしてそのまま理解したら「キリストと神は相違なる存在だ」ということになっちゃうし、実際そう認識した人も多かったのだ。

……とか、カトリックの僕が書くと、同じカトリックの人に異端だとか何だとか言われそうなんだけど、このことは歴史が証明している。初期のキリスト教宗派においては「神は複数の存在である」という考えは決して珍しいものではなかった。たとえば、キリストの説く「愛と慈悲の神」と、旧約聖書に出てくる「憤怒の神」は別の神さまのことだ、とかね(宗派によっては、神さまの数は30人、とか、いや365人いるんだ、とか、実はキ

リストは神さまの養子だった！ という主張もあったんだよ)。このような「複数の神を信じる」キリスト教徒の考え方が体系化されたのが、たとえばグノーシス主義と呼ばれるものだったりする。

そして、このようなアイコンの呪縛とその混乱からキリストの存在を解放したのが、有名な「三位一体」(さんみいったい、神・キリスト・聖霊の三つが同一かつ唯一の神だと認識する見方) という概念なんだけど、これに関する議論はやめておこう。古典としての神学問答というのは山のようにあるから、興味があるのならそちらを読んでいただくべきだと思うし、それにケンも書いているように、イエスの説く世界的な憤みや共感、友愛の教えを知る方が、人にとってははるかに重要なことだと思うから。

2.3 なぜイエスが神さまよりいいか

2.3.1 メッセージの中身

これはイエス登場以前の、民衆の「神」のイメージと、イエスが説いた「神」のイメージがどう違うのか、ということなんだろうけれど……今まで旧約聖書を読んできて、旧約聖書の神さまってのが、ケンが言うところの「血みどろ」な存在だというのはよく分かったと思う。こういう神さまのイメージを表すのに、しばしば使われるのが、先に挙げた「憤怒の神」とか、もう少しソフトに言うなら「荒ぶる神」というような言葉なわけだ。

旧約聖書の世界では、神の意志に沿うということは、それはそれは事細かく書かれた律法の規定を遵守するということで、ある意味非常に教条主義的というか、機械的というか、そういう行為だったわけ。細かく書いてあればある程、それを熟知する必要があったし、いくら細かく書いてあっても、それをどう解釈すべきか、という問題が生じてきて、それを遵守する上での「適切さ」を追求し、実践させる祭司が民衆に対する権力を握っていたわけ(これから新約聖書を読むと、ファリサイ人とかサドカイ人とかの神官・祭司ってのがあちこちで登場するんだけど、そのことね……もともと、結局イエスに論破されちゃうことがほとんどなんだけど)。

イエスが革命的だったのは、「倫理的な行動の実践は律法を内包している」と主張したこと。要するに、ゴチャゴチャした律法とその適用例を熟知しているから偉いんじゃないかと、神にとってよい行いやよい態度に努めることが偉いんだ！ と主張したわけ。これは旧来の権威主義を破壊する、まさに革命的主張だったんだけど、それ故に社会から迫害されたんだね……でもイエスはそんな迫害を超えて尚神さまに心を向けさせるための三点セットを用意していて、それが、罪の赦し・体の復活・永遠の命……というわけ。

2.3.2 プレゼンテーション

イエスのプレゼンはケンが言う通り、その寓話の使い方が天才的だったわけだけど、この寓話の使い方には実はふたつの側面があった……それは、分かりやすさと、分かりにくさだ。

これに関してはケンの書いている通り。食い付いて、噛みこなそうと思わせる魅力と、体制側の追及を巧みに避けるための抽象性（これはイエスの専売特許ではなく、例えば中国の思想家が王様に意見するときに、殺されないようにこれを駆使した……なんて話は、皆さんもご存知だと思う）を、イエスは巧みに使いこなした。今僕たちがこうやって聖書を読んでも、ん？ 何だ？ と僕たちを食いつかせるものがあることは、おそらくこれから分かると思う。

2.3.3 イメージ

ケンが絵姿の重要性を指摘し、山形氏はムスリムの例を挙げてそれを否定している。僕がここで指摘しておきたいのは、全てのキリスト教宗派が絵姿を活用したというわけではないけれど、正教会やカトリックは歴史的にそれを最大限に活用し、今もその伝統を踏襲している、ということ。たとえば正教会ではイコン（聖像、カトリックでは「御絵（ごえ）」なんて言い方をする）が崇敬の対象となるし、カトリックでもキリストや聖人、あるいは聖母マリアの像や絵画が崇敬の対象になる（信仰の対象ではないので念のため……キリスト教では偶像崇拜は御法度なので）。これに対して、プロテスタントはそのような権威主義的、かつ偶像崇拜を惹起するようなものに対しては否定的だけど、聖書の無謬性（ここまでもこの言葉の虚しさが垣間見えると思うけどさ）という言葉を知ると、聖書が聖像以上の信仰の拠り所になっているのを感じさせられる。まあ、イメージってのは、絶対条件ではないけれど、やはり必要なものなんだろうと思う。

2.4 イエスの物語

イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」——ヨハネ 3:3

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。——マルコ 1:14-15

2.4.1 第1部 若き日のイエス

(編者註:) 若い頃のイエスの記述だが、マタイ福音書ではいきなり洗礼者ヨハネが出てきて洗礼を受け(1:13-17)、四十日の断食と悪魔の誘惑……という感じ。ルカ福音書では、十二歳のときの神殿でのエピソード(過越の祭でエルサレム詣でをしたときに、両親に存在を忘れられて、神殿に置きざりにされてしまうんだ…… 2:41-51)の後に洗礼、後はマタイと同じ。

天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。

(参考:欽定訳:) And the angel answered and said unto her, The Holy Ghost shall come upon thee, and the power of the Highest shall overshadow thee: therefore also that holy thing which shall be born of thee shall be called the Son of God. ——ルカ 1:35

(編者註:) 山形訳だけを読むと、「最高のものの力」とあるのでいかにも思わせぶりだが、この「もの」は、欽定訳などを見ても、物体を指し示す「もの」ではなく、人称代名詞、つまり「者」(新共同訳では「方」)ととらえるのが妥当だろう。

ここで言及されている「無原罪の聖母」は、カトリック教会における概念。おとめマリアが生まれながらに原罪を免れた存在であるとする考えは、2世紀以来(カトリックや正教会において)信じられてきた「至潔なるマリア」の概念を、ヨハネス・ドゥンス・スコトゥスら、特にフランシスコ会が中心となって13世紀に体系化したものと考えられる。公式には、1854年12月8日の教皇ピウス9世の回勅において、はじめて信仰箇条(キリスト者が信じるべき教え)として宣言された。ケンはこの「無原罪の御宿り」がクレア

ヴォーの聖ベルナル（12世紀初頭から活躍したフランスの神学者）によってでっちあげられた、と書いている（原著にて確認済）けれど、これはダウト。はじめて「無原罪の御宿り」の論証可能性を主張したのは前述のとおり、スコラ学派（ちなみに先のベルナルは反スコラ派でならした人物なんだけど）であるヨハネス・ドゥンス・スコトゥスだといわれている。

イエス・キリストの誕生

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、——マタイ 1:18-24

占星術の学者たちが訪れる

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」——マタイ 2:1-2

そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰っ

て行った。——マタイ 2:7-12

さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。——マタイ 2:16

羊飼いと天使

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼料桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

「いと高きところには栄光、神にあれ、
地には平和、御心に適う人にあれ。」

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼料桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりにだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。——ルカ 2:8-20

(編者註:) 学者の人数に関しては、贈り物が3種類だった、というのを、贈り主が3人だったと誤解したのだろうか。まあ、よくあることですよ……それより、ケンが指摘しているけれど、マタイ福音書(実はマタイ福音書は福音書としては最初期のものだと言われているんだけど)には、あの有名な厩の話が全然出てこないんだね。それに、この学者達、自分の国で星を見つけて、エルサレムに一度行って、そこからベツレヘムに行っているわけだ。ヘロデ王の幼児大虐殺のくだりと合わせると、ケンの指摘もうなづけるところだと思う。

神の子羊

その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り

除く神の小羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。」そしてヨハネは証しした。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」——ヨハネ 1:32-34

2.4.2 第2部 中年の危機

敵を愛しなさい

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言う。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」——マタイ 5:43-48

2.4.2.1 アカのイエス

神と富

「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」——マタイ 6:24

どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」——ルカ 16:13

重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」——マタイ 19:24

金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」——マルコ 10:25

金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」——ルカ 18:25

しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である、

あなたがたはもう慰めを受けている。——ルカ 6:24

そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」——ルカ 12:15

これを聞いて、イエスは言われた。「あなたに欠けているものがまだ一つある。持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」——ルカ 18:22

イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」——マルコ 10:21

イエスは言われた。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」——マタイ 19:21

そこで、イエスは言われた。「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。——ルカ 16:15

2.4.2.2 イマイチなできごと

マルタとマリア

一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」——ルカ 10:38-42

罪深い女を赦す

さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事をしてほしいと願ったので、イエスはその家に入って食事の席に着かれた。この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。そこで、イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。イエスはお話しになった。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。イエスは、「そのとおりだ」と言われた。そして、女の方を振り向いて、シモンに言われた。「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが来てから、わたしの足に接吻してやまなかった。あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」そして、イエスは女に、「あなたの罪は赦された」と言われた。同席の人たちは、「罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう」と考え始めた。イエスは女に、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた。——ルカ 7:44-50

婦人たち、奉仕する

すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。——ルカ 8:1-3

(編者註:) ここに出てくる「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア」という記述(ここと、マタイ福音書の結びに出てくる)が、マグダラのマリアの負の前歴にほぼ唯一ふれているもので、これ以外には四福音書にはマグダラのマリアの来

歴にふれた記述はない。ただ、マグダラのマリアが誰よりも早く復活したイエスに出くわすという有名なくだり（ノリ・メ・タンゲレ……私に触れるな……というイエスの言葉を聞いたことがある人もいるだろう）を、このルカ福音書は4つの福音書の中で唯一否定しているのね（二人の弟子がエマオへの道行きでイエスと共に歩いた、とされる）。これ以外にも、外典「マリアによる福音書」には、ペトロがマグダラのマリアの言うことを信じようとしなない記述があったりするので、マグダラのマリア（や、その他の女性の随伴者）は、男性の弟子達から一種の嫉妬を受けていたのではないか、という見方もある。

サマリア人から歓迎されない

イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。しかし、村人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである。弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言った。イエスは振り向いて二人を戒められた。そして、一行は別の村に行った。——ルカ 9:51-56

2.4.2.3 おデブのイエス

断食についての問答

そのころ、ヨハネの弟子たちがイエスのところに来て、「わたしたちとファリサイ派の人々はよく断食しているのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか」と言った。イエスは言われた。「花婿と一緒にいる間、婚礼の客は悲しむことができるだろうか。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。そのとき、彼らは断食することになる。——マタイ 9:14-15

断食についての問答

ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々は、断食していた。そこで、人々はイエスのところに来て言った。「ヨハネの弟子たちとファリサイ派の弟子たちは断食しているのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか。」イエスは言われた。「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿と一緒にいるかぎり、断食はできない。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その日には、彼らは断食することになる。——マルコ 2:18-19

断食についての問答

人々はイエスに言った。「ヨハネの弟子たちは度々断食し、祈りをし、ファリサイ派の弟子たちも同じようにしています。しかし、あなたの弟子たちは飲んだり食べたりしています。」そこで、イエスは言われた。「花婿が一緒にいるのに、婚礼の客に断食させることがあなたがたにできようか。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その時には、彼らは断食することになる。」——ルカ 5:33-34

ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。」——マタイ 11:19

洗礼者ヨハネが来て、パンも食べずぶどう酒も飲まずにいると、あなたがたは、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、それに従うすべての人によって証明される。」——ルカ 7:33-35

(編者註:) 引用部をやや広めにとったが、これを読むと、殊更にイエスが自身を食いしんぼうだと言っているというより、「食ったら食ったで、食わないなら食わないで、色々言われちゃうわけだけど……」と言っているわけだ。

安息日に麦の穂を摘む

そのころ、ある安息日にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になったので、麦の穂を摘んで食べ始めた。ファリサイ派の人々がこれを見て、イエスに、「御覧なさい。あなたの弟子たちは、安息日にしてはならないことをしている」と言った。そこで、イエスは言われた。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。神の家に入り、ただ祭司のほかには、自分も供の者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか。安息日に神殿にいる祭司は、安息日の掟を破っても罪にならない、と律法にあるのを読んだことがないのか。言うておくが、神殿よりも偉大なものがここにある。もし、『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、あなたたちは罪もない人たちをとがめなかったであろう。人の子は安息日の主なのである。」——マタイ 12:1-8

安息日に麦の穂を摘む

ある安息日に、イエスが麦畑を歩いて行かれると、弟子たちは歩きながら麦の穂を摘み始めた。ファリサイ派の人々がイエスに、「御覧なさい。なぜ、彼らは安息日にしてはならないことをするのか」と言った。イエスは言われた。「ダビデが、自分も供の者たちも、食べ物がなくて空腹だったときに何をしたか、一度も読んだことがないのか。アビアタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えたではないか。」そして更に言われた。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子は安息日の主でもある。」——マルコ 2:23-28

安息日に麦の穂を摘む

ある安息日に、イエスが麦畑を歩いて行かれると、弟子たちは麦の穂を摘み、手でもんで食べた。ファリサイ派のある人々が、「なぜ、安息日にしてはならないことを、あなたたちはするのか」と言った。イエスはお答えになった。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。神の家に入り、ただ祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを取って食べ、供の者たちにも与えたではないか。」そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である。」——ルカ 6:1-5

いちじくの木を呪う

朝早く、都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。道端にいちじくの木があるのを見て、近寄られたが、葉のほかは何もなかった。そこで、「今から後いつまでも、お前には実がならないように」と言われると、いちじくの木はたちまち枯れてしまった。弟子たちはこれを見て驚き、「なぜ、たちまち枯れてしまったのですか」と言った。イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば、いちじくの木に起こったようなことができるばかりでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言っても、そのとおりになる。信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。」——マタイ 21:18-22

いちじくの木を呪う

翌日、一行がベタニアを出るとき、イエスは空腹を覚えられた。そこで、葉の茂ったいちじくの木を遠くから見て、実がなっていないかと近寄られたが、葉のほかは何もなかった。いちじくの季節ではなかったからである。イエスはその木に向かって、「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がいないように」と言われた。弟子たちはこれを聞いていた。——マルコ 11:12-14

枯れたいちじくの教訓

翌朝早く、一行は通りがかりに、あのいちじくの木が根元から枯れているのを見た。そこで、ペトロは思い出してイエスに言った。「先生、御覧ください。あなたが呪われたいちじくの木が、枯れています。」そこで、イエスは言われた。「神を信じなさい。はっきり言うておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言い、少しも疑わず、自分の言うとおりにになると信じるならば、そのとおりになる。だから、言うておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。また、立って祈るとき、だれかに対して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちを赦してくださる。」^{*1}もし赦さないなら、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちをお赦しにならない。——マルコ 11:20-26

(編者註:) ここでのイエスのいちじくの木への呪いは、食いものの恨みというよりは、むしろ旧約における預言者の呪い(列王記下 2:23-24 のエリシャの行動を思い出していただきたい……エリシャが子供達に「はげ頭」と罵られた一件ね)によく似ていて、マルコ福音書ではこの後に「神を信じなさい」と続くことを併せて考えると、おそらく主に祝福された者への充足を怠る者、つまり主を敬わない者を戒める意図なのだろう……と解釈できる。好意的に見ればね。

悔い改めない町を叱る

それからイエスは、数多くの奇跡の行われた町々が悔い改めなかったので、叱り始められた。「コラジン、お前は不幸だ。ベトサイダ、お前は不幸だ。お前たちのところで行われた奇跡が、ティルスやシドンで行われていれば、これらの町はとうの昔に粗布をまとい、灰をかぶって悔い改めたにちがいない。しかし、言うておく。裁きの日にはティルスやシドンの方が、お前たちよりまだ軽い罰で済む。また、カファルナウム、お前は、
天にまで上げられるとでも思っているのか。

陰府にまで落とされるのだ。

お前のところでなされた奇跡が、ソドムで行われていれば、あの町は今日まで無事だったにちがいない。しかし、言うておく。裁きの日にはソドムの地の方が、お前よりまだ軽い罰で済むのである。」——マタイ 11:20-24

^{*1} 印以下強調部(マルコ 11:26)は、底本に節が書けている箇所異本による訳文。

しかし、町に入っても、迎え入れられなければ、広場に出てこう言いなさい。『足についたこの町の埃さえも払い落として、あなたがたに返す。しかし、神の国が近づいたことを知れ』と。言うておくが、かの日には、その町よりまだソドムの方が軽い罰で済む。』
——ルカ 10:10-12

洗礼者ヨハネ、殺される

イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」そのほかにも、「彼はエリヤだ」と言う人もいれば、「昔の預言者のような預言者だ」と言う人もいた。ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」と言った。実は、ヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚しており、そのことで人をやってヨハネを捕らえさせ、牢につないでいた。ヨハネが、「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである。ところが、良い機会が訪れた。ヘロデが、自分の誕生日の祝いに高官や将校、ガリラヤの有力者などを招いて宴会を催すと、ヘロディアの娘が入って来て踊りをおどり、ヘロデとその客を喜ばせた。そこで、王は少女に、「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前にやろう」と言い、更に、「お前が願うなら、この国の半分でもやろう」と固く誓ったのである。少女が座を外して、母親に、「何を願いましょうか」と言うと、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。早速、少女は大急ぎで王のところに行き、「今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と願った。王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、少女の願いを退けたくなかった。そこで、王は衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るようにと命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、盆に載せて持って来て少女に渡し、少女はそれを母親に渡した。ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めた。——マルコ 6:17-29

洗礼者ヨハネ、殺される

そのころ、領主ヘロデはイエスの評判を聞き、家来たちにこう言った。「あれは洗礼者ヨハネだ。死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」実はヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアのことでヨハネを捕らえて縛り、牢に入れていた。ヨハネが、「あの女と結婚することは律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。ヘロデはヨハネを殺そうと思っていたが、民衆を恐れた。人々がヨハネを預

言者と思っていたからである。ところが、ヘロデの誕生日にヘロディアの娘が、皆の前で踊りをおどり、ヘロデを喜ばせた。それで彼は娘に、「願うものは何でもやろう」と誓って約束した。すると、娘は母親に唆されて、「洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、この場でください」と言った。王は心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、それを与えるように命じ、人を遣わして、牢の中でヨハネの首をはねさせた。その首は盆に載せて運ばれ、少女に渡り、少女はそれを母親に持って行った。それから、ヨハネの弟子たちが来て、遺体を引き取って葬り、イエスのところに行って報告した。——マタイ 14:3-11

(編者註:) まず、ここに出てくる「領主ヘロデ」というのは、ヘロデ大王の息子の一人で、ガリラヤ・ペレア四分領主であるヘロデ・アンティパスのこと。そして「自分の兄弟フィリポの妻ヘロディア」と書かれているフィリポというのは、やはりヘロデ大王の息子の一人であるヘロデ・フィリポを指す。しかし、フィリポは実際にはヘロディアの夫ではなく、ヘロディアの娘の夫だ。実は、このフィリポというのは福音書記者の誤記であり、本当はやはりヘロデ大王の息子の一人であるヘロデ・ボエートスを指している。ヘロディアはもともとヘロデ・ボエートスの妻で、先夫との間に娘（上引用部で登場する「ヘロディアの娘」「少女」のこと）を得たが、後に領主ヘロデの妃となった。このことに関しての記述が、フラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』（秦剛平氏による訳本がちくま学芸文庫に収録されている）18巻第5章4節にあるのだが、そこに「...しかし、彼らの姉妹のヘロディアは、ヘロデ大王の息子で、高位の祭司シモンの娘のマリアムネが生んだヘロデ〔・ボエートス〕と結婚し、サロメという娘ひとりをもうけた。...」と書かれており、サロメの名はここに依拠するものと思われる（ケンが言う通り、聖書には出てこないけれどね）。

洗礼者ヨハネは、弟の妻と結婚した領主ヘロデに対して、その婚姻が近親相姦になると諫めた。これは**兄弟の妻を犯してはならない**。兄弟を辱めることになるからである。（**レビ記 18:16**）という律法を論拠としたものなわけだけど、これを言われて領主ヘロデはカチーンときたものの、洗礼者ヨハネを殺したら民衆蜂起が起きるんじゃないかと恐れて、殺せずにいたのを、ヘロディアの娘（とヘロディア）に唆され、首を刎ねてしまうわけだ。ちなみにサロメが洗礼者ヨハネの首を盆に載せている場面は中世宗教画における有名なモチーフである（カラヴァッジョ「洗礼者聖ヨハネの斬首」はあまりに有名）。

ナザレで受け入れられない

イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろうか。この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコ

ブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いったいどこから得たのだろう。」このように、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言い、人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった。——マタイ 13:53-58

そして、言われた。「はっきり言うておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。確かに言うておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、エリヤはその中のだれのもとにも遣わされなくて、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。また、預言者エリシャの時代に、イスラエルには重い皮膚病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。——ルカ 4:24-30

イエス、死と復活を予告する

このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、人の子がその国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる。」——マタイ 16:21-28

イエス、死と復活を予告する

それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから

排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。神に背いたこの罪深い時代に、わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子もまた、父の栄光に輝いて聖なる天使たちと共に来るときに、その者を恥じる。」また、イエスは言われた。「はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる」——マルコ 8:32-9:1

(編者註:) ん、どうしてルカ福音書の引用がないか、って? 同じ場面は出てくるんだけど、何故かルカ福音書のイエスはペテロをサタン呼ばわりしないんだよね。

イエス、死と復活を予告する

イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、次のように言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子も、自分と父と聖なる天使たちとの栄光に輝いて来るときに、その者を恥じる。確かに言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国を見るまでは決して死なない者がいる。」——ルカ 9:21-27

(編者註:) ね?

シリア・フェニキアの女の信仰

イエスはそこを立ち去って、ティルスの方に行かれた。ある家に入り、だれにも知られたくないと思っておられたが、人々に気づかれてしまった。汚れた霊に取りつかれた幼い

娘を持つ女が、すぐにイエスのことを聞きつけ、来てその足もとにひれ伏した。女はギリシア人でシリア・フェニキアの生まれであったが、娘から悪霊を追い出してくださいと頼んだ。イエスは言われた。「まず、子供たちに十分食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない。」ところが、女は答えて言った。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」そこで、イエスは言われた。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。——マルコ 7:24-30

カナンの女の信仰

イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」とお答えになった。しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」とお答えになると、女は言った。「主よ、ごもっともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。——マタイ 15:21-28

(編者註:) うーん、卑屈ねえ。この場合は「主人 = 神」「子供 = イスラエルの民」「子犬 = 異民族 (= ギリシア人でシリア・フェニキアの生まれの女、カナンの女)」という対応関係なわけでしょう。「主人の食卓」、というと、クリスチャン的には「神の食卓」という言葉が脊髄反射的に浮かぶのだけど、この場合もそういう意味であって、主人という言葉は子供を指してはいないんじゃないかと思うけれど。

2.4.2.4 おまぬけ弟子たち

また、イエスは言われた。「このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。——マルコ 4:13

イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたとえについて尋ねた。イエスは言われた。「あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分らないのか。——マルコ 7:17-18

一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。——マルコ 9:9-10

あなたがたは親、兄弟、親族、友人にまで裏切られる。中には殺される者もいる。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくなる。忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」——ルカ 21:16-19

ヤコブの殺害とペトロの投獄

そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。——使徒 12:1-2

人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、人の子がその国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる。」——マタイ 16:27-28

また、イエスは言われた。「はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる。」——マルコ 9:1

確かに言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国を見るまでは決して死なない者がいる。」——ルカ 9:27

そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見ると、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人々を四方から呼び集める。」

いちじくの木への教え

「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」——マルコ 13:26-31

そのとき、人の子の徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。人の子は、大きなラッパの音を合図にその天使たちを遣わす。天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」

いちじくの木 of 教え

「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。それと同じように、あなたがたは、これらすべてのことを見たなら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」——マタイ 24:30-35

(参考・新共同訳:)

そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」

「いちじくの木」のたとえ

それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。はっきり言うておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」——ルカ 21:27-33

偽メシアや偽預言者が現れて、大きなしるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちをも惑わそうとするからである。——マタイ 24:24

偽メシアや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。——マルコ 13:22

だれがどのような手段を用いても、だまされてはいけません。なぜなら、まず、神に対する反逆が起こり、不法の者、つまり、滅びの子が出現しなければならないからです。——二テサロ 2:3

子供たちよ、終わりの時が来ています。反キリストが来ると、あなたがたがかねて聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。これによって、終わりの時が来ていると分かります。——一ヨハネ 2:18

(編者註:) 反キリストというのが明確に登場するのは、聖書ではヨハネの手紙一 (2:18, 2:22, 4:3) とヨハネの手紙二 (1:7)。上の 一ヨハネ 2:18 以外の箇所を引用しておく。

偽り者とは、イエスがメシアであることを否定する者でなくて、だれでありましょう。御父と御子を認めない者、これこそ反キリストです。——一ヨハネ 2:22

イエスのことを公に言い表さない霊はすべて、神から出ていません。これは、反キリストの霊です。かねてあなたがたは、その霊がやって来ると聞いていましたが、今や既に世に来ています。——一ヨハネ 4:3

このように書くのは、人を惑わす者が大勢世に出て来たからです。彼らは、イエス・キリストが肉となって来られたことを公に言い表そうとしません。こういう者は人を惑わす者、反キリストです。——二ヨハネ 1:7

(編者註:) この「反キリスト」というフレーズがあまりにキャッチーだったので、たとえば十字軍遠征でムスリムを虐殺しなかった神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世は、カトリックを破門された後に死ぬまでこの汚名を背負わされることになった。また、あの宗教改革のときにはルターやカルバンが「ローマ教皇は反キリストである」と主張したわけ。これらのような使われ方は、僕らの知っている言葉で言うと「非国民」というのに似ているかもしれない。

2.4.2.5 ゴーマンな子羊くん

「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。——マタイ 10:34

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ。——ルカ 12:49-51

だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」——ルカ 14:33

霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」——マルコ 9:22-23

イエスはお答えになった。「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」——マルコ 9:19

また、地上の者を『父』と呼んではならない。あなたがたの父は天の父おひとりだけだ。『教師』と呼ばれてもいけない。あなたがたの教師はキリスト一人だけである。——マタイ 23:9-10

(編者註:) うーん、ここだけ読むのはちょっとアンフェアなような気がする……ここでイエスが言いたかったのは、「律法学者やファリサイ派の人々は神と律法の威光を背負って權威然としてふるまっているけれど、連中は信仰を實踐してなんかいない、神の御前では小賢しい權威を主張したって無意味なんだ」というようなことなんだろう。ちょっと長くなるけれど、上引用部の少し前から引用する。

それから、イエスは群衆と弟子たちにお話しになった。「律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座に着いている。だから、彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見倣ってはならない。言うだけで、実行しないからである。彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない。そのすることは、すべて人に見せるためである。聖句の

入った小箱を大きくしたり、衣服の房を長くしたりする。宴会では上座、会堂では上席に座ることを好み、また、広場で挨拶されたり、『先生』と呼ばれたりすることを好む。だが、あなたがたは『先生』と呼ばれてはならない。あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ。また、地上の者を『父』と呼んではならない。あなたがたの父は天の父おひとりだけだ。『教師』と呼ばれてもいけない。あなたがたの教師はキリスト一人だけである。あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。——マタイ 23:1-12

ベタニアで香油を注がれる

さて、イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家におられたとき、一人の女が、極めて高価な香油の入った石膏の壺を持って近寄り、食事の席に着いておられるイエスの頭に香油を注ぎかけた。弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。「なぜ、こんな無駄遣いをするのか。高く売って、貧しい人々に施すことができたのに。」イエスはこれを知って言われた。「なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はわたしの体に香油を注いで、わたしを葬る準備をしてくれた。はっきり言うておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」——マタイ 26:6-13

ベタニアで香油を注がれる

イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。はっきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」——マルコ 14:3-9

ベタニアで香油を注がれる

過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっているながら、その中身をごまかしていたからである。イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」——ヨハネ 12:1-8

(編者註:) ここで問題。なぜヨハネ福音書では頭が足に変わったんだろう？ 実は聖書では、文献学的に後に世に出た文書では前に存在した文書の内容がこのように（あるときは矛盾を来さないように、またあるときはより宗教的イメージを喚起するように）変わっていることは珍しくない。

わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。——ヨハネ 10:14

(編者註:) 羊 sheep というのは、たしかに英語においてはあまりいいイメージのない単語だと思う。そのニュアンスはケンが書いている通りで、衆愚的なふるまいに終始する、知的に自律していないような類の人に対する蔑称として sheep という言葉が使われるのは事実だ。しかし、ヘブライ人は遊牧の民であり、羊飼という仕事は重んじられている。また、羊が群から迷い出たとしても、その羊に悪意があるわけではなく、羊飼いが連れ戻しさえすれば、また群に戻ることができるわけで、このようなたとえを用いることは、人の躓きには必ず救われる可能性が残されていることを暗示している。

2.4.2.6 イエス、家族を語る

平和ではなく剣を

「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。

人をその父に、
娘を母に、
嫁をしゅうとめに。

こうして、自分の家族の者が敵となる。——マタイ 10:34-36

分裂をもたらす

あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ。今から後、一つの家¹に五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。

父は子と、子は父と、
母は娘と、娘は母と、
しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、
対立して分かれる。」——ルカ 12:51-53

わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。——マタイ 10:37

弟子の条件

大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。——ルカ 14:26

弟子の覚悟

イエスは、自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸に行くように命じられた。そのとき、ある律法学者が近づいて、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。」ほかに、弟子の一人がイエスに、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」——マタイ 8:18-22

(編者註:) これは別にゾンビの互助会みたいな光景を想定しているわけではない。「死ん

でいる者たち」というのは、「キリストの下に生きていない者」という意味。

弟子の覚悟

一行が道を進んで行くと、イエスに対して、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。」そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。——ルカ 9:57-62

真の幸い

イエスがこれらのことを話しておられると、ある女が群衆の中から声高らかに言った。「なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。」しかし、イエスは言われた。「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である。」——ルカ 11:27-28

イエスの母、兄弟

イエスがなお群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちが、話したいことがあって外に立っていた。そこで、ある人がイエスに、「御覧なさい。母上と御兄弟たちが、お話ししたいと外に立っておられます」と言った。しかし、イエスはその人にお答えになった。「わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とはだれか。」そして、弟子たちの方を指して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」——マタイ 12:46-50

イエスの母、兄弟

さて、イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群衆のために近づくことができなかった。そこでイエスに、「母上と御兄弟たちが、お会いしたいと外に立っておられます」との知らせがあった。するとイエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行う人たちのことである」とお答えになった。——ルカ 8:19-21

ベルゼブル論争

イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭力で悪霊を追い出している」と言っていた。そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。国が内輪で争えば、その国は成り立たない。家が内輪で争えば、その家は成り立たない。同じように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。はっきり言うておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涇の言葉も、すべて赦される。しかし、聖霊を冒涇する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。」イエスがこう言われたのは、「彼は汚れた霊に取りつかれている」と人々が言っていたからである。

イエスの母、兄弟

イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。大勢の人が、イエスの周りに座っていた。「御覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」と知らされると、イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」——マルコ 3:20-35

2.4.2.7 福音いっぱい奇跡

さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。——ヨハネ 6:11-12

カナでの婚礼

三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メートル入りのものである。イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめ

の縁まで水を満たした。イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかった。花婿を呼んで、言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。——ヨハネ 2:1-11

悪霊に取りつかれたゲラサの人をいやす

一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。これまでも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は碎いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。

ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いだした。イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。——マルコ 5:1-20

悪霊に取りつかれたゲラサの人をいやす

一行は、ガリラヤの向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが陸に上がられると、この町の者で、悪霊に取りつかれている男がやって来た。この男は長い間、衣服を身に着けず、家に住まないで墓場を住まいとしていた。イエスを見ると、わめきながらひれ伏し、大声で言った。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい。」イエスが、汚れた霊に男から出るように命じられたからである。この人は何回も汚れた霊に取りつかれたので、鎖でつながれ、足枷をはめられて監視されていたが、それを引きちぎっては、悪霊によって荒れ野へと駆り立てられていた。イエスが、「名は何というか」とお尋ねになると、「レギオン」と言った。たくさんの悪霊がこの男に入っていたからである。そして悪霊どもは、底なしの淵へ行けという命令を自分たちに出さないようにと、イエスに願った。

ところで、その辺りの山で、たくさんの豚の群れがえさをあさっていた。悪霊どもが豚の中に入る許しを願うと、イエスはお許しになった。悪霊どもはその人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れは崖を下って湖になだれ込み、おぼれ死んだ。この出来事を見た豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。そこで、人々はその出来事を見ようとしてやって来た。彼らはイエスのところに来ると、悪霊どもを追い出してもらった人が、服を着、正気になってイエスの足もとに座っているのを見て、恐ろしくなった。成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれていた人の救われた次第を人々に知らせた。そこで、ゲラサ地方の人々は皆、自分たちのところから出て行ってもらいたいと、イエスに願った。彼らはすっかり恐れに取りつかれていたのである。そこで、イエスは舟に乗って帰ろうとされた。悪霊どもを追い出してもらった人が、お供したいとしきりに願ったが、イエスはこう言ってお帰しになった。「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになされたことをことごとく話して聞かせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。——ルカ 8:26-39

悪霊に取りつかれたガダラの人をいやす

イエスが向こう岸のガダラ人の地方に着かれると、悪霊に取りつかれた者が二人、墓場から出てイエスのところにやって来た。二人は非常に狂暴で、だれもその辺りの道を通れないほどであった。突然、彼らは叫んだ。「神の子、かまわないでくれ。まだ、その時ではないのにここに来て、我々を苦しめるのか。」はるかかなたで多くの豚の群れがえさをあさっていた。そこで、悪霊どもはイエスに、「我々を追い出すのなら、あの豚の中にやってくれ」と願った。イエスが、「行け」と言われると、悪霊どもは二人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れはみな崖を下って湖になだれ込み、水の中で死んだ。豚飼いたちは逃げ出し、町に行き、悪霊に取りつかれた者のことなど一切を知らせた。すると、町中の者がイエスに会おうとしてやって来た。そして、イエスを見ると、その地方から出

て行ってもらいたいと言った。——マタイ 8:28-34

そこで、イエスはヤイロと一緒に出かけに行かれた。

大勢の群衆も、イエスに従い、押し迫って来た。さて、ここに十二年間も出血の止まらない女がいた。多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。「この方の服にでも触れればいやしていただける」と思ったからである。すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体を感じた。イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、「わたしの服に触れたのはだれか」と言われた。そこで、弟子たちは言った。「群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう。それなのに、『だれがわたしに触れたのか』とおっしゃるのですか。」しかし、イエスは、触れた者を見つけようと、廻りを見回しておられた。女は自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、すべてをありのまま話した。イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい。」——マルコ 5:24-34

十二歳ぐらいの一人娘がいたが、死にかけていたのである。

イエスがそこに行かれる途中、群衆が周りに押し寄せて来た。ときに、十二年このかた出血が止まらず、医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえない女がいた。この女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れると、直ちに出血が止まった。イエスは、「わたしに触れたのはだれか」と言われた。人々は皆、自分ではないと答えたので、ペトロが、「先生、群衆があなたを取り巻いて、押し合っているのです」と言った。しかし、イエスは、「だれかがわたしに触れた。わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話した。イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」——ルカ 8:42-48

(編者註:) 山形訳ではルカ 8:28-34 となっているが、これは 8:43-46 の誤り (原著ではそうになっている)。上では少し広めに引用してある。

そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。——マルコ 7:33

イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。——マルコ 8:23

こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。——ヨハネ 9:6-7

イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。——ヨハネ 11:38-39

2.4.2.8 地獄好きなイエス

言っておくが、人は自分の話したつまらない言葉についてもすべて、裁きの日には責任を問われる。あなたは、自分の言葉によって義とされ、また、自分の言葉によって罪ある者とされる。」——マタイ 12:36-37

体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。——マタイ 10:28

「友人であるあなたがたに言っておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。だれを恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持っている方だ。そうだ。言っておくが、この方を恐れなさい。——ルカ 12:4-5

世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」——マタイ 13:49-50

こうして、天地創造の時から流されたすべての預言者の血について、今の時代の者たちが責任を問われることになる。——ルカ 11:50

悔い改めなければ滅びる

ちょうどそのとき、何人かの人に来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」——ルカ 13:1-5

(編者註:) 血をいけにえに混ぜる、ということ、悪魔の黒ミサミみたいなイメージに取られそうだけど、ここで言っているのは、神に捧げる過越しの祭のいけにえを屠る時期に、ピラトがユダヤ人を殺したことなのね。

2.4.2.9 言わなきゃよかった教えの数々

しかし、わたしは言うておく。不法な結婚でもないのに妻を離縁する者はだれでも、その女に姦通の罪を犯させることになる。離縁された女を妻にする者も、姦通の罪を犯すことになる。」——マタイ 5:32

言うておくが、不法な結婚でもないのに妻を離縁して、他の女を妻にする者は、姦通の罪を犯すことになる。」——マタイ 19:9

イエスは言われた。「妻を離縁して他の女を妻にする者は、妻に対して姦通の罪を犯すことになる。夫を離縁して他の男を夫にする者も、姦通の罪を犯すことになる。」——マルコ 10:11-12

妻を離縁して他の女を妻にする者はだれでも、姦通の罪を犯すことになる。離縁された女を妻にする者も姦通の罪を犯すことになる。」——ルカ 16:18

(編者註:) この離縁の一節は、イエスを試そうとするファリサイ派の人々が、イエスが離縁してはならない、と言うのに「じゃあモーセが離縁状出して離縁したのはどうよ」と聞き返したのに対する答えの一部。マタイ福音書とマルコ福音書から該当部分を引用しておく。

離縁について教える

イエスはこれらの言葉を語り終えると、ガリラヤを去り、ヨルダン川の向こう側のユダヤ地方に行かれた。大勢の群衆が従った。イエスはそこで人々の病気をいやされた。

ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と言った。イエスはお答えになった。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とにお造りになった。」そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」すると、彼らはイエスに言った。「では、なぜモーセは、離縁状を渡して離縁するように命じたのですか。」イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、モーセは妻を離縁することを許したのであって、初めからそうだったわけではない。言うておくが、不法な結婚でもないのに妻を離縁して、他の女を妻にする者は、姦通の罪を犯すことになる。」弟子たちは、「夫婦の間柄がそんなものなら、妻を迎えない方がましです」と言った。イエスは言われた。「だれもがこの言葉を受け入れるのではなく、恵まれた者だけである。結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい。」——マタイ 19:1-12

離縁について教える

イエスはそこを立ち去って、ユダヤ地方とヨルダン川の向こう側に行かれた。群衆がまた集まって来たので、イエスは再びいつものように教えておられた。ファリサイ派の人々が近寄って、「夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と尋ねた。イエスを試そうとしたのである。イエスは、「モーセはあなたたちに何と命じたか」と問い返された。彼らは、「モーセは、離縁状を書いて離縁することを許しました」と言った。イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、このような掟をモーセは書いたのだ。しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」家に戻ってから、弟子たちがまたこのことについて尋ねた。イエスは言われた。「妻を離縁して他の女を妻にする者は、妻に対して姦通の罪を犯すことになる。夫を離縁して他の男を夫にする者も、姦通の罪を犯すことになる。」——マルコ 10:1-12

姦淫してはならない

「あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは

言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。もし、右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。」——マタイ 5:27-30

罪への誘惑

「しかし、わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまづかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる方がましである。世は人をつまづかせるから不幸だ。つまづきは避けられない。だが、つまづきをもたらす者は不幸である。もし片方の手があなたがあなたをつまづかせるなら、それを切って捨ててしまいなさい。両手両足がそろったまま永遠の火に投げ込まれるよりは、片手片足になっても命にあずかる方がよい。もし片方の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。両方の目がそろったまま火の地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても命にあずかる方がよい。」——マタイ 18:6-9

罪への誘惑

「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまづかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。もし片方の手があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。^{*2}地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。もし片方の足があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。^{*3}地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。もし片方の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出しなさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。人は皆、火で塩味を付けられる。——マルコ 9:42-50

人を裁くな

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見

^{*2} 印以下強調部 (マルコ 9:44) は、底本に節が書けている箇所の変本による訳文。

^{*3} 印以下強調部 (マルコ 9:46) は、底本に節が書けている箇所の変本による訳文。

えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたにかみついてくるだろう。』——マタイ 7:1-6

(編者註:) 引用部に対応するルカ福音書の部分 (ルカ 6:37-38, 41-42) には何故かこの話は出てこない。

また、弟子たちに言われた。「あなたがたのうちのだれかに友達がいる、真夜中にその人のところに行き、次のように言ったとしよう。『友よ、パンを三つ貸してください。旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです。』すると、その人は家の中から答えるにちがいない。『面倒をかけないでください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません。』しかし、言うておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。そこで、わたしは言うておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。——ルカ 11:5-10

それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言うてやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と。』しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。』——ルカ 12:16-21

客と招待する者への教訓

イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された。「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない

い。そのとき、あなたは恥をかって末席に着くことになる。招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。』——ルカ 14:7-11

(編者註:) いや、前半だけ読んだらそう思われるかもしれないけれど、ちゃんとこれと対句になっている後半があるのね。以下引用。ここで言わんとしていることは、山形氏の脚註を御参照のこと。

また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」——ルカ 14:12-14

兄弟の忠告

「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の証人の口によって確定されるようになるためである。それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なしなさい。——マタイ 18:15-17

「仲間を赦さない家来」のたとえ

そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。——マタイ 18:21-22

(編者註:) マタイ 18:15-17 では、教会が最後の判断基準になっているわけ。で、マタイ 18:21-22 の後にはこういうたとえ話が続くので、ここでイエスは「最終判断は人の仕事じゃない、神の仕事なんだ」と言いたいんでしょう。**好意的に見ればね。**

そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。決済し始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。しかし、返済できなかったので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。仲間はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼んだ。しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。『不屈きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。』——マタイ 18:23-35

(編者註:) 余談だけど、マタイ 18:15-17 というのは、クリスチャンが自分達に不寛容な存在……異宗派とか無神論者とか……をシカトするときの定型句としてよくお目にかかる。

(編者註:) pp.159 の最後に出てくる「不正直な支配人の寓話」というのは、これのことだね。

「不正な管理人」のたとえ

イエスは、弟子たちにも次のように言われた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄遣いしていると、告げ口をする者があった。そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と

言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。そこで、わたしは言うておくと、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」——ルカ 16:1-13

(編者註) :で、その後こんな節が続く。

律法と神の国

金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った。そこで、イエスは言われた。「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている。しかし、律法の文字の一画がなくなるよりは、天地の消えさせる方が易しい。妻を離縁して他の女を妻にする者はだれでも、姦通の罪を犯すことになる。離縁された女を妻にする者も姦通の罪を犯すことになる。」——ルカ 16:14-18

金持ちとラザロ

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、というできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前

は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもたえ苦しむのだ。そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』金持ちは言った。『父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』——ルカ 16:19-31

その人は語り始めた。

「わたしはアブラハムの僕でございます。主がわたしの主人を大層祝福され、羊や牛の群れ、金銀、男女の奴隷、らくだやろばなどをお与えになったので、主人は裕福になりました。——創世記 24:34-35

死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。——マルコ 12:25

復活の時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。——マタイ 22:30

イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。——ルカ 20:34-35

(編者註:) これはちょっと不親切だから、一応解説しておく。ここで何がどうなっているかという、復活を否定しているサドカイ派の人々が、イエスにこう質問するわけだ:

「兄が結婚して子供ができないうちに兄が死んだら、弟が妻を娶って子を作らなきゃならないんですよ (編者註: オナンのくだりを思い出していただきたい)。じゃあ、男7人兄弟の長男が結婚して、子供なしで死んで、その妻と次男が結婚して、やっぱり子供なしで

ダンナが死んで、その弟が兄の妻と結婚して……ってのが七男まで続いて、でも結局子供ができなくて、結局妻も死んじゃった、と。で、復活の時に訪れたとき、その女は何男の妻になるんですかね？ だって、みーんなその女と結婚してたんですよ？」

……な一んかダメダメな質問だけど、一応これには論拠がないこともなくて、

家名の存続

兄弟が共に暮らしていて、そのうちの一人が子供を残さずに死んだならば、死んだ者の妻は家族以外の他の者に嫁いではならない。亡夫の兄弟が彼女のところに入り、めとって妻として、兄弟の義務を果たし、彼女の産んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならない。もし、その人が義理の姉妹をめとろうとしない場合、彼女は町の門に行き、長老たちに訴えて、こう言うべきである。「わたしの義理の兄弟は、その兄弟の名をイスラエルの中に残すのを拒んで、わたしのために兄弟の義務を果たそうとしません。」町の長老たちは彼を呼び出して、説得しなければならない。もし彼が、「わたしは彼女をめとりたくない」と言い張るならば、義理の姉妹は、長老たちの前で彼に近づいて、彼の靴をその足から脱がせ、その顔に唾を吐き、彼に答えて、「自分の兄弟の家を興さない者はこのようにされる」と言うべきである。彼はイスラエルの間で、「靴を脱がされた者の家」と呼ばれるであろう。——申命記 25:1-10

(編者註:) というわけね。このサドカイ派の(いかにも教条主義的な)質問に答えてイエスがこう言ったわけ:

「いや復活する人はもう結婚とか関係ないんだって。だって天使みたいな神の子なんだぜ？」

だから、ケンが言うように、現世で結婚できなくても天国で結ばれる、ということは、ここで見る限りはなさそうだ。イエスに念を押されそうだな:「いやもう関係ないんだって」ってさ。

で、死者が復活することは、モーセも『柴』の箇所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。(ルカ 20:37) とイエスは続けるんだけど、これは出エジプト記のことを指しているんだろうね。

モーセの召命

モーセは、しゅうとでありミディアンの祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あ

るとき、その群れを荒れ野の奥へ追って行き、神の山ホレブに来た。そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。モーセは言った。「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。」

主は、モーセが道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼が、「はい」と答えると、神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。——出エジプト 3:1-6

(編者註:) え、このどこに死者の復活について書かれているか、って? うーん、**柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。** ってのがそれを暗喩している、と、イエスは言いたいんでしょうね、きっと。

「ムナ」のたとえ

人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。イエスは言われた。「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった。そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をきなさい』と言った。しかし、国民は彼を憎んでいたので、後から使者を送り、『我々はこの人を王にいただきたくない』と言わせた。さて、彼は王の位を受けて帰って来ると、金を渡しておいた僕を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知ろうとした。最初の者が進み出て、『御主人様、あなたの一ムナで十ムナもうけました』と言った。主人は言った。『良い僕だ。よくやった。お前はごく小さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう。』二番目の者が来て、『御主人様、あなたの一ムナで五ムナ稼ぎました』と言った。主人は、『お前は五つの町を治めよ』と言った。また、ほかの者が来て言った。『御主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。あなたは預けないものも取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。』主人は言った。『悪い僕だ。その言葉のゆえにお前を裁こう。わたしが預けなかったものも取り立て、蒔かなかったものも刈り取る厳しい人間だと知っていたのか。ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。』そして、そばに立っていた人々に言った。『その一ムナをこの男から取り上げて、十ムナ持っている者に与えよ。』僕たちが、『御主

人様、あの人は既に十ムナ持っています』と言うと、主人は言った。『言っておくが、だれでも持っている人は、更に与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる。ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ。』——ルカ 19:11-27

だから、どう聞くべきかに注意しなさい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる。」——ルカ 8:18

「タラント」のたとえ

「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラント、一人には二タラント、もう一人には一タラントを預けて旅に出かけた。早速、五タラント預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。同じように、二タラント預かった者も、ほかに二タラントをもうけた。しかし、一タラント預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラント預かった者が進み出て、ほかの五タラントを差し出して言った。『御主人様、五タラントお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』次に、二タラント預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』ところで、一タラント預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントをこの男から取り上げて、十タラント持っている者に与えよ。だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』——マタイ 25:14-30

イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。

永遠の命の言葉

ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。それでは、人の子がもつといた所に上るのを見るならば……。命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。そして、言われた。「こういうわけで、わたしはあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのだ。」

このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。——ヨハネ 6:53-66

すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。——ヨハネ 10:24-26

「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」——マルコ 10:33-34

人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。

彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」——ルカ
18:32-33

2.4.3 第3部 泣き言とともに去りぬ

エルサレムのために嘆く

ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」イエスは言われた。「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。見よ、お前たちの家は見捨てられる。言うておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決してわたしを見ることがない。」——ルカ 13:31-35

ゲツセマネで祈る

それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」それから、弟子たちのところへ戻って御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」更に、二度目に向こうへ行って祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。そこで、彼らを離れ、また向こうへ行って、三度も同じ言葉で祈られた。それから、弟子たちのところに戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」——マタイ 26:39-44

ゲツセマネで祈る

一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、こ

ここに座っていなさい」と言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」更に、向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」——マルコ 14:32-42

オリーブ山で祈る

イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。いつもの場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」〔すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。〕イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」——ルカ 22:39-46

大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。

「ダビデの子にホサナ。

主の名によって来られる方に、祝福があるように。

いと高きところにホサナ。」

イエスがエルサレムに入られると、都中の者が、「いったい、これはどういう人だ」と言って騒いだ。そこで群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言った。——マタイ 21:8-11

それからイエスは、押し寄せて来た祭司長、神殿守衛長、長老たちに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった。だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。」——ルカ 22:52-53

裏切られ、逮捕される

イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダがやって来た。祭司長たちや民の長老たちの遣わした大勢の群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。それを捕まえろ」と、前もって合図を決めていた。ユダはすぐイエスに近寄り、「先生、こんばんは」と言って接吻した。イエスは、「友よ、しようとしていることをするがよい」と言われた。すると人々は進み寄り、イエスに手をかけて捕らえた。そのとき、イエスと一緒にいた者の一人が、手を伸ばして剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかって、片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。わたしが父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう。」またそのとき、群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内に座って教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書いたことが実現するためである。」このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。——マタイ 26:47-56

裏切られ、逮捕される

さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と、前もって合図を決めていた。ユダはやって来るとすぐに、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。人々は、イエスに手をかけて捕らえた。居合わせた人々のうちのある者が、剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落とした。そこで、イエスは彼らに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。」弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。——マルコ 14:43-50

裏切られる

イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に立って、イエスに接吻をしようと近づいた。イエスは、「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか」と言われた。イエスの周りにいた人々は事の成り行きを見て取り、「主よ、剣で切りつけましょうか」と言った。そのうちのある者が大祭司の手下に打ちかかって、その右の耳を切り落とした。そこでイエスは、「やめなさい。もうそれでよい」と言い、その耳に触れていやされた。それからイエスは、押し寄せて来た祭司長、神殿守衛長、長老たちに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった。だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。」——ルカ 22:47-53

(編者註:) ケンは引用していないけれど、ヨハネ福音書における該当箇所は以下の通り。

裏切られ、逮捕される

それでユダは、一隊の兵士と、祭司長たちやファリサイ派の人々の遣わした下役たちを引き連れて、そこにやって来た。松明やともし火や武器を手にしていた。イエスは御自分の身に起こることを何もかも知っておられ、進み出て、「だれを捜しているのか」と言われた。彼らが「ナザレのイエスだ」と答えると、イエスは「わたしである」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒にいた。イエスが「わたしである」と言われたとき、彼らは後ずさりして、地に倒れた。そこで、イエスが「だれを捜しているのか」と重ねてお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスだ」と言った。すると、イエスは言われた。『『わたしである』と言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい。』それは、「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした」と言われたイエスの言葉が実現するためであった。シモン・ペトロは剣を持っていたので、それを抜いて大祭司の手下に打ってかかり、その右の耳を切り落とした。手下の名はマルコスであった。イエスはペトロに言われた。「剣をさやに納めなさい。父がお与えになった杯は、飲むべきではないか。」——ヨハネ 18:3-11

(編者註:) あっれー？ 接吻しようとするしてないじゃん。ユダは何のために出てきたのかなあ。こんなところからも垣間見えるように、「ヨハネによる福音書」は他の3つの福音書とは趣が異なる。現在、この福音書はキリストの死後数十年から百数十年を経て書かれたものとされ、記者も使徒ヨハネと同一人物ではない、というのが有力とされている。

ペトロ、信仰を言い表わす

イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。——マタイ 16:13-20

ペトロ、信仰を言い表わす

イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。——マルコ 8:27-30

ペトロ、信仰を言い表わす

イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。そこでイエスは、「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。弟子たちは答えた。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『だれか昔の預言者が生き返ったのだ』と言う人もいます。」イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「神からのメシアです。」

イエス、死と復活を予告する

イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、——ルカ 9:18-21

しかし、イエスは黙り続け何もお答えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言った。イエスは言われた。

「そうです。

あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、
天の雲に囲まれて来るのを見る。」——マルコ 14:61-62

イエスは黙り続けておられた。大祭司は言った。「生ける神に誓って我々に答えよ。お前は神の子、メシアなのか。」イエスは言われた。

「それは、あなたが言ったことです。しかし、わたしは言うておく。

あなたたちはやがて、

人の子が全能の神の右に座り、
天の雲に乗って来るのを見る。」——マタイ 26:63-64

そこで皆の者が、「では、お前は神の子か」と言うと、イエスは言われた。「わたしがそうだと、あなたたちが言っている。」——ルカ 22:70

ピラトから尋問される

さて、イエスは総督の前に立たれた。総督がイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と言われた。祭司長たちや長老たちから訴えられている間、これには何もお答えにならなかった。するとピラトは、「あのようにお前に不利な証言をしているのに、聞こえないのか」と言った。それでも、どんな訴えにもお答えにならなかったのも、総督は非常に不思議に思った。

死刑の判決を受ける

ところで、祭りの度ごとに、総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することになっていた。そのころ、バラバ・イエスという評判の囚人がいた。ピラトは、人々が集まって来たときに言った。「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それともメシアといわれるイエスか。」人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があった。「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。」しかし、祭司長たちや長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらうようにと群衆を説得した。そこで、総督が、「二人のうち、どちらを釈放してほしいのか」と言うと、人々は、「バラバを」と言った。ピラトが、「では、メシアといわれているイエスの方は、どうしたらよいか」と言うと、皆は、「十字架につける」と言った。ピラトは、「いったいどんな悪事を働いたというのか」と言ったが、群衆はますます激しく、「十字架につける」と叫び続けた。ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が

起こりそうなを見て、水を持って来させ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。」民はこぞって答えた。「その血の責任は、我々と子孫にある。」そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。——マタイ 27:11-26

ピラトから尋問される

夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、長老や律法学者たちと共に、つまり最高法院全体で相談した後、イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と答えられた。そこで祭司長たちが、いろいろとイエスを訴えた。ピラトが再び尋問した。「何も答えないのか。彼らがあのようにお前を訴えているのに。」しかし、イエスがもはや何もお答えにならなかったため、ピラトは不思議に思った。

死刑の判決を受ける

ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々が願い出る囚人を一人釈放していた。さて、暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。群衆が押しかけて来て、いつものようにしてほしいと要求し始めた。そこで、ピラトは、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と言った。祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。祭司長たちは、バラバの方を釈放してもらうように群衆を扇動した。そこで、ピラトは改めて、「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と言った。群衆はまた叫んだ。「十字架につける。」ピラトは言った。「いったいどんな悪事を働いたというのか。」群衆はますます激しく、「十字架につける」と叫び立てた。ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。——マルコ 15:1-15

ピラトから尋問される

そこで、全会衆が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。そして、イエスをこう訴え始めた。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました。」そこで、ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになった。ピラトは祭司長たちと群衆に、「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と言った。しかし彼らは、「この男は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と言い張った。

ヘロデから尋問される

これを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ね、ヘロデの支配下にあることを知ると、イエスをヘロデのもとに送った。ヘロデも当時、エルサレムに滞在していたのである。彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのは、イエスのうわさを聞いて、ずっと以前から会いたいと思っていたし、イエスが何かしるしを行うのを見たいと望んでいたからである。それで、いろいろと尋問したが、イエスは何もお答えにならなかった。祭司長たちと律法学者たちはそこにいて、イエスを激しく訴えた。ヘロデも自分の兵士たちと一緒にイエスをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せてピラトに送り返した。この日、ヘロデとピラトは仲がよくなった。それまでは互いに敵対していたのである。

死刑の判決を受ける

ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、言った。「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」^{*4}祭りの度ごとに、ピラトは、囚人を一人彼らに釈放してやらなければならなかった。しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。このバラバは、都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである。ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけた。しかし人々は、「十字架につける、十字架につける」と叫び続けた。ピラトは三度目に言った。「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決定を下した。そして、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どおりに釈放し、イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた。——ルカ 23:1-25

ピラトから尋問される

人々は、イエスをカイアファのところから総督官邸に連れて行った。明け方であった。しかし、彼らは自分では官邸に入らなかった。汚れないで過越の食事をするためである。そこで、ピラトが彼らのところへ出て来て、「どういう罪でこの男を訴えるのか」と言った。彼らは答えて、「この男が悪いことをしていなかったら、あなたに引き渡しはしなかったでしょう」と言った。ピラトが、「あなたたちが引き取って、自分たちの律法に従って裁け」と言うと、ユダヤ人たちは、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」

^{*4} 印以下の強調部（ルカ 23:17）は、底本に節が書けている箇所のある異本による訳文。

と言った。それは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、イエスの言われた言葉が実現するためであった。そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」ピラトは言った。「真理とは何か。」

死刑の判決を受ける

ピラトは、こう言ってからもう一度、ユダヤ人たちの前に出て来て言った。「わたしはあの男に何の罪も見いだせない。ところで、過越祭にはだれか一人をあなたたちに釈放するのが慣例になっている。あのユダヤ人の王を釈放してほしいか。」すると、彼らは、「その男ではない。バラバを」と大声で言い返した。バラバは強盗であった。

そこで、ピラトはイエスを捕らえ、鞭で打たせた。兵士たちは茨で冠を編んでイエスの頭に載せ、紫の服をまとわせ、そばにやって来ては、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、平手で打った。ピラトはまた出て来て、言った。「見よ、あの男をあなたたちのところへ引き出そう。そうすれば、わたしが彼に何の罪も見いだせないわけが分かるだろう。」イエスは茨の冠をかぶり、紫の服を着けて出て来られた。ピラトは、「見よ、この男だ」と言った。祭司長たちや下役たちは、イエスを見ると、「十字架につける。十字架につける」と叫んだ。ピラトは言った。「あなたたちが引き取って、十字架につけるがよい。わたしはこの男に罪を見いだせない。」ユダヤ人たちは答えた。「わたしたちには律法があります。律法によれば、この男は死罪に当たります。神の子と自称したからです。」

ピラトは、この言葉を聞いてますます恐れ、再び総督官邸の中に入って、「お前はどこから来たのか」とイエスに言った。しかし、イエスは答えようとされなかった。そこで、ピラトは言った。「わたしに答えないのか。お前を釈放する権限も、十字架につける権限も、このわたしにあることを知らないのか。」イエスは答えられた。「神から与えられていなければ、わたしに対して何の権限もないはずだ。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪はもっと重い。」そこで、ピラトはイエスを釈放しようと努めた。しかし、ユダヤ人たちは叫んだ。「もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する者は皆、皇帝に背いています。」

ピラトは、これらの言葉を聞くと、イエスを外に連れ出し、ヘブライ語でガバタ、すな

わち「敷石」という場所で、裁判の席に着かせた。それは過越祭の準備の日の、正午ごろであった。ピラトがユダヤ人たちに、「見よ、あなたたちの王だ」と言うと、彼らは叫んだ。「殺せ。殺せ。十字架につけろ。」ピラトが、「あなたたちの王をわたしが十字架につけるのか」と言うと、祭司長たちは、「わたしたちには、皇帝のほかには王はありません」と答えた。そこで、ピラトは、十字架につけるために、イエスを彼らに引き渡した。

十字架につけられる

こうして、彼らはイエスを引き取った。——ヨハネ 18:28–19:16

(編者註:) ここでケンが言及しているのは、いわゆる聖ヴェロニカのベールと呼ばれるもの。ヨハネ7世(在位: A.D.705–707)のときに古いサン・ピエトロ大聖堂に飾られていたのだけど、1600年頃、サン・ピエトロ大聖堂の改築の際に紛失されたとされていた。中央イタリアのマノペロ市にある修道院の聖堂に現存するベールがこの紛失されたオリジナルではないかといわれている。

で、だ……聖ヴェロニカに関してだけど、たしかに福音書にはヴェロニカに相当する女性は登場しない。先に登場した、十二年間出血が止まらなかった女性がイエスに触れた話(マルコ5:24–34、ルカ8:42–48)を思い出してほしいのだけど、新約外典である『ニコデモ福音書』(*Acta Pilati*、『ピラト行伝』とも呼ばれる)7章第1節に、彼女の名前がヴェロニカだという記述があるんだ。どうも、先の話と、磔刑に処せられようとしているイエスに布を差し出した女性の話が混同され、そこに更に「その女性が皇帝チベリウスを癒した」という伝承が加わって、ケンがふれているような話が出来上がったのが11世紀のことらしい。カトリック・エンサイクロペディアによると、Velonicaという名前はラテン語で真実を意味する *vera* と、ギリシャ語で *image* に相当する *eikon* に由来する、なんて話までできてきて、そのまま「十字架の道行き」(キリストの一生と受難・復活を辿る絵巻)にも登場するようになったわけ。

しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。このバラバは、都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである。ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけた。しかし人々は、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫び続けた。——ルカ 23:18–21

(編者註:) バラバが過激派、というのはどういうことか、というと、当時のユダヤ人の中では「熱心党」という政治宗教集団が形成されていて、ユダヤ人のローマ支配からの武力解放を目論んでいた。バラバはその一員だったのではないかと、いわれているのだけど、

でもバラバにそんなにカリスマがあったのかどうかは分からないなあ。たしかに民衆は恩赦を望んではいたけれど、殊更にそれがバラバでなければならない、というような根拠は福音書には書かれていない。むしろ、祭司長らのアジテーションの方が大きいんじゃないかなあ。

祭司長たちは、バラバの方を釈放してもらうように群衆を扇動した。——マルコ 15:11

しかし、祭司長たちや長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらうようにと群衆を説得した。——マタイ 27:20

2.4.3.1 イエスの十字架はりつけに関する誤解

■十字架を担いだのは？

兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。——マタイ 27:32

そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。——マルコ 15:21

人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。——ルカ 23:26

■「ローブ」は誰のもの？

そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、侮辱した。また、唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたき続けた。このようにイエスを侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために引いて行った。——マタイ 27:28-31

そして、イエスに紫の服を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、「ユダヤ人の王、万歳」と言って敬礼し始めた。また何度も、葦の棒で頭をたたき、唾を吐きかけ、ひざまずいて拜んだりした。このようにイエスを侮辱したあげく、紫の服を脱がせて元の服を着せた。そして、十字架につけるために外へ引き出した。——マルコ 15:17-20

■ 「ローブ」は誰のもの？（ヨハネ福音書の記述）

兵士たちは、イエスを十字架につけてから、その服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡すようにした。下着も取って見たが、それには縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった。そこで、「これは裂かないで、だれのものになるか、くじ引きで決めよう」と話し合った。それは、

「彼らはわたしの服を分け合い、
わたしの衣服のことでくじを引いた」

という聖書の言葉が実現するためであった。兵士たちはこのとおりにしたのである。
——ヨハネ 19:23-24

（編者註：）ここで言っている「くじ引き」に関する聖書の言葉というのはこれね。

犬どもがわたしを取り囲み
さいなむ者が群がってわたしを囲み
獅子のようにわたしの手足を砕く。
骨が数えられる程になったわたしのからだを
彼らはさらしものにして眺め
わたしの着物を分け
衣を取ろうとしてくじを引く。——詩篇 22:17-19

（編者註：）ところで、イエスが「ローブ」を脱がされた後も服を着ていたのは先のマタイ福音書とマルコ福音書の記述で明らか（「元の服」を着せられている）だけど、十字架につけられた後はどうだったのか？ ルカ福音書で該当箇所を見てみると……

〔そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。】人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。——ルカ 23:34

（編者註：）あれれ？ これって服をはがされていませんか？ マルコ福音書を見返すと、

それから、兵士たちはイエスを十字架につけて、
その服を分け合った、

だれが何を取るかをくじ引きで決めてから。——マルコ 15:24

(編者註:) あれれ? これも服をはがされてるよね? マタイ福音書では、

彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、——マタイ 27:35

(編者註:) ということで、先のヨハネ福音書の記述はケン(や山形氏)の言う程人を悪人よばわりしていないんじゃないの? そもそも悪人呼ばわりとかいう問題ではなくて、福音書に詩篇を実現したという描写が必要だった、ということでしょう。

そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」——ヨハネ 20:25

(編者註:) ここなのだけど、どうもおかしい。使徒言行録(山形氏は旧来の「使徒行伝」という呼び名で書いているけれど)を見ても、

このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまっただけです。——使徒言行録 2:23

(編者註:) と、釘に関する記述はなし。欽定訳を見ても、

(参考:欽定訳:) Him, being delivered by the determinate counsel and foreknowledge of God, ye have taken, and by wicked hands have crucified and slain:——使徒言行録 2:23

(編者註:) という感じ。直接「釘」に結びつく記述はない。文語訳(大正改訳)新約聖書を見てみると、

(参考:文語訳(大正改訳):) この人は神の定め給ひし御旨と、預じめ知り給ふ所とにより

て付（わた）されしが、汝ら不法の人の手をもて釘磔（はりつけ）にして殺せり。——使徒行傳 2:23

（編者註:）ようやく「釘」って出てきたけれど、これはもともと釘と磔がセットになっているからであって、物理的に釘が打たれたか否か、というのをこれで判断することは（欽定訳をみても明らかなように）できないだろう。ちなみにページ下部註に引用されているヨハネ 19:16 も、

（参考:文語訳(大正改訳):）ここにピラト、イエスを十字架に釘（つ）くるために彼らに付（わた）せり。——ヨハネ 19:16

（編者註:）「釘」って出てきて、たしかに他のところは悉く「十字架につけ」と平仮名表記ではある。けれどこれで物理的に（以下略）。

■通りすがりの人は悼んだ？ バカにした？

そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、——マタイ 27:39

そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、——マルコ 15:29

■一緒にはりつけにされた泥棒達は……

一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。——マタイ 27:44

メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。——マルコ 15:32

十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言

われた。——ルカ 23:39-43

■海綿

そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。——マタイ 27:48

イエスの死

この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した。イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。——ヨハネ 19:28-30

(編者註:) この章節が「ヨハネ伝 28-30」となってるのは「ヨハネ伝 19:28-30」。強調部が抜けてしまったのかな。

■イエスのお母さんは

またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼバダイの子らの母がいた。——マタイ 27:55-56

また、婦人たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメがいた。——マルコ 15:40

■わき腹から……

しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。——ヨハネ 19:34

(編者註:) このときの槍が「聖槍 (せいそう)」と言われるもので、槍を刺したローマ兵の名をとって、「ロンギヌスの槍」とも呼ばれる。某アニメで有名になった、アレですよ……もちろんロンギヌスなんて名前は聖書にはどこにも書いてなくて、この名前や逸話も、先の聖ヴェロニカの一件で出てきた新約外典『ニコデモ福音書』に言及されている(16章第7節)。『黄金伝説』(*Legenda aurea*、11世紀中盤、ヤコブス・デ・ウォラギネによって著された聖者伝)によると、ロンギヌスは目が不自由で、このときイエスのわき腹から流れ

出た血と水が目に入って癒され、この体験から回心し、洗礼を受けたということになっているらしい。ちなみにこのロンギヌス、カトリックでは聖人のひとりになっている。

■イエス、臨終のことば

三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。——マタイ 27:46

三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。——マルコ 15:34

イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。——ルカ 23:46

イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。——ヨハネ 19:30

(編者註:) ちなみに、先の「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」というのはこれを反映しているんだろうね。

わたしの神よ、わたしの神よ
なぜわたしをお見捨てになるのか。
なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず
呻きも言葉も聞いてくださらないのか。——詩篇 22:2

(編者註:) ただ、厳密には、イエスの臨終のことばはよく分からないのかもしれない。だって……

しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。——マタイ 27:50

しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。——マルコ 15:37

(編者註:) 勿論、これがあつたってケンの指摘する福音書の不一致には何ら変わりはない。

このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。——マタイ 16:21

一行がガリラヤに集まったとき、イエスは言われた。「人の子は人々の手に引き渡されようとしている。そして殺されるが、三日目に復活する。」弟子たちは非常に悲しんだ。——マタイ 17:22-23

イエスはエルサレムへ上って行く途中、十二人の弟子だけを呼び寄せて言われた。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して、異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、鞭打ち、十字架につけるためである。そして、人の子は三日目に復活する。」——マタイ 20:17-19

イエスはこれらの言葉をすべて語り終えると、弟子たちに言われた。「あなたがたも知っているとおりに、二日後は過越祭である。人の子は、十字架につけられるために引き渡される。」——マタイ 26:1-2

それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。——マルコ 8:31

それは弟子たちに、「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する」と言っておられたからである。——マルコ 9:31

「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」——マルコ 10:33-34

次のように言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」——ルカ 9:22

「この言葉をよく耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されようとしている。」——ルカ 9:44

イエスは、十二人を呼び寄せて言われた。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子について預言者が書いたことはみな実現する。人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」——ルカ 18:31-33

墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。——マタイ 27:52-53

そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。——ヨハネ 20:22

彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているのを、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。——ルカ 24:41

(編者註:)「なにか喰うものもってない?」と聞いただけ、では(勿論)終わらない。

そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。——ルカ 24:42-43

2.4.3.2 なぜイエスは失敗したか

(編者註:) まあ、結果的にはイエスの死は失敗ではなかったんだろうね。だって、たとえどれ程美化されているとしても、人の罪を贖うためにひとり人間が死んだんだよ? しかもその人は神の子と言われていた人だったわけ。これはやはり現代を生きる僕たちが読んでも、凄くショッキングだよ。僕たちの聖書の読み方は、金の子牛像よろしく金箔で

飾られていたイエスの像の、その金箔を剥ぐような作業だったかもしれない。けれど、鈍く光るその地金の像というのは、今の僕たちにとってすごく人間的な、生々しい存在として映る。妬み、腹を空かし、死を目前に恐怖に戦いて、それでもイエスは神の子として、そして人として死ぬんだ。殉教の教科書というのがあったとして、その教科書に体系だててきっちりと書かれていたように見えたイエスの一生とその死が、今の僕たちにはもう少し近くにあるものとして感じられる。これはすごいことなんだろうと思うよ。

2.4.3.3 福音書の不一致

(編者註:) 実はこのケンの本を読んで驚かされたのはここなんだ。福音書というのは、その描写の違いを比較できることから、聖書の文書の中でも文献学的研究が進んでいるものなのだけど、ケンはおそらくそんな文献学的研究成果を学んだりせずに、その成果の語る場所を言い当ててしまっているんだ。虚心坦懐とはよくも言ったものだと思う。

マスキール。アサフの詩。

わたしの民よ、わたしの教えを聞き
わたしの口の言葉に耳を傾けよ。
わたしは口を開いて箴言を
いにしえからの言い伝えを告げよう——詩篇 78:1-2

イエス・キリストの系図

アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。

アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、アラムはアミナダブを、アミナダブはナフシオンを、ナフシオンはサルモンを、サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、エッサイはダビデ王をもうけた。

ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、ソロモンはレハブアムを、レハブアムはアビヤを、アビヤはアサを、アサはヨシャファトを、ヨシャファトはヨラムを、ヨラムはウジヤを、ウジヤはヨタムを、ヨタムはアハズを、アハズはヒゼキヤを、ヒゼキヤはマナセを、マナセはアモスを、アモスはヨシヤを、ヨシヤは、バビロンへ移住させられたころ、エコンヤとその兄弟たちをもうけた。

バビロンへ移住させられた後、エコンヤはシャルティエルをもうけ、シャルティエルはゼルバベルを、ゼルバベルはアビウドを、アビウドはエリアキムを、エリアキムはアゾ

ルを、アヅルはサドクを、サドクはアキムを、アキムはエリウドを、エリウドはエレアザルを、エレアザルはマタンを、マタンはヤコブを、ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。

こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまでが十四代である。——マタイ 1:1-17

それゆえ、わたしの主が御自ら

あなたたちにしるしを与えられる。

見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み

その名をインマヌエルと呼ぶ。

災いを退け、幸いを選ぶことを知るようになるまで

彼は凝乳と蜂蜜を食べ物とする。

その子が災いを退け、幸いを選ぶことを知る前に、あなたの恐れる二人の王の領土は必ず捨てられる。主は、あなたとあなたの民と父祖の家の上に、エフライムがユダから分かれて以来、臨んだことのないような日々を臨ませる。アッシリアの王がそれだ。」

(参考:欽定訳) Therefore the Lord himself shall give you a sign; Behold, a virgin shall conceive, and bear a son, **and shall call his name Immanuel**. Butter and honey shall he eat, that he may know to refuse the evil, and choose the good. For before the child shall know to refuse the evil, and choose the good, the land that thou abhorrest shall be forsaken of both her kings. The LORD shall bring upon thee, and upon thy people, and upon thy father's house, days that have not come, from the day that Ephraim departed from Judah; even the king of Assyria. ——イザヤ 7:14-17

このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

(参考:欽定訳) Now all this was done, that it might be fulfilled which was spoken of the Lord by the prophet, saying, Behold, a virgin shall be with child, and shall bring forth a son, **and they shall call his name Emmanuel**, which being interpreted is, God with us. ——マタ

イ 1:22-23

わたしは彼らに言った。「もし、お前たちの目に良しとするなら、わたしに賃金を支払え。そうでなければ、支払わなくてもよい。」彼らは銀三十シェケルを量り、わたしに賃金としてくれた。主はわたしに言われた。「それを鑄物師に投げ与えよ。わたしが彼らによって値をつけられた見事な金額を。」わたしはその銀三十シェケルを取って、主の神殿で鑄物師に投げ与えた。——ゼカリヤ 11:12-13

こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。「彼らは銀貨三十枚を取った。それは、値踏みされた者、すなわち、イスラエルの子らが値踏みした者の価である。主がわたしにお命じになったように、彼らはこの金で陶器職人の畑を買い取った。」——マタイ 27:9-10

イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。——マタイ 4:23

イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にもものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。——マルコ 1:34

十二人を選ぶ

イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすためであった。十二使徒の名は次のとおりである。まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心党のシモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテのユダである。

十二人を派遣する

イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。むしろ、イスラエルの家が失われた羊のところへ行きなさい。行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。——マタイ 10:1-7

そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった。——マルコ 3:14-15

わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている。
——マタイ 12:30

わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。——マルコ 9:40

風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。——ヨハネ 3:8-10

いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。——ヨハネ 1:18

エルサレムの墮落

第六年の六月五日のことである。わたしは自分の家に座っており、ユダの長老たちがわたしの前に座っていた。そのとき、主なる神の御手がわたしの上を下った。わたしが見ていると、人の有様のような姿があるではないか。その腰のように見えるところから下は火であり、腰から上は琥珀金の輝きのように光輝に満ちた有様をしていた。——エゼキエル 8:1-2

天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。——ヨハネ 3:13

彼らが話しながら歩き続けていると、見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った。——列王記下 2:11

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。——ヨハネ 3:16

当時もその後も、地上にはネフィリムがいた。これは、神の子らが人の娘たちのところに入って産ませた者であり、大昔の名高い英雄たちであった。——創世記 6:4

また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。——ヨハネ 5:22

主は諸国を裁き、頭となる者を撃ち
広大な地をしかばねで覆われる。——詩篇 110:6

そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない。父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」——ヨハネ 6:34-40（強調部:39）

すると、イエスは言われた。「『わたしである』と言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい。」それは、「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした」と言われたイエスの言葉が実現するためであった。——ヨハネ 18:8-9（強調部:9）

2.4.3.4 ヨハネ伝の神さまらしからぬイエス

わたしは、人からの誉れは受けない。——ヨハネ 5:41

あなたたちは、モーセを信じたのであれば、わたしをも信じたはずだ。モーセは、わたしについて書いているからである。——ヨハネ 5:46

わたしについて証しをなさる方は別におられる。そして、その方がわたしについてなさる証しは真実であることを、わたしは知っている。あなたたちはヨハネのもとへ人を送っ

たが、彼は真理について証しをした。わたしは、人間による証しは受けない。しかし、あなたたちが救われるために、これらのことを言うておく。——ヨハネ 5:32-34

イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」——ヨハネ 8:12

あなたたちは肉に従って裁くが、わたしはだれをも裁かない。しかし、もしわたしが裁くとすれば、わたしの裁きは真実である。なぜならわたしはひとりではなく、わたしをお遣わしになった父と共にいるからである。——ヨハネ 8:15-16

イエスは言われた。「神があなたたちの父であれば、あなたたちはわたしを愛するはずである。なぜなら、わたしは神のもとから来て、ここにいるからだ。わたしは自分勝手に来たのではなく、神がわたしをお遣わしになったのである。——ヨハネ 8:42

(編者註:) 上引用箇所では、山形訳では 8:47 になっているけれど、8:42 が正しい (原著でも 42 になっている)。

(編者註:) おいおい、ここでも原著にあるのに訳本で引用箇所が削られている!

神に属する者は神の言葉を聞く。あなたたちが聞かないのは神に属していないからである。」——ヨハネ 8:47

あなたたちはその方を知らないが、わたしは知っている。わたしがその方を知らないと言えば、あなたたちと同じくわたしも偽り者になる。しかし、わたしはその方を知っており、その言葉を守っている。——ヨハネ 8:55

あなたたちのうち、いったいだれが、わたしに罪があると責めることができるのか。わたしは真理を語っているのに、なぜわたしを信じないのか。——ヨハネ 8:46

イエスはお答えになった。「わたしが自分自身のために栄光を求めようとしているので

あれば、わたしの栄光はむなしい。わたしに栄光を与えてくださるのはわたしの父であって、あなたたちはこの方について、『我々の神だ』と言っている。あなたたちはその方を知らないが、わたしは知っている。わたしがその方を知らないと言えば、あなたたちと同じくわたしも偽り者になる。しかし、わたしはその方を知っており、その言葉を守っている。あなたたちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである。」ユダヤ人たちが、「あなたは、まだ五十歳にもならないのに、アブラハムを見たのか」と言うと、イエスは言われた。「はっきりしておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』」すると、ユダヤ人たちは、石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、神殿の境内から出て行かれた。——ヨハネ 8:54-59

神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」——出エジプト 3:14

イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。わたしと父とは一つである。」

ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた。すると、イエスは言われた。「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」そこで、イエスは言われた。「あなたたちの律法に、『わたしは言う。あなたたちは神々である』と書いてあるではないか。神の言葉を受けた人たちが、『神々』と言われている。そして、聖書が廢れることはありえない。それなら、父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒瀆している』と言うのか。もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを信じなくてもよい。しかし、行っているのであれば、わたしを信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父がわたしの内におられ、わたしが父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう。」そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕

らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。——ヨハネ 10:25-39

新しい掟

さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。『わたしが行く所にあなたたちは来ることができない』とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言っておく。あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」——ヨハネ 13:31-35

「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。——ヨハネ 14:15

「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。——ヨハネ 15:18

(編者註:) まあまあ。この後にこう言っているんだし。

しかし、それは、『人々は理由もなく、わたしを憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。——ヨハネ 15:25

第3章

二次会 —— イエスが帰ってから

そのころ、イエスを裏切ったユダは、イエスに有罪の判決が下ったのを知って後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちや長老たちに返そうとして、「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言った。しかし彼らは、「我々の知ったことではない。お前の問題だ」と言った。そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつって死んだ。
——マタイ 27:3-5

ところで、このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。——使徒 1:18

聖霊が降る

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、

アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

ペトロの説教

すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉を耳を傾けてください。今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているわけではありません。——使徒 2:1-15

(編者註:) これがいわゆる「異言」というやつ。旧約聖書にも、神が人の口から異国の言葉で話すという場面が出てくる(例えば、**確かに、主はどもる唇と異国の言葉で／この民に語られる。——イザヤ 28:11**) けれど、異言と呼ばれるものは、この使徒言行録のくだりて定義されるものだ、というのが一般的見解。特に一部のプロテスタントはこの異言を重視するんだけど、全てのクリスチャンがこの異言を重視するわけでもないの念のため。

信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。——使徒 4:32

アナニアとサフィラ

ところが、アナニアという男は、妻のサフィラと相談して土地を売り、妻も承知のうえで、代金をごまかし、その一部を持って来て使徒たちの足もとに置いた。すると、ペトロは言った。「アナニア、なぜ、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか。売らないでおけば、あなたのものだったし、また、売っても、その代金は自分の思いどおりになったのではないか。どうして、こんなことをする気になったのか。あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」この言葉を聞くと、アナニアは倒れて息が絶えた。そのことを耳にした人々は皆、非常に恐れた。若者たちが立ち上がって死体を包み、運び出して葬った。

それから三時間ほどたって、アナニアの妻がこの出来事を知らずに入って来た。ペトロは彼女に話しかけた。「あなたたちは、あの土地をこれこれの値段で売ったのか。言いなさい。」彼女は、「はい、その値段です」と言った。ペトロは言った。「二人で示し合わせて、主の霊を試すとは、何としたことか。見なさい。あなたの夫を葬りに行った人たちが、もう入り口まで来ている。今度はあなたを担ぎ出すだろう。」すると、彼女はたちまち

ペトロの足もとに倒れ、息が絶えた。青年たちは入って来て、彼女の死んでいるのを見ると、運び出し、夫のそばに葬った。教会全体とこれを聞いた人は皆、非常に恐れた。——使徒 5:1-11

それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、——使徒 5:41

(編者註:) ここでケンが「キリスト教マゾヒズム」と書いているのを読んでカチン、ときたクリスチャンがいるかもしれないのだけど、歴史に目をやると、この言葉を単なる誹謗中傷だと決めつけることはできない。高い謙譲とか自己犠牲の美德というものと、自罰的行為とを勘違いする人はどの時代にもいて、たとえば 13 世紀後半以降のイタリアでは「鞭打ち苦行会」 *flagellanti, disciplinati, battuti* というのが大流行したんだ……その頃の宗教画には、頭まですっぽり覆った白衣の人々が描かれていることがあるけれど、それがこの「鞭打ち苦行会」だね。

ステファノの説教

大祭司が、「訴えのとおりか」と尋ねた。そこで、ステファノは言った。「兄弟であり父である皆さん、聞いてください。わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハラシに住んでいなかったとき、栄光の神が現れ、『あなたの土地と親族を離れ、わたしが示す土地に行け』と言われました。それで、アブラハムはカルデア人の土地を出て、ハラシに住みました。神はアブラハムを、彼の父が死んだ後、ハラシから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、そこでは財産を何もお与えになりませんでした、一步の幅の土地さえも。しかし、そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに対して、『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』と約束なされたのです。神はこう言われました。『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる。』更に、神は言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。』そして、神はアブラハムと割礼による契約を結ばれました。こうして、アブラハムはイサクをもうけて八日目に割礼を施し、イサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長をもうけて、それぞれ割礼を施したのです。

この族長たちはヨセフをねたんで、エジプトへ売ってしまいました。しかし、神はヨセフを離れず、あらゆる苦難から助け出して、エジプト王ファラオのもとで恵みと知恵をお授けになりました。そしてファラオは、彼をエジプトと王の家全体とをつかさどる大臣に

任命したのです。ところが、エジプトとカナンの全土に飢饉が起り、大きな苦難が襲い、わたしたちの先祖は食糧を手に入れることができなくなりました。ヤコブはエジプトに穀物があると聞いて、まずわたしたちの先祖をそこへ行かせました。二度目のとき、ヨセフは兄弟たちに自分の身の上を明かし、ファラオもヨセフの一族のことを知りました。そこで、ヨセフは人を遣わして、父ヤコブと七十五人の親族一同を呼び寄せました。ヤコブはエジプトに下って行き、やがて彼もわたしたちの先祖も死んで、シケムに移され、かつてアブラハムがシケムでハモルの子らから、幾らかの金で買っておいた墓に葬られました。

神がアブラハムになさった約束の実現する時が近づくにつれ、民は増え、エジプト中に広がりました。それは、ヨセフのことを知らない別の王が、エジプトの支配者となるまでのことでした。この王は、わたしたちの同胞を欺き、先祖を虐待して乳飲み子を捨てさせ、生かしておかないようにしました。このときに、モーセが生まれたのです。神の目に適った美しい子で、三か月の間、父の家で育てられ、その後、捨てられたのをファラオの王女が拾い上げ、自分の子として育てたのです。そして、モーセはエジプト人のあらゆる教育を受け、すばらしい話や行いをする者になりました。

四十歳になったとき、モーセは兄弟であるイスラエルの子らを助けようと思い立ちました。それで、彼らの一人が虐待されているのを見て助け、相手のエジプト人を打ち殺し、ひどい目に遭っていた人のあだを討ったのです。モーセは、自分の手を通して神が兄弟たちを救おうとしておられることを、彼らが理解してくれると思いました。しかし、理解してくれませんでした。次の日、モーセはイスラエル人が互いに争っているところに来合わせたので、仲直りをさせようとして言いました。『君たち、兄弟どうしてではないか。なぜ、傷つけ合うのだ。』すると、仲間を痛めつけていた男は、モーセを突き飛ばして言いました。『だれが、お前を我々の指導者や裁判官にしたのか。きのうエジプト人を殺したように、わたしを殺そうとするのか。』モーセはこの言葉を聞いて、逃げ出し、そして、ミディアン地方に身を寄せている間に、二人の男の子をもうけました。

四十年たったとき、シナイ山に近い荒れ野において、柴の燃える炎の中で、天使がモーセの前に現れました。モーセは、この光景を見て驚きました。もっとよく見ようとして近づくと、主の声が聞こえました。『わたしは、あなたの先祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である』と。モーセは恐れおののいて、それ以上見ようとはしませんでした。そのとき、主はこう仰せになりました。『履物を脱げ。あなたの立っている所は聖なる土地である。わたしは、エジプトにいるわたしの民の不幸を確かに見届け、また、その嘆きを聞いたので、彼らを救うために降って来た。さあ、今あなたをエジプトに遣わそう。』人々が、『だれが、お前を指導者や裁判官にしたのか』と言って拒んだこのモーセを、神は柴の中に現れた天使の手を通して、指導者また解放者としてお遣わしになったのです。この人がエジプトの地でも紅海でも、また四十年の間、荒れ野でも、不思議な業とするしを行って人々を導き出しました。このモーセがまた、イスラエルの子らにこう言いました。『神

は、あなたがたの兄弟の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てられる。』この人が荒れ野の集会において、シナイ山で彼に語りかけた天使とわたしたちの先祖との間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれたのです。けれども、先祖たちはこの人に従おうとせず、彼を退け、エジプトをなつかしく思い、アロンに言いました。『わたしたちの先に立って導いてくれる神々を造ってください。エジプトの地から導き出してくれたあのモーセの身の上に、何が起こったのか分からないからです。』彼らが若い雄牛の像を造ったのはそのころで、この偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造ったものをまつって楽しんでいました。そこで神は顔を背け、彼らが天の星を拝むままにしておかれました。それは預言者の書にこう書いてあるとおりです。『イスラエルの家よ、

お前たちは荒れ野にいた四十年の間、
わたしにいけにえと供え物を

献げたことがあったか。

お前たちは拝むために造った偶像、
モレクの御輿やお前たちの神ライファンの星を
担ぎ回ったのだ。

だから、わたしはお前たちを
バビロンのかなたへ移住させる。』

わたしたちの先祖には、荒れ野に証しの幕屋がありました。これは、見たままの形に造るようにとモーセに言われた方のお命じになったとおりのものでした。この幕屋は、それを受け継いだ先祖たちが、ヨシュアに導かれ、目の前から神が追い払ってくださった異邦人の土地を占領するとき、運び込んだもので、ダビデの時代までそこにありました。ダビデは神の御心に適い、ヤコブの家のために神の住まいが欲しいと願っていましたが、神のために家を建てたのはソロモンでした。けれども、いと高き方は人の手で造ったようなものにはお住みになりません。これは、預言者も言っているとおりのです。

『主は言われる。

「天はわたしの王座、
地はわたしの足台。

お前たちは、わたしに

どんな家を建ててくれると言うのか。

わたしの憩う場所はどこにあるのか。

これらはすべて、

わたしの手が造ったものではないか。』

かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、一人でもいたでしょうか。彼らは、

正しい方が来られることを預言した人々を殺しました。そして今や、あなたがたがその方を裏切る者、殺す者となった。天使たちを通して律法を受けた者なのに、それを守りませんでした。』

ステファノの殉教

人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ぎしりした。ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った。人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。——使徒7

しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。

(参考:欽定訳:) Then Ananias answered, Lord, I have heard by many of this man, how much evil he hath done to thy **saints** at Jerusalem:

(参考:Good News Bible:) Ananias answered, “Lord, many people have told me about this man and about all the terrible things he has done to your **people** in Jerusalem. ——使徒 9:13

ペトロ、ヤッファで幻を見る

翌日、この三人が旅をしてヤッファの町に近づいたころ、ペトロは祈るため屋上に上がった。昼の十二時ごろである。彼は空腹を覚え、何か食べたいと思った。人々が食事の準備をしているうちに、ペトロは我を忘れたようになり、天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。そして、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」と言う声がした。しかし、ペトロは言った。「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。」すると、また声が聞こえてきた。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」こういうことが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた。

ペトロが、今見た幻はいったい何だろうかと、ひとりで思案に暮れていると、コルネリウスから差し向けられた人々が、シモンの家を探し当てて門口に立ち、声をかけて、「ペ

トロと呼ばれるシモンという方が、ここに泊まっておられますか」と尋ねた。ペトロがなおも幻について考え込んでいると、“霊”がこう言った。「三人の者があなたを探しに来ている。立って下に行き、ためらわないで一緒に出発しなさい。わたしがあの者たちをよこしたのだ。」ペトロは、その人々のところへ降りて行って、「あなたがたが探しているのは、このわたしです。どうして、ここへ来られたのですか」と言った。すると、彼らは言った。「百人隊長のコルネリウスは、正しい人で神を畏れ、すべてのユダヤ人に評判の良い人ですが、あなたを家に招いて話を聞くようにと、聖なる天使からお告げを受けたのです。」それで、ペトロはその人たちを迎え入れ、泊ませた。

翌日、ペトロはそこをたち、彼らと出かけた。ヤッファの兄弟も何人か一緒に行った。次の日、一行はカイサリアに到着した。コルネリウスは親類や親しい友人を呼び集めて待っていた。ペトロが来ると、コルネリウスは迎えに出て、足もとにひれ伏して拝んだ。ペトロは彼を起こして言った。「お立ちください。わたしもただの人間です。」そして、話しながら家に入ってみると、大勢の人が集まっていたので、彼らに言った。「あなたがたもご存じのとおり、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられています。けれども、神はわたしに、どんな人をも清くない者とか、汚れている者とか言うてはならないと、お示しになりました。それで、お招きを受けたとき、すぐ来たのです。お尋ねしますが、なぜ招いてくださったのですか。」——使徒 10:9-29

見つけ出してアンティオキアに連れ帰った。二人は、丸一年の間その教会と一緒にいて多くの人を教えた。このアンティオキアで、弟子たちが初めてと呼ばれるようになったのである。

(参考:欽定訳:) And when he had found him, he brought him unto Antioch. And it came to pass, that a whole year they assembled themselves with the church, and taught much people. And the disciples were called **Christians** first in Antioch. ——使徒 11:26

(編者註:) 現在の日本キリスト教界では、「キリスト教徒」ではなく「キリスト者」と称するのが一般的なので、ここでもそれに倣っているものと思われる。

定められた日に、ヘロデが王の服を着けて座に着き、演説をすると、集まった人々は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。ヘロデは、蛆に食い荒らされて息絶えた。——使徒 12:21-23

島全体を巡ってパフォスまで行くと、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスという一人の偽預言者に出会った。この男は、地方総督セルギウス・パウルスという賢明な人物と交際していた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとした。魔術師エリマ——彼の名前は魔術師という意味である——は二人に対抗して、地方総督をこの信仰から遠ざけようとした。パウロとも呼ばれていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、言った。「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。今こそ、主の御手はお前の上に下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、だれか手を引いてくれる人を探した。——使徒 13:6-11

(編者註:) ん? バルイエスとバルナバは別人よ。バルイエスはここのくだりに出てくる魔術師、バルナバはサウロ (この頃はすでに回心してキリスト者になっていて、後にパウロと名を変える) と同じアンティオキア (さっき出てきたよね) の教会にいた聖職者で、パウロの最初の宣教の旅に同行したといわれている。

3.1 タルソのサウル

(編者註:) ペトロがイエスに「伝道の礎」と言われたくだけは マタイ 16:13-20 (既出)。

このことがエフェソに住むユダヤ人やギリシア人すべてに知れ渡ったので、人々は皆恐れを抱き、主イエスの名は大いにあがめられるようになった。信仰に入った大勢の人が来て、自分たちの悪行をはっきり告白した。また、魔術を行っていた多くの者も、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てた。その値段を見積もってみると、銀貨五万枚にもなった。——使徒 19:17-19

パウロ、若者を生き返らせる

週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっていると、パウロは翌日出発する予定で人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた。わたしたちが集まっていた階上の部屋には、たくさんのともし火がついていた。エウティコという青年が、窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。起こしてみると、もう死んでいた。パウロは降りて行き、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて言った。「騒ぐな。まだ生きている。」そして、また上に行って、パンを裂いて食べ、夜明けまで長い間話し続けてから出発した。人々は生き返った青年を連れて帰り、大いに慰められた。——使徒 20:7-12

あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」——使徒 20:35

わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。——コリント 11:23-25

荘厳な栄光の中から、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」というような声があって、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。わたしたちは、聖なる山にイエスといたとき、天から響いてきたこの声を聞いたのです。——二ペテロ 1:17-18

(編者註:) ここでケンが指摘していることは実に鋭い。この筆致からすると、文献学的な聖書研究に関してケンがそれ程知っているとは思えないのだけど、虚心坦懐に聖書を読むと、こういうことが見えるということが驚きだと思う。この問題に関して興味のある方は『捏造された聖書』(バート・D・アーマン 著、松田和也 訳、柏書房)を御一読いただきたい。現在の新約聖書の成立過程に関する研究にふれることができる。

これを聞いて、人々は皆神を賛美し、パウロに言った。「兄弟よ、ご存じのように、幾万人ものユダヤ人が信者になって、皆熱心に律法を守っています。この人たちがあなたについて聞かされているところによると、あなたは異邦人の間にいる全ユダヤ人に対して、『子供に割礼を施すな。慣習に従うな』と言って、モーセから離れるように教えているとのこと。いったい、どうしたらよいのでしょうか。彼らはあなたの来られたことをきくと耳にします。——使徒 21:20-22

パウロ、神殿の境内で逮捕される

七日の期間が終わろうとしていたとき、アジア州から来たユダヤ人たちが神殿の境内でパウロを見つけ、全群衆を扇動して彼を捕らえ、こう叫んだ。「イスラエルの人たち、手伝ってくれ。この男は、民と律法とこの場所を無視することを、至るところでだれにでも教えている。その上、ギリシア人を境内に連れ込んで、この聖なる場所を汚してしまった。」彼らは、エフェソ出身のトロフィモが前に都でパウロと一緒にいたのを見かけたので、パウロが彼を境内に連れ込んだのだと思ったからである。それで、都全体は大騒ぎになり、民衆は駆け寄って来て、パウロを捕らえ、境内から引きずり出した。そして、門はどれもすぐに閉ざされた。彼らがパウロを殺そうとしていたとき、エルサレム中が混乱状態に陥っているという報告が、守備大隊の千人隊長のもとに届いた。千人隊長は直ちに兵士と百人隊長を率いて、その場に駆けつけた。群衆は千人隊長と兵士を見ると、パウロを殴るのをやめた。千人隊長は近寄ってパウロを捕らえ、二本の鎖で縛るように命じた。そして、パウロが何者であるのか、また、何をしたのかと尋ねた。しかし、群衆はあれやこれやと叫び立てていた。千人隊長は、騒々しくて真相をつかむことができないので、パウロを兵営に連れて行くように命じた。パウロが階段にさしかかったとき、群衆の暴行を避けるため

に、兵士たちは彼を担いで行かなければならなかった。大勢の民衆が、「その男を殺してしまえ」と叫びながらついて来たからである。——使徒 21:27-36

すると、主は言われました。『行け。わたしがあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ。』』

パウロと千人隊長

パウロの話をここまで聞いた人々は、声を張り上げて言った。「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしてはおけない。」彼らがわめき立てて上着を投げつけ、砂埃を空中にまき散らすほどだったので、千人隊長はパウロを兵営に入れるように命じ、人々がどうしてこれほどパウロに対してわめき立てるのかを知るため、鞭で打ちたたいて調べるようにと言った。パウロを鞭で打つため、その両手を広げて縛ると、パウロはそばに立っていた百人隊長に言った。「ローマ帝国の市民権を持つ者を、裁判にかけずに鞭で打ってもよいのですか。」これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところへ行って報告した。「どうなさいますか。あの男はローマ帝国の市民です。」千人隊長はパウロのところへ来て言った。「あなたはローマ帝国の市民なのか。わたしに言いなさい。」パウロは、「そうです」と言った。千人隊長が、「わたしは、多額の金を出してこの市民権を得たのだ」と言うと、パウロは、「わたしは生まれながらローマ帝国の市民です」と言った。そこで、パウロを取り調べようとしていた者たちは、直ちに手を引き、千人隊長もパウロがローマ帝国の市民であること、そして、彼を縛ってしまったことを知って恐ろしくなった。——使徒 22:21-29

告発者たちは立ち上がりましたが、彼について、わたしが予想していたような罪状は一つ指摘できませんでした。パウロと言っている問題は、彼ら自身の宗教に関することと、死んでしまったイエスとかいう者のことです。このイエスが生きていると、パウロは主張しているのです。——使徒 25:18-19

それで、神は彼らを恥ずべき情欲にまかせられました。女は自然の関係を自然にもとるものに変え、同じく男も、女との自然の関係を捨てて、互いに情欲を燃やし、男どうしで恥ずべきことを行い、その迷った行いの当然の報いを身に受けています。——ローマ 1:26-27

(編者註:) レズビアンだけじゃないよ。男のホモセクシャルもだよ。

3.2 使徒書簡

(編者註:) この脚註で山形氏が書いている「いい加減な引用をしても、盲目的な信者はそこだけ読んで、それ以外のところは読もうとしないだろうから。」という話だけど、これは結構深刻な問題なんだ。キリスト教信者の多く(自分はそうじゃない! と怒りに震えている人がいるかもしれないけれど)は、実際のところ、聖書の一句を引用して何か言われると、その周辺を読もう、などとは考えず、納得してしまいがちなものなんだ。だからこそ、こういう本の存在意義は大きいと思う。ただし……いい加減な引用に関する責めはあなたも受けるべきですけどね、山形浩生さん!

3.2.1 神さまとイエスに関するパウロの独特な解釈

口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。——ローマ 10:9

わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。——2コリント 4:11

しかし、聖書はすべてのものを罪の支配下に閉じ込めたのです。それは、神の約束が、イエス・キリストへの信仰によって、信じる人々に与えられるようになるためでした。——ガラテヤ 3:22

では、尋ねよう。ユダヤ人がつまずいたとは、倒れてしまったということなのか。決してそうではない。かえって、彼らの罪によって異邦人に救いがもたらされる結果になりましたが、それは、彼らにねたみを起こさせるためだったのです。——ローマ 11:11

あなたがたはキリストにおいて、手によらない割礼、つまり肉の体を脱ぎ捨てるキリストの割礼を受け、洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです。肉に割礼を受けず、罪の中にいて死んでいたあなたがたを、神はキリストと共に生かしてくださいました。神は、わたしたちの一切の罪を赦し、規則によってわたしたちを訴えて不利に陥っていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。——コロサイ

2:11-14

兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません。ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選びました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。それは、だれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです。——1コリント 1:26-29

(編者註:)なぜ貧乏人とバカにここまでおもねった書き方になるか、というと、当時のキリスト教徒にそういう人達(いや、まあ、バカかどうかは分からないけれど、貧困、かつ家柄のないような人々のことね)が多かったから。ここで不思議だと思わない? だって、そういう人達ってそういう時代だったらほとんどが文字の読み書きができないはずだよな? でも、キリスト教って、福音書とか使徒書簡で伝道されたんだよね? 文字の読めない人に文字で伝道された、って、どういうことなんだろう? 実は当時、各地の共同体では、字の読めるリーダー格の人が会衆に読み聞かすかたちで伝道が行われていたんだね。

3.2.2 キリスト教徒は律法よりえらいのじゃ

けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。——ガラテヤ 2:16

わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。——ガラテヤ 2:21

信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません。——ガラテヤ 3:23-25

3.2.3 新たな選民

すなわち、肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。——ローマ 9:8

また、そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。——エペソ 2:12-13

ユダヤ人たちは、主イエスと預言者たちを殺したばかりでなく、わたしたちをも激しく迫害し、神に喜ばれることをせず、あらゆる人々に敵対し、異邦人が救われるようにわたしたちが語るのを妨げています。こうして、いつも自分たちの罪をあふれんばかりに増やしているのです。しかし、神の怒りは余すところなく彼らの上に臨みます。——1テサロニケ 2:15-16

あの犬どもに注意なさい。よこしまな働き手たちに気をつけなさい。切り傷にすぎない割礼を持つ者たちを警戒なさい。彼らではなく、わたしたちこそ真の割礼を受けた者です。わたしたちは神の霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇りとし、肉に頼らないからです。——フィリピ 3:2-3

実は、不従順な者、無益な話をする者、人を惑わす者が多いのです。特に割礼を受けている人たちの中に、そういう者がいます。その者たちを沈黙させねばなりません。彼らは恥ずべき利益を得るために、教えてはならないことを教え、数々の家庭を覆しています。彼らのうちの一人、預言者自身が次のように言いました。

「クレタ人はいつもうそつき、
悪い獣、怠惰な大食漢だ。」

この言葉は当たっています。だから、彼らを厳しく戒めて、信仰を健全に保たせ、ユダヤ人の作り話や、真理に背を向けている者の掟に心を奪われないようにさせなさい。清い人には、すべてが清いのです。だが、汚れている者、信じない者には、何一つ清いものはなく、その知性も良心も汚れています。こういう者たちは、神を知っていると公言しながら、行いではそれを否定しているのです。嫌悪すべき人間で、反抗的で、一切の善い業に

については失格者です。——テトス 1:10-16

3.2.4 シニカルなパウロ

ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。また、わたしは神の律法を持っていないわけではなく、キリストの律法に従っているのですが、律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようになりました。律法を持たない人を得るためです。弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。——1コリント 9:20-23

キリストを宣べ伝えるのに、ねたみと争いの念にかられてする者もいれば、善意とする者もいます。一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせているのです。だが、それがなんであろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいきます。これからも喜びます。——フィリピ 1:15-18

奴隷には、あらゆる点で自分の主人に服従して、喜ばれるようにし、反抗したり、盗んだりせず、常に忠実で善良であることを示すように勧めなさい。そうすれば、わたしたちの救い主である神の教えを、あらゆる点で輝かすことになります。——テトス 2:9-10

3.2.5 キリスト教徒はイエスよりお金が入用

自発的な施し

兄弟たち、マケドニア州の諸教会に与えられた神の恵みについて知らせましょう。彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなったということです。わたしは証しますが、彼らは力に応じて、また力以上に、自分から進んで、聖なる者たちを助けるための慈善の業と奉仕に参加させてほしいと、しきりにわたしたちに願い出たのでした。また、わたしたちの期待以上に、彼らはまず主に、次いで、神の御心にそってわたしたちにも自分自身を献げ

たので、わたしたちはテトスに、この慈善の業をあなたがたの間で始めたからには、やり遂げるようにと勧めました。あなたがたは信仰、言葉、知識、あらゆる熱心、わたしたちから受ける愛など、すべての点で豊かなのですから、この慈善の業においても豊かな者となりなさい。

わたしは命令としてこう言っているのではありません。他の人々の熱心に照らしてあなたがたの愛の純粹さを確かめようと言うのです。あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。この件についてわたしの意見を述べておきます。それがあなたがたの益になるからです。あなたがたは、このことを去年から他に先がけて実行したばかりでなく、実行したいと願ってもしました。だから、今それをやり遂げなさい。進んで実行しようと思ったとおりに、自分が持っているものでやり遂げることです。進んで行う気持があれば、持たないものではなく、持っているものに依じて、神に受け入れられるのです。他の人々には樂をさせて、あなたがたに苦勞をかけるということではなく、釣り合いがとれるようにするわけです。あなたがたの現在のゆとりが彼らの欠乏を補えば、いつか彼らのゆとりもあなたがたの欠乏を補うことになり、こうして釣り合いがとれるのです。

「多く集めた者も、余ることはなく、
わずかしか集めなかった者も、
不足することはなかった」

と書いてあるとおりで。—— 2 コリント 8:1-15

わたしはあなたがたの熱意を知っているので、アカイア州では去年から準備ができていると言って、マケドニア州の人々にあなたがたのことを誇りました。あなたがたの熱意は多くの人々を奮い立たせたのです。わたしが兄弟たちを派遣するのは、あなたがたのことでわたしたちが抱いている誇りが、この点で無意味なものにならないためです。また、わたしが言ったとおりに用意してもらいたいためです。そうでないと、マケドニア州の人々がわたしと共に行って、まだ用意のできていないのを見たら、あなたがたはもちろん、わたしたちも、このように確信しているだけに、恥をかくことになりかねないからです。—— 2 コリント 9:2-4

各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。—— 2 コリント 9:7

3.2.6 パウロ:爆裂エゴの持ち主

このようにキリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせようと、わたしは熱心に努めてきました。それは、他人の築いた土台の上に建てたりしないためです。——ローマ 15:20

(編者註:) うーん。これはパウロがちょっとかわいそうかなあ。この後に言っていることからみると、「もう土台のあるところに建て増しすることよりも、土台のないところに土台を築くことこそが福音伝道に対して重要だからだ」って言いたいわけで、功名心を剥き出しているわけでは……少なくともここでは、この文脈上では……ないからね。

「彼のことを告げられていなかった人々が見、
聞かなかった人々が悟るであろう」
と書いてあるとおりです。——ローマ 15:21

何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかり保つでしょう。こうしてわたしは、自分が走ったことが無駄でなく、労苦したことも無駄ではなかったと、キリストの日に誇ることができるでしょう。——フィリピ 2:14-16

あなたがたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです。だから、わたしとしては、やみくもに走ったりしないし、空を打つような拳闘もしません。むしろ、自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです。——1コリント 9:24-27

わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。今や、義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれをわたしに

授けてくださるのです。しかし、わたしだけでなく、主が来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでも授けてくださいます。——2 テモテ 4:7-8

あなたがたをかき乱す者たちは、いっそのこと自ら去勢してしまえばよい。——ガラテヤ 5:12

3.2.7 自信のないやつ死んじまえ

そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。——1 コリント 15:14

この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。——1 コリント 15:19

(編者註:) ここもちょっとパウロがかわいそう。パウロが言いたいのは「もしキリストの復活が信じられないなら、俺達あまりに惨めじゃないの、でもそうじゃないんでしょ? キリストの復活ってこれ以上ない程の恵みなんだよね?」ということなんだから。以下、上引用部の含まれる節を丸ごと引用する。

死者の復活

キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させたと言って、神に反して証しをしたことになるからです。死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることとなります。そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。

しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。

つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。最後の敵として、死が滅ぼされます。「神は、すべてをその足の下に服従させた」からです。すべてが服従させられたと言われるとき、すべてをキリストに服従させた方自身が、それに含まれていないことは、明らかです。すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。

そうでなければ、死者のために洗礼を受ける人たちは、何をしようとするのか。死者が決して復活しないのなら、なぜ死者のために洗礼など受けるのですか。また、なぜわたしたちはいつも危険を冒しているのですか。兄弟たち、わたしたちの主キリスト・イエスに結ばれてわたしが持つ、あなたがたに対する誇りにかけて言えば、わたしは日々死んでいます。単に人間的な動機からエフェソで野獣と闘ったとしたら、わたしに何の得があったでしょう。もし、死者が復活しないとしたら、

「食べたり飲んだりしようではないか。

どうせ明日は死ぬ身ではないか」

ということになります。思い違いをしてはいけません。

「悪いつきあいは、良い習慣を台なしにする」

のです。正気になって身を正しなさい。罪を犯してはならない。神について何も知らない人がいるからです。わたしがこう言うのは、あなたがたを恥じ入らせるためです。――

1 コリント 15:12-34

3.2.8 救われましてもこれでは……

あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴隷となり、聖なる生活の実を結んでいます。行き着くところは、永遠の命です。――ローマ 6:22

みだらな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて体の外にあります。しかし、みだらな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯しているのです。知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。――1 コリント 6:18-20

(編者註:) ここも原著にある引用箇所が削られている。以下引用。

あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか。キリストの体の一部を娼婦の体の一部としてもよいのか。決してそうではない。—— 1 コリント 6:15

3.2.9 パウロは女性がお嫌い

礼拝でのかぶり物

あなたがたが、何かにつけわたしを思い出し、わたしがあなたがたに伝えたとおりに、伝えられた教えを守っているのは、立派だと思います。ここであなたがたに知っておいてほしいのは、すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神であるということです。男はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶるなら、自分の頭を侮辱することになります。女はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶらないなら、その頭を侮辱することになります。それは、髪の毛をそり落としたのと同じだからです。女が頭に物をかぶらないなら、髪の毛を切ってしまいなさい。女にとって髪の毛を切ったり、そり落としたりするのが恥ずかしいことなら、頭に物をかぶるべきです。男は神の姿と栄光を映す者ですから、頭に物をかぶるべきではありません。しかし、女は男の栄光を映す者です。というのは、男が女から出て来たのではなく、女が男から出て来たのだし、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。だから、女は天使たちのために、頭に力の印をかぶるべきです。いずれにせよ、主においては、男なしに女はなく、女なしに男はありません。それは女が男から出たように、男も女から生まれ、また、すべてのものが神から出ているからです。自分で判断しなさい。女が頭に何もかぶらないで神に祈るのが、ふさわしいかどうか。男は長い髪が恥であるのに対し、女は長い髪が誉れとなることを、自然そのものがあなたがたに教えていないでしょうか。長い髪は、かぶり物の代わりに女に与えられているのです。この点について異論を唱えたい人がいるとしても、そのような習慣は、わたしたちにも神の教会にもありません。—— 1 コリント 11:2-16

(編者註:) これが、カトリックの女性信者がベール（通常は白、寡婦は黒）を着用する根拠になっている。でも最近ではカトリックのミサでも、ベールをしない女性が圧倒的に多いけれどね。

婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちには語る事が許されていません。律

法も言っているように、婦人たちは従う者でありなさい。何か知りたいことがあったら、家で自分の夫に聞きなさい。婦人にとって教会の中で発言するのは、恥ずべきことです。——1 コリント 14:34-35

(編者註:) 僕の知る限り、これは今のカトリックには何も反映されていないなあ。

妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい。キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭だからです。また、教会がキリストに仕えるように、妻もすべての面で夫に仕えるべきです。——エフェソ 5:22-24

同じように、婦人はつつましい身なりをし、慎みと貞淑をもって身を飾るべきであり、髪を編んだり、金や真珠や高価な着物を身に着けたりしてはなりません。むしろ、善い業で身を飾るのが、神を敬うと公言する婦人にふさわしいことです。婦人は、静かに、全く従順に学ぶべきです。婦人が教えたり、男の上に立ったりするのを、わたしは許しません。むしろ、静かにしているべきです。なぜならば、アダムが最初に造られ、それからエバが造られたからです。しかも、アダムはだまされませんでした。女はだまされて、罪を犯してしまいました。——1 テモテ 2:9-14

やもめとして登録するのは、六十歳未満の者ではなく、一人の夫の妻であった人、善い行いで評判の良い人でなければなりません。子供を育て上げたとか、旅人を親切にもてなしたとか、聖なる者たちの足を洗ったとか、苦しんでいる人々を助けたとか、あらゆる善い業に励んだ者でなければなりません。年若いやもめは登録してはなりません。というのは、彼女たちは、情欲にかられてキリストから離れると、結婚したがるようになり、前にした約束を破ったという非難を受けることになるからです。その上、彼女たちは家から家へと回り歩くうちに怠け癖がつき、更に、ただ怠けるだけでなく、おしゃべりで詮索好きになり、話してはならないことまで話しだします。——1 テモテ 5:9-13

3.2.10 結婚カウンセラーパウロ

結婚について

そちらから書いてよこしたことについて言えば、男は女に触れない方がよい。しかし、みだらな行いを避けるために、男はめいめい自分の妻を持ち、また、女はめいめい自分の夫を持ちなさい。——1 コリント 7:1-2

互いに相手を拒んではいけません。ただ、納得しあつたうえで、専ら祈りに時を過ごすためにしばらく別れ、また一緒になるというなら話は別です。あなたがたが自分を抑制する力がないのに乗じて、サタンが誘惑しないともかぎらないからです。——1コリント 7:5

もし、ある人が自分の相手である娘に対して、情熱が強くなり、その誓いにふさわしくないふるまいをしかねないと感じ、それ以上自分を抑制できないと思うなら、思いどおりにしなさい。罪を犯すことにはなりません。二人は結婚しなさい。しかし、心にしっかりした信念を持ち、無理に思いを抑えつけたりせずに、相手の娘をそのままにしておこうと決心した人は、そうしたらよいでしょう。要するに、相手の娘と結婚する人はそれで差し支えありませんが、結婚しない人の方がもっとよいのです。——1コリント 7:36-38

3.2.11 分をわきまえなさい

人よ、神に口答えるとは、あなたは何者か。造られた物が造った者に、「どうしてわたしをこのように造ったのか」と言えるのでしょうか。焼き物師は同じ粘土から、一つを貴いことに用いる器に、一つを貴くないことに用いる器に造る権限があるのではないか。——ローマ 9:20-21

人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。従って、権威に逆らう者は、神の定めにくぐることになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。——ローマ 13:1-2

奴隷たち、キリストに従うように、恐れおののき、真心を込めて、肉による主人に従いなさい。人にへつらおうとして、うわべだけで仕えるのではなく、キリストの奴隷として、心から神の御心を行い、人にではなく主に仕えるように、喜んで仕えなさい。——エフェソ 6:5-7

3.2.12 パウロのホントにへんてこな信念

それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生

きるためなのです。——ローマ 6:3-4

つまり、あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。——フィリピ 1:29

もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。——ローマ 7:20

わたしたちが正気でないとするなら、それは神のためであったし、正気であるなら、それはあなたがたのためです。——2 コリント 5:13

疑いながら食べる人は、確信に基づいて行動していないので、罪に定められます。確信に基づいていないことは、すべて罪なのです。——ローマ 14:23

そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。——ローマ 6:9

わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。——ガラテヤ 2:19-20

従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。そのため、あなたがたの間に弱い者や病人がたくさんおり、多くの者が死んだのです。——1 コリント 11:27-30

救いの道をたどる者にとっても、滅びの道をたどる者にとっても、わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。滅びる者には死から死に至らせる香りであり、

救われる者には命から命に至らせる香りです。このような務めにだれがふさわしいでしょうか。——2コリント 2:15-16

神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらします。——2コリント 7:10

それでは、善いものがわたしにとって死をもたらすものとなったのだろうか。決してそうではない。実は、罪がその正体を現すために、善いものを通してわたしに死をもたらしたのです。このようにして、罪は限りなく邪悪なものであることが、掟を通して示されたのでした。——ローマ 7:13

それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。こう書いてあります。

「主は言われる。

『わたしは生きている。

すべてのひざはわたしの前にかがみ、

すべての舌が神をほめたたえる』と。」

それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです。——ローマ 14:10-12

(編者註:) 本当かな? この引用元は……

わたしは自分にかけて誓う。

わたしの口から恵みの言葉が出されたならば

その言葉は決して取り消されない。

わたしの前に、すべての膝はかがみ

すべての舌は誓いを立て

恵みの御業と力は主にある、とわたしに言う。

主に対して怒りを燃やした者はことごとく

主に服し、恥を受ける。

イスラエルの子孫はすべて

主によって、正しい者とされて誇る。——イザヤ 45:23-25

(編者註:) うーん。ここって、神さまが裁きを下す、というよりも「私は正しいのだ!」と主張しているところなんだよね。ちなみに引用部の前は「諸国民の受ける恥」という、神さまが自分を軽んじた者達が辱められたと言うくだりが延々と続いている。

3.2.13 ……そして珍しく半ば正気な瞬間も

わたしは、あなたがたのだれよりも多くの異言を語れることを、神に感謝します。しかし、わたしは他の人たちをも教えるために、教会では異言で一万の言葉を語るより、理性によって五つの言葉を語る方をとります。

兄弟たち、物の判断については子供となってはいけません。悪事については幼子となり、物の判断については大人になってください。律法にこう書いてあります。

『異国の言葉を語る人々によって、

異国の人々の唇で

わたしはこの民に語るが、

それでも、彼らはわたしに耳を傾けないだろう』

と主は言われる。」このように、異言は、信じる者のためではなく、信じていない者のためのしるしですが、預言は、信じていない者のためではなく、信じる者のためのしるしです。教会全体が一緒に集まり、皆が異言を語っているところへ、教会に来て間もない人か信者でない人が入って来たら、あなたがたのことを気が変だとは言わないでしょうか。——1コリント 14:18-23

3.2.14 ヘブル人への使徒書簡

さて、最初の契約にも、礼拝の規定と地上の聖所とがありました。すなわち、第一の幕屋が設けられ、その中には燭台、机、そして供え物のパンが置かれていました。この幕屋が聖所と呼ばれるものです。——ヘブライ 9:1-2

しかし、第二の幕屋には年に一度、大祭司だけが入りますが、自分自身のためと民の過失のために献げる血を、必ず携えて行きます。——ヘブライ 9:7

けれども、キリストは、既に実現している恵みの大祭司としておいでになったのですから、人間の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋を通り、雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。——ヘブライ 9:11-12

こうして、ほとんどすべてのものが、律法に従って血で清められており、血を流すことなしには罪の赦しはありえないのです。——ヘブライ 9:22

モーセの律法を破る者は、二、三人の証言に基づいて、情け容赦なく死刑に処せられます。まして、神の子を足げにし、自分が聖なる者とされた契約の血を汚れたものと見なし、その上、恵みの霊を侮辱する者は、どれほど重い刑罰に値すると思いますか。

「復讐はわたしのすること、

わたしが報復する」

と言い、また、

「主はその民を裁かれる」

と言われた方を、わたしたちは知っています。生ける神の手に落ちるのは、恐ろしいことです。——ヘブライ 10:28-31

(編者註:本には ヘブライ 12:6 とあるけどこれは明らかにミス。)

なぜなら、主は愛する者を鍛え、

子として受け入れる者を皆、

鞭打たれるからである。」——ヘブライ 12:6

3.2.15 ヤコブの使徒書簡

あなたがたの中で知恵の欠けている人がいれば、だれにでも惜しみなくとがめだてしないでお与えになる神に願いなさい。そうすれば、与えられます。いささかも疑わず、信仰をもって願いなさい。疑う者は、風に吹かれて揺れ動く海の波に似ています。そういう人は、主から何かいただけたらと思っただけではありません。心が定まらず、生き方全体に安定を欠く人です。——ヤコブ 1:5-8

舌は火です。舌は「不義の世界」です。わたしたちの体の器官の一つで、全身を汚し、移り変わる人生を焼き尽くし、自らも地獄の火によって燃やされます。——ヤコブ 3:6

神に背いた者たち、世の友となることが、神の敵となることだとは知らないのか。世の友になりたいと願う人はだれでも、神の敵になるのです。——ヤコブ 4:4

3.2.16 ペテロの使徒書簡

あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。—— 1 ペトロ 2:5

この霊たちは、ノアの時代に箱舟が作られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者です。この箱舟に乗り込んだ数人、すなわち八人だけが水の中を通して救われました。この水で前もって表された洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです。洗礼は、肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願い求めることです。—— 1 ペトロ 3:20-21

まず、次のことを知っていなさい。終わりの時には、欲望の赴くままに生活してあざける者たちが現れ、あざけて、こう言います。「主が来るという約束は、いったいどうなったのだ。父たちが死んでこのかた、世の中のことは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか。」—— 2 ペトロ 3:3-4

愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。—— 2 ペトロ 3:8-9

3.2.17 ヨハネの使徒書簡

子供たちよ、終わりの時が来ています。反キリストが来ると、あなたがたがかねて聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。これによって、終わりの時が来ていると分かります。—— 1 ヨハネ 2:18

わたしたちは知っています。わたしたちは神に属する者ですが、この世全体が悪い者の支配下にあるのです。—— 1 ヨハネ 5:19

愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。—— 1 ヨハネ 4:8

愛とは、御父の掟に従って歩むことであり、この掟とは、あなたがたが初めから聞いていたように、愛に歩むことです。——2ヨハネ 1:6

3.2.17.1 ヨハネの堂々巡り

神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にいつもあるからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。——1ヨハネ 3:9

神の子を信じる人は、自分の内にこの証しがあり、神を信じない人は、神が御子についてなされた証しを信じていないため、神を偽り者にしてしまっています。——1ヨハネ 5:10

わたしたちは神に属する者です。神を知る人は、わたしたちに耳を傾けますが、神に属していない者は、わたしたちに耳を傾けません。これによって、真理の霊と人を惑わす霊とを見分けることができます。——1ヨハネ 4:6

わたしたちは、願い事は何でも聞き入れてくださるということが分かるなら、神に願ったことは既になえられていることも分かります。——1ヨハネ 5:15

3.2.18 ユダの手紙

(編者註:) 一応聖書に慣れていない人のために補足。キリストを裏切ったユダ(イスカリオテのユダ)は、いわゆる十二使徒の一人だったんだけど、罪を悔んで首を吊って死んだので「降板」扱いになって、代わりにマティアが「新しい十二番目の使徒」になった。世間ではイスカリオテのユダを十三番目の使徒とか言ってる人がいるけど、あれは間違い。で、ややこしいのだけど、十二使徒の一人に、「ヤコブの子ユダ」とか「ダダイと呼ばれるユダ」という人がいて、これはイスカリオテのユダとは別人なので間違えないように。英語だと——イスカリオテのユダは英語では Judas、ヤコブの子ユダは Judah なので——分かりやすいんだけど。で、だ。この「ユダの手紙」を書いたのは、自称「イエス・キリストの僕にしてヤコブの兄弟ユダ」なので Judah か、と思いきや、英語では Epistle of Jude。最近の研究では、どうも Judah とは別人らしい、とのこと。

一方、自分の領分を守らないで、その住まいを見捨ててしまった天使たちを、大いなる日の裁きのために、永遠の鎖で縛り、暗闇の中に閉じ込められました。——ユダ 1:6

神は、罪を犯した天使たちを容赦せず、暗闇という縄で縛って地獄に引き渡し、裁きのために閉じ込められました。——2ペトロ 2:4

大天使ミカエルは、モーセの遺体のことで悪魔と言い争ったとき、あえてののしって相手を裁こうとはせず、「主がお前を懲らしめてくださるように」と言いました。——ユダ 1:9

モーセの死

モーセはモアブの平野からネボ山、すなわちエリコの向かいにあるピスガの山頂に登った。主はモーセに、すべての土地が見渡せるようにされた。ギレアドからダンまで、ナフタリの全土、エフライムとマナセの領土、西の海に至るユダの全土、ネゲブおよびなつめやしの茂る町エリコの谷からツォアルまでである。主はモーセに言われた。

「これがあなたの子孫に与えるとわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である。わたしはあなたがそれを自分の目で見えるようにした。あなたはしかし、そこに渡って行くことはできない。」

主の僕モーセは、主の命令によってモアブの地で死んだ。主は、モーセをベト・ペオルの近くのモアブの地にある谷に葬られたが、今日に至るまで、だれも彼が葬られた場所を知らない。モーセは死んだとき百二十歳であったが、目はかすまず、活力もうせてはいなかった。イスラエルの人々はモアブの平野で三十日の間、モーセを悼んで泣き、モーセのために喪に服して、その期間は終わった。

ヌンの子ヨシュアは知恵の霊に満ちていた。モーセが彼の上に手を置いたからである。イスラエルの人々は彼に聞き従い、主がモーセに命じられたとおりに行った。

イスラエルには、再びモーセのような預言者は現れなかった。主が顔と顔を合わせて彼を選び出されたのは、彼をエジプトの国に遣わして、ファラオとそのすべての家臣および全土に対してあらゆるしるしと奇跡を行わせるためであり、また、モーセが全イスラエルの目の前で、あらゆる力ある業とあらゆる大いなる恐るべき出来事を示すためであった。——申命記 34

アダムから数えて七代目に当たるエノクも、彼らについてこう預言しました。「見よ、主は数知れない聖なる者たちを引き連れて来られる。——ユダ 1:14

カインは妻を知った。彼女は身ごもってエノクを産んだ。カインは町を建てていたが、その町を息子の名前にちなんでエノクと名付けた。エノクにはイラドが生まれた。イラド

はメフヤエルの父となり、メフヤエルはメトシャエルの父となり、メトシャエルはレメクの父となった。——創世記 4:17-18

イエレドは百六十二歳になったとき、エノクをもうけた。イエレドは、エノクが生まれた後八百年生きて、息子や娘をもうけた。イエレドは九百六十二年生き、そして死んだ。

エノクは六十五歳になったとき、メトシェラをもうけた。エノクは、メトシェラが生まれた後、三百年神と共に歩み、息子や娘をもうけた。エノクは三百六十五年生きた。エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった。——創世記 5:18-24

3.3 おっかない未来

3.3.1 ハイライトを少々

フィラデルフィアにある教会にあてた手紙

フィラデルフィアにある教会の天使にこう書き送れ。

『聖なる方、真実な方、

ダビデの鍵を持つ方、

この方が開けると、だれも閉じることなく、

閉じると、だれも開けることがない。

その方が次のように言われる。——黙示録 3:7

(編者註：) フィラデルフィアという名前が、アメリカのあの都市名に由来するものではなくて、あの都市名が由来するところだ、というのは書くまでもないよね。もともとフィラデルフィアというのは、トルコ西部にあるアラシェヒルという都市のギリシャ語名なんだ。当時は他にもいくつかフィラデルフィアと呼ばれる都市があって、その中で最も有名なのはヨルダンのアンマンだろう。

天上の礼拝

その後、わたしが見ていると、見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラッパが響くようにわたしに語りかけるのが聞こえた、あの最初の声があった。「ここへ上って来い。この後必ず起こることをあなたに示そう。」わたしは、たちまち“霊”に満たされた。すると、見よ、天に玉座が設けられていて、その玉座の上に座っている方がおられた。その方は、碧玉や赤めのうのようであり、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。また、玉座の周りに二十四の座があって、それらの座の上には白い衣を着て、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。玉座からは、稲妻、さまざまな音、雷が起こった。また、玉座の前には、七つのともし火が燃えていた。これは神の七つの霊である。また、玉座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。

この玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があった。第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった。この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りにも内側にも、一面に目があった。彼らは、昼も夜も絶え間なく言い続けた。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、
全能者である神、主、
かつておられ、今おられ、やがて来られる方。」——黙示録 4:1-8

そして、天にある神の神殿が開かれて、その神殿の中にある契約の箱が見え、稲妻、さまざまな音、雷、地震が起こり、大粒の雹が降った。——黙示録 11:19

彼らは、玉座の前、また四つの生き物と長老たちの前で、新しい歌のたぐいをうたった。この歌は、地上から贖われた十四万四千人の者たちのほかは、覚えることができなかった。彼らは、女に触れて身を汚したことの無い者である。彼らは童貞だからである。この者たちは、小羊の行くところへは、どこへでも従って行く。この者たちは、神と小羊に献げられる初穂として、人々の中から贖われた者たちで、——黙示録 14:3-4

わたし、イエスは使いを遣わし、諸教会のために以上のことをあなたがたに証しした。わたしは、ダビデのひこばえ、その一族、輝く明けの明星である。」

(参考: 欽定訳:) I Jesus have sent mine angel to testify unto you these things in the churches. I am the root and the offspring of David, and the bright and morning star. ——黙示録 22:16

(編者註:) うーん、これは切る場所の問題のような気が。

3.4 最後の審判

(編者註:) ケンが言う「最後の18章」というのは、黙示録第5章から第22章までのこと。あまりに長いので引用はしない。

以上すべてを証しする方が、言われる。「然り、わたしはすぐに来る。」アーメン、主イエスよ、来てください。

主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。——黙示録 22:20-21

第4章

編者による補遺

この章は編者による補遺。なんでこんな章を追加するか、というと、実は正確を期するためにケンの原著を取り寄せて読んでみたところが、巻末に付けられていた質問集や索引がざっくり訳本で割愛されていることが分かったからだ。たしかにこれは本筋から見たら瑣末なことなのかもしれない。けれど、あるものはあるものなので、原著にはこういうものがありますよ、というのを皆さんにも見てもらえの方がいいと思う。ということで、ここに補遺を追加することにしたわけだ。

4.1 恥かしくさせられる聖書の疑問

- ノアが初子を産ませたときに五百歳だったって本当に信じられる？ ——創世記 5:32
- 罪深い町ソドムを滅ぼすのはオツケーだったのに、実の父親とセックスしちゃうロトの娘達を滅ぼすのがオツケーじゃないのはどうして？ ——創世記 19:30-36
- もし神さまが全能の力を持っているなら、ヤコブとのレスリング試合でどうして負けたんだろう？ ——創世記 32:24-30
- 宗教的な「安息の日」に働いた人は誰でも殺されるべきだ、なんて、本当に信じられる？ ——出エジプト 31:15
- 子供を殺すなんて信じられる？ そして、どうして神さまはエフタが処女の娘をいけにえに献げることをよしとしたんだろう？ ——申命記 11:30-39
- 子供たちが親の罪のために死に追いやられるべきだ、なんて、信じられる？ そして、どうして神さまはダビデとバト・シェバの子供を殺したのに、当のダビデとバト・シェバは生かしておいたんだろう？ ——申命記 11:30-39
- もし神さまが全能の力を持っているなら、どうして神さまの軍勢は、異教の神ケモシュに息子をいけにえに献げたモアブ王に打ち負かされちゃったんだろう？ ——

列王記下 3:18-19, 26-27

- 聖性が衣服に移るって信じる？ 神さまは信じてるよ——エゼキエル 44:19
- 君が自分の手や目のせいで罪を犯したら、その目や手を切り離すべきだって思う？ キリストはそう思ったよ——マタイ 5:29-30
- どうして神さまはアブラハムやヨブに地上の富を与えたのに、イエスは富が地獄への片道切符だなんて言ったんだろう？ ——創世記 24:34-35, ヨブ 42:10-12, マタイ 19:24
- 君は奴隷制に疑いを持たない？ じゃあ、どうして聖書に登場する誰も（イエスですら）が奴隷制を批判しないんだろう？ どうして使徒パウロやペテロは従順な奴隷たることを奨励したんだろう？ ——エフェソ 6:5-7, ペテロ 2:18
- イエスが実物の惑星である金星だったって信じる？ 彼は信じてたんだよ——黙示録 22:16
- 聖書の最後の章で、イエスは3回言う：「わたしはすぐに来る」って。これは、2000年も前に書かれたことだ。どうして彼はまだ来ないの？ ——黙示録 22:12-13

4.2 聖書セックス索引

- アダムとイブ——創世記 4:1
- ケインとその妻（氏名不詳）——創世記 4:17
- アダムとイブ（2回戦）——創世記 4:25
- 神の子らと人の娘たち——創世記 6:2, 4
- サライとファラオ——創世記 12:14-19
- アブラムとハガル——創世記 16:4
- 二人の御使いとソドムの男たち（未遂）——創世記 19:4-5
- ロトとその娘たち（むりやり）——創世記 19:30-36
- イサクとリベカ——創世記 24:67
- ヤコブとレア——創世記 29:23
- ヤコブとラケル——創世記 29:30
- ヤコブとビルハ——創世記 30:4
- ヤコブとジルパ——創世記 30:9-10
- ヤコブとレア（2回戦）——創世記 30:16
- シケムとディナ（むりやり）——創世記 34:2
- ルベンとビルハ——創世記 35:22
- オナンとタマル——創世記 38:9

- ユダとタマル——創世記 38:18
- ヨセフとポティファルの妻（未遂）——創世記 39:7, 10-12
- 神さまのセックスタブーざっくりリスト——レビ記 18:1-23
- 追放もしくは死刑相当のセックスタブー——レビ記 20:10-21
- 不貞の妻への試練による判定——民数記 5:11-31
- イスラエルの男たちとモアブの女たち——民数記 25:1
- 更なるセックスタブー——申命記 22:13-30
- サムソンと名もなき遊女——士師記 16:1
- ギベアの男たちと名もなき女（むりやり）——士師記 19:25
- ボアズとルツ——ルツ記 4:13
- エルカナとハンナ——サムエル記上 1:19
- エリの息子たちと召し使いの女たち——サムエル記上 1:19
- ダビデとバト・シェバ——サムエル記下 11:4
- ダビデとバト・シェバ（2回戦）——サムエル記下 12:24
- アムノンとタマル（むりやり）——サムエル記下 13:11-14
- オハシュロス王/クセルクセス王とエステル——エステル記 2:16
- 姦淫する女と意志の弱そうな若者——箴言 7:6-23
- 花嫁と新郎——雅歌（どこを取っても）
- メディア人の男たちとバビロンの妻たち（むりやり）——イザヤ 13:16
- エルサレムの男たちとおびただしい数の遊女たち——エレミヤ 5:7-8
- エルサレムと「傍らを通るすべての者」（寓意）——エゼキエル 16:25-34
- エルサレムの男たち（色んな趣向で……父親、生理中の女、隣人の妻……等々）——エゼキエル 22:10-12
- オホラとオホリバ、そして色んな国の男たち（これも寓意として）——エゼキエル 23:1-21
- ユダの女たちとどこの誰だか分からない男たち（むりやり）——哀歌 5:11
- ホセアとゴメル——ホセア 1:2-3
- イスラエルの人びと：様々な乱行にふける——ホセア 1:2-3
- エルサレムの女たちと「諸国」の男たち（むりやり）——ゼカリヤ 14:2
- マリアと聖霊——ルカ 1:35-38
- イエス、バツイチ女性と結婚する男は姦通の罪を犯していると宣言——ルカ 16:1
- 神をも恐れぬ同性愛——ロマ 1:26-27
- コリント人の名もなき男とその（継？）母——1コリント 5:1
- 使徒パウロ、性道德の乱れを糾弾する——1コリント 7:1-7
- 使徒パウロ、結婚期間中のセックスにちょっと賛成——1コリント 7:1-7

- 使徒ヨハネは、女性とのセックスの経験がある人は救済されないだろうと書いている——黙示録 14:3-4

4.3 ボーナス中絶反対論者ホラー索引

4.3.1 切り裂かれた妊婦に言及している箇所

- シリア人による——列王記下 8:12
- イスラエルの王メナヘムによる——列王記下 15:16
- 未確認の攻撃者による——ホセア 13:16
- アンモン人による——アモス 1:13

4.3.2 殺された子供に言及している箇所

- ミディアンの子供たち——民数記 31:17 †
- ヘシュボンの子供たち——申命記 2:34 †
- バシヤンの子供たち——申命記 3:6 †
- イスラエルの子供たち——列王記下 8:12
- バビロンの子供たち——詩篇 137:9 †
- バビロンの子供たち——イザヤ 13:16 †
- ベト・アルベルの子供たち——ホセア 10:14
- イスラエルの子供たち——ホセア 13:16 †
- テーベの子供たち——ナホム 3:10
- ベツレヘムの子供たち——マタイ 2:16

† 神さまの承認による

第5章

編者あとがき

この『誰も教えてくれない聖書の読み方』新共同訳ガイドは、冒頭に言及したとおり、僕が『誰も——』の存在を知ってからずっと、作りたかったけれど、あまりの文書の量に恐れをなして実現できずにいたものが、「eBible Japan」「DT Works クラウド型聖書検索」という、全文検索型の新共同訳聖書データベースが登場したことによって、ようやく重い腰を上げて制作にとりかかったものです。

『誰も——』の存在は、2000年代半ばには既に知っていて、特にこの本の聖書根本主義に対する皮肉が、当時の僕には非常に痛快に感じられたのですが、訳本における聖書の引用文には不自然さを感じていました。『誰も——』訳本では、聖書の引用元として、1954-55年に初版が刊行された財団法人日本聖書協会の口語訳聖書を用いているのですが、この聖書は戦前からの訳に拠っていた上に、文体の不自然さや過剰な平仮名表記などのために、その評判はあまり良くありません。カトリックと多くのプロテスタントにおいては、1987年に初版が刊行された「新共同訳聖書」を使うのが一般化しています。そのため、『誰も——』訳本の聖書引用部だけを、何とか新共同訳に置き換えられないものか、と、考えていたわけです。

その考えを現実にするためには、当然ですが、まず最初に『誰も——』訳本を新共同訳聖書と一対一できっちり並読しなければなりません。そもそもこの覚悟を決めるのに何年かを要したのですが、先の新共同訳聖書のデータベースが利用できるようになって、ようやくこの作業にとりかかる気になりました。聖書の引用箇所を抜き書きしたメモを作成しながら『誰も——』を読み進めることにしました。山形氏の訳本を読み、紙の聖書で該当箇所の位置付けを確認しながら、データベースで該当箇所を抽出し、テキストファイルにアpendしていくという、要するに「書き抜き」の作業です。

この「書き抜き」の作業をしながら読み進めると、今までそこそこちゃんと読んでいたつもりの山形氏の訳本を、実は要所要所をつまんで斜め読みをしていたことが厭でも分かってしまいます。本来なら、『誰も——』を本当に楽しむためには、皆さん一人一人が

このような読み方をされるのが一番いいのだらうと思います。ただし、聖書には比較的慣れ親しんでいる僕でも、この作業は相応の時間が必要でした。

抜き書きの箇所が訳本の記述と本当に一致しているか確認するために、今度は「書き抜き」した内容を聖書で確認しながら、訳本を辿る作業を行いました。この結果、どうも訳本には少なからぬ間違いがあるようだ、と気付いたわけですが、この間違いに関しても、単なる引用章節番号の書き間違いとすぐに分かるものもあれば、記述の内容に深く関わるもの（「無原罪の御宿り」に関して等）もありました。これは訳本と聖書だけではどうにもならない、ということで、NYのBlast BooksからKen Smithの原著を取り寄せました。

原著を訳書と並読してみても驚いたのは、間違いが単なる引用章節番号の誤記だけではなく、ケンが原著で引用しているのに訳本では割愛されている箇所がいくつか、そしてケンが原著において何ら言及していないのに訳書で引用されている箇所^{*1}が2箇所あったことです。原著と併せて並読した結果、現時点で分かっているものだけでも、22箇所の間違い^{*2}を確認しています。これは、ちょっと問題のある数でしょう。

というのも、この本がツッコミを入れている、そしてそのツッコミに最も腹を立てているであろう、聖書根本主義の立場をとる人々にとって、それらの間違いは、この『誰も——』の記述が無意味だと主張する格好のネタになってしまうからです。もちろん、この世の現実の中に完全な正確さというものが存在し得ないのは事実ですが、この本の虚心坦懐なツッコミに、そのツッコミにムカツいている人々の耳目を開かせるためにも、それが下らない、つまらないものだ、と相手に言わせないに足る正確さが、このような本には必要なのです。

これに関してはErrataと共に、山形氏にe-mail、そして出版元である晶文社に書状で書き送りましたが、どちらからも何ひとつ回答をいただけていない状態です。前述の通り、この本の記述が聖書の揚げ足取りだ、と考える人が少なからず存在し、そういう人にとってはこのErrataで示した誤記の存在が、自らの認識を正当化するためのうってつけの材料にされてしまうので、一刻も早く、山形氏のサイトや晶文社のサイトで正誤表を公開していただく等の対応をしていただきたいのですが、彼らにそのつもりは残念ながらありません。

まあ、この点に関しては残念でしたが、このことで、先の「抜き書き」をXML document化すること、そしてこのPDF作成のためにL^AT_EX documentを作成することの覚悟が決まりました。hyper text化にはそれ程の時間は要しませんでした（というのも、先の抜き書きをXMLで作成していたので）が、これを皆さんがお読みになっているということは、新共同訳聖書の引用に関する著作権の問題等もクリアされた状況下で、この文書が公開さ

^{*1} 山形氏が勝手にケンの文章に加筆しているということです。しかも、その事実に関して何の断わりもなく。

^{*2} 間違いの内容は、巻末に付けたErrataを御参照下さい。

れているということでしょう。これを書いている時点ではまだそういう状況は実現していませんが、そうなっているのだとしたら、これに勝る幸甚はありません。是非皆さんも、山形氏の訳本、あるいは Ken Smith の原著と、この文書を片手に、聖書の血沸き肉躍る世界（比喩ではなくて）を感じていただければ、と切に願っております。

第 6 章

Errata —— 山形訳本正誤表

- pp.42: 「神の御**枝**」とあるが、これは「神の御**業**」の間違いであろう。
- pp.55: 「アーロンの代用息子の一人エレアザルが」は誤り。正しくは「アーロンの孫（代用息子の一人エレアザルの子）ピネハスが」とすべき。これに関しては原著該当部 pp.34 でも “...*Happily, Eleazar, one of Aaron's replacement sons,...*” とあるので、原著段階での誤りであろう。
- pp.55: 脚註「……で、近くの街の人がやってきて」とあるが、これは「イスラエル人が宿営していたモアブの王バラクが」とすべきか。
- pp.59: 申命記 25:11-12 と申命記 20:10-18 の間にあるはずの引用箇所（原著 pp.37 5 番目）が抜けている。
 （原文）
 God relishes the thought of starving sinners eating their children. “Even the most gentle and sensitive man among you will have no compassion ... he will not give to them [his starving children] the flesh of his children that he is eating.” —— DEUTERONOMY 28:53-57
 （試訳）
 神さまは罪人を飢えさせ、彼らが子供を食べるのを楽しむんだって。「あなたたちの中で一番おとなしく敏感な男であっても、哀れみの情を持つことはないだろう……彼は彼ら（彼の飢えた子供たち）に、自分が食べているその子達の肉を与えないだろう。」 —— 申命記 28:53-57
- pp.62: 「犬のように舌で水をなめる者」は誤り。「水を手にすくってすすった者」が 300 人の兵隊である。尚、この箇所に関する記述は原著には存在しない。山形氏が無断で追加したものと思われる。
- pp.67: 末尾 サムエル記上 11:5-7 とあるのは誤り。同 7:10 が正しい（原著では 7:10 になっている）。

pp.67: 上訂正部の後に入るはずの引用箇所（原著 pp.42 4 番目）が抜けている。

（原文）

Saul, the first God-anointed king of Israel, ensures that Israel's people will follow him into battle by threatening to kill all of their oxen. — I SAMUEL 11:5-7

（試訳）

はじめて神に油注がれたイスラエルの王であるサウルは、イスラエルの民の牛を皆殺しにすると脅すと、彼らが自分に従って戦ってくれるということを証明したんだ。——サムエル記上 11:5-7

pp.69: ダビデがゴリアテを殺すくだり：訳はケンの記述に忠実だが、これはケンの勘違いでは？ 以下、該当箇所を新共同訳および欽定訳から引用する：

ダビデは袋に手を入れて小石を取り出すと、石投げ紐を使って飛ばし、ペリシテ人の額を撃った。石はペリシテ人の額に食い込み、彼はうつ伏せに倒れた。ダビデは石投げ紐と石一つでこのペリシテ人に勝ち、彼を撃ち殺した。ダビデの手には剣もなかった。ダビデは走り寄って、そのペリシテ人の上にまたがると、ペリシテ人の剣を取り、さやから引き抜いてとどめを刺し、首を切り落とした。ペリシテ軍は、自分たちの勇士が殺されたのを見て、逃げ出した。——サムエル記上 17:49-51

And David put his hand in his bag, and took thence a stone, and slang it, and smote the Philistine in his forehead, that the stone sunk into his forehead; and he fell upon his face to the earth. So David prevailed over the Philistine with a sling and with a stone, and smote the Philistine, and slew him; but there was no sword in the hand of David. Therefore David ran, and stood upon the Philistine, and took his sword, and drew it out of the sheath thereof, and slew him, and cut off his head therewith. And when the Philistines saw their champion was dead, they fled. — I SAMUEL

17:49-51

これらを見ると分かるように、ダビデはゴリアテを石で打ち殺した後に、（自らは武器を帯びていないので）ゴリアテの剣で首を切り落としたことになっている。

pp.69: 末尾本文・脚註：ペリシテ人を殺した人数は日本語の聖書だけではなく欽定訳でも 200 人。100 人という人数はどこから？

pp.84: 歴代誌下 26:16 とあるのは誤り。同 26:16-21 が正しい（原著でこうなのを確認済）。

pp.101: イザヤ 34:2-3 と イザヤ 26:19 の間にあるはずの引用箇所（原著 pp.42 4 番目）が削除されている：

（原文）

To dramatize His gloomy prophecies against Egypt, God makes Isaiah walk around

nude for three years — ISAIAH 20:2-4

(試訳)

エジプトに対する悲観的な預言をドラマティックなものにするために、神さまはイザヤを裸で三年間歩かせる。——イザヤ 20:2-4

pp.102: イザヤ 49:14-15 に相当する引用箇所は原著に存在しない。山形氏が無断で追加したものと思われる。

pp.123: セファニヤ 1:2-3 と セファニヤ 1:18 の間にあるはずの引用箇所 (原著 pp.78 4 番目) が削除されている:

(原文)

“That day will be a day of wrath... I will bring distress upon people... their blood shall be poured out like dust, and their flesh like dung.” — ZEPHANIAH 1:15-17

(試訳……訳文は新共同訳聖書による)

その日は憤りの日……わたしは人々を苦しみに遭わせ……彼らの血は塵のように はらわたは糞 (ふん) のようにまき散らされる。——セファニヤ 1:15-17

pp.139-140: 「無原罪の御宿り」がクレアヴォーのベルナルによるものとあるがこれは誤り。ベルナルは反スコラ派の宗教学者で、むしろ「無原罪の御宿り」という概念に反対する立場にあり、ここに挙げるならばヨハネス・ドゥンス・スコトゥスが適切 (これに関してはケンの記述の段階からこうだったことを確認済)。

pp.156: ルカ 8:28-34 とあるがこれは誤り。同 8:43-46 が正しい (原著ではこうなっている)。

pp.167: ヨハネ 28-30 とあるが、章番号が抜けている。ヨハネ 19:28-30 が正しい (原著の段階で抜けていたのを確認済)。

pp.178: ヨハネ 8:47 とあるがこれは誤り。同 8:42 が正しい。

pp.178: ヨハネ 8:42 と ヨハネ 8:55 の間にあるはずの引用箇所 (原著 pp.111 3 番目) が削除されている:

(原文)

“He who belongs to God hears what God says. The reason you do not hear is that you do not belong to God.” — JOHN 8:47

(試訳……新共同訳からの引用)

神に属する者は神の言葉を聞く。あなたたちが聞かないのは神に属していないからである。」——ヨハネ 8:47

pp.186-187: バルナバとなっているのは誤り。バルイエスが正しい (原著ではバルイエスとなっている。ちなみにバルナバとバルイエスは別人である……バルナバはサウロと同じアンティオキアの教会にいた聖職者で、パウロの最初の宣教の旅に同行したといわれている)。

pp.203: 1 コリント 6:18–19 と 1 コリント 11:3–15 の間にある引用箇所（原著 pp.126 3 番目）が削除されている：

（原文）

“Do you not know that your bodies are members of Christ himself? Shall I then the members of Christ and unite them with a prostitute? Never!” —— I CORINTHIANS 8:47

（試訳……新共同訳からの引用）

あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのか。キリストの体の一部を娼婦の体の一部としてもよいのか。決してそうではない。—— 1 コリント 6:15

pp.211: ヘブル人への書 12:6 とあるのは誤り。同 10:28–31 が正しい（原著ではこうなっている）。

pp.214: 「923 ページある聖書の、902 ページ目でやっと。」とあるのは誤り。「923 ページある聖書の、907 ページ目でやっと。」が正しい（原著ではこうなっている）。

以上。

索引

- Acta Pilati, 234
- eikon, 234
- Good News Bible, viii
- Judah, 278
- Judas, 278
- Jude, 278
- Ken's Guide to the Bible, vii
- Legenda aurea, 239
- Sefer haYashar, 49
- στρουθιο, 31
- struthio, 31
- Velonica, 234
- vera, 234
- アーロン, 38
- アカイア州, 266
- 赤い外套, 235
- アガグ, 65
- 暁の雌鹿, 128
- アキシユ, 80
- アキム, 244
- 明けの明星, 282
- アサ, 85, 243
- アサフ, 115, 124
- アザルヤ, 96, 98
- アジア, 251
- アジア州, 260
- アシェラ, 93, 99
- アシエル, 20
- 葦の海, 25
- 葦の棒, 235
- アシュケナズ, 97
- アシュケロン, 55, 63
- アシュドド, 61, 63
- アシュトレト, 84
- アシユル, 97, 148
- アゾル, 244
- アダム, 97
- アダヤ, 96
- アダルの月, 102
- アタルヤ, 95, 96
- アッシリア, 117, 139, 150, 244
- アッシリア人, 149
- アッバ、父よ, 226
- アドラム人, 21
- アドリエル, 77
- アナニア, 252, 256
- アナミム人, 97
- アハズ, 138, 243
- アハズヤ, 90, 95
- アハブ, 90
- アビアタル, 192
- アビウド, 243
- アビガイル, 67
- アビシャイ, 79
- アビナダブ, 71
- アヒノアム, 69
- アビフ, 30
- アビマエル, 97
- アビメレク, 52
- アヒヤ, 94
- アビヤ, 84, 243
- アビラム, 35
- アブサロム, 75, 79
- アフヨ, 71
- アブラハム, 97, 243
- アブラム, 11, 97
- アベド・ネゴ, 157
- アベル, 10
- アベル・ケラミム, 52
- アベル・メホラ, 51
- アマウ人, 39
- アマツヤ, 167
- アマレク, 26, 65
- アミタイ, 168
- アミナダブ, 243
- アムノン, 75
- アモス, 167, 243
- アモツ, 99, 140
- アモリ人, 39, 45, 49, 77, 97
- アモン, 87, 100
- アヤ, 77
- アヤロン, 49
- アラウナ, 79
- アラシェヒル, 281
- アラバ, 70, 144
- アラビア, 252

- アラブ人, 86
荒ぶる神, 181
アラム, 20, 97, 138, 243
アララテ, 10
アララト, 10
アルキ人, 97
アルバクシャド, 97
アルファイ, 245
アルモダド, 97
アルモニ, 77
アルワド人, 97
アレクサンドロ, 235
アロエル, 52
アロン, 26
安息日, 27, 95
アンテオキア, 257
アンデレ, 245
アンマン, 281
アンモン人, 52, 72

イエス・キリスト, 184, 243
イエスに布を差し出した女性, 234
イエフ, 90, 164
イエラ, 97
イエリコ, 48
イエレド, 10, 97, 280
異言, 252, 275
イコン, 182
イサカル, 20
イサク, 243
イザヤ, 99
イシュ・ボシエト, 70
イシュマエル, 96
イシュマエル人, 20
イスカリオテのユダ, 204, 245
イスラエル, 18, 19
イズレエル, 69, 164
イズレエル人, 90
イゼベル, 92
いちじくの木, 192, 200
いちじくの葉, 9
イツハル, 35
犬のように舌で水をなめる者, 51
いのちのことば社, viii
茨の冠, 233
イブレアム, 90
鋳物師, 245
鋳物の像, 85
イラド, 279
イルメヤ, 143
インマヌエル, 139, 184, 244

ヴェロニカ, 234
ヴェロニカのベール, 234
ウザ, 71, 100
ウザル, 97
ウジヤ, 243
ウジヤ王, 98, 138

うずら, 34
ウツ, 97, 103
ウリヤ, 72, 243

エウテイコ, 259
エクロン, 61, 63
エコンヤ, 243
エサウ, 12
エジプト, 97, 251
エシュタオル, 55
エステル, 102
エタム, 55
エッサイ, 66, 243
エデイドヤ, 75
エデンの園, 9
エトバアル, 92
エドム, 12, 153
エナイム, 21
エノク, 88, 97, 279
エノシュ, 97
エバ, 10
エバル, 97
エビ, 38
エビル・メロダク, 145
エファ升, 175
エフェソ, 259
エフォド, 165
エブス, 56
エブス人, 45, 79, 97
エフタ, 52
エフド, 49
エフライム, 50, 88, 244
エフラタ, 170
エベル, 97
エベン・エゼル, 64
エマオ, 190
エミマ, 107
エラム, 97, 251
エリ, 61
エリ、エリ、レマ、サバクタニ, 240
エリアキム, 243
エリアブ, 35
エリアム, 72
エリウド, 244
エリコ, 38, 48, 75, 144
エリシャ, 97
エリシャファト, 96
エリファズ, 105
エリマ, 258
エリヤ, 86, 92, 194
エル, 21
エルアザル, 37
エルサレム, 149
エルバアル, 50
エレアザル, 244
エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ, 240
エロハム, 96
エン・ドル, 118

- エン・ハロド, 50
 黄金伝説, 239
 オナン, 21
 オハシュロス王, 102
 オバデヤ書, 168
 オバドヤ, 92
 オフィル, 81, 97
 オベド, 96, 243
 オベド・エドム, 71
 オホラ, 149
 オホリバ, 149
 オレブ, 118
 オン, 35
 女呪術師, 26
 カイアフア, 232
 カイサリア地方, 229
 階段, 26
 回勅, 183
 外典, 179
 飼い葉桶, 185
 海綿, 239
 カイン, 9
 カイン人, 49
 隠し所, 26
 ガザ, 63
 カスルヒム人, 97
 割礼, 12, 19, 25, 253, 260, 262
 カデシュ, 78
 ガト, 63, 80
 ガド, 17, 20, 78
 カナ, 207
 カナン, 10, 97
 カナン人, 20, 21, 45
 ガバタ, 233
 カパドキア, 251
 カファルナウム, 193, 223
 カフトル人, 97
 かぶり物, 270
 カブルの地, 83
 神の子ら, 10
 カラヴァッジヨ, 195
 カリ人, 95
 ガリム, 69
 ガリラヤ, 83, 183
 ガリラヤ・ペレヤ, 195
 カルデア, 148, 150
 カルデア人, 104, 143, 149, 253
 カルバン, 201
 カルメル, 67
 カルメル山, 93
 カレブ人, 67
 キション川, 118
 キティム, 97, 163
 ギデオン, 50
 キドロム, 80
 キドン, 71
 ギブア, 56, 77
 ギブオン, 49
 牛糞, 146
 教会, 199
 共観福音書, 180
 共同訳聖書実行委員会, viii
 キリスト者, 257
 ギルガシ人, 97
 ギルガル, 65
 ギルボア山, 69
 キルヤタイム, 153
 キルヤト・エアリム, 63, 71
 ギレアド, 59
 ギレアドの山, 50
 キレネ, 251
 キレネ人, 235
 銀貨三十枚, 251
 近親相姦, 195
 欽定訳聖書, viii
 金の子牛, 92
 金のねずみ, 62, 63
 金のはれ物, 62, 63
 偶像, 41, 175
 寓話, 182
 釘の跡, 237
 クザ, 189
 クシュ, 34, 97, 140
 クシュ人, 85
 クセルクセス王, 101
 グノーシス, 179
 グル, 90
 クレアヴォーの聖ベルナル, 184
 クレタ, 251
 クレタ人, 153, 264
 契約の書, 27
 汚れた霊, 197
 ケジブ, 21
 ケダル, 83
 ケツィア, 107
 結婚, 272
 ゲツセマネ, 225
 ゲテル, 97
 ケナアナ, 87
 ケナン, 97
 ゲバ, 58
 ゲハジ, 88
 ケハト, 35
 ゲバル, 117
 ケモシュ, 84
 ゲラ, 79
 ゲラサ人, 208
 ゲラル, 85
 ケルビム, 70
 ケレン・プク, 107
 ケン・スミス, iii

- 権利章典, iv
 コア, 150
 恋なすび, 17
 紅海, 25
 皇帝, 233
 皇帝チベリウス, 234
 強盗, 238
 香油, 189, 203
 国教の樹立, iv
 コヘレト
 ——の言葉, 133
 ゴメル, 97, 164
 コラ, 35, 113
 コラジン, 193
 コルネリウス, 256

 祭司, 191
 祭司長, 196
 祭壇, 26
 再臨, v
 サウロ, 256, 258
 サタン, 77, 103, 196
 サドカイ派, 219
 サドク, 244
 サフィラ, 252
 サブタ, 97
 サブテカ, 97
 サマリア, 89, 90, 149
 サマリア人, 190
 サムソン, 54
 サライ, 11
 サルモン, 243
 サレブタ, 196
 サロメ, 195, 239
 サン・ピエトロ大聖堂, 234
 三位一体, 181

 シェアルティエル, 173
 シェト, 42
 シェバ, 97
 シェバ人, 104
 シェバの女王, 81
 シェフェラ, 49
 シェラ, 21, 97
 ジェリコ, 48
 シェレフ, 97
 シェン, 64
 ジクリ, 96
 シケム, 18
 シセラ, 49, 118
 シティム, 48
 シドン, 78, 97, 193, 196, 198
 シドン人, 55, 92
 シニ人, 97
 シホル, 71
 シムイ, 79
 シメオン, 20, 22

 シモン, 189, 195, 196, 203, 235, 245
 シモン・バルヨナ, 229
 シモン・ペトロ, 229
 シャドラク, 157
 車輪, 145
 シャルティエル, 174, 243
 シュア, 21
 シュア人, 105
 宗教改革, 201
 十字架, 196
 十字架の道行き, 234
 十字軍遠征, 201
 修正条項第1条, iii
 十二年間出血が止まらなかった女性, 234
 十二年間も出血の止まらない女, 210
 終末思想, v
 シュル, 25
 ショア, 150
 上エジプト人, 97
 小ヤコブ, 239
 処女, 43
 処女降誕, v
 シリア人, 196
 しるし
 カインの——, 9
 ジルバ, 16
 シロアム, 211
 シンアル, 11, 175
 新改訳聖書, viii
 新改訳聖書センター, viii
 進化論, iv
 新共同訳聖書, viii
 信仰箇条, 183
 神聖ローマ皇帝, 201
 新日本聖書刊行会, viii
 人糞, 146

 酸いぶどう酒, 239
 過越, 232
 スコープス裁判, iv
 スコラ学派, 184
 スサ, 102
 スサンナ, 189
 ステファノ, 253
 スル, 95

 正教会, 182
 政教分離, iii
 聖書, 262
 聖書検索, viii
 聖書根本主義, iii
 聖書の無謬性, v
 聖性, 284
 聖槍, 239
 聖なる柱, 165
 生理, 32
 セイル, 153
 セイル兵, 98

- 聖霊, 183
 ゼエブ, 118
 ゼデキヤ, 142
 セト, 97
 セバ, 97
 ゼバ, 118
 ゼブルン, 20
 ゼベダイ, 225, 239, 245
 セム, 10, 97
 ゼラ, 85, 243
 セラフィム, 138
 セラヤ, 144
 セルギウス・パウルス, 258
 セルグ, 97
 ゼルバベル, 173, 174, 243
 占星術の学者, 184
 洗礼, 186
 洗礼者ヨハネ, 191
 洗礼者ヨハネの首, 194

 総督, 230
 ソドム, 193
 ソドムとゴモラ, 166
 ソロモン, 75, 243

 ターバン, 152
 代償的贖罪, v
 互いに愛し合いなさい, 250
 ダゴン, 61
 タダイ, 245
 ダダイと呼ばれるユダ, 278
 ダタン, 35
 ダチョウ, 31
 タバト, 51
 ダビデ, 66, 243
 ダビデ王, 243
 ダビデのひこばえ, 282
 ダマスカス, 139
 ダマスコ, 139
 タマル, 21, 75, 243
 タラントン
 —のたとえ, 222
 タルシシュ, 97, 168
 ダレイオス, 160
 ダレイオス王, 173
 ダン, 17, 20, 55, 77, 92
 ダン・ヤアン, 78

 血, 223
 血と水, 239
 徴税人, 191, 245
 長老, 196

 ツァルムナ, 118
 ツイドキヤ, 87
 ツイバ, 80
 ツイボラ, 25
 ツイボル, 39

 ツェファタ, 85
 ツェファンヤ, 144
 ツェマリ人, 97
 ツエルヤ, 78, 79
 ツエレラ, 51
 ツォアル, 12
 ツォファル, 105
 ツォルア, 55
 唾, 210
 ツル, 38

 デイクラ, 97
 ティシュベ人, 92
 デイスペンセーション主義, v
 デイナ, 18
 デイファト, 97
 デイブライム, 164
 ティムナ, 21, 54
 ティラス, 97
 ティルス, 78, 83, 117, 193, 197
 デカポリス地方, 208
 テケル, 160
 デダン, 97, 153
 テトス, 266
 テベツ, 52
 デボラ, 50
 テマン, 153
 テマン人, 105
 テラ, 97
 テラフィム, 165
 天地創造説, iv
 伝道の書, 133

 塔, 11
 陶器職人, 245
 トガルマ, 97
 トバル, 97
 トマス, 180, 237, 245
 奴隷, 265
 神の——, 269
 トロフィモ, 260

 ナアマ人, 105
 ナアマン, 88, 196
 ナコン, 71
 ナダブ, 30
 ナタン, 73
 ナバル, 67
 ナフション, 243
 ナフタリ, 17, 20
 ナフトヒム人, 97
 ナボト, 90, 93, 95
 ナホル, 97
 鉛の円盤, 175
 ナルド, 203

 肉, 223
 ニコデモ, 246

- ニコデモ福音書, 234
 偽メシア, 200
 偽預言者, 200, 258
 ニネベ, 168
 日本聖書刊行会, viii
 日本聖書協会, viii
 ニムロド, 97

 ヌン, 48

 ネゲブ, 49, 78
 熱心党, 234, 245
 『捏造された聖書』, 260
 ネバト, 92
 ネファイリム, 10
 ネブカドネツァル王, 156
 ネブカドレツァル, 143
 ネブザルアダン, 144

 ノア, 10, 97
 ノリ・メ・タンゲレ, 190

 バアナ, 70
 バアラト, 71
 バアル, 38, 91, 99
 バアル・タマル, 58
 バアル・ツェフオン, 25
 バアル・メオン, 153
 バアレ・ユダ, 70
 ハガイ, 173, 174
 はげ頭, 88
 箱舟, 10
 バシャ, 94
 バシャン, 129
 バダン, 20
 ハツァルマベト, 97
 ハツォル, 49
 派手な衣, 232
 バト・シェバ, 72
 ハドラム, 97
 ハナンヤ, 143
 ハヌン, 75
 ハビラ, 97
 バフォス, 258
 バフリム, 79, 80
 バベル, 11
 ハマト, 144
 ハマト人, 97
 ハマン, 101, 102
 ハム, 10, 97
 ハムタル, 143
 ハメダタ, 101
 ハモル, 18
 バラク, 39
 バラバ・イエス, 230
 バラム, 38
 ハラン, 15, 253
 バラン, 67

 針の穴, 187
 バルイエス, 258
 バルジライ, 77
 バルシン, 160
 バルティ, 69
 バルティア, 251
 バルトロマイ, 245
 バルナバ, 258
 ハルマゲドン, v
 反キリスト, 201, 277
 パンフィリア, 251

 ビ・ハヒロト, 25
 ビウス9世, 183
 挽き臼, 52
 ヒゼキヤ, 99, 243
 ヒソブ, 239
 左利き, 58
 羊飼い, 185
 ビドカル, 95
 人の手の指, 159
 ビネハス, 38, 58
 ヒビ人, 18, 45, 78, 97
 ヒラ, 21
 ピラト, 212, 230
 ヒラム, 81, 83
 ビルダド, 105
 ビルハ, 16

 ファラオ, 11
 ファリサイ派, 189
 ファンダメンタリスト, v
 ファンダメンタリズム, iii
 フィラデルフィア, 281
 フィリポ, 194, 245
 フェニキア, 198
 不割禮, 171
 福音書, 179
 福音派, iv, v
 不正な管理人
 ——のたとえ, 217
 豚, 132, 208
 ブト, 97
 ブラ, 51
 フラウィウス・ヨセフス, 195
 フランシスコ会, 183
 フリードリヒ2世, 201
 フリギア, 251
 フル, 26, 38, 97
 憤怒の神, 181

 ベール, 270
 ベエル・シェバ, 57, 77, 78
 ベエロト人, 70
 ペオル, 38, 39, 41
 ペカ, 138
 ペコド, 150
 ベタニア, 192, 203

- ベツレヘム, 56, 170, 184
 ヘツロン, 243
 ベテル, 50, 58, 88, 92, 167
 ヘト, 97
 ベト・エケド, 91
 ベト・エケド・ロイム, 91
 ベト・エシモト, 153
 ベト・カル, 64
 ベト・ガン, 90
 ベト・シェメシュ, 62
 ベト・シタ, 51
 ベト・ホロン, 98
 ベト・レホブ, 56
 ベトサイダ, 193
 ヘト人, 16, 44, 78
 ペトル, 39
 ペトロ, 193, 225, 226, 245
 ベナヤ, 81
 ベニヤミン, 20, 22, 57
 ベニヤミン人, 80
 蛇, 9
 ヘフツイ・バ, 99
 ヘブロン, 70
 ベヘモット, 108
 ヘベル, 49
 ヘマン, 126
 ペリジ人, 20, 45
 ペリシテ人, 55, 66, 97
 ベルシャツアル王, 159
 ベルゼブル, 207
 ペレグ, 97
 ベレツ, 243
 ベレツ・ウザ, 71
 ペレト, 35
 ヘロデ・アンティパス, 195
 ヘロデ・フィリポ, 195
 ヘロデ・ボエートス, 195
 ヘロディア, 194
 ヘロデ王, 184
 ヘロデ大王, 195

 ボアズ, 243
 補遺, 283
 包皮, 25
 防腐処置, 24
 ホサナ, 226
 ホセア, 163
 ポティファル, 22
 ホフニ, 61
 滅びの子, 201
 盆, 194
 ポントス, 251

 マアカ, 80
 マアセヤ, 96
 マオン, 67
 巻物, 146, 175
 マグダラの女と呼ばれるマリア, 189

 マグダラのマリア, 180, 239
 マケドニア州, 265, 266
 マゴグ, 97
 マスキール, 113
 マタイ, 179, 245
 マタイによる福音書, 179
 マタン, 244
 末日, 162
 マナセ, 99, 243
 マヌア, 54
 マノペロ市, 234
 マハナイム, 80
 マハラト, 126
 マハラルエル, 97
 マリア, 184, 188, 239, 244
 マリアによる福音書, 190
 マリアムネ, 195
 マルコ, 179
 マルコによる福音書, 179
 マルタ, 188, 204, 211
 マレシヤ, 85

 ミカ, 55
 ミカヤ, 86
 ミカル, 67, 69, 71, 77
 ミグドル, 25
 御輿, 255
 水を手にすくってすすった者, 51
 みだらな行い, 269
 ミツパ, 53
 ミディアン人, 20, 38
 ミニト, 52
 耳を切り落とした, 227
 ミリアム, 34
 ミルコム, 84

 無原罪の聖母, 183
 ムスリム, 182
 鞭打ち苦行会, 253
 ムナ
 —のたとえ, 221
 紫の服, 233, 235

 メギド, 90
 メシア, 180, 185, 229, 244
 メシエク, 97
 メシヤク, 157
 メソポタミア, 251, 253
 メディア, 97, 251
 メトシェラ, 10, 97, 280
 メトシャエル, 280
 目には目, 27
 メネ, 160
 メフィボシエト, 77
 メフヤエル, 280
 メホラ人, 77

 モアブ, 37, 153

- モーセ, 25
 モーゼの疲れた腕, 65
 黙示録, v
 元の服, 235
 求めなさい。そうすれば、与えられる。、215
 モルデカイ, 102
 モルモン教, 162
 モレク, 84, 255
 モレの丘, 50
- ヤイロ, 210
 ヤエル, 49
 ヤコブ, 12, 190, 196, 226, 239, 243–245
 ヤコブス・デ・ウォラギネ, 239
 ヤコブの子ユダ, 278
 ヤシャルの書, 49
 ヤッファ, 168, 256
 ヤビン, 50, 118
 ヤフェト, 10, 97
 ヤベシユ, 59, 63, 64
 山形浩生, iii, 262
 やもめ, 271
 槍, 239
 ヤロブアム, 92, 167
 ヤワン, 97
- ユーフラテス川, 39
 ユダ, 20, 196, 243
 イスカリオテの——, 227
 ユダヤ, 184, 251
 ユダヤ教, 251
 ユダヤ古代誌, 195
 ユダヤ人, 264
 ユダヤ人の王, 231
- ヨアシユ, 51, 87
 ヨアハズ, 86
 ヨアブ, 72, 78
 陽皮, 67
 ヨクタン, 97
 ヨシェバ, 95, 96
 ヨシヤ, 243
 ヨシャファト, 243
 ヨシュア, 26, 48, 173, 174
 ヨセ, 239
 ヨセフ, 20, 184, 196, 239, 244
 ヨタム, 52, 98, 99, 138, 243
 ヨツァダク, 173, 174
 四つの生き物, 145
 ヨナ, 168
 ヨナダブ, 75, 91
 ヨナタン, 69, 77
 ヨハナ, 189
 ヨハナン, 96
 ヨハネ, 180, 185, 190, 226, 245
 ヨハネス・ドゥンス・スコトゥス, 183
 ヨハネによる福音書, 179
 ヨバブ, 97
- ヨブ, 103
 陰府, 193
 ヨヤキム, 143
 ヨヤキン, 145
 ヨヤダ, 81, 95
 ヨラム, 86, 94, 243
 ヨルダン, 281
 ヨルダン川, 38
- ライシユ, 55, 69
 らい病, viii, 32
 ライファン, 255
 らくだ, 187
 ラケル, 16
 ラザロ, 204, 211, 218
 ラバ, 72, 153
 ラハブ, 48, 243
 ラバン, 15
 ラピドト, 50
 ラマ, 50, 56, 67, 97
 ラモト・ギレアド, 86
- 利子, 43
 リツバ, 77
 律法, 191, 194
 律法学者, 196
 リディア人, 97
 リビア, 251
 リブナ, 143
 リブラ, 144
 リベカ, 13
 リモン, 59, 60, 70
 流産, 27
 領主ヘロデ, 195
- ルカ, 179
 ルカによる福音書, 179
 ルター, 201
 ルツ, 243
 ルド, 97
 ルフォス, 235
- レア, 16
 レアノト, 126
 レウ, 97
 レカブ, 70, 91
 レカブ人, 91
 レギオン, 208
 レケム, 38
 レスリング, 283
 レツイン, 138
 レバ, 38
 レバノン, 171
 レハビム人, 97
 レハブアム, 243
 レビ, 20
 レビボット, 76
 レビヤタン, 109, 125

レボ・ハマト, 71

レボナ, 60

レマルヤ, 138

レメク, 97, 280

ロ・アンミ, 164

ロ・ルハマ, 164

ローマ, 251

ロダニム, 97

ロト, 12

ろば, 40

ロンギヌス, 239

ロンギヌスの槍, 239

若い雄牛, 28

わき腹, 239

わたしはある, 249